

# 奇譚クラス

◆ 新しい風俗文献誌

## 2



奇譚クラス

1971.2

雑誌コード2805

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

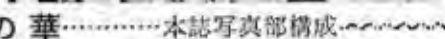
Osaka Japan

## 2

2月号 ¥350

カメラ・ハント楽我記…辻村隆  
女体緊縛の醍醐味を語る…塚本鉄三

カメラ・ハント楽我記…辻村隆  
女体緊縛の醍醐味を語る…塚本鉄三



## 女体緊縛の華

雅妻は織を知りぬ 金原加奈子  
 開股の正面と背面 中河恵子  
 華麗な開股責め 中河恵子  
 イルリガートルを前に 長井美津子  
 非情な責めの終末 長井美津子  
 両手吊りの噺し 川路恵子  
 袴縛りの完了 川路恵子  
 処女縛りとまどう 三浦純子  
 麻縄に身をゆだね 中河恵子  
 盗視するSMの目 佐々木真弓

賣めてみたい娘の女  
 日本式高小手縛り  
 足吊りのある風景  
 M女二輪の花魁  
 奇麗に乱れた黒髪  
 開股前での幻想  
 誘悦のひととき  
 ハリツケ晒し  
 左川前中歌中船  
 近路田河河郎河川  
 麻真恵恵川恵恵  
 里護知子子路子代

可憐な目物………佐々木真弓  
酒の肴になる………川路富雄  
舐蛇の洗札………関谷真知子  
舐蛇されるままに………前田真知子  
海老縛りのお味………長井葉津子  
柱につながれた女………長井葉津子  
痛さをこらえる異国………関谷真知子  
の女………関谷真知子  
實の果の詩観………前田真知子  
ホ打の一時………関谷真知子  
ホステス探人生………佐々木真弓

女性モデル募集

|        |      |         |         |         |         |         |
|--------|------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 選外佳作作品 | 佳作作品 | 入選作品第五席 | 入選作品第四席 | 入選作品第三席 | 入選作品第二席 | 入選作品第一席 |
| 五十一萬圓  | 二萬圓  | 三萬圓     | 五萬圓     | 十萬圓     | 二十萬圓    | 三十萬圓    |
| 10篇    | 15篇  | 10篇     | 5篇      | 3篇      | 1篇      | 1篇      |

さるものを選んで御執筆下さい。あくまで新分野の開拓に意欲的な御作品を求めています。この際、お望みの御作品をお持ちの方は御応募下さるようお願い致します。

▽規定△

応募作品は編集部に於て抽選幹員の上で人選決定したものは速かに筆者に通知致します。入賞作品に対しては掲載の如くお奨励金を贈ります。なお、掲載料は掛りません。尚、入賞作品は必ずしも掲載されるものではありません。

「本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文獻資料向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇氣を奮つて御応募下さいよう、お願い致します。」

「本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年齢、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込

[illegible]

以て御承知お願ひいたします。わづらへ未発表の自作の作品に限り、応募作品はたとへば未発表の作品でも他社へ投稿されたものはお断りします。作品の中に他人の作品を引用する部分があり下され、出処へ作者の氏名と部数を明記して下さい。原稿は必ず「白字」又は「四角字」で原稿用紙を使用して下さい。枚数は四百字詰換算にて三十枚以上二百枚以下とし、一枚以上二枚以下は一枚として扱います。原稿は必ず「白字」又は「四角字」で原稿用紙を使用して下さい。枚数は四百字詰換算にて三十枚以上二百枚以下とし、一枚以上二枚以下は一枚として扱います。ただし、切詰しは毎月三回まで願ひます。人選作品は出来次第、早稲穂賞に掲載致します。区別するため第Ⅱ巻に一般の原稿、読者原稿と表示するため第Ⅲ巻に懸賞とお書き下さい。連篇先を氏名は必ずお書き下さるが、住所者の氏名を公開したり他へ渡したりなどは、応募絶対に致しませんから御安心下さい。絶対にお書きせん故、若しご人用でしたらコピーして頂いて下さい。

箱第Ⅰ巻の送付先は、大阪市吉野郵便局募集係に送り、種郵便にてして下さい。直接の送金に申込みは固くお断り致します。

での神札を著し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨を記して下さるよう願います。御都合に依つて分譲用又は助手分添え或はブレイクのみを出して頂きます。その時の報酬については御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略の他に身長と体重をお書き添へ願います。真を同封下さいれば尚結構ですが、若しお手元に適當なものがなければ、なくとも著文だけでも構いません。

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号  
映出版株式会社編輯部宛



の女性を「純日本式縛り」にて縛

14 号天星社宛前金にて願います。第  
 お申込は、早見の目にお申込、私書箱。  
 だいと、思いに、すも、で、お、込、さ、い。  
 文と、献的に、見、非、常、に、珍、し、い、資、料。  
 を得、て、分、め、す、特、に、シ、ー、ラ、の、要、望、に、こ  
 を、ほ、し、たい、と、い、う、マ、ニ、ア、の、明、な、写、真  
 画、紙、に、焼、付、け、た、極、め、て、鮮、明、な、写、真  
 を、紙、に、焼、付、け、た、し、ま、し、た、の、望、に、こ  
 縛、る、上、げ、た、ル、バ、ハ、金、髪、碧、眼、の、美、女、を

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号△いき▽  
生れて初めて縛られる首縄高手

小手縛りの全裸の肢体を言われる  
まに動かし床の間の飾り物の  
ように白い肌を晒すのだった。

大手札三枚一組  
シラ・ケニ一  
ぎゅうぎゅうと力  
略号五〇〇円  
まかせて縮め

つける縄は柔肌に驚くほど喰ひ込  
んで、その苦痛に耐えようとする。  
彼女の表情に一段と迫力を増す。

大手札三枚組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号△いあ▽  
きびしい高手小手 博めて加えて

首繩、更に埋れるような股間縛りで肌を割り、自然な姿態を強要すれば美しい顔面が忽ち紅潮する。

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号△いて▽

テールブルの固い板の上に正座させられた白人の美女が縦横に縄を掛けられて二つ折りになっているのを正面側面背面から狙った。

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号△いた▽

シーラ嬢の美しい容貌とすらりと伸びた肢体とが両手を吊られて拘束されることによって諦めきつた被虐美を最高に発揮している。

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号へいま▽

縛られた彼女の心の中にマゾの芽が芽ばえているかどうかかわからないが、全裸で縛られたこのボーズの中に諦めきった相が見える。

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号△いゆ▽

ドス黒い麻縄は情容赦なく白肌に埋まり青い目を曇らせて、この異様な緊縛に耐えようとする。

大手札三枚一組 五〇〇円  
シラ・ケニ 略号入いせ  
つぶるな青い 小止みを見開いて

何をすると聞いたげに賣手を見る目には可憐な拒否がある。

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号入いしV  
多分彼女は今まで人前で果の尻

を晒したことがないで、  
後手に縛られて前をかくす  
さえずなく喘ぎ悶えるだけである。

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号△いそ  
すらりと伸びた長い脚、しかし

今は徒らな足掻きを見せるに過ぎない。日本式縛りの厳しさが今こそ彼女の骨身にこたえるのだ。

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号△いや▽  
責めのイケニエとなつた衰れな

彼女に、悪魔の触手によって身動きも出来ない縛られるのであった。

大手札三枚一組  
五〇〇円  
シラ・ケニ一  
略号△いも▽  
秀々とした金髪、  
嗜好のよい高

ついでに、平常は男性を尻目に高慢だ  
つたか知らないが、このように縛  
られると裸を羞らう哀れな女だ。

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号△いむ▽  
高橋小乳男 博の首魁と責めあ

表情をアップで狙いをつけた。

大手札三枚一組  
シラ・ケニ  
略号五〇〇円  
支本の美しい

を縄を用いることによつて、このように最大にまで高めることが出来たのは大成功であると思う。

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号△いひん  
長い足を逆と折り曲げてエビの形

にすれば、流石にスタイルの良さを誇るだけあって、まことに優美な肢体を輝くばかりに開陳した。

大手札三枚一組 五〇〇円  
シーラ・ケニー 略号△いえV  
あるだけの縄を使ってシーラの

白い肌に狂ったように掛けた結末が、このような余りにも日本的な縛りとポーズになってしまった。

大手札三枚組  
シラ・ケニ  
ビール瓶、コップ、  
略号五〇〇円  
食べ散らう

した寿司の器、その中で麻縄で縛られた彼女は疲れきった全裸体を、長々とびたように横たえた。



# 奇譚クラブ

第二五巻 第二号・通刊第二七六号

(昭和四十六年) 二月号 目次

△本 文▽

- 扉で一言「プレイとしてのSM」……………阿部 亘(9)
- 考察「辻村隆研究」(SM理論家としての辻村隆)……………絹吹悠紀夫(10)
- 随想 奇虐淫乱思いつくまま……………橘 房由(19)
- 禁令を尋ねて「複婚(夫婦交換) 讚美論」……………姉小路俊介(24)
- 告白妻を縛るの記……………大越 照美(40)
- 連載小説「大噴火」△第二十九回▽……………千葉 青鬼(42)
- 懸賞入選「貴婦人の飼犬」……………野村圭次郎(50)
- 女責め図録の系譜 ストリップ残酷物語……………南 彦造(58)
- 文献研究「性典入門」(8)△巻本目録について▽……………斎藤 夜居(64)
- 水田真紀子「お町の折檻」……………水田真紀子(76)
- 習作シリーズ……………加賀 明男(83)
- 懸賞告白 イチジクの殻が潰れた時……………三原 寛(88)
- 奴隷の譜 魔美女王様の優雅な生活……………奮斗士好太(90)
- 助太刀娘相撲「梢の冒険」(中)……………奮斗士好太(90)



## 本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文庫を研究する平和で健全な社会生活を営む真面目な成人を対象として編集しておりますが、青少年の保護育成に關する条例には抵触しないよう、十分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順次整えて参りましたが、更に挿入写真の減少及び見出し、キャッチフレーズの改訂などによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いものは極力掲載しないようにするのは勿論、掲載した文章は十二分に検討を加え、いやしくも青少年の健全なる育成に支障を与えないよう努力いたします。尚、本誌の発行部数は最低限度にとどめ、その増大を企てるための努力はいたしません。

## 奇クサロン

232



- ミニズのたわごと……………竹内 秀敏
- フォト通信「裸に酔う」……………福井 太郎
- サロン楽我記△第八十回▽……………辻村 隆
- イメージ画「喰い入る針金」……………志羽 利也
- 縛られた女神たち……………塚本 鉄三
- ある青年の断片……………津治 良一
- イメージ画「光」……………旭 桃太郎
- 初めてのクリップ・プレイ……………阪東 太郎
- 編集部だより……………編集部
- 念願の文金高島田……………山本 五郎
- 聞いて下さい四つのお願ひ……………峰 真琴
- 美少女無惨図秘帖「介しゃく人無用」……………桐原 素門
- 短歌「誘 拐」……………高村 初子
- アマゾンの横顔 馬装の魅力……………佐野 寿
- 飼育の記録 妻を縛る……………小田原 一郎
- SM映画鑑賞 私の探点……………岡田 映像
- 私の愛した縛り人形……………末広 平三
- A感覚、浣腸、肛交……………相馬 盆児
- イメージ画「孤独の耽溺」……………緑 JOE
- SMファンよりの「或る便りから」……………内海 実
- フォト「犬の折檻」……………犬 畜生
- 随想「五万分之一」……………早木 夢二
- イメージ画「軟皮の樹」……………長野ヒロシ

- 四十五年度刊回顧「SMカメラ・ハント」に思う……………大西 弘明(前)
- 懸賞入選創作「狂ったプレイ」……………玄 一鬼(前)
- 年度末に思う「羞恥観念」……………三輪 昂(前)
- 被虐の旅シリーズ 赤と黄の衣裳……………由利美千子(前)
- セミ・フィクションII 牝猫と鼠の一日……………座頭 孝司(前)
- 連載・アブ紳士行状記「M派交友録」(4)……………鬼山 絢策(前)
- 懸賞入選創作「異教徒」……………天野 邪騎(前)
- SMカメラ・ハント△続・谷山久美子の巻▽……………辻村 隆(前)
- 「凄絶! 片足逆さ吊り」……………辻村 隆(前)
- 哀れなる夢想「まさにたわごと」……………虹丸 紅吉(前)
- M派創作「鳴咽(むせびなき)」……………浅羽やすし(前)
- 創作「夜の菊」……………座頭木之助(前)
- 連載小説「花と蛇」△続編第七十一回▽……………団 鬼六(前)
- 告白か? 自慢か? パンティと縛り……………舟山 和男(前)
- 連載・青春の陥穽(13)「奇妙な同居者」……………芳野 眉美(前)
- 読者通信……………編集部選(前)
- 読者ギャラリー……………雄松比良彦・室井亜砂路・豪 城二
- 須坂 旭・志羽 利也・岡 たかし
- 春川ナミオ・阿武 能丸
- 目次カット……………須坂 旭・西 名鶴
- 原カット……………あらい・かず



# カメラハントとカメラルポの美女たち

## 沖縄美人の明子嬢

本誌十月号のカメラルポで塚本鉄三氏が沖縄出身の美人座間明子嬢の責め緊縛に成功し、その麗筆にて詳細の経緯を発表した。明子嬢は、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 妖麗な縛られぶり

座間明子嬢の妖麗な縛られぶりを、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 股間縛りの痛さか

座間明子嬢の股間縛りの痛さを、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 悶える厳しい縛り

座間明子嬢の悶える厳しい縛りを、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 椅子で演ずる痴態

座間明子嬢の椅子で演ずる痴態を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 観念して身を任す

座間明子嬢の観念して身を任す姿を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 縄は柔肌をくびる

座間明子嬢の縄は柔肌をくびる姿を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 美しさ抜群の正面

座間明子嬢の美しさ抜群の正面姿を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 飼育女性好美夫人

座間明子嬢の飼育女性好美夫人姿を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 悦虐にむせぶ美貌

座間明子嬢の悦虐にむせぶ美貌を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 責められて恍惚境

座間明子嬢の責められて恍惚境姿を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 足挙げと開股縛り

座間明子嬢の足挙げと開股縛り姿を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 超羞恥責めの極致

座間明子嬢の超羞恥責めの極致姿を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 股縄は知っている

座間明子嬢の股縄は知っている姿を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 鼻責めの悦楽境地

座間明子嬢の鼻責めの悦楽境地姿を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 鼻を愛撫する責め

座間明子嬢の鼻を愛撫する責め姿を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 蠟燭責めと臀打ち

座間明子嬢の蠟燭責めと臀打ち姿を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 喰い込む股間縛り

座間明子嬢の喰い込む股間縛り姿を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、

## 肉を喰う股間縛り

座間明子嬢の肉を喰う股間縛り姿を、本誌十月号のカメラルポで、大塚三枝氏が、その細い腕で、鮮やかな色紙に、好家にお付けした極鮮な写真と、直接印刷に焼けた極鮮な写真と、真として、好事家にお付けした極鮮な写真と、





あらい・かず画

## プレイとしてのSM

本誌ではプレイという言葉が従来から頻繁に使われてきたし、最近では一般誌に於いてもプレイという文字が日常茶飯事のように用いられてきている。

SMをプレイとしてみる考え方に、私は全面的に賛成であるが、異論を唱える方も決して少なくないだろうと思う。

プレイといえば、遊びであり、申合せであり、所謂スポーツ化である。スポーツの槍投げは技を競うのであって、決して敵を殺傷する目的を持っていない。

SMをプレイ化することも、遊びのためにSMを愉しむのであって、本来、相手を苦しめたり、傷つけたりすることが目的ではない。良識によって理性化されたSMは、そこにリクリエーションとしての楽しみはあっても、対象物を損う何物もあってはならないのである。

この意味でプレイとしてのSMのより高度化を私は声を大にして提案したい。他人に迷惑を掛けないSM感の満足は、SMをプレイとしてエンジョイすることにあって、所謂「人生はお芝居である」という文句が、ここでも重要な意味を持って私達に迫ってくるのである。良識はSMをプレイ化する——と。





はじめに、この小論で使用するSMという言葉について定義しておきたい。それは即ち辻村氏が昭和四十四年十二月号の『サロン楽我記』で説かれている如く「恋態の頭文字のHが、今では恋態でも助平でもない……軽い意味の『猥らごと』程度に、ごく一般化して使用されている」ように「SMという言葉もその語源は勿論サド、マゾから来ているが、真性のものではなく多分にプレイを前提とした要素を含む言葉に変貌」している。私の使用するSMなる語も、精神病的サド、マゾか

## 考察

# 辻村隆研究

## — SM理論家としての辻村隆 —

「何しろ辻村さんは、謂わば奇クの歴史ですな」

Ⅱ 団 鬼六（『オニ六先生大いにシバる』昭四十三・一）

ら遠ざかった「プレイを前提とした要素を含む」ものなのである。

さて、辻村隆について考える人は、それが尊敬からであれ愛情からであれ、又羨望からであれ、誰しも最後には一つの命題に逢着するであろう。即ち、果たして彼はサディストなのか否か、と。

事実、これは極めて興味深い問題である。そして奇クの読者は、直接、辻村氏を知っているモデル諸嬢を含めてその大部分の人は、

辻村氏を目するにサディストをもってしているらしい。現に辻村氏も、その旺盛なるサード精神——氏の性格の長所でもあるのだが——によって、つとめて読者の要望にそうべく努力されたため、ますますその印象を強めるようになったのである。

例えば『乱倫の生態』（昭和四十四・五）の滑川幾代である。彼女は辻村氏を次のように評している。

○

辻村さんが、こんなに温厚な感じの人な

夫 紀 悠 吹 絹



んて……。私、もっともって凄く感じのサジストを想像していたんですもの。

○

「買いかぶりですよ。そのうちボロを出しますよ」とは辻村氏の返事であるが「違うのだそうではないのだ」と心中、強く叫びながらも、誤解を解くべく努力しても所詮、無駄だろうという、一種のあきらめにも似た感情が氏の返事から読みとれる。そして結局、氏は滑川幾代が認識しなおした通りの男性で、決してボロは出さなかった（初めからなかったのだから）ことは、このハントを読んだ人なら、すぐ理解し得たであろう。

しかし、こういう間違いをしたのは、何も女性の無思慮からでは少しもない。辻村氏自身が、昭和三十九年十二月号の「サロン楽我記」で「私自身矢張りサジストだと自認するのだが」と言い、又、昭和四十二年十一月号の『快樂の紋章』で、芝梨枝子の「所謂、サジストなのね」という問いに対し「いやな言葉だがその通りだ」と奇怪な発言をされているからである。そして、種々のSMハントプレイ。誤解を招くのも、或いは当然かもしれない。

又、氏は滑川幾代に会う少し前にハントし

た飯田カオルには「特殊なプレイが好きなのレクターとでも言うておきましょうか」と自己紹介をしている。（『肉塊の蠢き』）

しかし、私をして言わしめれば「美を追求するロマンチスト」と自己紹介してもらいたかったのだが、その理由はいずれこの小論が進むにつれて明らかになるだろう。

飯田カオルは、辻村氏の行動を評して、

○

エッチだなんて、言葉だけで言い切れないようです。エゴの極致というのかしら。世の中、金と暇があれば男は誰しも、多かれ少なかれ、何らかの方法で女性を翻弄し自由気儘に扱ってみたいくなるのでしょう。

○

と言っているが、この考えが明らかに間違っている事、いずれこの小論が証明するであろう。今は、辻村氏の人間性を含めてその言動は、この程度にしか受け取られていない一証拠として挙げておこう。

又、先の柴梨枝子を雇い、辻村氏にSMプレイをさせた、金満家の山田氏は、辻村氏を「ああ、辻村君——例のオモシロイ人だね」と言ったという。辻村氏が単なる町のオモシロイ小父さんか否か、これもこの拙論が決定

を下すであろう。

辻村氏が飯田カオルに「特殊プレイのレクター」と、奇妙な自己紹介をされたのは、氏自身の心中に「サディスト」を嫌う気持と「サディスト」でないとする自負心があり、それが無意識のうちに働いたからであろう。私は氏が柴梨枝子に「いやな言葉だが、その通りだ」と一見、サディストを肯定された如き発言の「いやな言葉だが」というところに注目し、そこにすがりつきたい。そして私の立論を進めて行きたい。そこを私の考察の立脚点としたい。それは一に辻村氏がサディストでないからである。かつて、義憤生氏が言ったように、氏自身が誤解されているのである。現に氏は、次のようにも自己を分析されているのだ。

○

女性には、みんな可愛いもの。サジスト振っててくせに、案外フェミニストだね、私って。（「女の肌の燃えるとき」昭四十四・六）

○

試みにマルキ・ド・サドの著作をどれでもよいから読んでみ給え。女性の人格を全く無視し、血しぶきを上げさせ、のたうち廻らせ



ている。これはフェミニストのする事であろうか。いや、これがサディストの仕事なのである。

一方、辻村隆非サディスト説を唱えた者は極めて少なく「一寸一言」の義憤生氏しか寡聞にして知らぬ。

辻村隆氏はサディストか否か。結論を先に言うならば、私も辻村非サディスト派なのである。そして辻村隆氏こそ、極めて高度なロマンチストだと考えるのである。以下、辻村氏の全業績を瞥見することにより、私の仮説が間違いでないことを証明しよう。

辻村氏は、現在見る如き、SMルポライター、SM文学作家の前に、SM理論家として活躍された一時期があった。即ち昭和二十七年頃から三十年代頃である。この時期の氏の業績は、辻村隆という一人の人間を考えると、極めて貴重な示唆を我々に提供してくれる。そうして、この時期に発表された辻村氏のSM理論は、その根底において、昭和四十五年の現在に至るまで少しも変化していないのに驚く。その故に於いても、その時期の氏のSM理論は貴重なのである。

さて、何をもって辻村氏をサディストでな

く、優れたロマンチストであるとするか。即ち氏は次の三つの人間性を所有されているからである。

### (一) 美の追求者である。

氏は『被縛女体の研究』（昭二十八・八）で次のように言われている。以下、私の小論においては、今、古い奇クは殆ど入手不可能であり、辻村氏の貴重な資料を翻刻する意味で、煩を厭わず引用しよう。

#### ○

ここに我々はよく縄を纏いながらも、そこに「美しさ」というものを発見したいと常に努力しているものであり、刑罰としての被縛とは自ら軌を一にしていないのである。刑罰図譜といったものは一部の或る種のマニアには歓迎されるかも知れないが、我々のとるところではない。あくまで健康的で陽気な浪漫的なものが我々の狙いなのである。

#### ○

辻村氏は相手を苦しめることを主眼とした「刑罰としての被縛」を好む者を「一部の或る種のマニア」として自らと一線を画されている。既に指摘した如くマルキ・ド・サドの

諸作を読むと、そこにあるのは只、女の阿鼻叫喚と飛び散る血しぶきだけである。尋常の感覚が受容することが可能な美しさは何もない。「美を破壊するところに新しい美があるようなサディストの詭弁は、この際、とる必要はない。辻村氏のいわれる、この「一部のマニア」こそサディストなのであって、右の引用文は、辻村氏自身の非サディスト宣言でなくてなんであろう。

かかる辻村氏に、又、女がイヤだといって逃げるのを無理に縛りたい人がいるが、「私はどちらかと云えば、無理にというのは好かないので云々」（『女を縛った経験語る』昭二十八・十一）という発言があるのは至極、当然のことであろう。

以上の如く、緊縛プレイは決して女を苦しませるのを目的とした刑罰的なものでなく、そこに女に対する愛情を主体とした美があるのだ」という上述の論旨を更に徹底させた論文に『緊縛に関する十二章』（昭三十・一）がある。

これは辻村氏のSM理論の中で最も力のもったものであり「奇ク」史上、沼正三氏のマゾ関係の諸論文と共に疑いなく第一に位する論文である。



先ず氏は、緊縛という言葉には「愛縛」や「粹縛」「淫縛」等の要素が総合された「妖しい魅力」があることを指摘され、次いで何故、その魅力にひかれるのかと設問を投げ、自ら解答を与えて居られる。

即ち、氏自身「普段は平凡なる一サラリーマンであり、家庭では、よき夫であり、四児の父親でもある」のに、緊縛の持つ「妖しい魅力」にひかれるのは、一般的に人間性というものは「ジキル博士とハイド氏」にみる如く複雑であり、特に男性はその通性として、女性征服欲があるからだ、とする。

一寸、ここで緊縛の「妖しい魅力」を構成する緊縛に対する、男女相互の感情について註を加えると、それは被縛者からすれば「身動きも出来ない程、ひしひしと身をいましめられた自由束縛の感じ」であり、縛者からすれば、「完全に相手の自由を奪い、自分に属従せしめた、という満足感」のことである。

(「荒縄による緊縛感のスポット」昭二十八・五) 言い得て妙だ。

再び「緊縛に関する十二章」にもどると、つまり女性緊縛の願望は、男性にとって極めて本能的な欲望で、当然のことなのである。少しも隠すべきものではないのである。しか

しそれだからといって、それは無制限に拡大されていいかというと、ここに又、問題が起る。辻村氏は理性的な男性と非理性的な男性の二様を考察し、次のように結論を下す。

○ 理性が支配すればする程、それは内燃性のものとなり、自瀆的な感情の吐け口が文なり絵となって現われてくるのだ。(略)

自己の内奥に秘めたものを文にすることすら知らない一部の実行派、即ち公然猥褻の暴行へと駆り立てるより仕方のない、教養なき野蛮族こそ、本当のアブノーマルな人間とっていいであろう。

○ 我々はここに、モラリスト辻村隆を見るのである。

本当のアブノーマルな人間とは、確かに氏の指摘する人種である。この明確な断定は辻村氏の理性的、且、道徳的な性格を物語っている。そのような氏が、さらに緊縛と嗜虐の限界について触れ、次のような発言をされているのも、これ又、当然であろう。

○ 私の提唱する緊縛は、どこまでもプレイを主としたもので、拷問でも責め折檻でも

あってはならないのだ。拷問や責めは既に緊縛の限界を外れている。(略)

○ 嗜虐(加虐ではない)と苦痛の限界、これは緊縛のプレイを行なう人は須く心得ておくべきだと思う。(第四章)

○ 相手をただ苦しめ痛めつけることのみを目的とした拷問や責めが、緊縛美の破壊者であり有害以外の何者でもないから、氏は排斥するのである。拷問によって女性が少しでも緊縛を厭うようになった時、辻村氏の追求する美が崩壊してしまう。それは氏が「緊縛は被縛者にとって愉しかるべきものであらねばならない」(第五章)という、前提にたっているからである。

この前提は、それから十数年たった今日でも、少しも崩れていない。ハント「お気に召すまま」(昭四十四・十)から氏の意見を聴こう。

○ 責め、いためつける前に、苦痛が快楽に変化しなければ、プレイの醍醐味はないといっても過言ではなからうか。(略)

東映や日活の一連の性愛路線の映画が、残酷な責苦をもって事足りりとしているの



は、真のプレイを知らない人の企画であった。(略)

SMプレイは、女も歓喜し、男も悦虐に喜悅してこそ、真のプレイの成果があがるのである。(略)

嗜虐の果ての快楽、被虐の前戯のあとにくる悦楽が、プレイの真髓だと私は思っている。

これ等の意見を徴しても、辻村氏が二十年前の若年に発表された、緊縛プレイ愛好者非サディスト説が、決して、当時の世間的な恥かしさ後ろめたさをカバーするための、煙幕でなかったことが、容易に理解されるのである。

さて、緊縛プレイは男女が、ともに楽しくなければならぬことがわかった。どちらか一方が少しでも苦痛を感じた瞬間、二人が構成した緊縛美は雲散霧消し、後には嫌悪の情だけが残る。氏の言葉、「嗜虐は加虐ではない」とは、何と名言であろう。この言葉を吐く人間が果たしてサディストであろうか。美の、緊縛美の飽くなき追求者にして、初めて言い得る言葉なのである。

では、次に緊縛プレイを上述の如く考えて

いる辻村氏が、緊縛美を完成させるために、如何なる態度で臨もうとされているかをみよう。実際的なことは、本論の第二部、SM写真構成家としての辻村隆で、精しく考察するとして、ここでは氏の考えの大筋を掴んでみたい。

氏は先ず、緊縛は美であらねばならぬということから「女性の肉体の線の美しさまでも崩してしまう滅茶苦茶に縄をぐるぐる巻きにすることは、最も厭むべき」とする。(「緊縛美の考察」昭二十八・四)このことは、それから三年後に発表された既出の「緊縛に関する十二章」でも指摘され、次のように言うて居られる。

〇  
ごてごてと寄せ集めの紐、帯、縄切れの類いで滅茶苦茶に縛るのは、或る程度、凌辱の美感はあろうが、緊縛と名のつく縛り方には、凡そ縁遠いものだ。

〇  
そして「長い太目の綿ロープで、スッキリと柔肌を形よく緊縛した場合、そこには緊縛の美感が、そこはかとなくただよ」と結論されている。

では緊縛の美感は、如何にして構成される

のか。

それは先ず、女性が全裸か、幾らかの衣服をまとったものか、という二つの観点に別れる。氏は「夫々の趣味によって違いうだろう」と各人の立場を認めつつも「或る程度、あぶな絵式に腰巻なり、又洋式に黒いタイツなどをつけた方が寧ろ緊縛の様相が現われていいのではなからうか」と自分の根拠を明らかにされている。何故、氏が程々の着衣を好むのか、この問題の解明は実に重要な意義を持つ。

〇  
裾からこぼれる太腿の悩ましさも、これが始めから全裸になっているものを見る時は、その太腿自体も何らの感興も呼び起こさない。緊縛のため、乱れた裾からこぼれる股のつけ根、胸のほだけ、歪んだシュミーズ。そんなものこそ反って頹廢的な緊縛の美感が盛られているのではなからうか。

〇  
遂に辻村隆氏の追求する「美」が明らかにされた。即ち緊縛のもつ頹廢的な美なのである。頹廢的な美は、例えば永井荷風や谷崎潤一郎の文学にみる如く、それは実に高度な、そして極めて美意識の発達した者にのみ理解



できる美なのである。辻村氏が、なまなかの美追求者でないことが、これでわかった。

## (二) 愛と和の求道者である。

さて、辻村氏がロマンチストである理由の二つ目は、愛の求道者、且、和の信奉者であることである。この場合、私の使用した和という言葉には、それが持つ、すべての概念を包含しての、それと解していただきたい。

辻村氏は、既にみて来た如き、氏自身の美意識を、人間相互の和合に役立てるべく行動しようとしたのは必然であろう。人間の愛のそして和の極致は、男女間、それも夫婦の間において完全なものとして開華しよう。

辻村氏は既に昭和二十七年に、夫婦間の危機である倦怠期をのりこえるために、緊縛を取り入れることを提唱されている。何故、倦怠期解消に緊縛が最も良いのであろうか。氏は倦怠期を、性生活上の不満に起因しているとし「夫婦間の虚飾なき赤裸々な愛情の交換が、それを解決する最短距離」だとする。

確かに夫婦生活は新鮮味がなくなると、そこには只、平凡なものが露呈され累積されて遂には、平凡なものが醜悪なものへと変化する。もしその時、そこに緊縛を取り入れたら

らば、(一)でみて来た緊縛の頹廢美という高度な美がそこに展開され、醜悪なものは吸収されて遂に消散してしまふであろう。そして残るものは、ただ美、美だけである。男女が其処に新しい幸福と感激を発見するであろうことは言をまたない。

それについて、改めて辻村氏の意見を聴こう。

### ○

赤裸々なる夫婦生活に於いて、単調なるノーマルな生活を破るため、より新鮮なるものを探求するのは男性の本能である。夫は、種々新しい刺激と変化を希ってやまない。かくして愛する妻の身体の一部を噛み、さては性愛を、より以上、高めるため、妻の肉体を緊縛することによって、又は鞭撻することによって妻を征服し、妻は征服せらるることによって、より激しく興奮と満足とを覚えるのである。これは何ら変態的な行為でなく、夫婦愛の極致に至って当然起こるべくして起こったに過ぎぬ性愛のあらわれである。(「夫婦愛と緊縛の考察」昭二十七・十)

### ○

「これは何ら変態的な行為でなく」は、まさ

に聞くべき名言であろう。そして、これは、辻村氏が自分自身の体験を語られた告白を読むことにより、一層の迫真性をもって読者の胸中に染み込むのである。

ちなみに、辻村氏がこの論文を発表された昭和二十七年は、氏にとって特記すべき年であった。というのは、氏が初めて奇クのために緊縛写真をとられた年で、その時のモデルは、かの有名な川端多奈子である。(「甘美な羞らい」昭四十三・二)

さて、ここで一寸、辻村氏の緊縛美に魅せられた性生活史を瞥見しよう。氏は第四回読者座談会(昭二十八・十一)の席上、次のように自己を分析されている。実に興味深い資料である。

### ○

少年期から青年期に至る過渡期には、あらゆる仮性的倒錯症状があらわれるものですね。私なんかも、今ではネオ・サディストの一人にされていますが、やはり最初の洗礼は小学校時代の教師からと、中学時代の上級生からの受身的影響。それが自分が上級生になると、逆に下級生の美しい少年に好意を持つようになりましたが、しかしそれも異性に興味を持つようになると霧散



しましたよ。

○  
そして、緊縛に興味を持つようになったのはその頃からか、という質問に対して、

○  
はつきり何時からというような画期的なものはないようです。只、月並のようですが、小説なんかで女の被虐場面があると、特に熱心に読みました。美しい女を見た時、このお上品にすましたお嬢さんを、身動き出来ないようにして苛めたらなあ、という淡い感情は思春期の末期には起こったことを覚えています。(略)

それから、ずっと潤一郎のものや乱歩のものを耽読しまして、結婚するまでは直接そういう機会もないし、強いてやってみようという程、強い衝動も起こらなかったんですが、初めて縛った女といえは妻なんです。

○  
この辻村氏の告白を読むとき、我事を語っている、殆どの日本中の男性は、思わずにはいられないのではなからうか。というのは辻村氏がサディストという精神病患者でなく精神的肉体的に極めて健康であるからだ。故

に氏の言動の持つ普遍性に、多数の男性は微笑みつつ、内心、肯定するのである。

○  
さて辻村氏は、最初に縛った女性は妻だと明言された。もう少し、そこにスポット・ライトをあててみよう。氏は愛妻を得て、如何にその主張を実践されたのであろうか。緊縛に関する十二章<sup>1)</sup>は言う。

○  
楽しい新婚時代も過ぎ、そろそろ無味乾燥な夫婦生活の倦怠期に入った場合、程々に緊縛は前戯として行なっていくと、私は思う。(略)

私自身も嘗てそうした倦怠期と云うか過渡期があつて、妻との生活に、も一つ、情熱を覚えなくなった時があつた。

或る夜、何かの刺激で、妻の両手両足を細帯や、腰紐で束縛した処、妻は非常な羞恥を全身に示し、新鮮な抵抗を感じて、私は近時、かつてなかった満足を覚えたことがあつた。これは一つの発見だと思つた。

私は妻と相談の上、毎夜の如く行なえば疲れるので、一週に一度(大抵は土曜日)と定め、次第々々に本格的緊縛へと導入して行つたが、妻がその後、土曜日を心待ちに待ち受けるようになったのは確かだ、はっ

きりいそいそしているのが、私にも汲み取れた。私の意慾も、そうした夜は旺んになることは否めなかった。これも一種の変型的な前戯と見てよからうと、私はその時、思つた。

○  
そして、氏は「私の場合、無事に倦怠の過渡期を、緊縛によって脱し去ったといつても過言でない」と断定され、「妻を征服する場合、肉体的には緊縛が最良の方法ではなからうか」とも、感想を述べて居られる。

この辻村氏の体験の裏づけがあつたからこそ、夫婦の和合に緊縛をすすめた、上述の諸論文に迫真性があつたのだ。

そして我々は又、右の告白文で、氏が「毎夜の如く行なえば疲れるので、一週に一度と定め」と云われているところに注目しなければならぬ。

疲れきつた女体から真の美は生まれぬ。故に女性をいたわる気持から、一週一度と定めたのである。もし、これがサディストならどうであろう。女性と相談して緊縛の回数をきめること自体ナンセンスであろう。この点からも、辻村氏が極めて健康的なロマンチストであることがわかるのだ。



さて私は、先に飯田カオルの、辻村氏の行動はエゴの極致であり、金と暇を持て余した男性が、女性を翻弄するのと同じであるという批評に対し、果たして真か否かと設問を投じたが、もはや私が、飯田の言葉が間違っているため無駄な言辭を費すまでもなからう。既にみて来た辻村氏の諸論文が、それに明確に否の解答を与えているからだ。

辻村氏が女性を緊縛するのは、女性を翻弄するためでなく、女性をいつくしみ、その人格を尊重するからであった。そして、女性の持つ美しさを引き出すためであった。それは女性を愛するが故だ。女性を愛さぬ者が何で女性の美に心を奪われよう。

女性は緊縛されることによって、不思議な美を発揮する。辻村氏は、その美に魅了され追求せずにはいられないのである。その美には幻想があり、夢がある。その幻想と夢が、氏を緊縛へと駆りたてる。しかし辻村氏は、それを強引に押し通そうとするエゴイストではない。相手が少しでも嫌悪の情を示せば、氏は速かに自分の探求心を後退させ、或る時は断念さえもする。まして翻弄という言葉など、氏にあたらぬも、はなはだしい。

『乱倫の生態』の滑川幾代は、自分の良人の

ことを辻村氏に「私がいくらやめてと頼んでも、自分の気の済むまでトコトンやるのね。デリケートな女心なんて、ちっとも考えてくれない」と言っている。そういう男の行動こそ、飯田カオルが指弾して止まない、女性を翻弄するエゴイスト特有のものなのである。

そして、それが緊縛プレイにつながる時、一直線にサディストになる。滑川幾代は辻村氏の言動に、良人と裏はらなものを発見して驚いている。辻村氏も淡々として「それが真のSなのだろうね」と相槌を打つ。辻村氏がサディストでないからである。

今ここに、一組の男女の努力によって頽廢的緊縛美が構成され展開されたとする。しかし完成九十九パーセントの所においても、もしそこに一点の男性のサディズム或いはエゴイズムが加われば、すべては崩壊してしまうであろう。緊縛美は、それ程デリケートなものである。しかしサディストは、それを考慮しない。それに非ざる辻村氏は、特にこの緊縛の余情の重要性を強調するのである。

○  
緊縛を終えた後の余情、これは重要である。如何にして解放後の被縛者をいたわるべきか。(略)

被縛者への、優しい慰めの言葉といったわり、適切な紳士的態度——。緊縛につづいて性愛のともなう場合は、愛撫への連鎖反応——。こうした緊縛解放後の処置が適切であればある程、被縛者は緊縛を厭わなくなる。(『緊縛に関する十二章』)

○  
まさに銘記すべき名言であり、如何に辻村氏が、相手の女性の人格を尊重しているかが理解されよう。この辻村氏の態度は、先にも触れた如く、終始一貫して変りないものである。これが辻村氏の緊縛美追求のモラルである。例えば十四年たった昭和四十四年十二月号の『サロン楽我記』でも、次の様な一文を見出す事が出来る。

○  
SMのプレイには愛情が伴い、拷問、責折檻には憎悪が介在している。思いきり強く緊縛しておき乍ら、縄を解くと、縄痕の体を撫でさすってやる心理、それがプレイというものではなからうか。(略)

美肌に血を流し、悦虐や快楽を伴わぬ苦痛のみにのたうちまわらせたら、それはもうプレイとはいえないのではなからうか。縛る人間と縛られる人間、虐める男と虐め



られる女、そうしてその逆も真で、こうした人間関係が暗黙の諒解の上でSMの行為を行なつてこそ、そこに悦楽と快楽への探求が、生まれてくるのだと思うのである。

“責め地獄”が、も一つ同好者の共感を呼ばなかったのは、そうしたことに遠因があるのではなからうか——。

まさに然りである。

常人は狂人を厭う。常人の社会において、“責め地獄”的映画が栄えなかったのは当然であろう。そして面白い事に、偉大なる常人辻村氏は、すでに昭和二十八年にこの事を予言されているのである。

### (三) 生命の絶対的尊重者である

真性のサディストは、少しも相手の生命は考慮しない。只女性に要求するのは献身であり、それに報いるのは死である。故に生命の絶対的尊重者はサディストではない。サディストたり得ない。辻村氏が如何に人間の生命を貴重なものと考えているか、ここに重要な資料がある。

私のような存在が良風を毒するとして、おえらい婦人の方のシンシユクを買っているらしいが、一旦生を享けてこの世に生まれ出ようとする幼い魂を、中絶掻把という手段で、案外易々として殺している女人の残酷性を、どう説明すればいいのか。プレイの対象に美を発見してそれを追求し、耽美するのも、藤本氏の謂う一種のゲームであるならば、幼い魂の抹殺に較べて、それは確かに許容されてよい、人それぞれの好みではなからうか。(『サロン楽我記』昭四十五・一)

世界に人間の生命を尊しとする者は少ない。それが人情である。しかし胎児の殺人に激しい憤りを覚える氏は、まさに通常の人情を超えた、それよりもっと深い人間愛に根ざした性格の所有者である。それ故に次の発言があるのも当然で、これは亦、氏の性格の一面を物語つて余りがない。

(略)最後の南方の孤島で、次々と戦友が栄養失調で死んでいったのですよ。(略)こんな面白いものを見ることも出来なくてムザムザ死んでいった英霊は本当に気の毒

だってネ、(略)もっともつとわれわれは戦死者英霊の気の毒さを察してあげなければいけないと思う——(『友あり遠方より来る亦愉しからず哉』昭四十一・四)

私は既に辻村氏が、ロマンチストでありモラリストであることを確認した。しかしここに至って、あわてつつも喜んで、辻村氏の性格にヒューマニストの一項を付け加えるものである。

辻村氏がサディストであるか否かを論じているうちに、何時の間にか私は、サディストなどという低次元を超越した、素晴らしい一人の男性の人間性を語っていた。しかしこれは辻村氏の諸論文を読み進んで行った事の当然の帰結であった。もし、辻村氏はサディストだと自分自身に言い聞かせつつ氏の論文を読む人があったとしても、最後の頁を読了した時、必ずや豊かな人格者辻村氏の、おだやかな微笑に遭遇するに違いない。

辻村氏は、堺の出身(『陶酔の乳房』昭四十二・七)である。堺は亦明治の情熱歌人と謝野晶子の故郷であった。堺は、ここに希有の二人のロマンチストを得たと言ふべきであろう。



カッタ・ユミヒコ



随想

# 苛虐淫乱

(サディズム)

## 思いつくまま

橘 房 由

近頃、書店を歩いてみると、やたらにS・M・なんとかといった種類の雑誌に出合う。「ほはお」と当然のことながら、手にとってペラペラと頁を繰ってみて、ガックリすることがよくある。

本質的にはS性でもM性でもない人がマスコミで、やれサドだ、やれマゾだと騒ぎたてるので「ひとつ、こいつで金儲けしてやれ」と、いやしい商売根性で出版しているのである。この種の雑誌の、見分け方を考えてみたのだが、何でもかんでも盛り沢山に入れておけばいいと思ってS・Mからホモからレスビアンから、おまけにノーマルな人向け? か

何のヘンテツもないヌード写真まであるのは大抵がそうらしい。種類が豊富であれば、それだけ多くの人が買ってくれるとでも、思っているのだろうか。あさましいという他ない。そして、どれもこれもが本物でない。

一例をあげて説明すると、最近の某雑誌に緊縛写真なるグラビアが数頁ついていたが、およそS的なムードはまるで感じられず、単なる縄付きヌード写真という感じであった。よくアメリカの映画なんかには、日本の場面が登場する時に、70年代の東京に人力車が現われたり、紋付き袴の人が多く繁華街を歩いたり、日本でもアメリカでもない異様な風

俗が出現して我々日本人を不愉快にさせるがこの種の縛り写真にもそれに似た様な不快感を感じる。ゆるんだ縄に、苦しみの表情も悶えの表情もないモデルの顔。ポーズも、できるだけ無理のない楽なものである。モデルはなかなかの美人であるしグラビアはカラーでもあるのに本当に勿体ない気がする。ひと言『奇ク』に相談すれば、いい作品ができたのに……なんて、ハツ当たりに思う。もっとも『奇ク』が再び、グラビア写真を入れる様なことにでもなれば、この種のS・M・なんとか・かんとかと云った様な、どちらつかずの雑誌は消えてしまうであろうが……。



「奇クが再びグラビア写真を入れてくれたらなあ」と、垂涎の思いで密かな期待を抱いている『奇ク』のファンは私一人だけではない。もしもそういうことになれば、一冊二千円前後もする『奇ク』の古本を漁って東奔西走する苦勞もなくなるわけである。最近では、先に述べた様なまやかし雑誌を始め、相当名のあるSM専門誌でも緊縛写真を取り上げる様になってきた。しかし、それでも尚かつ、『奇ク』の古本は高値を呼び、売れているのだ。と云うことは、過去の『奇ク』にあったものに勝るグラビア写真が、いまだ無かったし、これからも無いであろうと云うことであると思う。くどい様だが『奇ク』編集部への再考を願いたい。

映画においても『残酷……』『残忍……』『責め』と、題だけ興味津々のものがある。私もそういう題がついておれば釣られて、一応は行ってみるのだが、この方のでたらめも相当なものである。そしてさしたる題名でない映画で、むんむんたるサディズムの臭いがするものもある。これだけは雑誌と違って映画館へ入って出てくるまで、内容をおおづかみにすることもできない。もし『奇ク』の読者の方で、SM映画の上手な見方を知っていらっし

やる方がおられたら教えていただきたいが、私も、色々映画を見てきた結果、不完全ながらSM映画の見方を自分なりに決めているのである。これくらいのことでは誰でも考えておられることだと思うが、まず映画の看板を見て小森白氏か団鬼六氏の名前があれば、八分通り映画館に入ってよいと決めている。勿論ついでに主演スターの名前も見ておいて参考の足しにすれば良いようだ。次に題名であるが、これは前にも書いた通り見破るのがさぶる難しいのだが、確実な題名からゆくと、『拷問……』とか『……刑罰史』とかの様に拷問という言葉が刑罰史という言葉の入っている題名の映画は百パーセント大丈夫だと思っている。もっとも、最近はこの種の題の映画は、メッキリ無くなってしまったようだが……。私としては『日本拷問刑罰史』や、その他のリバイバル上映を、熱望するところである。

要注意は『……責め』とか『残酷……』とか『……地獄』という種類の題名である。私の見た映画の中で期待外れもいとこだったのが『夢幻地獄』とかいうやつで、およそ責めの場面はゼロで、その代りに婆さんのヌードが出てくるという気分のはなはだしく悪

くなる映画であった。こういうゴダールのできそこないみたいなくだらん映画はピンク映画館からしめ出すべきであると思う。だからそれらしい題名の映画を見たいと思ったら本屋へ行って、成人映画の雑誌でも立ち読みして、ある程度の推測をしてからにすればよいのだろうが、本屋のオヤジのジロリが気になると思うようにはならない。

猟奇的な感じの題、あるいは争いのイメージが浮かび上がってくる様な題名の映画、または戦争に関係した感じの題名の映画はマージとしておいた方が良いでしょう。推察の上でとび込んで見た『性教育なんか』というふうな、教育的な題を除いた女高生関係の映画に、時々面白いのがあった。『桃色秘密ルー』とか『肉体の畏』とか『女高生体験記・濡れた秘事』などである。

『奇ク』の奇クサロンに載っている『今月の縛り映画』などの映画紹介を参考にするのもよいのだろうが、見た人の投稿なので街で上映されているものよりも、一テンポ遅れている。

できたら毎月『奇ク』で頁をさいて洋画邦画を問わず、編集部で新作映画の紹介をしてもらいたいところである。



映画と云ってもなかなか私の感覚にピッタリくる作品は少ない。SでもMでもかなり主観的なものであるから皆に満足させる作品は、映画に限らず小説でも写真でもプレイでも不可能なのかもしれない。だから私が良いと思っても否とする人が多いであろうから、今書いているこの雑文でも私の主観が強過ぎて読みづらい人には謝っておきたい。

私が今まで見た映画の中でもっとも感激したのは『世界猟奇地帯』というドキュメンタ映画の中で、ユダヤ人の少女が私刑される西ドイツの残酷ショーの場面である。ほんの十五分にも満たない短い時間であったが、あの場面にはサディズムの醍醐味をお手本の様に示していたと思う。時代はナチスの恐怖政治のもとで、屋根裏に一人の金髪のユダヤ人の少女が隠れているところからこのショーは始まる。

少女は人形を抱いて子守歌を小さな声で歌い乍ら椅子に坐っている。そこへナチスのゲシュタポが舞台の下手から現われて、いやがる少女を無理やり連れてゆく。舞台は変わってゲシュタポの取り調べ室。少女は恐ろしさの余り震えながら人形をしっかりと抱きしめて取り調べ官の机の前の椅子に坐らされてい

る。取り調べ官は独眼でいかにもサディストクかないやらしそうな顔をしている。机の上には二たばの縄が置かれてある。取り調べ官は激しい口調で少女に何かを質問している。こういう場合、ドイツ語というのは大変効果的な響きをもつものだった。少女は泣きそうになって、口をしっかりと閉じたまま、ひたすら首を横に振るだけである。

やがて少女に何も答えることができないと分かったらしい取り調べ官は、質問をやめ、表情を崩してゆっくり立ちあがると、少女から目を離さずに机の上の縄を素早く少女の後に立っている二人の部下に手渡す。部下はすぐに少女を椅子に後手に縛りつける。人形が床の上に落ちる。取り調べ官が少女のそばにやってきて、舐め回す様に少女を見つめた後で鞭の先でニヤニヤしながらスカートをたくし上げてゆく。白い脛がまずあらわになり、膝小僧が見え、なおも太腿までもむき出しになる。水色のパンティまでが覗けて見える様な状態にしておいてから、部下に合図する。少女はこの間も恐怖と羞恥の顔で黙ったままである。

とたんに絹をさく様な悲鳴と打撃する鈍い音が聞こえる。しばらくその音がしてからス

クリーンに椅子に縛られたまま殴りつけられた後の少女の姿が大写しになる。目の周囲は黒ずんで、唇はきれて血が滲み、顔全体が青ずんで、おさげに金髪を分けていたリボンがちぎられ、服の前は引き下げられて、水色のブラジャーが無惨にもあらわになって、しかも両手は椅子の背後に縛られたままである。

取り調べ官は金髪を驚嘆みにして息使いも荒々しく苦しげに悶えている少女の顔をのけぞらせ、その上におおいかぶさる様にして再び何かを強い調子で質問する。少女は朦朧としながらも首を横に振る。取り調べ官は机の上に置いてあるもう一たばの太いめの縄を部下に手渡す。部下は縄を受けとるとグッタリした少女を椅子から、かかえる様にして離し舞台の中央の方まで連れてきて、かろうじて少女の爪先が床にとどく位にして両手吊りにする。

この両手を縛る時に、何かを少女の手の間にはさんでその上から縛るのだが、その時に少女は朦朧とした顔をゆがめて敏感にその苦痛に反応する。少女は椅子から舞台中央に連れて来られる間に服は脱げて、パンティとブラジャーだけという姿で吊るされている。このまるで無抵抗の状態の少女に取り調べ官は



剃刀を持って近付き少女の目の前でチラチラさせる。少女は体を横の方へ弓なりにしてイヤヤをするが、ブラジャーの紐が切られてずり落ち、ブルンと美事な乳房があらわれる。やがてその白いあどけない肉体に対して容赦のない鞭打ちが加えられ、少女の悲鳴が舞台中に響き渡り、幕となる。

この映画の中では、金髪の少女は最初から最後まで、何もしゃべらない。日本の映画でよくあるように、やたらに「やめて！」とか「いやー」とか、わめかない。わめかなくても一寸した表情でゾクゾクさせる。ただ、かぶりを振ったり、目を大きく見開いたり、息使いを激しくするだけで、下手にセリフをしゃべるより、ずっと効果的なのである。映画とか劇とかは見るもので、読むものではない。ギャアギャア、ワーワーと時間つなぎに余分な叫び声やセリフはカットしてしまえばよいのだ。日本の映画は映画シナリオも小説もゴツチャにしているところに根本的な欠点があるのではないか。

小説と云えば『花と蛇』とくる。実際、私の友人にもこの小説の熱狂的ファンがいて、ちよっとでも『花と蛇』の悪口を云おうものなら、たちまち、「団先生に対して何を云う

か！」と叱られる。

私も『花と蛇』のネチネチとした漂うようなサディズムは認めるが、どうも好みに合わないのだ。私の考えでは『花と蛇』は女性的サディズムという感じがするのである。抒情的というか、そういう種類のムードである。私の好みは江戸川乱歩的な地下帝國的な感じの男性的ロマンである。

だからひと口にサディズムとかマゾヒズムとか云っても千差万別であろう。そのため我々は自分の好みに比較的合っている作者を見つけるのに苦労する。小説の方では、まだ私は自分の感覚にピッタリくる作品にお目にかかったことがない。『奇ク』のこれからの作品に期待する次第である。

先日、古本屋で『奇ク』の旧刊号に目を通していたら、確か昭和三十年代の初期の頃、『奇ク』がグラビアにおいても全盛であった頃であったと思うが拾い読みして面白いところが、かなりあった。川端嬢の『縄に魅せられて』とか、その他題名は忘れたが短篇小説でも、ついつい読み終えてしまった本屋の親父にジロリとイヤな目で見られた。挿絵でも今以上にユニークで独特の味わいがある。『家畜人ヤプー』で『奇ク』が市民権を獲得

した感のある昨今では、もはや、過去のイメージと異った存在になりつつあるのであろうか。過去の『奇ク』を濁醪<sup>どろく</sup>の味にたとえれば現代の『奇ク』は高級なウィスキーの味ではないだろうか。勿論、私はそのことにウンチクを傾けて「ああだ、こうだ」と云える立場ではないが……。

かつて『奇ク』『風奇』と並んで三大SM専門誌の一つに『裏窓』という、雑誌があった。これも自粛をする前までが良かったのであるが、この『裏窓』誌の中に、短篇の絵物語で『十字架と美少女』というのがあった。これは私が生まれて初めて読んだSM小説で今ならばそれほどの興味を示さないであろうが、その時のショックは大変なものである。今でもその小説の中に出てきた言葉「それだけはんきにんして」をよく覚えていて。かんにんしてというのとやめてというのでは前記の方が大変マゾヒスチックな味わいがある様に思う。というのはいやめてという言葉は完全な拒絶で行為者と被行為者との間に完全な断絶がある言葉であるが、かんにんしてという言葉には行為者の心に甘く響く承諾が感じられ、共に喜びを分かち合う表面には現われな

い被行為者との繋がりがあからだ。また悲



鳴を表現する場合、日本語でもっともサディスティックな言葉は、「あーっ」でも「くうーっ」でも「つうーっ」でもなく「ヒューッ」という言葉であると思う。これはまさに歓喜と苦痛の微妙な頂点にある。切実に肉体から発せられた肉感的悲鳴であると思う。英語なんかの場合は大抵が「EINOI」である。しかし「ヒューッ」などという表現言葉を持つのは日本だけであって「EINOI」など遠く及ばない様な気がする。SM小説は、これらの様々な日本語のもつ被虐や加虐に関する言葉を吟味し巧みに使い分けることによって生じるSMの空間の密度の度合いによって、良し悪しが決まる様と思う。

その意味において市販されているSM小説は密度の荒いものがほとんどである。たいてい作者は同じいつか見たことのあるメンバーに決まっていて表現も新鮮でない。もっともSM小説とは目的もテーマも唯一つだけであるから、作者もそうそう傑作ばかり書けないだろうが、これも映画と同じく今ひとつという作品が多いのだ。SMについて理解の深い人が書くのならばまだ文章が少々まずくてもどこかに読みどころがあるが、これも金のためかどう最良目に見てもただただ嫌悪感をも

よおすだけとしか思えないものがある。映画などでも東映の異常性愛路線とかで辻村氏まで引っぱり出して仰々しく宣伝した挙句、どの作品も『奇ク』の読者からはあまり評判が良くなかったのも、製作者の方にSMの感覚の分かる人がいなかったから、あの作品群もSMとはあまり関係のない単なるグロテスクなもので終わってしまったからであろう。

世間ではサディストとは、やたらめったに殴ったり蹴ったりすることを喜び、マゾはその反対だ、位にしか思っていないらしい。野蛮で荒々しいものだ、大部分は認識している。本当のサディズムはもっと繊細で緻密な計算された状況が必要とするしサド・マゾとも豊かな感受性の持ち主でないとその奥深い快楽の空間を垣間見ることはできないであろう。SMの愛好者は意外とインテリ階級に多いといわれるのも当然である。ゆえに残酷やグロは確かにSM感覚に必要な場合もあるかもしれないが決して目的ではない。

SMに理解のある作家が描く作品はその内容の良し悪しにかかわらず、この区別がハッキリしているが、全くSM感覚の分からない人の書いたものは、えてしてエロ・グロ・残酷そのものが主題になっているのだ。責め

場面はふんだんに出てくるが全然サディスティックでもなんでもない作品、これは最初書いたSMなんかという様な、雑誌と同じことである。なかには「サディズムをうんときかした強烈アクション！」などと、SMを胡椒か山葵と間違えているものもある。

サディズム感覚やマゾヒズム感覚が、社会において隅っここの小さな位置にでもいいから安全な地位を獲得出来るのは『奇ク』の読者ならば誰もが願うことであろう。しかしながらサディズムやマゾヒズムの感覚が、今まで述べてきた様に、雑誌にしろ映画にしろ小説にしろ、大部分はゆがめられ歪曲された形でマスコミにのせられ拡がってゆくのをみるのは、実に危険で不安な気がするのである。こういう時において『奇ク』は過去の実績から云ってもそのスタッフにおいても、いたずらに世間に対して及び腰にならずSMの本質を社会に示し、その実績でおのずとあきらかになっているであろうSMのモラルをも同時にアピールして『家畜人ヤプー』のみならず、『奇ク』自身が市民権を得てもらいたい。そのことは、すなわち現代様々な形を見せ混乱しているセックス文化に対しても、一つの指針を示すことになるであろう。(完)



禁令を尋ねて

# 複婚

(夫婦交換)

# 讃美論

姉小路俊介



カット・岡 たかし

## 序論

——夫婦交換を試みたいのだが、なにか法をおかすようで躊躇しています。一体、法律上、罪にならないのでしょうか。

という質問をうけた私は、

——まさか。全然罪にはなりませんよ、堂々と、おやりなさい。

答えたあとで、待てよと思った。まこと、罪にはならないのだろうか、現在の刑法・民法改訂以前の明治大正期の刑法以下、さらには徳川時代の武家法・庶民法、それ以前の諸法令に、てらしてみても、どうなのだろうと。

法律は、専門外の私であるが、てもとの数冊の書籍を開いて「全く無罪」という証拠をたしかめてみたくなったのである。

以下は、その報告になるのだが、その前にまず、夫婦交換という言葉の定義をしておかねばなるまい。

夫婦交換と一般に云われる行為は、

- 1 夫婦が健康であり現在、生きている。
- 2 夫(或いは妻)が、夫婦以外での性行為を承認、または奨励している。
- 3 その行為、つまり「姦通」の現場に夫(或いは妻)が立ち合っている。



4 立ち合わないまでも、現在、妻（或いは夫）が、どこで、誰と、何をしているかを確実に、夫（或いは妻）が、知っている。

5 未婚者、未亡人、寡婦では、成立しない行為である。

6 その他

となるであろう。そこで、私は夫婦交換という言葉以外に、より適当な言葉はないかと考えてみた。次々と浮かんだイメージを羅列してみると、

男女平等婚・姦通讃美婚・姦通承認婚・欲求不満解消婚・自由婚・満足婚・夫婦承認婚・複数和姦・従容婚・愛妻婚。

さらに「姦通」という言葉に美しさを感じている私は、夫婦姦通承認婚という言葉を書いて浮かべてみたが、結局

夫婦単数婚——夫婦複数婚

が、よいのではなからうかと現在、思っている。これは逆にして単数夫婦婚でも、複数夫婦婚でもよろしい。略して

単婚——複婚

男女一人あての従来の結婚形態が、単婚であり、単婚による夫婦の危機——必ず訪れる倦怠期を切り抜ける方法としての複婚——つまり夫婦交換は、大いに奨励されてしかるべしと結論づけたのである。

2 DKとか3 DKとか、徳川時代の長屋にも似た、いや、長屋は一步でれば、母なる大地があり雑草がはえていたが、現在のマンション、アパートにあるものはコンクリートと

人造の机、人造の天井、人造の壺、人造の襖紙……科学の進歩がもたらした、味もそっけもない調度品にこめられて、「自然のもの」と云えば、「人間」だけ、男女の肉体だけが自然そのもので、他はすべて人造の科学の所産にかこまれた日々の生活のなかで、人類はいよいよ「性」を「肉体」を讃美する、或いは讃美せざるを得ぬ蟻地獄におち入って行くに違いないのである。

が、一人の男（又は女）が一人の女（男）を愛し続けるには限度がある。短くて半年か一年、長くても二十年も経てば、それぞれ相手の肉体という「秘密の宝島」の探検・調査・発掘は、終わるのが普通であろう。二年で終わったと云うのは、終わったのではなくて、途中で、その島（肉体）に魅力なしとして、あきらめたのであり、もったいないことを——というはかばかなく、二十年以上もひとつの島に、専念するのは、いささか、愚かであろう。十年——十五年……この年月で

夫婦が、三十年代四十代になった頃合に、一度思いきって、なじみの島を捨て、別の島の洞穴を探検することは、決して悪ではなく、探検後の夫婦の夜が、新鮮なものであることを考えれば、善の善たるものと云えよう。

つまり、複婚は、単婚から——離婚への道をたどる危険性のある夫婦にとっては、離婚防止婚であり、単婚のまま一生を終える夫婦にとっても、一人の伴侶を守り抜こうとする妻への、夫への、愛妻婚であり愛夫婦にはかならない。

以上の夫婦交換——私の所謂、複数夫婦婚讃美論に対しては、動物的！ 家族制度の破壊！ 道德紊乱者！ などの意見がよせられるであろうが、私は無視する。

なぜなら、それらの人々は、やりたいのだけれど、やりたいと云う本能が、深層心理にわだかまっているのだけれど、行為する機会がなかったか、或いは、「勇気」のない人間たちなのだから。

## 一、法律上、全然無罪

さて、法律上の問題にかえそう。

現行の諸法のなかで、次のような条項が、夫婦交換に関連をもつ。



民法七百三十二条 配偶者のある者は重ねて婚姻をすることができない。

刑法百八十四条 配偶者アル者重ネテ婚姻ヲ為シタルトキハ二年以下ノ懲役ニ処ス其相婚シタル者亦同ジ。

ただし、これは法律上の婚姻であり、私婚私通、夫婦交換には何等関係がない。従つて夫婦交換が、離婚の原因とならないことも当然である。離婚には、協議上の離婚と裁判上の離婚の二種が規定されているが、

民法七百七十条 夫婦の一方は左の場合に限り離婚の訴を提起することができる。

- 一、配偶者に不貞な行為があつたとき。
- 二、配偶者から悪意で遺棄されたとき。
- 三、配偶者の生死が三年以上明かでないとき。

四、配偶者が強度の精神病にかかり回復の見込みがないとき。

五、その他婚姻を継続し難い重大な事由があるとき。

以上五項目が、裁判上、離婚訴訟を起こすことのできる原因である。

夫婦交換は、表面上からみれば、配偶者に明らかに不貞な行為であり、起訴できよう。ただし、し、ようと思へばのことであり、妻の

不貞を夫が承認し、夫の不貞を妻が諒解している、つまり配偶者相互が、理解しあつてのことであれば、全く問題はなく、青天白日下の不貞であり、堂々とした姦通なのである。

夫婦交換したあとで、妻に去られるのでは夫から離婚の訴訟をおこされるのでは……とそんな危惧を抱いている夫婦は、ご忠告申し上げるが、最初からおやりめさるな。

複婚は、心体ともに愛し合っている夫婦だけに許された天与の特権なのであり、複婚の行為のあとで、捨てられるとか、もし、新しい夫や、新しい妻が、より好きになったらどうしようなどと仮の一夜かぎりの、或いは年に数度の仮の夫や妻に、心が移るのを心配するような、そんなたよりない間柄の夫婦などは、複婚などゆめゆめ考えめさることなく、山ほどある原因を数えあげて、早々に協議上の離婚をなさるのがよい。

くどいが申し上げておく。夫婦交換は、惚れて惚れて惚れ抜いた夫婦だけが、同じように仲睦まじい夫婦（或いは、夫婦たち）と、天与のプレイを楽しむことであり、一心同体の浮気であり、同心同体の姦通なのだ。

事実、夫婦交換が離婚の原因になった例を私は知らない。むしろ、いよいよ濃厚な仲睦

まじさを見せつけられるばかりである。

次に、刑法上の問題をみよう。第二十二章に、猥褻・姦淫及ヒ重婚ノ罪という一章がある。強制猥褻——十三才以上の男女に対し暴行または脅迫を以て猥褻の行為をした罪。

強姦——暴行又は脅迫を以て十三才以上の婦女を姦淫する罪（十三才未満も亦同じ）

準強制猥褻・準強姦——心神喪失若しくは抗拒不能に乗じて猥褻・姦淫をする罪。及びその未遂罪。及び死に至らしめたる罪。

などがあげられているが、そのいずれの条項にも、複婚はあてはまらないし、緊縛プレイもあてはまらない。抗拒不能に乗じたのも抗拒不能ならしめたのではなくて、抗拒不能になることを欲した上での合意の行為であるからである。また、同意に、

淫行勧誘の罪——営利の目的を以て淫行の常習なき婦女を勧誘し姦淫せしめたる場合、三年以下の懲役とあるが、これもまた、緊縛プレイにも夫婦交換にも該当しないことは明白であろう。

さて売春防止法全四章四十条であるが、これまた問題とはならない。第二条に、「この法律で売春とは、対償を受け又は受ける約束で、不特定の相手方と性交することをいう」



とある。複婚は、対償に關係なく、また不特定の相手方でもない。緊縛プレイは、性交ですらなく、従って、法とは全く無關係。続いてせめて輕犯罪法にいい、よくしないであろうかと全三十四項を一瞥するに、これまた著名な二十項の「公衆の目に触れるような場所で公衆にけん惡の情を催させるような仕方でしり、ももその他身体の一部をみだりに露出したもの」とあり、複婚やSMプレイは全く問題なし。

むしろ、日本国憲法

第十一条 国民はすべての基本的人權の享有を妨げられない。

とあり、この「奇ク」を學術雑誌とみれば第二十三条 學問の自由はこれを保障する第二十一条 集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由はこれを保障する。とさえあるのである。

勿論、刑法第七十五條に、「猥褻物頒布等」の罪が規定されており、この点で、「奇ク」編集部が御苦心が察せられるのであるがこと、夫婦交換、緊縛プレイなどに関する限りは、憲法第二十四條の

「婚姻は両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の權利を有することを基本として相

互の協力により維持されなければならない」とある。

夫（或いは妻）が、妻（或いは夫）の、目を盗んで浮気をするより、夫婦交換は、より堂々とした、より一致協力した仲睦まじい浮気であり、賞讃されこそすれ、批判される点は、みじんもないのである。

夫婦交換を非難するのは中流階級の下あたりの、しかも四十代五十代の御婦人方に多いのは、單なる嫉妬とみて無視するにしかず。

彼女たちは昭和二十二年改正以前の明治の刑法、つまり現在に削除された「姦通罪」の亡霊から脱出できないのであろう。それには次のように記されてある。

旧刑法百八十三條 有夫の婦が姦通したるときは二年以下の懲役、相姦者も同じ。

旧民法にも離婚の正当な理由として「妻が姦通したるとき」

とある。勿論、夫が妻以外の女と通じることは、男の甲斐性でこそあれ、罪にはならない。そこで、私のいいたいのは、この今はなき明治の刑法、民法下でも、夫婦交換は、無罪であるということ——つまり、民法上、妻が姦通したとしても、これは、親告罪であり夫が告訴した場合にのみ限られる。つまり、

妻は夫の所有物であり、これが、損犯されたとして、夫が平然としておれば、罪は成立しない。まして、夫婦合意の上であるにおいておや。又、刑法上、告訴したとしても「夫が姦通を継容した場合」は無効と規定されている。継容とは、あらかじめ、夫が姦通を承諾することである。

以上、現行法下、全然、問題にならないにもかかわらず、なぜ、夫婦交換をためらう人々がいるのか……それは多分、機会なきゆえか、夫婦心底から結び合っていないせい、さらには、社会の目をおそれての勇氣なきせいではあるまいか。または、一人の伴侶にみち足りる程度の体力の持主ゆえなのであろうか……別に、喧嘩を売るつもりではない、筆のすさびとして、許されよ。

では、本題に入り、複婚夫婦の歴史を辿ってみよう。

## 二、乱婚→共同婚

人類の結婚の型態が、乱婚→共同婚→一夫多妻（即ち多夫一妻）婚→一夫一婦婚と展開したことは通説であらう。人類が、ある種の猿であった時代から、Hord（ホルド）とよばれる群をつくり出した原始社会において婚



姻は、無意識の性交、つまり歴史家が乱婚とよぶ形態であった。この形態を二十万年以上つづけた人類は、父娘・母息子・兄弟の間における婚姻が不具者を生みだす事実に基づき種族保存の本能から、それらの「相手」を性交の対象から、除外し始める。そして、集団のなかで二十人前後の男と女が「共同の妻」「共同の夫」として結婚するのである。つい最近まで南オーストラリアのガムビア山地の黒人たちは、集団を二階級（クロキ階級・クミテ階級）に分け、クロキ階級の男は、クミテ階級の女を妻としていたと調査されているのがこれであり、これを共同婚と名づけるのである。乱婚のなごりはギリシャのソフォクレス（イソップ物語の作者イソップより百年おそい紀元前五世紀の劇作家）の「エディプス王」の母子相姦のテーマとなり、日本でも、恋人のことを「吾妹（わぎも）」とよぶ習慣にあらわれている。

余談になるが、「踊り」という言葉の語源は「オドリ」であり、「雄取り」即ち、ヨメトリが、男の発情を示すに対して、踊りは、発情した女が、男を取るための誘惑であり、挑発であるという。そういえば、舞踊は、女のものであり、元来、男のするものではなかつたようである。

さて、この共同婚こそ、夫婦交換の原始的形態であり、人類は数万年以上、この自由で奔放な悦楽の時期をすごしたのであったが、農耕の発生、金属器の発明が、すべてを一変させた。肥沃な土地、豊富な鉱山をめぐって戦争が頻発し、酋長が必要となり、王者と貴族と自由民と奴隷という身分制度が現われ独占欲と排他性と勝者のエゴイズムが、一夫多妻婚を招来したのである。そして、一夫多妻婚をうら返せば、身分低きもの、貧困なる者は一妻多夫制に走らざるを得ず、娼婦——必要欠くべからざる聖なる娼婦の群れが、都市にうごめき始めるのであり、これを、一般に娼婦婚とよぶ。

日本人の婚姻について、始めて筆を及ぼしたのは、古事記でも日本書紀でもなく、三国志のなかの魏志の東夷伝中の倭人伝（所謂、魏志倭人伝）であるが、その中に、「大人」と「下戸」の二階級があり、

「其ノ俗、国ノ大人は皆四・五婦、下戸モ或ハ二・三婦。婦人淫セズ、妬忌セズ……」とあるが、男女数が平等である以上、下戸の下に奴隷（生口とよばれる）があり、彼等は当然、娼婦制のもとで一生を終わったこと

が想像されるのである。それにしても婦人淫セズとは、日本の女性も、バカ（？）にされたものである。古事記のなかでは、アメノウズメノミコトが、乳房を出しホトをだして、天の岩戸から、天照大神をお出し申し上げているというのに。

### 三、大宝律令

さて、複数夫婦婚が、どの時代にあっても無罪であるという論拠であるが、日本最初の婚姻についての法規から見よう。

西暦五百四十五年の大化の改新に際して次のような禁令が出されている。

1 妻妾が夫に捨てられて年を経て、他に嫁ぐのは常理であるのに、夫が二、三年のうちに異議を申し立てること。

2 人妻が夫に嫌われ、夫婦の契も遠ざかりながら、なおとどまること。

3 自分の妻が姦通したと疑って事情もたしかめず官司に訴えること。

などであり、

八百一年に制定された大宝律令には、離婚の理由として、七去三不去四求として、七去——無子、惡疾、姦通、窃盜など七つの原因で妻を離婚（棄妻という）できる。



三不去——棄妻できない場合として、実家がない、舅姑の喪を経持した、娶るとき賤しきのち貴となった場合をあげ、

四求——妻の方から夫に離縁を求める場合で、結婚後三カ月経っても式をあげない、徒刑以上の罪を夫が犯した場合など四つの原因をあげているが、重婚は禁止されていても、夫婦交換の制規は、刑罰その他、どこを探しても見当たらないのである。

これは、当然のことと云えよう。土台、夫婦交換は、夫婦が同意して行なうものでありこれを禁止するいわれはないのである。従って、この小論は、あくまでも夫婦交換に犯法性があるかも知れぬと思つてゐる方々へ、そんなことは全くありませぬ——と断言するために、老婆心までに、無いと知りつつ歴史を遡つてゐるのである。とすれば、ここで筆を転じて、「もしも……」の世界を、想像して見るのも、読者にとって無意味ではあるまい。そして、もしもの世界が、真実の世界であつたかも知れないではないか。

### 額田女王

額田女王は大海人皇子の妃であつたが、大海人皇子の兄、中大兄皇子（天智天皇）のお目にとまり、天智のもとに献上された女であ

る。これだけなら別にさしたることもない。問題は、献上のちも女王と大海人とが関係があつたかどうかである。歴史はそれを語らない。だが、大海人の次の歌は、何かを暗示してゐるように思われる。

紫の匂へる妹を憎くあらば人妻ゆえに  
吾れ恋いめやも

大海人は、まぎれもなく愛する妃を、兄に献上した。その夜、夜具のなかの彼の悩みが心底、苦しいものであつたか、それとも、甘美な、自虐の喜悦に悶えていたか知るべくもないが、昨夜まで自分のものであつた女が、他の男に、丈（た）の長い髪（あ）の深い紅色の裳（も）を脱がされ、足（あ）の結（むす）いの鈴（すず）を悲しげに鳴らしながら女体をくねらせてゐる情況を思ひうかべたに違ひないのである。

その他、藤原鎌足の妻・車持夫人は、天智天皇の妃を下賜されたものであり、平安初期中納言藤原縄主の妻・薬子は、平城天皇の寵愛をうけているが、九重の雲の上での出来事であり、ご遠慮申し上げることにして。

### 赤染衛門の母

平安朝女流歌人として著名な赤染衛門の母香子は、初め平兼盛の妻であつたが、衛門を妊娠したまま夫と別れ、同じ下級貴族の右衛

門志・赤染時用に嫁いでゐる。その間の事情を推測すると、次のようになる。

千二十七年、位人臣（くらひ）を極めた藤原道長は逝去したが、その子頼通・教通は、爛熟した栄華の生活を日夜繰りひろげていた。

それを上目づかいに眺めながら、退屈な宮中警護の職務を繰り返していた兼盛は、四月なかば賀茂の祭の夜の歌合の席で、赤染時用と、男・女の話から、遂には酒の勢いもあつて夫婦交換の約束を結ぶ。

「関白さまたちは、いと易う女性が手に入るが、我等ではのう。お互いに、取り換えるほかないではないか。それに、敦子もこの頃は退屈しておる。初めは、いやだというだろうが、これは女の羞恥（はづかし）というもの、濡れぬさきこそ露をも厭（いと）え……この言葉は、人妻のためにあるもので、兼盛殿」

「だがのう、万一、子だねを宿すようなことにでもなれば」

という兼盛のためらいに、

「大丈夫。宋から渡つてきた薬師（くすりし）から、よい秘法を授かつておるわ」

「すると赤染殿は、つねにその秘薬を」

「フッフッフ……こう世の中が落ちついてゐては、我等、五衛府の小役人の楽しみといえ



ば、女漁りよりほかはあるまいて」

時用の言葉に力を得た兼盛は、その夜から妻の香子を口説きにかかった。十八歳で嫁ぎ二十七歳になつていた香子は、三句ののち、「あなた様のおいつけとあらば……」

と、三尺にあまる垂髪を、くちなしの花のように白い背中から、豊かな臀部までそよがせて夫に縋りついてきた。

「フッフッ、まことは、時用に抱かれてみたのであるが。殿方ばかり数多くの女子と戯れるのに、なぜ、女性が、一人の男を守つて老いさらばえて行かねばならんのか、そんなことを度々、考えておるのである」

「いやでござります！ そのような事をおおせられましては！」

言葉とは、うらはらに、香子は、夜のあけるまで、身悶えつづけた。

時用から伝授された秘法——それは、女の生理日をもとにしたものであったが——に合せて、交換の日取りを決定してのち、香子に大きな変化が現われ始めた。それは、肌の手入れ、化粧に驚くほど念を入れることであつた。ひねもす鏡に向かってゐる後姿に、

「香子、わたしのために一度でもそのように化粧したことがあつたかの」と兼盛は何度か

嫉み心で呼びかけた。

——実際に経験した夫でないといわらないことであるが、複・数・夫・婦・婚は、挙式の日を決定した瞬間から、妻の態度が、がらりと変わるものなのである。肉体の隅々までを、実に丹念に手入れし、夫には、何か、牝猫が、飼主に甘えるときのような、よそよそしい、甘えかたを示し、何か悪戯を見つけられたときの子供のような態度を示す。

肉体と精神の分離が、妻のなかで起こつてゐる証拠である。夫以外の未知の男体を知ることに対する、いや、知りたいという灼熱した欲望と、夫に悪いのでは……というかよわい妻（女は結局はかよわいものなのである）としての魂が相剋し、突発的に夫に縋りつくかと思えば、次の瞬間、激しく身をこぼむ。身をこぼむのは、新しい男性に対する節操の心からであり、現在の夫との行為が、姦通に思われるからなのである。

とまれ、複婚・挙式の日までの妻の生活は初めての結婚式を迎える処女心を、二乗した初々しさをもっており、現在の自分の妻が結婚式の前にどのように化粧してくれたかをとくことのできなかつた夫にとって、その未知の新鮮さは、男として得難い体験であ

り、夫として、妻の魅力を再発見する確実な機会となる。

さて、平兼盛・香子、赤染時用・敦子の両夫婦が、くちなしの花の匂う夜、どのようにして、それぞれの朋輩の妻の小桂をとり、打衣、単衣をぬがせ、唐紅の裳をひきはがしていったか、香子がどのように白い練絹のような肌をうごめかせ、喘いだかは次にゆずるとして、問題は宋からの秘法がどうしたわけか効果がなかつたことであつた。あきらかに香子は、時用の子を身ごもってしまったのである。二十世紀のスキン・ハーモニー（スキンによる調和）など考えられなかつた平安朝の悲劇であり、兼盛は、断腸の思いで、香子を時用にゆずつた。敦子が、兼盛のもとへきたかどうかはあきらかでないが夫婦交換後、夫婦が別れると云うのでは、全くお話にならない。現在では、このように愚かな例は私の知る限り一例もない。

各種各様の避妊器具に幸あれ！

では今ひとつの例を平安末期にとうろ。平清盛と常盤御前の例である。源義朝の妾であつた常盤御前が、平治の乱の後、大和竜門の牧に隠れていたが、実母と牛若今若乙若の三子の生命を救うために、清盛に身をまかせた



話は著名であるが、複婚はその七年後の仁安元年秋のことであった。

左大臣の地位にあった清盛は、大蔵大輔從三位・藤原長成と、ほぼ、平兼盛、赤染時用と同じような経緯で、複婚を約束したのであった。時に清盛四十八才、常盤三十五才、長成四十才、妻の提子は三十三才。場所は、洛東栗田口にある右大臣藤原忠雅の別業。

### 常盤御前

「清盛様。提子にござりまする」

座についた清盛夫妻に、長成は十二単に麗々しく装った妻を紹介した。

「美々しいのう。噂どおりじゃ。あとで後悔なさるまいの長成殿」

「御念には及びませぬ。されど、今宵を迎えるまで三カ月がほどは、これを説伏するのにかい苦労をいたしましたわ」

「それは余とて同じ。のう、常盤」

清盛は上機嫌で、自らひさげから腰高へと酒を注ぐと、長成にすすめ、提子にも、

「少しは、飲んでおくものじゃ」

と、さし出した。田嶋が、二声、三声、釣殿の屋根のあたりで哭いて、北の空へと飛んで行く。

「では、手順どおりに」

冠直衣の裾を払って長成がたち上ると、「常盤。どちらでもよい、今から提子殿が先ず裸になれる、見るもよし、東の対の屋で待つもよし」

「あの……」

小桂の紅もみじの袖口のように頬をあからめた常盤は、深々と一礼して、小走りに出ていった。

「フッフッフ……いつになっても初心なやつでの」

満足気にうなずいた清盛は、「では、提子殿。我等、二人で、とくと鑑賞させて頂きまするぞ」

提子の頬が、サアッと蒼くなり、緊張感からくる震えが、りんどうの袖口を小刻みにうごかせている。

「提子。さあ、約束どおりに、一枚一枚、清盛さまの前で脱いで行くのじゃ」

「でも……妾、どうしても……」

齒の根が、ガチガチと鳴っている。

「ええい。この場に及んで、何をいう！立て！立つんじゃ。今をときめく平清盛様の前で、一度約束したことを反古にしたとあっては、この長成、明日から宮仕えもできぬことになるわ！」

背をおされて提子は、よろよるとたちあがる、柏扇が、カチャリと音を立てて床におちた。身舎の中央に高一尺ばかり九尺四方ほどの帳台があり、縹緗縁の畳が二枚敷かれてある。尋常は帳を垂らして寝所とするのであるが今宵はそれが恰好の犠牲台となり、帳は、三方が片付けられて見すかしとなっていた。

「早うせい！」

もう一度、長成にせかされた提子は、恨念とも羞恥心とも、或いは甘美な期待をこめた心とも、何とも表現しがたい、爛熟した人妻の複雑きわまりない表情で、夫を眺め、長成にゾクツとする陶酔を味あわせたのち、高麗錦の裳の引腰の紐帯を解いていく。解くやおそしと裳をうけ取った長成の手が、唐衣を脱がせ、萌黄の表着をとり、りんどうの花に似た五衣をはぎとる。清盛も黙ってはいない。

「提子殿、その紅梅の御単は、余が……」

と、ほんのりと匂い始めた明石香のかおりを嗅ぎながら長く裾をひく単の襟に手をかけると、豊かに盛りあがった胸もとに頭を押しつけるようにして剥ぎとっていった。

あとは唐紅の袴と、生絹の白小袖、丈余の黒髪が波打っている。

紅と白と黒髪——この三つの色が、高坏の



灯明に映えて、提子の姿は、この世のものとも思われぬ美しさに輝いていた。

「長成殿。余が、余がとうろぞ」

清盛は、上か下かとチラッと考えた末、白小袖の襟に、むずっと手をかけた。

「いや！ いやでござります。お、お許し下さいませ！」

纏綿縁の畳の上にずるずると崩折れた提子の燃えるような眼眸を、見つめながら

「この、いや！ という言葉じゃがの、長成殿。これは女の誘惑の言葉よ。拒むことによつて自分を高く売りつけようとする本能。いっつどこでも女は最初は激しく抵抗する、いや抵抗するそぶりをして見せる。内心は別。ほれ、提子どのも、ほれ、ほれ、このように、肉体は、男を求めて……」

清盛のしなやかな長い指が、白小袖をひといきに、背中に向かってひき剥ぎ、あらわにされたもぎたての桃の実のような乳房を、驚ぶかみにする。

「アッ、アウ……あ、あなた様」

夫の目を意識しながら提子は、激しい抵抗のかたちをとったが、それが、清盛の云うとおり、あくまで（自分が、はしたない女ではないと云うことを最後まで男たちに示そうと

する）ところの、女の本能にすぎないことはなれば開き始めた唇の喘ぎや、次第に緩慢になつていく両手の動きに現われていた。

「見事じゃぞ、長成。次は、常盤の番」

自分といっしょに、額に汗をながしながら妻の提子の肉体を觸っている長成に、清盛はやつと云った。敬称がいつの間にか省かれていた。長成も、様を殿にかえて、

「こ、このようにたかぶりを覚えたことはいまだかつてござりませぬ、清盛殿。提子、お前……お前は、いかがじゃ」

清盛の前もはばからず、長成は提子を背中から抱いて、その顔に口をつけながら問う。長成にとって、もはや、清盛の妻・常盤御前の裸身を眺めることよりも、清盛という他の男の前で裸身をさらし觸られた妻の肉体に、より大きな刺激と感激を覚え、絶大な魅力を抱いていた。

「清盛殿。今少し提子を、存分に、存分に觸ることにいたしましょうぞ」

「それはなるまい、長成。妻を他の男の自由にさせて、眺め、自らも加わつて觸るといふ夫の快楽、今のおぬしの快楽を、今度は余が味わう番じゃ。夜も長い……まず、余が快楽を味わつてのち、その後で、二人で、或いは

右大臣の忠雅殿も参加して、のう」

長成は、やつとうなずくと、なおも身を寄せてくる提子を軽く押し離し、

「しばし、待っておれ。そのうち法悦にのたうたせてやろうゆえに」

と云つてから、

「清盛殿。提子をこのままにしておくよりも動けぬように」

「そうじゃな。余が、時々、常盤にしてやるのじゃが、その黒髪、この黒髪を縄代わりにしての」

清盛は、提子の六尺ちかい黒髪を二つに分けた。長成が、雪のように白い提子の腕を背中にねじると両手首をひとつに合わせる。

「これは、我ながら面白いと思つておる」

清盛は、黒髪の半分を、その両手首にくるくるとまきつけ、縛りあげると、残りの半分を唐匣の脚につないで固定する。

「もはや、これも無用のもの、剥ぎとりましょうぞ」

と云いながら、提子の身を護る最後の布である袴の紐をとき、ずるると、両足を八の字に開かせてぬぎとつていったのは清盛でなく夫の長成であった。しかも、そうして一糸まといぬ身を、曝け出した提子の、ふくよか



な肌を撫でさすっていったのも、長成であった。妻を人目に曝すということは、ほかならぬ夫自身の得難き悦楽であり、その場に居合わせる男、この場合、清盛はあくまでも、さしみのつまにすぎないのである。勿論、清盛とても長成に負けじと、練絹のように燦く肌をなでさすり始めるのだから、夫婦交換で、一番、得をするのは、快楽を味わうことのできる女・妻、この場合、提子なのである。

私が、夫婦交換を、愛・妻・婚と名付ける所以がここにある。

黒髪が、縄の役目をはたし、一糸まとわぬ裸体を、几帳のかげに押しやった二人の前に常盤御前がよび出される。この別業の持主である藤原忠雅の志であろう、常盤は小桂姿の上から縄打たれ、心きいた若い雑色が二人縄尻をひいて現われる。

紅もみじの小桂を、表着を白小袖を、二人がどのようにときめく胸を押えながらぬがせていったかは、想像におまかせするとして、緋色の桂袴ひとつにされた常盤の裸身は、むっちり凝脂がのって、甘ずっぱい女臭をむんむんと漂わせていた。

「では、失礼します」

長成は、常盤の袴をずりおろすと、白い肉

の賞味にかかる。几帳のかげから提子をひきずり出し、胡座した膝の上に坐らせながら清盛は、長成に組みしかれている妻の常盤の顔の動きをまんじりともせず眺めていた。軽く閉ざされた眸が、苦痛とも喜悦ともつかぬ風情で、しかめられたり、あらぬ方角を凝視したり、鼻孔が大きく開き、脇腹が、巨大な白蛇のように蠢き、

「あ、あなたさま！ 清盛さま！ 妾、妾：このような、このような、悪い女ではありません。せぬ。ア！ アウ！ ア……あ、ああ、長成さまあ……」

長成の半脱ぎの直衣の肩に、爪をたて、しがみつき、嗚咽を始める常盤を眺めながら、清盛は、膝の上の提子の乳房を、力一杯、握りしめる。

夫の長成が、他人の妻である常盤に挑むのを目の前にして、提子もまた、女の欲情を押えきれなくなったらしく、妖しく眼を光らせながら清盛を見上げたが、清盛の眼は、妻の常盤から寸時も離れようとはしなかった。

（妻が犯される……愛している妻が、目の前で、他の男に嬲られ、犯されている！）

この場面上に、夫を男を興奮させるものは他にない。この興奮度に比較すれば、新婚

初夜の興奮などもの数ではなく、男は、こうして、二度、妻と結婚することになる。

男として生まれた以上、ただやみくもに動きまわった初夜の経験を、はるかに凌駕するこの体験を是非味わうべきではなからうか。しかも、女、妻もまたこれを潜在意識として深層心理の奥深く、希望しているのである。

このあと、藤原忠雅が姿を現わし、雑色を助手にして、男五人が、常盤と提子を心ゆくまで嬲り、姦し、姦させたことは勿論であるが、その描写は省略しよう。とまれ、この夫婦交換は、その後十年にわたり、年に五度、六度と、手を代え、品をかえて行なわれた。後日、常盤が、大蔵卿となった長成のもとに再嫁したと云われるが、これは、清盛が、自由に複婚を楽しむために、常盤を長成の館に置いたと解釈することも可能なのであり、四人は、以後も、悦びをともにしつづけたと考える見方も十分に成立するであろう。

さて、話を、武家法に転じ、十三世紀以降の法令のなかで、夫婦交換完全無罪の証拠を見ることにしよう。

#### 四、戦 国 家 法

西暦千二百三十二年に発布された関東御成



敗式目五十一ヶ条、およびその追加法のなかにも、夫婦交換の禁令はない。従つて鎌倉室町、さらには戦国時代においても複婚は、人知れず、随意、いたる所でくりひろげられたに相違ないのである。乱波、野伏などは勿論土民、土豪たちも、戦乱の明日知らぬ身をつかの間の光芒——荒野にそそりたつ幻の樹に例えられる「性」に求めて、夜昼うごめき続けたことであろう。

とまれ、法令をみよう。

先程、禁令はないと断言したが関東御成敗式目の三十四番目に、やや、気になる一条がある。それは、

一、密懷他人妻罪科事

右不論強姦和奸懷抱人妻之輩被召所領半分可被罷出仕無所帶者可處遠流。女之所領同可被召之無所帶者又可被配流。

訳せば次のようになる。強姦和奸に拘りなく人妻を抱いたものは所領の半分を取りあげて出仕を停止。無所帶者（所領のない者）は遠流にする。女もこれと同じ——と云うのである。この和奸の解釈次第で、複婚をしたものは処罰されるのである。もしもこの和奸が亭主が許可した場合も含むとすれば、有罪、人妻でありながら他の男を誘惑したにとどま

る、つまり亭主には隠れて密通した意味にとれば、複婚はこの禁令にあてはまらないことになる。前者の解釈をとったのか、後者の解釈が一般的であったのか、判決例を知らないで、即断しがたいが、夫婦合意の上での姦通を断罪するほど野暮ではなかったように思われる。

式目はこれにつづいて「辻捕女事。於御家人者百箇日之間可止出仕……」以下、所謂、暴行罪についての規定があり、御家人は百日間の出仕停止、即従であれば片髪剃りなどの刑に処せられることになっている。

さて、ここで、複婚からはなれた純然たる姦通罪についてみてみよう。

姦通は大罪であり、姦婦姦夫を合わせて斬り殺すべきであるという考え方は、十五世紀後半以後の考え方であつて、鎌倉時代にあつては、妻が夫にかくれて姦通するのは、夫に飽きはてたゆえであると考え、夫が、それに恋々として怒ったり間夫を殺したりするのは武士らしくないとされていたと云う（「日本婚姻史」高群逸枝著）。夫が姦通者を私刑したのは応仁の大乱が終わって二年目、山名方の被官渋川家の家臣某が、妻と通じた赤松家の家臣某を殺害し妻を斬殺したのが最初であ

つて、この事件以後、姦夫姦婦を生かしておくのは「男の恥」とみなされ始めたと云う。戦国時代に突入して、「家」の繁栄のためにいくらでも息子、子が、消耗品として必要となりこどもを生む機械として女性、が、奴隷視され始めたことの結果であろう。

本論にかえらう。戦国時代に、諸大名が領国内で発布した法令を戦国家法（分国法）と云い、武田信玄家法・北条早雲二十一箇条を始め数十が現存するが、その中にも、また、複婚を禁ずる条規はなく、姦通（当時は密懷と云った）についての、夫が姦夫姦婦を斬殺してよろしいと云う規定が、慶長集や長曾我部元親百箇条に見えるだけである。

そもそも、結婚は、夫婦合意の上で成立するものであり、結婚後、夫婦合意による複婚は、処罰の対象となるはずはなく、ましてや当事者以外、社会にいかなる悪影響をも及ぼさないものなのだから、私刑や、村八分の対象にさえならないものである。

そこで、この時代の複婚の事例をたからかに訊いあげるとすれば、豊臣秀吉・淀君夫妻と大野治長・世智夫婦のそれであろう。

淀君

話は天正十八年に始まる。



この年、秀吉は、全国征覇のための最後の城攻めを、北条氏政・氏直父子のたてこもる小田原城に展開していた。

「あせるではないぞ。自然に落ちるわ」

秀吉は諸將に命じて国元から妻子を呼びよせるよう命じ、自らも淀君を招致した。「このような戦さであれば一生続いても結構でござる」と福島正則たちに云わせたほど、のどかな城攻めであった。四月から始まって五月六月と秀吉は夜な夜な淀君を抱いた。が——淀君の顔に倦怠のかが走るのをいかんともしがたかったのである。時に、秀吉五十五才淀君はと云えば女盛りの三十四才。

「淀よ。余に満足いたしておらぬな」

「そ、そのようなことは——」

豊満な裸身を秀吉にすり寄せてはきたものの、秀吉自身、かつて蜂須賀小六のもとに身をよせていた頃の精気がなくなっていることを、十分に知っていた。

「淀。大野治長はどうじゃな」

秀吉は、ずばりと切り出してみた。淀君が軍目付の治長に、気があるとかないとか云うのではなく、二十八才の治長の凛々しさに、この若者であれば、淀を抱かせても大したこと、ここ数旬、考えていたことを思いきって

吐き出したまでのことであつた。

「おたわむれを！」

淀は、激しく秀吉に迫ってくる。治長が淀を抱きしめている場面を空想しながら秀吉は久しぶりに男の面目を保ち得た。その翌日から秀吉は、淀を口説きにかかったのである。

難波江の葦の生命にもすぎぬ人の一生。ましてや女の衰えは早く、やがて野良犬ですら見返りもしなくなる老いの日がやってくる。そのときに、何が果して残るであろう、一人を守った誇りか、数人に愛された想い出か。女は、ましてや、汝のごとく麗わしい女性は、夫の余が許すゆえに、多くの男たちに愛されるがよいのじゃ。身ごもる心配はない、ポルトガル商人が余に献じてくれたこの皮袋を、当夜、使用すればすむことじゃ——秀吉は、うすい皮でできた袋を十箇二十箇ととり出して見せたのである。

淀君の眸が、妖しい光を漂わせ始めたのは無理からぬことであつた。

「あとでお叱りをうけるようなことは」

「ない。そのようなことは絶えてない。むしろ、余の命令をきき入れてくれたことに感謝いたさねばなるまい」

淀君を口説きおとした喜びに秀吉は、ぞく

ぞくする快感を味わっていた。

秀吉からの申し出をうけた治長は、当然のことのようにこれを固辞したが、

「淀のため、余のため、頼む」

と頭を下げられては、これも忠節のうちとひきうけ、妻、世智に告げ、

「余ひとりのために頼むのではない。秀吉様と淀君のため、さらにはのう、世智、そちのためにもなること。未だ知らぬ快楽の洩でそちを抱きしめてくれようぞ」

と、拒む世智の頭を十日のちに縦に振らせることに成功したのである。

場所は、俗に太閤一夜造りの城と呼ばれる小田原城の東丘にある館の一郭、五月も末近い短夜——

治長も淀君も玉の汗に濡れ、それを横目に秀吉も汗にまみれて世智を抱いた。

この世のものとも思われぬ快楽の夜々なかで、小田原城は陥落し、天下を統一した秀吉は、朝鮮征伐の軍をすすめ、自らも肥前名護屋に本営をすすめた。その間、大阪城で、伏見の館で、聚楽第で、四人は、灼熱に生命を燃やしつづけたのである。

淀君を素裸にひき剥いて、荒縄で縛りあげる遊び。世智を同じようにして、数人のポル



トガル人に翻らせる遊び。十字架に淀君をはりつけ、三角木馬に世智をのせ、果ては、治長の眼前で、数人の黒人に思うがまま淀君をもてあそばせ、それを眺めながら秀吉は世智を抱いた。そして、淀君も世智も、日一日とあでやかさ妖艶さをまして行き、皮袋が次々と献上され、秀吉は、悔いのない生涯を六十才で、大阪城で閉じていったのである。

その後、治長が、淀君のために身命を捧げて徳川家康に対抗したことは、歴史の示すとおりである。秀頼は治長の子ではなく、明らかに秀吉の子であり、治長の子・治徳も秀吉の落胤でないことは、皮袋の効果からして当然のことである。治長が、弟治胤（道賢）同治房と一族をあげて大阪城に殉じたのは故秀吉の恩義——複婚の恩義に報いたものにほかならない。ちなみに、道賢治胤は、落城後、捕えられ、堺の町で火焙りにされたが、死んだと思つて検使が近寄ると、黒焦げの身でとびかかり検使の脇差しを抜いてこれを突き殺してのち、体が灰になったと「葉隠」のなかを書きのこされている。これまた、兄の治長を通じて、秀吉の故恩に報いる執念の現われと云えるであろう。

## 五、武家諸法度

徳川時代に移ろう。

元和元年を最初に、歴代將軍の發布した武家諸法度のなかには勿論、二百六十諸藩の掟書のなかにも私の目のとどく範囲で、夫婦交換の禁令はない。もしやと思つて「葉隠」全千三百四十三箇条をつぶさにみて行つたが、姦通罪処断の実例はあつても、複婚の事例は載せられていない。載せられていないのは、複婚の事実がなかったというのではなく、複婚が、円滑に秘密裡に、口の端にのぼることなく行なわれていたことになるのであろう。

妻は夫に従えばよいのであり、夫の望むままに夫婦交換の場に臨むことは、美德でこそあれ、決して悪徳ではなかったのである。今は懐しき佳き男上位時代を次の抜萃で偲んでいただくのも一興であらう。

「身のかたみ」——われより賤しきものに見えさせ給ふとも男といふものは三世の諸仏の化現にて賞罰正しく、おろそかに思ふべからず。ただ仏菩薩に添ひたてまつると思ふべきこと。

「本朝女鑑」——白氏文集に婦人一たび夫を失なへば林の中の竹の如し。忽ちに風に吹き

折られ一たび折れて重ねて生ひず。

「比売鑑」——孔子の宣はく婦人は人に伏するなり。此故に専制の義なく三従の道あり。

「女大学」——一、婦人は別に主君なし、夫を主君と思ひ敬ひ慎みて仕ふべし。夫の教訓あらばその仰せを叛くべからず。夫もし腹立ちて怒るときは恐れて順ふべし。女は、夫をもつて天とす。返す返すも天に逆ひて天罰を受くるべからず。

「楽亭かんな筆記」——夫を天の如く尊み神の如く敬ひ、下をいたはり侍る外になすべきことは侍らずとなむ。（中略）女の行のうちにも嫉妬の心ほど悪しき事はあらじ。かの妾など数多あらばよくよくそれぞれに心づかひして夫の寵し侍るよりもまさる程にいたはり、共にいひかえして夫のためよかれと侍れば、いかなる男にても感ぜざる者やあるべき。

さて、懐旧の念はこの位にして、複婚の具例として、柳沢吉保・お蝶の方夫妻と五代將軍綱吉と愛妾小谷の方の情事を逸することはできない。

昭和元禄とよばれる昨今、元禄時代に一代の権勢をほしいままにした吉保の父は、僅か百六十石の微禄者であつたに過ぎない。その



子である吉保は、異例の出世を重ね、最後には大老格甲府十五万石の大名にまで立身したのである。原因は、夫婦交換にありと世間の風評に云う。事實は、如何に――。

### 小谷の方

綱吉が、側用人柳沢保明（のち綱吉の吉をもらって吉保）の妾お蝶を見染めたのは元禄三年八月、鶴岡八幡祭の日であった。居並ぶ大名たちの御台所のなかで、大納言正親町公通を父に持つ彼女の気品ある美しさは、群を抜いてあでやかであった。綱吉は、意のあるところを保明に伝え、主君の命は絶対、唯々として保明はこれに応じて、お蝶の方を説得した。（夫の指示に逆うてはならぬ）とお蝶の方が、羞恥に全身を染めながら承諾したことも論をまたない。

綱吉の柳沢邸訪問の第一回は、元禄四年四月二十二日のことであつた。面白いことに將軍お成りの理由が、いずれの書にも記載されていないことである。お成りの次第は事細かにかきのこされているのに、肝心の点が、ぼやかされているのである。ともかく、御目見得の儀式が終わると、別殿にて、綱吉自身が論語の講義をながい間したのち、夜遅く江戸城に御帰還遊ばされている。

この別殿での論語の講義が、複婚の場であり、綱吉は、北の丸殿・大典侍局・常盤井局以下数ある寵妾のなかで最も愛した小谷の方（別にお伝の方とも云う）を同道していたのであつた。時に綱吉四十五才、保明は三十四才――小谷、お蝶二人の女の年令は三十才前後であつたろう。

結灯台の灯りのなかで、四人が本能の赴くままに肉をむさぼり合つたことは想像に難くない。しかもその後、この異例のお成りが、年に数回、綱吉が六十四才で逝去するまで十六年間にわたって延々とつづくのである。余程、保明も綱吉も、この複婚に満足したに相違ないし、時は、元禄、より激しい刺戟を求めて綱吉が、保明に命じて二人の女に、各種の緊縛姿態を繰り上げさせたと思測できぬことはない。鋸挽、磔、獄門、火焙、死罪というのちにお定書百ヶ条に規定される刑罰のほかに、お蝶の方が全裸の身を、逆磔、串刺、牛裂、車裂、箕巻などに次々とかけられ、小谷の方が、吊責め、海老責め、石抱き、答打ちなどの拷問をうけてのけぞり、身悶えたと思像することも自由なのである。

お蝶の方が顔見知りの家臣たちに手足を大の字にはりつけられ、罵られ、それを綱吉が

御用絵師に命じて書き写させながら盃を干し異情を沸らせる。小谷の方が、その名のようになく、ひきしまった裸身を数人のむくつけき非人にもてあそばされる姿を眺めながら保明が、綱吉と淫靡な眼を見交わしている情景は、小谷の方を私の妻におきかえ、お蝶の方を読者の奥様方におきかえて空想するとき、胸躍るものを覚える。

### 六、近代法

明治以後の刑法、刑事訴訟法、民法に於いて、複婚が、無罪であることは、すでに何度も説いたところである。

ここで、具体例を列挙したのであるが、あまりにも身近かであり、何かとさしさわりも考えられるので、実名をあげるのをやめて私が調査した結果を発表する事にしよう。

仕事の都合から、人に接することが多いので、口頭（一部、手紙）で、過去一年、数十組の夫婦に種々の質問をして得られた数字である。五十組だけを取り上げたので、大新聞社が、数万人のなかから任意抽出して得るところのいわゆる「白書」でも「コンピュータ調査」でもなくあくまでも「個人の調査」であることをお断り申し上げておく。

されどこの数字は、昭和四十五年における日本人のひとつの「環境」の断面であり、その深層心理の一端を示したものであるとして、興味あるものと思う。

表中の数字について、緩々、書きたいこともあるが、今回は読者諸賢の推察にすべてをお任せする。

設問A、夫婦交換について

- a したことがあるか
- b したことがある、と答えた夫婦に
- 1 とても素晴しかった。続けてしたいと思う。夫の答、妻の答（以下同じ）
  - 2 楽しかった。
  - 3 もう二度としようとは思わない。
- c したことがない、と答えた夫婦に
- 1 機会があればしたいと思うか。
  - 2 別にしたいとは思わない。
  - 3 いやである。
- d 夫婦交換の噂を、テレビなどではなく現実に聞いたことがあるか。
- 設問B、ダブル・セックスについて
- a 「男男女女」でしたことがあるか。
- b 「男男女女」の行為を現実に見たことがあるか。
- c 「男男女女」でしたことがあるか。

<設問Aに対する答>

| a | 50組 | あ る、11 組 |             | な い、39 組 |  |
|---|-----|----------|-------------|----------|--|
| b | 11組 | 1        | 夫 7人        | 妻 10人    |  |
|   |     | 2        | 夫 3人        | 妻 0人     |  |
|   |     | 3        | 夫 1人        | 妻 1人     |  |
| c | 39組 | 1        | 夫 35人       | 妻 36人    |  |
|   |     | 2        | 夫 2人        | 妻 2人     |  |
|   |     | 3        | 夫 2人        | 妻 1人     |  |
| d | 50組 | ある       | 夫 38人・妻 45人 |          |  |

<設問Bに対する答>

|   |     |    |             |
|---|-----|----|-------------|
| a | 50組 | ある | 夫 31人・妻 26人 |
| b | 50組 | ある | 夫 36人・妻 29人 |
| c | 50組 | ある | 夫 11人・妻 9人  |
| d | 50組 | ある | 夫 16人・妻 10人 |
| e | 50組 | ある | 夫 39人・妻 33人 |
| f | 50組 | 思う | 夫 43人・妻 48人 |
| g | 50組 | 思う | 夫 50人・妻 50人 |

<設問Cに対する答>

|   |     |         |             |     |         |
|---|-----|---------|-------------|-----|---------|
| a | 50人 | ある、夫45人 | b           | 50人 | ある、妻21人 |
| c | 50人 | ある、夫11人 | d           | 50人 | ある、妻4人  |
| e | 50人 | ある、夫6人  | f           | 50人 | ある、妻15人 |
| g | 50組 | 希望している  | 夫 50人・妻 47人 |     |         |
| h | 50組 | 希望している  | 夫 45人・妻 40人 |     |         |
| i | 50組 | 思　　う    | 夫 50人・妻 48人 |     |         |

- d 「男男女女」の行為をみた事があるか。
- e ともかく複数の性行為をみたことがあるか。
- f 複数の性行為のヒーロー、ヒロインになつてみたいと思うか。
- g 複数の性行為を見物したいと思うか。
- 設問C、緊縛プレイについて
- a 妻を縛ったことがあるか。
- b 夫を縛ったことがあるか。
- c 妻以外の女を縛ったことがあるか。

- d 夫以外の男を縛ったことがあるか。
- e 妻以外の女に縛られたことがあるか。
- f 夫以外の男に縛られたことがあるか。
- g 二人だけの夫婦緊縛プレイを希望するかどうか。
- h 他人も加わつての緊縛プレイを希望するかどうか。
- i 緊縛プレイを見物したいと思うか。
- 以上の設問に対して、得た結果を表にする  
と次のようになる。



## 結 論

夫婦交換——私の云う複婚は、今後、いよいよ数多く行為され発展するであろう。またそうあらねばなるまい。科学万能の現代に生きる人間復活の最高手段として、深く、そして静かに、自然に——。

その心得を七カ条、

一、夫婦一心同体なること肝腎にて候。

複婚は夫婦を一人とみなしての新しき結婚にて候わば、夫婦の仲に、一点のかげりだにあり申すまじく。

一、相手をよくよく吟味仕るべき事。

何人か、結婚の相手をよくよく吟味やせざる。まして、世間を熟知しての複婚ならば、慎重に慎重を重ね、その日以前、少なくとも三回は夫婦揃うて書簡を往復させ、写真を交換し、これぞと思う相手をえらぶべし。

一、場所を選ぶべき事。

豪華なるホテルを避け、壁落ちたる旅館を避け、尋常の部屋をとること初見の相手への思いやりとして必要にて候。

一、得手のものを待ち候う事。

人それぞれに、筈、縄、パイプなど気に染む染まざるの区別あれば、相手の好み、当方

の得手を勘案して、縄一筋にも心を配ること必要にて候。当然スキンなども必携のこと。

一、事に臨みて遠慮会釈全く無用の事。

かく準備したる上は、この日「相手を奴婢と定めて責めいたぶり、数十年の思い人と思うてかきずき甘ゆるべし。ゆめゆめ残心あるまじく候事。」

一、きぬぎぬ、相手を賞揚すべし。

これ、極めて、肝腎のことにて、万一、意に満たざる肉体上の欠陥ありとて、絶対にあげつらうことなく、存外の言葉にて佳き点を讃美すべし、人、必ず、取得あるものなり。これを忘念し、悪口、皮肉など云わんか一生の失策となりぬべし。よくよく心すべし。

一、秘密を守ること大切に候。

相手も、われと同じく社会人として責任ある身なり。またの日「のためにネガ・フィルムは勿論、手紙の往復にも細心の配慮をなすべきにて、秘密を守り得ざるものは、ここ百年二百年の間この至極の快楽を得るに値せざるものと知れ。」

さて、この拙論のおわりに、本誌への希望として、次のような広告欄を考えてみた。

三分の一頁でもよい、夫婦交換希望欄を開放、しかるべき広告料をとった上で、希望す

る相手、当方の職業、年令、好み、家庭状況などを掲載、日本唯一の、いな、世界で唯一の特殊な「奇ク」の存在価値を、いやが上にも高められては如何に、と。勿論、「この欄に関しては当社は全く責任を負いません」と一号活字で大書した上で、と——。

だが、やはり、これは無理のようである。

心なき者どもに悪用されるおそれが多分にある。「奇ク」は、現在のままが一番よい。間違いない、一番よいのだ。「奇ク」こそは二十世紀後半・人間不在の荒野に高く光をかける灯台であり、現実と夢幻との交錯する原点に、実り豊かにそそりたつ大樹であり、いつまでも生きつづけて貰わなければならぬ、私どもの月々の糧なのだから。

——以上——

参考文献——「刑法の常識」江家義男著千

倉書房・「中世法制史料集」佐藤進一編岩波書店・「日本女性社会史」高群逸枝著真日本社・体系日本史叢書・法制史」石井良助著山川出版・「葉隠」栗原荒野篇内外書房・「女性日本史」龍居松之助著章華社・「日本法制史概説」石井良助著弘文堂・「日本婚姻史」高群逸枝著至文堂・「六法全書」末川博編岩波書店。

カット・山岸三郎



私の妻は、誌上に発表されていられる人達の容姿端麗ぶりとは、まるで比較にはなりません。背は低く、よく肥えていて不恰好なうえに、子供を産んだ乳房は、垂れてしまっています。しかし、長年連れ添った私にとってはそれなりに又、別な魅力を内に秘めている恋女房なのです。

私が初めてこの恋女房を縛ったのは、そう古いことではありません。

結婚生活十数年。子供も成長してきては、公営住宅二DKのわが家では当然の気兼ねが

—— 告 白 ——

妻を……

## 縛るの記

大越 照 美

生じてきて、時々ホテルや旅館を利用しなくてはならなくなってきました。この、多少の無理をしての一刻。遠慮や気兼ねから解放された夫婦だけの時間が、私に若い頃から抱きつづけていた願望を強く押し出してくれる結果になったのでした。

その夜、利用したホテルの出してくれた浴衣の紐が、女の腰紐のように長めのもので、なんとなく縄を連想させるものでした。私は無意識に、そう思ったのかもしれないが、とたんに折にふれ想像しては、胸を躍らせな

がいろいろな状況で踏みきれなかった一種の願望が、もくもくと頭をもたげてきたのでした。

湯上りの妻は浴衣を剥がれても、その目的で来ているのですからもちろん抗うことはありません。シーツに上気した頬を埋めて、私のなすがままになっていました。伏せた丸い背中を眺めていた私は、思いきって紐をとり上げ、妻の両手を背中に回して縛りました。が、妻は「どうするの?」といっただけで、私が、両足首を揃えて折り曲げさせ、後手首に連結して縛ってしまってもじっとされるがままになっていました。私はもう一本の紐をとって、妻の上半身を持ち上げるようにして胸の下を通し、腕もろともに乳房を強く縛り上げて後手首で結び合わせ、もう自力では妻が寝返りもうてない状態にしたのでした。

そうして縛り上げてから、抱きかかえて仰向けにしてやったのですが、その時になって初めて妻は「痛いわ、やめて」といい始めたのでした。後で聞いたところでは紐がくい込んで痛いより、曲げられた足や重なり合った手首などのほうがこたえたらしいのです。

それでもその時の私は夢中で、紐を解いてやるかわりに、紐をくいこませてプツクリとびだした肌の小山を始め、息する度に上下する胸や腹を、軽く抓ったり叩いたり、あるいは擦ったりして妻にさまざまな声を吐き出



させてやったのでした。「ああッ」だったり「ううう」だったり、「ウッフン」だったり「ヒーッ」だったり……。

そして、妻は次第に陶酔の表情になり、やめてくれとはいわなくなったのでした。

生気なく垂れている筈の乳房が、紐にくい込まれたおかげでふくらみを取り戻し、後手に縛られた体をいたぶられて悶える妻に、新鮮な女性美を見出した私は、初めて見る素晴らしい目に目を眩る思いで、これこそ「縛られた女の美しさ、虐げられる女体の美しさ」というものだろうと感じとったのでした。

突然に縛られて、責めとはいえないにしてもいたぶられた妻はびっくりしたことでしょうが、その夜、家に帰ってから「紐がくいこむって、なんともいえない変な感じね」といっただけで、やり過ぎたかなと思ひ、怒り出しはしないかと内心でビクビクしていた私を安心させてくれました。

そればかりか、以後、時々自分から「縛ってえ」というようになったのでした。もちろん私は望むところですが、しかし我が最愛の妻が、本当にM性で縛られることを好むのであればいいのですが、もし、あの最初の夜の私の態度から何かを感じとって、厭なのを我慢して私に合わせるようになっているのではないかという気持ちもあったものですから、あまり強い縛り方は意識的に避けて、挙げさせた両腕

で頭部を挟みつけて縛るとか、乳房と手首だけに縄をかけるとか、胴に絡ませた両足首を固定するとか、程度の軽い縛りの繰返しに抑えて、様子を見ていたのでした。

本当に厭なのではないらしいと思われるようになるまでには少し時間が掛かりましたが私は思いついて、十メートルほどのロープを二本買い求め、妻には気付かれないようにホテルに持って行き、心ゆくまで縛りあげてみる決心をしました。妻には、生来のものにして、私が植えつけたものにしろ、単なる私への同調ばかりでなく、確かにMの傾向があると思えるようになったからです。

その日、私は先に浴室を出てロープをとり出して待ち構えていて、妻が出てくるなりウムをいわず押し倒し、浴衣を剥ぎとって素速く後ろ手にとった手首にロープをからませました。ちょっと驚いた様子をみせた妻は、しかしすぐにおとなしくなり、私の「今日は徹底して縛るぞ」という言葉に大きく頷いたのでした。

その妻を引き起こして、後ろ手首をしかりと縛り直し、両脇に回して上膊部を一巻きしたうえに胸に回し、乳房の上辺りで両方から来たロープを合わせてひと捻りして、今度は乳房を挟みこむようにして下側を締めあげながら腕を押えて後ろ手首へ戻したのでした。私のロープ捌きはギコチないもので、思う

ように縛り上げることはころもとないのですが、頭の中ではギッチリとした縄掛けで、股間縛りや海老縛りが描かれていました。しかし現実には、締まっただけのもの、単に胸をロープが走っているというだけの、お義理にも見事とはいえない縛り方でした。

それなのに、一応後ろ手縛りの形が出来た時に、妻が上気した顔をねじ向けて、「あなた、縛るの上手ね。何処でこんな素敵なこと覚えたの、たまらないわ」と、悩ましいことをいったのです。私は嬉しさと可愛さで、我れを忘れるほどになってしまいました。

ノーマルな他人からみれば、奇異はもちろんの事としても、あきれて却って吹き出すような愚行かも知れません。しかし、この愚行のおかげで、私達夫婦は一層深い愛情が湧き上り、十数年の色あせた夫婦生活に新鮮さを吹きこむことが出来たようです。今では、それまで私一人が隠れ読みをして捨てなければならなかったK誌も、夫婦揃って読むことが出来るし、それによって潤いを増すようになりました。

残念なことは私に写真技術がなく、せっかくの思い出が記録できないことです。少し心配なことは、私も少なからぬ関心はありますが、妻が同好の方とプレイがしてみたいといひ出していることです。

## 百足（むかで）行列

F五五四号は、その青い瞳から絶え間なく涙を流しつづけていた。何か物をうったえようとしても、発声機能を封じられてしまった。今となつては、獣のようなウメキ声が洩れるにすぎない。われながらその音がいやらしいので、声を立てることすら諦めてしまった。それとひきかえに涙が滂沱として溢れ出てきた。それはまるで栓を閉め忘れた蛇口のようなものだった。とめどなく流れる涙は裸の乳房を濡らし、つややかな太腿を伝わって、足

もとに小さな水溜りを作っていた。もとより固くロックされた後手では、はずかしい姿を蔽うことすらできぬ。彼女をして身じろぎもせず直立不動の姿勢をとらせているのは何故だろうか。ただ見る、天井から垂れ下った細い鎖の先についたS字金具が、無情にも彼女の鼻輪を吊りあげていたのだった。手で引けば簡単に千切れてしまえそうな細鎖であつても鼻づらでは如何とも仕様がなない。F五五四号は裸身をふるわせながらも、立ちすくんでいるほかはなかった。それどころか、彼女の身長一ぱいに、ピンと張った鎖では、かがむことはおろか、足の位置を動かすことすら出

前号まで「有明の創設した暗黒の王国では、世界各国から色々な手段で誘拐されて来た数多の美女が生活していた。彼女等は美しさとか服従度とかで夫々、金、銀、銅、鉄の各クラスに、分類されている。物語は、あたらしく入荷した女囚の行方を追いながら、これらのクラスを紹介しようとしている。鉄のクラスは畜、物二位に分けられている。畜位と判定された美しいアメリカ娘F五五四号は、冷厳なレセプションによって眉とウブ毛以外の体毛を悉く剃りとられ、鼻輪、永久ギャグ等を装着されてしまった。すべてが機械的に且、非情に行なわれている。





来ないのが実状だったのである。

畜位の裸女たちは、そうしている間にも、一人二人と数を加えて、悉くF五五四号の周囲に、彼女と同じように、鼻で吊るされてゆく。彼女等は、それぞれ肉体上に特徴はあっても、さすがに世界中から選抜かれた美形揃いだった。プローションといい容貌といい妍をきそう裸体の陳列はそれだけでも素晴らしい見ものだった。そして、その数が十人（いや今はもう十頭と呼ぶべきかもしれぬ）に達したとき、美獣は始めて、鼻吊りの責め苦から解放される。しかし、それは又、あらたな汚辱のはじまりをも意味していたといえよう。

F五五四号は無理に上半身を前に倒すことを命じられた。同時に脚を開かされる。その股ぐらに、もう一人の女因が頭を突っ込まさせられた。細腰に巻きつけられた鎖の冷たさにF五五四号は思わず失禁しそうになった。胴鎖はその首輪をF五五四号の下腹部に縛りつけるためのものだったのである。さらに、それぞれの鼻輪に細紐が通されて、ギューとしぼりあげられる。F五五四号は頭をあげる事ができなくなってしまった。

こうして、次から次へと前の女の股ぐらに

頭を突っ込んだ形で連縛されてゆくと、ここに奇妙なムカデが誕生する。

「ピシッ」と鞭が鳴った。空振りではあったが、哀れな犠牲者たちは、その音だけでも総身を硬直させざるを得ない。

F五五四号の首輪がアマゾン女兵の手で驚嘆みにされた。そのまま前へ曳かれる。苦しまぎれに顔をあげようとする。たちまち、次の女の鼻づらが干切れそうになった。これは次から次へと連鎖反能を起こして行った。かくしてムカデはたどしく動きはじめる。盛りあがった豊かな双丘をつらねて、暗い隧道の闇へ、吞まれるように吸い込まれて行くのだった。

マーチは凡そ二十分ばかりだったけれど、あえぎあえぎガニ股で歩いた道のりは途方もなく長い距離のように思われた。

彼女等は漸く、これから起居する「厩舎」に到着したのである。

天井の低い、ガランとした空間だった。動物的な臭気がプンと鼻を刺した。こうした生活させられていると不思議なことに、人間も他の獣と同じような匂いを発するようになる。つまり、その匂いは動物園でも、豚小舎

でも同じものなのである。

打ちっぱなしのコンクリート床に無数のステンレス・パイプが林立して、銀色に輝いていた。

そのパイプで仕切られた、タテ、ヨコ夫々一メートル程の小間が夫々、美獣一頭にあたえられた居室？ となる。とはいえ、ただのパイプにすぎない。左右は、なる程二〇センチばかりの格子が衝立状に立っているのだが前後は全くの吹き抜けである。前を仕切るのは中央部にあるスタンション、すなわち二本のパイプで首をはさんで固定する道具だ。これにはさまれると、上下はパイプの長さの範囲で自由に出来るが、前後は抜きさしならぬ。後は床上五〇センチぐらいの高さで固定されたパイプの横棒一本で仕切られている。横棒のまん中にバケツがぶらさがっているのは糞尿用である。前にも後にも夫々巾一メートル程の通路があるが、家畜は横棒（バー）のある側の通路のみを使って、それをまたがせて出入れさせられる。スタンションのある通路は両側から向かい合わせになっていて給餌係のアマゾン女兵しか通らない。前者を不浄口といい、後者をお清め口といいならしている。床は、お清め口の通路を峰として、

お清め口から噴出する水流で室内の掃除をするようになっていた。

夜は敷藁代わりに薄いウレタンのマットが床に敷かれるが、寸法が足りないので家畜は足を延ばそうとすると、どうしても不浄口の通路に突き出すしかなかった。

睡眠時間を除いては、横になっていることも坐っていることも許されない。たえず首をスタンションの上端に押しつけ、腿のうしろを不浄口の横棒（バー）に触れさせていなければならぬのである。このことは、直立したまま上体を九〇度前に傾けた姿勢を、常時とっているという命令に他ならない。少しでも首を下げるか、腿をバーからはなすと、忽ちブザーが鳴って不快な電流が流れる。調教者は、これによって脚部を鍛えることを目的としていた。

F五五四号を先頭にしたムカデの隊列は厩舎につくとスグにバラバラに分けられ、つぎつぎと仕切りの中に繋ぎとめられていった。今日だけは調教を行わずに、パイプ囲いの住居に馴れさせようという考えらしい。しかし、美獣たちはその前に、厩舎長の検閲を受けなければならなかった。

小柄だが体操選手のように堅くしまった身体。厩舎長は順々に仕切りの間を廻って、新入り家畜と対面した。一匹ずつ畜歴、その他のデーターが読みあげられる。

アメリカの生まれ故郷や、卒業した大学の名前が読みあげられたとき、F五五四号は打って変わったような今の境涯とひきくらべて思わず大粒の涙をこぼした。彼女の涙は、今も涸れずに流れている。そして、あまり泣きつづけたため、目のまわりが赤くはれ上ってしまっていた。

それを認めた厩舎長が英語で、「そんなに泣くんじゃないよ。泣いたって仕様がなんだから。調教がはじまれば、泣くことも自由に許されなくなる。早くあきらめて一生懸命、よい家畜になれるよう努力するのが一番だよ」

と、意外にやさしい声でさとしながら、彼女のツルツル頭をなでてくれた。その感触が彼女に頭髪を失ったことを想い出させたからたまらない。再び、こみあげてくる鳴咽を、どうすることも出来なくなってしまった。

何ともいえないような悲しい吼え声を立てながら、一匹の美獣が小突かれながら転り込

んできた。鼻輪を曳いているのは、鬼のようなアマゾン女兵である。とはいえ、これは家畜の方からみて鬼のようであるというにすぎない。美しい日本女性であるこのアマゾン女兵も、同じようにして誘拐された浮屠の身の上であるという点では全く異なるところがないのだ。それは丁度、ユダヤ人を迫害するために使ったドイツ人の手口に似ている。収容所に入ったユダヤ人は、カポと呼ばれる同胞によって監督され統制されたのであった。カポも又、被収容者であることに変わりないのだが、カポになれば衣食ともに十分にあたえられるので、この裏切りは極めて容易に行なわれたのである。

美獣は、毛穴という毛穴から膏汗を噴き出していた。ほっそりした身体だったが、形よく発達した乳房が、はげしい息づかいにつれてブルブルと揺れ動いていた。よくクビれたウエストのために、ひろい腰の線が一層、強調されて、さらに流れるように美しい脚線につらなっている。かくすところもない素肌のは、美獣の苦悶とは裏腹に、ひどく綺麗な見物だった。

厩舎の一隅に洗い場が作ってあった。そこ



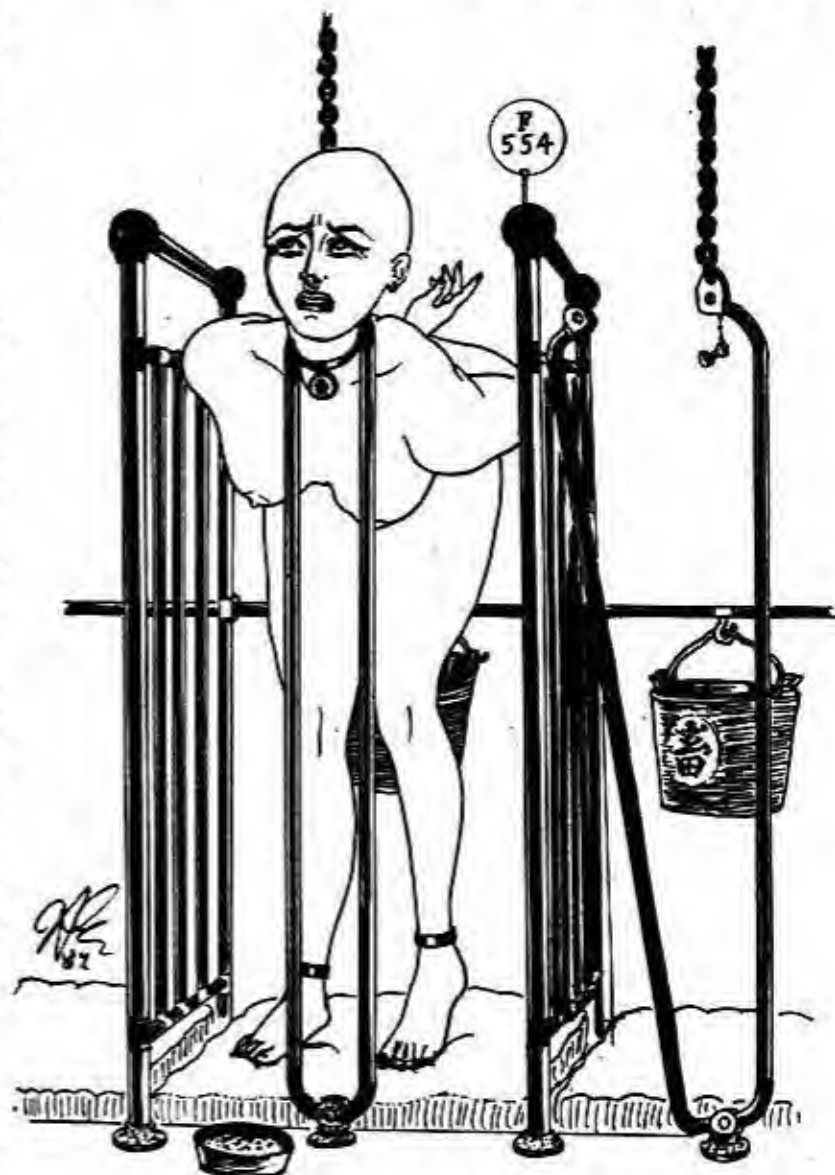
へ引きずるように曳かれて来た汗みどろの女体は、鼻鎖を天井から下っているフックに引っ掛けられてしまう。さっきF五五四号が経験したのと全く同じことだった。手を伸ばせさえすれば訳なく外せるのに、後手の美獣は疲れ切った裸身をシャンとはって、直立していなければならぬ。

「オーン、オーン」

ギャグの奥から言葉にならない泣き声が、あたりの壁に反響する。

こわいもの見たさというか、或いは自らの避けることの出来ない未来を確認するためなのか、F五五四号は恐怖に三角形になった両眼を美獣に向けて、極度の疲労に全身をケイレンさせながら、なお鼻で吊られて、まっすぐ立っていなければならない先輩を注視していた。彼女を拘束していたスタンションからは、ちょっと顔をまげれば見える場所だったのである。

彼女には全然見覚えがなかったけれどもこの美獣は例のシェイク・アル・ゼバルの館で



サド女、アマトル・アミンの慰みものにされていた女奴隷のアン・ブラウンに他ならなかった。(第七、八回参照)

可哀想に彼女はアマトル・アミンの責め苦から逃れることはできたものの、今ここへ来て又、新手の責め苦にさいなまれる羽目に陥ってしまった。

エミー司令が館を爆破したとき、彼女はアミンとともに例のドラム缶に閉じ込められ、やがて原子力潜水艦ネプチューン号に収容され、とうとうここまで運ばれてきてしまった

のであった。

つましいカソリックの尼僧も、ここではクールに、一頭の牝馬としてしか扱われない。皮肉なことにアマトル・アミンのところで折角、延びはじめた髪の毛を、再び剃り落とされて、信仰を告白した日と同じ頭にされてしまったのである。しかしその唇は、もはや美しい声で讃美歌を歌ったり、祈禱文を称えたりすることが、出来なくなってしまうている。固いステンレスの蓋が、シッカリと舌を押えつけていては、単に喉の奥から、しぼり出てくるウメキ声しか出せないのだ。

さっきのアマゾン女兵が太いホースを持って近づいてきた。汗やその他、体液に汚れたアン・ブラウンの身体を洗おうというのだろ。それにしても、そのホースは、まるで消防用に似ていた。ノズルを押すと案の定、強く鋭い水流が迸ってアン・ブラウンの裸身にぶつかって行った。アンは、そこそ地獄に落ちる日のような絶叫をあげはじめた。激しい水は棒で打つように彼女に当たっている。たまらなくグルグル廻りはじめたのは、まだ

いい。もし転んでしまったら——彼女の鼻は体重を支え切れずに千切れてしまうだろう。こんな姿になっても、美貌が損われることは何よりも怖ろしかった。ともすれば押し倒そうとする水の圧力を、彼女は全身に力を入れて耐えなければならぬ。少しでも後退すれば、忽ち、鼻づらが引きつってしまふ。

その苦しみはF五五四号にも、よくわかった。そして、自分にも同じことが待っているのだということを覚らざるを得ない。

冷たい恐怖が背筋を凍らせてしまったのだろうか、美畜は思わず失禁する。臀の下にブラさげられていたバケツが、変に陽気な音をたてて、それを受けた。その音が一層、F五五四号をみじめにさせるのだった。

## 美畜コンビ

快い乾燥熱風がEの一四三号、つまり、アン・ブラウンの全身を包んでいた。

濡れた身体を乾かすこの数分間は、美畜にとってホンの束の間ではあっても、宝物のような、やすらぎのひと時であった。それ程、彼女等の時間は苛酷な調教の連続だったといえよう。もっとも、依然として鼻輪から高々

と吊られていては、腰をゆるめることさえも出来なかった。彼女だけは、鼻梁に穴をあけられる苦痛をここでは免れることが出来た。といっても、時間の差があっただけにすぎない。それは、シェイク・アル・ゼバルの館であのサド女アマトル・アミンに金二千パーレビーの奴隷として買いとられたあと、アマトルの手で既にあげられてあったからである。鉄のクラススの女囚たちは、穿孔されてから、二、三日、大概、鼻を腫らして苦しまねばならないのだが、E一四三号だけは、それがなかったというだけにすぎない。

あたたかい空気の渦に包まれた彼女の脳裏に、もはや二度と帰って来ないであろう懐しい故郷の想い出が、走馬灯のように蘇っていた。

何百年もの歴史を持つ、城のように頑丈な館に育った幼い日のこと。両親が買ってくれたシェトランド・ポニーにまたがって、広い牧場を、まっしぐらに走ったものだ。皮肉なことに、今の彼女は、そのポニーにされてしまっているのである。馬を入れるような囲いの中に起居し、昼間は絶対に坐ることを許されず、息もつかせない激しい調教に明け暮れるのであった。

体型が抜群だった彼女は、調教が終わればマスター用の戦車馬に擬せられていた。いろいろな儀式や、又、狩猟の時などにマスターが乗る金色燦然たる二人乗り軽駕を牽く役目である。畜位の女囚として最も名誉ある役目であるだけに、その調教が余計、厳しくなったのも又、止むを得ないことといわなければならぬ。

元来、英国上流社会では男女共に、スポーツを尊ぶ習慣が根強く残っている。アンにしても、好んで色々なスポーツを、こなしていた。それだけに運動神経もよく発達していた。悲惨な屈辱の日々に号泣しながらも、調教師の課したカリキュラムを文字通り体当たりでこなして行ったのである。羚羊のように、しなやかな肢体は、贅肉がとれていよいよ磨きのかかった美しさをあらわしはじめていた。特に、細いくせに強靱な足腰のバネは、戦馬として他に比べものがない程、好い数字を示している。不思議なことに、脚部の発達は無エストをぐんと細め、反対に胸乳を一層、豊かにするという副作用を生じた。といっても、神以外と交ったことのない彼女の乳房には少しのゆるみもなく、美しいフォームで早駆けをするとき、小さきみに揺れるその動き



は、正にエレガントそのものであった。つまり、彼女の心は汚辱に傷つき、苦痛にのたうちまわっていたのに、肉体の方は飼い主の期待した通りの見事な反応を示すという、結果となってしまうのである。それだけに、相手の思う通りになって行く自分の肉体が、アンは恨めしく、又、うとましくさえ思われるのだった。

素裸のまま、足をちぢめて囲いの中に寝ながら彼女は、われとわが肉体をスポイルすることに必死だった。しかし、昼間の激しい運動は、彼女に健康な眠りを強制してしまうのが常であった。熟睡すること、それ自体が今の状態では極楽のようなものだったし、惨めな境過を忘れることを可能にしてくれるので彼女として抵抗する理由は全くなかったのだけれども。例えば、首の方はスタンションで抜きさしならなかったが、足の方は延ばそうと思えば不浄口通路へ延ばすことができる。ところが、夜間は全部の通路へ電流が流されているので、若しそれに触れると、不快な電



撃が全身に伝わり、否でも応でも目を醒させられてしまうのである。そんなとき、途中で眠りを奪われるのが一層、辛く、みじめだった。

食事は、カロリーだけしか考えないようなドロドロしたクリーム状のもので、朝晩二回しか出ない。スタンションの前に金属ボールに入れて置かれるのを、ひざまずいて喰べなければならぬ。後手にロックされているから、口だけで獣のようにして喰う。馴れるまでは、これとて大変な仕事である。ボールの中を唇で拭いて、キレイにしておかなければ懲罰されてしまう。せめて、舌でも自由に使

うことが出来たら、もっと上手に喰べられるのに永久ギャグで舌を押えられているのでどう仕様もないのだ。ドロドロした液体は、とても美味いといえるような代物ではなかったけれども、美畜たちは、いつも空腹と渇きに苦しんでいたから結構、喉を通すことができるのであろう。もっとも、残したら鼻からでも押し込まれてしまうし、第一、そのあとの罰が怖ろしい。

食事以上に屈辱感を与えるのは、排泄行為であった。床に置いた食事をひざまずいて喰べなければならぬにせよ、出すものは立ってするように要求されている。といってもスタンションがあるから、腰から上は水平に前傾した例の昼間の姿勢である。このような姿勢をとると、腿の後が自然に横バーを押すような形になる。そして、臀部はそれから斜々突き出す。だから、そこから大小便をたれば、嫌でもバーの中央にブラ下っているバケツの中に、それが落ちる。ステンレス製のバケツは用足しの度毎に真夜中でも、けたたま

しい物音をたてる。はずかしさがストレスを嵩じさせることは容易に想像できる。しかしそのストレスさえ押し切ってしまう程、畜化速度が早いから、家畜の心身は存外、健康なのである。健康だということは、反面、辱かしめや苦しめに対して常に新鮮に反応することとを意味する。一般的に、有明の国では羞恥や苦痛に麻痺してしまうことを強く否定していた。彼はマゾヒストを喜ばすことを極度に嫌っていた。

睡眠時間は使役時を除いて、夜十時から朝五時までだった。この間は床に横になることが許される。五時キツカリにスタンションに電流が流れる。立ち上ってスタンションの先端に後首を、腿をバーに触れると電流は切れる。つまり、五時から日中を経て午後十時まででは上体を前傾した姿勢でジツとしていないければならないのである。従って食事時間は朝は四時半、夜は十時以降十時半までと定まっている。それ以外は、夜中にはまったく休んでしまうから、闇の中で喰べなければならぬ。食事は二回分が一度に夜、配られるのである。夜食はまだしも、朝食は四時半に明るくなるだけでベルも鳴らないから、ウツカ

リすると寝過ぎて五時の電撃を迎えてしまうこともある。そうになると喰べる時間がないので残したまま立ち上がる他はない。それも処罰の対象となる。

通常、七時から、グラウンドに曳き出される。ここでは「馬場」と呼ばれている。

その前に、バーをまたいで不浄口通路へ出ると、バケツを口にくわえて洗い場に運び、汚物を棄ててバケツの中を洗う作業がある。これが洗面を兼ねるのだから皮肉なものである。手が不自由だから口と足しか使えない。

コビリついたものは半ば乾いて、なかなかとれにくいから、厄介である。アマゾン女兵がスタンションを外してくれたら、先ず、しなければならぬのが、こうした汚物の始末だった。バケツをもとへもどすと今度はウレタンのマットをくわえて、バーにひっかけて干す。七時半になると部屋中、水が噴き出して床を洗うから、若しマットをそのままにしておくと濡れてしまうからである。

こうして美獣たちは鞭に追われながら、隣接する「馬場」に追い出されるのだ。

馬場には二百メートルのグラウンドの他、色々な調教用の設備が整っている。

たとえば、牽引力強化用のコンベヤーや、

走行馴致用のエンドレスマットなどで、夫々ノルマをコンピュータに与えると、ロボットが訓練を監視するようになっていて、比較的、少人数で女畜を管理できる。

女畜を管理するのは、アマゾン女兵の騎兵隊がこれにあたっている。女兵は特別に訓練された後、一週間交替で兵営から派遣されてくるのである。こうした交替は、看守と女畜との間の馴合関係をふせぐために役立つものであった。

女兵が再びF五五四号をひきずり出した。もう一つの手には、E一四三号の鼻鎖を握っていた。つまり、二頭的美畜が揃って馬場に牽き出されたのである。

F一四三号には毎日、見馴れた馬場の光景だったけれども、F五五四号にとっては生まれてはじめて見る光景だった。

そこでは、何一つ非の打ちようもない美女たちが、半馬のように追いまくられていた。彼女等は、ことごとく畜位に判定された女囚たちだった。

壁ぎわに並んで必死にロープを引っばっている一組があった。実際の馬車を牽いてグラウンドを駆け廻っている組もあった。又、別



の一隅では、あらん限りの早さでペタルを踏まされている美畜もあった。誰も彼も紅涙をしぼり、淋漓と膏汗を流して調教を受けていた。少しでも気をゆるませると、たちまち鞭が飛び、電撃が襲った。言葉を封じられた美畜たちは、意味をなさない喉声を出すしかない。そのような悲鳴が共調して、ワーンという異様な物音を壁にこだまさせていた。

「お前たち二匹は体形がよく似ているので、ペアにして訓練することになった」

調教師であるアマゾン女兵がいった。

「先ず、二人で仲よくやれるよう、アイサツをさせてやるよ」

日本語を知らない美畜には、何をいったのか、さっぱりわからなかった。もっとも、家畜の身では、言葉がわかってとわかるまいと大した関係はない。やがて、身体でわからせられてしまうのだから。

二匹の美畜は夫々、ウエストに革の馬具をつけさせられた。これは車を牽く時、轆（な）がえ）に固定するもので、ここでは轆を股下にまたぐようにハサミ込む式になっていた。しかし、今の場合はちがう。馴致用の六尺パイプを股下にはさんで、約三十センチほど離れて向かい合うように、固定されたからであ

る。丁度、二匹の頭の上に、矢張り長さ三十センチばかりの細い金属棒が、真中を吊られてスルスルと下降して来た。

二匹の鼻鎖が無造作に、その金属棒の両端にヒツかけられた。

二匹とも、思わず悲鳴をあげた。

金属棒が再び上昇しはじめたからである。

鼻を襲った激痛に二匹とも腰を浮かした。ヨロヨロと爪先立ちになったところで、やっと金属棒は動きをとめる。

とても、爪先立ちで長くいることはできない。F五五四号が遂に踵を床に下ろした。すると彼女を吊った金属棒の片端が下がって、

反対側の端を思い切りハネあげてしまった。その下には言うまでもなく、E一四三号の鼻が吊られていたのだから、たまらない。

「ヒューッ」

と絶叫してE一四三号は、これ以上、伸ばせない身体を、もどかしげによじった。その力が今度はF五五四号の鼻を突きあげる。

「ギャーッ」

ありったけの声でF五五四号は吼えた。

たった三十センチの鉛筆のような金属棒がシーソー運動を繰り返すたびに、二匹の美畜は地団駄を踏むようにして苦しむ。

「何だい、だらしないねえ。馬というのは踵をつけちゃいけないんだよ。まごまごしていると、一日中、爪先立ちをさせておくよ」

プリプリ揺れる二匹の恰好のよい尻を、ピシャピシャと叩きながら調教師は、あざ笑った。

E一四三号は、調教師の方に哀願するような、まなざしを送った。彼女の方が何カ月か先輩だったから、この調教が如何に苛酷なものであるか、身をもって体験していたのである。

しかし、アマゾン女兵は、そんな態度に動かされはしなかった。

股に挟んだ六尺パイプの両端に重しをつけはじめたからである。片側十キロずつ、合計二十キロが二匹の腰をグンとひき下げる。美畜は二匹ともに、一度に叫びはじめた。

調教師は冷たい声でいった。

「これが、おまえたちのアイサツだよ。これからは、二匹とも一心同体になって頑張るんだ。さあ、もっともっと吼えるがいい」

ピシッと皮鞭が鳴って、二匹の突き出した臀部に炸裂した。

懸賞創作入選作品

# 貴婦人の飼犬

野村圭次郎



カット・春川ナミオ

野村圭次郎君。例の雑誌で、貴男の投稿を拝見致しました。随分、悩んでいるようですね。そんなに奴隷になりたいのですか。

私は四十歳になる女です。経済的に恵まれて気ままな生活を過ごしています。例の雑誌は数年前から読んでいますが、貴男のように誠実で真実に溢れた投稿は初めてのよう気が致します。

二十四歳の今日まで、よく耐えて来ましたね。けれども心からの願望というものは、いつかは必ず実現するものですわ。若々しい貴男を奴隷にして、飼育訓練する楽しさは今か

ら燃えあがっています。これからの私の命令に忠実に従って行動して下さい。

来る二十日、新宿発午後の中央線に乗車すること。立川で青梅線に乗り換えて、終点の氷川で下車し、駅前からタクシーを利用、裏面の地図に依って×印の所まで来ること。×印から目的地の○印まで歩いて十分ばかりです。○印の家は私の別荘になっていますから中に入って待っていること。

但し次のことを必ず守るようにね。

- 一、衣服を脱ぎ、全裸になること。
- 二、両足を固く縛ること。

三、次にめかくしをすること。

四、そして正座して待っていること。

貴男は私の可愛い人間犬になるのね。私の忠実な奴隷になるのね。最後には女王様の便器になることが出来るまで訓練して下さいと貴男の投稿にありましたね。

圭次郎君、何も心配しないで、すべてを私に任せなさい。

初めから無理なことを強要するような下手な調教飼育は致しません。まず貴男の場合は初めてなのだから、優しくいじめてあげる。私の愛玩物として、可愛い犬として、飼育



を始めます。それから、だんだんと一人前のマゾヒストとして、一人前の奴隷として、立派な珍芸も出来る人間犬に成長させてあげましょう。あまり鞭を使用することは好みません。それが貴男の努力次第というところね。

あの別荘の周辺は、人家もなく、夜になると人通りは全くないところです。夜の散歩は楽しみだわ。勿論、圭次郎君は全裸の人間犬よ。首輪をはめられ、鎖につないで散歩するの。時々、私を乗せて歩く馬にもなってもらいます。いいわね。小柄な貴男はつぶれてしまいかも知れないわね。

貴男は容貌と性格には自信があると書いていましたね。どんなに美しい顔と、すなおな性格を持っているのか、とても楽しみです。

それだけ容貌に自信があるのだったら、かつらを利用して、女の服装をさせ、町の中まで買物をさせて来るというような面白いことも出来ますね。ローソク責めや卵責め、鼻責め、水責め、海老責めなど名前は、いくらか知っているでしょう。私はこれらの中で卵責めが一番、貴男に向いているような気が致します。これらの責め苦は、貴男が何とか奴隷として素質があることを証明するためのものですからね。

私のことを、いろいろ知りたいと思うのは当然ですが、今はまだ私の身分を明かす訳には参りません。貴男が心身ともに、私の忠実な飼犬として、奴隷の運命を悟った時、その身分を教えてください。

貴男の投稿に心を抱いている女性には外にも存在しているでしょう。もう私のこの手紙の他にも、貴男の所にはいくらか便りが届いているかも知れない。けれども、圭次郎君、貴男が私の命令に応じなければ、きっと貴男は生涯、後悔することになります。

何故って……それは私の姿を一目見れば、知ることが出来ます。精神と肉体の調和がとれ、女性として成熟している教養の高い女王様、中年女性の女王様——貴男の投稿が希望している女性、貴男の理想の女王が私なのです。

貴男もお仕事を休む訳にはいかないでしょうけど、第一回目は私の命令通りに行動して下さい。次からは日時を決めることにしましょう。運命を信じなさい。私が貴男に幸福という運命をもたらすのです。勇気をもって電車にお乗りなさい。貴男の長い間の夢がかなえられるのです。

野村圭次郎君

貴男の女王・登志子

○  
この手紙を受け取った時、僕は嵐のような戦慄を感じた。遂に身の破滅が近づいたことを覚った。おそらく僕はこの誘惑に勝てないだろうと思った。悪魔からの手紙が、僕の未来を決めてしまいうさだ。甘美な、すがりつきたくなるような誘惑の手紙なのだ。悪魔は僕の心の隅から隅まで知りつくしているではないか。この悪魔の命令に、僕は到底、さかろうことは出来そうにない。その証拠に、僕の胸は喜びに満ちているではないか。

いつの頃からだろうか。確かな記憶はないが、小学生の頃は隣の家のおばさんに、中学時代は音楽担任の女教師に、高校時代は級友の母親に憧れていたようだ。

今では三十代の後半から四十歳前後の女性にしか魅力を感じないようになっている。

完成した女性、それが僕の理想なのだ。遠い子供の頃からの、僕のこの傾向は一体、どういうことなのだろう。自分でも時々不思議でならない。中年女性の美しさの前には、僕のどのような抵抗も通じないのである。二十四歳の今日まで、誰にも言えない悩みとしてただひたすらに耐えて来たが、この誘惑の手紙が来てしまった以上、それも限界と覚悟し

なければならぬようだった。

それにしても何故、若い女性に魅力を感じることが出来ないのだろうか。僕の友達のすべてが、二十代の女性を、十代の女性を恋人に選んでいるではないか。三十代や四十代の女性には見向きもしないのが、僕達の年齢である男性の一般的な傾向ではないか。

だが僕は、ちがう。四十歳前後の美しい女性を見ろ……。あの、みずみずしい知性、あの、教養に溢れた美しさ。それは数々の経験に満ちた人生がつつまれ、あたかも何千年の歴史を秘めた富士の嶺のように、尊い美しさに輝いているのだ。この中年女性の美しさに比較するなら、若い女性などのものは、単に肉体の美だけという外ない。円熟の美は中年女性の特権なのだろうか。

それでも僕は誘惑と戦った。何とか、このままの、世間一般の慣習と常識の上に、安定した社会生活を営み、勤務先において管理職が得られる二、三年後には結婚をして、平和な家庭を築く人生を送りたい。何を好んで変態的な欲望に走ることがあろう。

しかし、理性が感情を抑制することは不可能なのだろうか。どのような理屈を並べていても単なるタワゴトに過ぎないように、その

日の午後、僕の足は新宿駅から女王様の命令通りに進んで行ったのだった。この足が、この靴までが、僕の理性を無視するのだ。そして目的地が近づくにつれて、僕の胸は妖しい期待にふくらみ、恍惚感で、いっぱいになるのであった。

地図によると、これでも東京都西多摩郡である。東京という名前の都会的印象と、全かけ離れた路線の景観であった。それは、まるで山の中をマツチ箱のような電車がヨチヨチと走っているようであった。終点の氷川駅からタクシーで×印まで二十分、×印から目的地の○印まで四十分も歩いた。女王様の地図では、×印から○印まで十分と書いてあったが、山を上り、谷を渡って、やっとの思いで到着したのである。

なるほど○印に家があった。平屋でまだ新しい。近辺には人家のないのが当然である。そこは山の奥の一軒家、まわりは何十年の自然のままの樹木と雑草の世界であった。

玄関のドアを開く時の僕の気持、それは黄金の宝が秘められている場に入るような感情であった。中に入ると土間の廊下になっていて、右側に二つの部屋があり、左側に井戸と流しのある台所、浴場、一番奥が洗面所にな

っているようであった。そして右側の二つの部屋のうち、手前の方のドアの前に張紙がしてあった。

登志子より圭次郎君へ

この部屋に入って待っていなさい。  
手紙の命令通りにしていること。

筆で書いてあったが、誠に達筆な文字であった。この文字を見ただけでも、女王様が教養の高い方であることがわかる。

その部屋は、かなり広い洋室であった。セミダブルのベッドが窓ぎわにあり、テーブルの上には、ちゃんと細いロープと布が並べて置かれてあった。

全く他人の部屋で全裸になる快感こそ、期待の大きさを証明するものであった。自分で両足をしばり、めかくしをして最後に両手をぐるぐるとロープで巻き、床の上にころがった時、僕は生まれて初めての感情を覚えた。

僕はやはりマゾヒストなのだ。生まれて初めて自分自身をこのような姿にして、プライド云々よりも喜びを感じているではないか。

「女王様、早く来て下さい」

そっとつぶやいてみる、この楽しさ……。  
「登志子様ン、早くいらしてエ……圭次郎、



さっきから待ってるのよ。お待ちしてるのよ。僕の女王様、登志子様……」

目かくしをしていることは、すべてを想像の世界に求める役目を果たしてくれる。僕は未だ見ぬ自分の女王様の名前を、だんだんと大きな声で呼び始めていた。

おそらく彼女は、奥の部屋にいるにちがいない。物音が時々聞こえて来るのだ。彼女は僕に対して、新宿を午後に出よと命令している。彼女は午前中に、この家へ来たのだと思う。

○

「圭次郎君ね。余計なことを一切、言わないようにね。私が女王の登志子です。私の命令することだけにだけ答えるように……」

突然に美しい声が頭の上から聞こえた。二時間余りも電車に乗っていた疲れのためか、僕はいつの間にか、うとうとと眠ってしまったらしい。めかくしをしているので、女王様の姿は見えないが、その声は美しく、僕には理想的な女王様のように思えた。

「立ちなさい」

彼女の命令は静かな声だったが、ゆったりとした中にも威厳がこもっていた。僕が無言のまま立ち上ると、彼女は素早い動作で、僕

の両腕を背中にまわして固く縛り、次に両足のロープを、しっかりと縛り直した。

「おすわり」

僕は不自由な身体のまま正座して、めかくしのまま深く頭を下げ、まだ見ぬ女王様に土下座をするのだった。

「お手紙を、ありがとうございます。僕が野村圭次郎です。登志子様でございますね。どうか女王様のお姿を見せて下さい」

我ながらスムーズに言うことが出来たと思った。先程の僕のひとりごとは、みんな女王様に聞こえている筈だ。それにしても、この目かくしというものの程、僕にとって不安なものではなかった。

「登志子様、今日から僕は貴女様の忠実な奴隷の身でございます。貴女様の好きなようになさって下さいませ」

「勿論よ。私ね、お前を四、五日、帰さないつもりよ。いいわね」

「それは、ちょっと……僕は会社の方がありますし……第一回目は御命令のまま来なければ連絡が出来ないため、仕方がありませんでしたが、なるべくなら、土曜の夜から日曜の夜までにしてもらいたいです。奴隷の身で勝手なお願いなんです……」

「意外と生意気を言う奴ね。こんなの始めてだわ。おまえは、奴隷になりに来たのでしょう。私が許すまで帰られる訳ないわ。それだけ頑丈に縛ってあれば、どうすることも出来ないよ。もしかしたら一生このままかもね。どうするの？ 圭次郎君」

女王様の言葉に、僕は急に不安になって来た。突然、自分でも思いもかけぬ涙が次から次に流れ始めて、もう何も言うことが出来なかった。例えばようなない恐怖が全身をおそったのだ。両手はビクともしないほど固く縛られているし、両足も痛いほどロープに固定されてしまつて、無防備の肉体は、女王様の思いのままである。

「ホホホ。泣き始めたわね。じゃあ、目かくしを取って上げましょう。私の姿が見たいのでしょう。さあ、よく見なさい。貴男の一生を支配する女王の姿を……」

暗黒の世界から、夕陽の輝く光の世界に、僕の涙に濡れた瞳の前が開けた。そしてそこには、この数日間というものの、夢にまで見た人の姿があったのだ。

貴婦人という言葉は正にこの女王様のためにあると言つて不思議ではない。登志子様の姿は、僕の想像以上に美しく気品に溢れてい

た。上背があり、すらりとしたスマートな全身を見ただけで、この婦人が貴族の血統であることに気がつくだろう。雪のような純白の肌、頬から顎にかけの線の若々しさ、莊重で氣品に満ちた鼻すじ、優雅な唇がかすかに笑みをたたえ、面長な顔全体を、賢明な光を潜めた黒い瞳が引きしめ、教養に溢れた美貌はとてもとても四十歳とは思えない若々しいものであった。そして紫色のワンピースが、ぴったりと似合い、この人のセンスの良さを感じさせる。おそらく僕よりも身長が高いだろう。

「泣いたりしちゃって……おまえは男らしくないわねえ。これじゃあ先が思いやられる。少し考えを変えて、最初から厳しく訓練しなきゃ駄目ね。私の氣に入るまで、おまえの身体は預りますよ」

「僕はこんなつもりじゃあなかったんです。最初はお互いによく話し合って、それぞれの心を理解し合い、それから少しずつプレイをするような方法にして欲しかったんです」

「ますます生意氣ね。ふん。ちよっとばかり優しい手紙を出してやれば、すっかりその氣になって。おまえは全く馬鹿ね。あんな手紙を本氣にして、のこのこと、こんな山の中ま

でやって来るなんて。おまえはね、私が氣の済むまで調教飼育して、外国に売られて行くんだよ。嫌だと言ったって、もうどうしようもないわよ。私の鞭と、私の肉体と、おまえの餌と、多くの武器が、おまえを従順な奴隷に、芸当の出来る犬にしてくれるわ。そして高い金で外国に売れるのよ。覚悟を申し！

いいわね……もっとも、おまえは珍しく可愛い顔をしているし、まあ、私が存分に遊んでから売りとばすことにするわね。さあ、能書きはこのくらいにして、そろそろ最初の調教を始めることにしようかしら。よろしくお願ひしますって言うのよ。おねだりの下手な者は奴隷以下なのよ。わかる？」

僕は、とうとう心の底から泣き出した。泣かずには、いられなかった。やはり僕は馬鹿だったのだ。あまりにも軽率過ぎたのだ。まさか、こんなことになるとは……。

「おかあさん、助けてエ——」

僕は泣き叫んだ。もう僕の心は、この家から無事に帰ることしか望んではいなかった。何とかして帰りたいかった。

「お願い。お願いですから帰して下さい。嫌なんです。僕はただ、趣味のつもりだったんです。本物の奴隷になるなんて——お願いで

すから、お許しになって下さい。助けて下さい！ 女王様、御主人様、登志子様」

おおよそ恥も外聞もなく、僕は土下座をくり返して、登志子様にお許しを乞い、泣き叫ぶのであった。

「いくらでも泣き叫ぶがいいわ。この家は山の中の一軒家、誰も助けに来てはくれないのよ。ふふふ——」

登志子様は冷酷だった。正直に言って、その時の僕の心は恐怖以外の何の感情もなかった。あまりにも自分の愚かさが情なかった。人間の心の奥底にある妖しい願望、それに氣がついた者同志が、ひそかに世間の目から逃れて、おたがいの趣味をかなえ合うという、ただそれだけの軽い氣持であったのに——。

このまま抵抗も出来ない身体では、例え殺されても、誰も氣づかないだろう。外国の何処かに売られてしまったりしたら、二度と肉親や友達にも逢うことは出来なくなってしまふのだ。

僕は全裸のままでも、たとえ縛られたままでも、とにかく逃げたかった。生きていさえすれば、将来はどうにでも取り返せる。

全く現実には厳しい。美しくて優しい四十歳の貴婦人に、猫や犬を可愛がるように、ま



ごと遊びの相手のようにして、もてあそばれる夢が、現実にはあまりにもかけ離れた存在に変わってしまったのだ。

「この通りですから、もう許して下さい。もうこんなこと嫌なんです。だって、僕は全然経験がなかったし、まさかこんなことになるなんて、夢にも思わなかったんですから」

土下座を繰り返しながら僕は泣き叫んだ。

登志子様は両腕を男のように組んで、そんな僕の姿を、面白そうに見下ろしているのだ。た。あのように美しい貴婦人が、こんなにも恐ろしい女性とは、誠に信じられない。

やがて登志子様は余裕を潜めた微笑を口許に浮かべながら、優しい声で叱責した。

「いいかげんになさいよ、圭次郎君。男らしくないわね。私だって、せっかくの奴隷を簡単に売り飛ばしたりしないさ。おまえが一生懸命に奉仕するのなら、努力次第では、ちゃんと考えてあげるのよ。わかるわね、何事もおまえ次第なのよ。さあ、女王様の足の裏から奉仕を始めなさい」

登志子様はベッドの上に腰をかけて、すらりとした美しい両足をブラブラとさせ、僕の奉仕を求めた。僕は不自由な身体のまま、彼女の足の裏を口にあてると、登志子様はその

指先を無理やりに僕の舌にからませ、口の中いっぱい、さまざまに、まさぐり続けるのであった。

僕は生まれて始めて女の足の味を知った。それは先程までの恐怖心を少しずつ遠ざけていく程、甘美なやわらかな感触であり、仄かな陶酔の世界の入口を教えてくれているようであった。

「まだまだッ。まだ上にうつるのは早いわ。指と指の間を充分にやったら、足の裏を存分におなめなさい。もっともっと早くッ」

僕は懸命になって、唇と舌を上下左右に動かした。十分間あまりもその動作を続けていくと、やがて先程の恐怖心も大分、薄らいで来て、かすかな希望さえ覚えるようになった。

一生懸命に奉仕していれば、二、三日中に帰してくれるかも知れない。

「そうそう、そういう風に努力するのよ。そうしていればね、私だって、だんだんとおまえのことが可愛くなってくるのだから」

○

恐怖心のおあまりに逃げることでまで考えた自分の気持ちがわからない。登志子様のようなすばらしい女王様は、正にこの世に二人とはい

僕は登志子様のためならば、もう命などいらない。火の中だろうが、水の中だろうが、登志子様の命令ならば、喜んで飛び込んで行くだろう。

あの最初の日、僕が登志子様の両足をすっかり舌で清め終わると、彼女は美しく微笑してすべてのいましめを解き放して下さった。

「奴隷になるって事が、どんなに大変な辛さのものか、大体の見当がついたでしょう。さあ、いつでも帰っていいのよ。早くこういう世界のことを忘れて、人並の生活に返ることね」

登志子様の優しい言葉だった。先程までの彼女とは一変して、教養の高い、優しい貴婦人の姿がそこにあった。

ああ！ この時こそ僕は登志子様が理想の女王様であることに気がついたのだ。僕は再び登志子様の足許にひざまずき、その足先に唇を接し、彼女をふり仰いで両手を合わせ叫んだ。その叫びこそが、僕の心からの願いであり、見果てぬ夢なのだった。

「登志子様！ 僕を、僕を見捨てないで下さい。貴女様こそ僕の理想の女王様なのです。僕を貴女様の真実の飼犬にして下さい。飼犬にして、立派な芸の出来るよう、調教して下さい」

さい。お願いします」

僕の胸は希望でいっぱいだった。もう先程までの恐怖は少しもなかった。この貴婦人は絶対に信頼することが出来るという確信があった。だからこそ、心から彼女の飼犬になる決心がついたのだ。

「よく決心をしたわね。そんなに押まなくてもいいのよ。それでは今日かぎり、おまえは私の飼犬なのよ。その印として、首輪をつけて、鎖につなぎます。そうそう、その前に私がまんが出来なくなったから、飲んでもらいますよ——」

それにしても、早速便器にされるとは思わなかったがもはや僕には拒否感はなかった。登志子様の神水を戴くと、そのまま奉仕が続けられた。

「何をしてるのよ。もっと丁寧に出来ないのおまえは足の裏が好きなんだろう？」

登志子様は足を蹴り上げて、僕の身体を後方に押し倒した。その間といえども、僕は奉仕を続けていなければならなかった。

女王様の奉仕強要は続いた。貴婦人は娼婦以上に大胆に振舞い、僕に屈辱の悦びを叩きこみ始めたのだった。

僕は無我夢中で従った。そして心から奴隷

の喜びを感じとった。ああ、僕は完全に登志子様に征服されたのだ。

「全くこんな若い飼犬が出来るなんて、思いもかけなかったわ。だって、私より十六も年下になるのね、おまえって犬は……」

僕の顔の上に降ろした豊満な腰。僕の顔はすばらしい玩具になっていた。

「圭次郎、いい子になるのよ。さあ、起きて四つんばいのまま、私のまわりを走るのよ。そして、犬らしく甘えなさい——」

僕は四足になって、ピョンピョンと駆けまわり、女王様に向かって甘えなくてはならなかった。

「ワンワン、きゃあん、きゃあん——」

一体どのように吠えれば、一番、登志子様の気に入るだろうか。どのような芸当をすれば女王様に喜んでいただけるのだろうか。

僕は、そのこと以外に何も考えてはいなかった。登志子様の美しい姿を見ていられるだけでも、無上の幸福感を覚えるのであった。

やがて全裸になられた女王様は、僕の哀れな姿に向かって、更に無理な恥辱を与えるのであった。

「圭次郎、そのままよ。四つんばいのままで腰を高く上げなさい。はい、腰を高く上げた

ら、両足をうんと開いて——」

僕は従順に命令に従ったが、とたんに悲鳴をあげなければならなかった。

「イ、痛ァい。御主人様ァ」

「泣くんじゃないの！ なによ、いまさら。おまえにやった手紙に、ちゃんと書いてあったでしょう。これが卵責めよ——」

「コケコッコ」

夜明けになると、僕のこの声が登志子様への挨拶になるのである。

もっとも、女王様の耳には、コケコッコの声は毎朝、同じ場所でも聞こえるものではない。女王様の御機嫌のいい時は両腕の中で聞かれることもあるが、僕にとっては、こんな幸福な夜明けばかりではない。

師走の寒さだというのに、犬小屋の中で何度、鳴かねばならなかったことだろう。

「圭次郎の正月は、犬小屋の中かもね」

登志子様の面白そうな言葉だった。卵責めを手始めに、毎日に調教訓練は激しく、そして厳しくなっていくのだ。

それでも登志子様は、あまり鞭を使うのを好まなかったから、僕の身体はそれほど苦痛を感じていない。



だが何よりも辛い訓練といえ、やはり人間便器であった。女王様の神水の方とはともかく、黄金色の宝ともいえるものともなると、これが登志子様からの賜物だと思っではいても、容易に口に合うものではなかった。

この調教の時ばかりは、いっそのこと死んでしまった方が楽だと思ったものだ。

「心から飼犬になります。心から奴隷になります……なんて、おまえの言ったことは嘘だったの？ 今こそ真実を語る時なのよ。おまえがそんな調子なら、私にも重大な考えがあるわ。さあ、圭次郎、おまえの餌を食べなさい。おまえは犬畜生なのよ。人間だなんて考えが残っているから、いつまでも成長しないのよ。早く食事をすませなさい！」

情なかった。既に趣味の世界を超越している飼育調教に入っていたのだ。本格的な訓練であった。物事は一朝一夕には進まない。登志子様も完全な人間犬を作り上げるためには相当の日時を要することに気がついたようであった。この山中の一軒家で食事の仕度から洗濯、清掃など、すべての仕事は僕の役目であった。僕は登志子様の女中であり、下男であり、そして飼犬であった訳だ。

「この家にいる間に、おまえを一人前の奴隷

に仕上げねばならないのよ。芸当の出来る飼犬にも成長させる。その上で、おまえが真実に私の所有物になったと確信することが出来れば、東京の邸宅の方へ連れて行くの。それまで私の身分のことについて何も知る必要はないのよ」

登志子様が夜の散歩道で言われた。この寒空だというのに、僕は全裸のまま震えながら女王様の鎖につながれて、雑草の中の道を歩くのであった。

「寒そうね。暖かくしてあげるわ」

登志子様は、にこっと笑って、僕の背中に乗るのであった。

「さあ、これが人間馬なのよ。圭次郎は便利な奴隷ね。可愛い犬になったり、強い馬になったり、私の人間便器になったり、面白くって仕方がないわ。東京に帰るまでに、どんなにまで成長することか、楽しみでならない」重かった。登志子様の肉体を背に乗せ、いく度も僕はつぶれた。けれども彼女は決して許そうとはしなかったのである。

東京に帰りた。また元のように、平凡だが平和な安定した生活をしたい。やはり奴隷とか、飼犬とか、こんな変態的な世界に幸福などはないのだ、と思うこともある。だが女

王様の魅力が、僕のその気持をみごとに破ってしまうのであった。正に円熟の頂上にある美しい中年女性の肉体、妖しいばかりに輝く登志子様の表情、厳しさの後に訪れる甘美な官能の時間、女王様の飼育の手練手管が、僕を後退することの出来ない道へ歩ませて行くのであった。既に、この山中の家に来てから一週間の日数が過ぎている。会社の方は無断欠勤を続けているのだ。届けを出そうにも、このありさまでは、連絡方法もない。一体、登志子様は、どういうつもりなのだろうか。

難解な採用試験をパスして、やっと入社を果たし、二、三年後には管理職の地位が待っているというのに……。内心の僕は、いささか焦りをさえ感じていた。

「すべてをあきらめるのね。圭次郎、おまえは一生、私の飼犬のままよ。おまえのことが可愛くなったから、もう離さないことに決めたの……。死ぬまで、その首輪をとることはないのよ」

やがて登志子様が宣言なさった。予感していたことはいえ、それは僕にとって、絶望の時であった。そして絶望の喜びが、稲妻のように僕の脳天を走り、この時、名実ともに僕は貴婦人、登志子様の飼犬になったのだ。

## 女責め図絵の系譜

## ストリップ残酷物語

文と絵 南彦造

## その五

同じ座主経営のT劇場に、まるぼちゃで、女子高校生のように可憐なP子がいた。

何事にも控えめで、地味な彼女は、南九州は枕崎の産で、故郷の中学校を終えた頃——そこにやって来たストリップ劇団のマネージャーに、そのグラマー振りが眼にとまり、是非劇団員として活躍してくれ——ヌードなんかにならなくて、いいんだよ——と説き伏せられ、東京へ出たかった彼女は、喜んで参加することにした。

彼女の父親は小学校長だったし、母親も教員だった関係で劇団への参加は不如意だったが、彼女は夜逃げ同然で家出したのだった。

途中で四国とか近畿をドサ廻りした挙句のはて、やっと東京は品川附近にある劇団事務所へ着いたのは、その年も終りに近い十二月の二十四日——ちょうどクリスマススイヴとか何とかで、ヌードの踊りは、何処のキャバレーでも引っぱりだこの大騒ぎだった。

マネージャーはこのチャンスに強かった。何とかしてP子のヌード価値を高めようと画策した。

だが入団条件は「ヌードにならない」こと

だったので、裸にするわけにはいかない。

そこで「フロアショウに出演という振れ込みで「セミヌード」を要求した。

それを、あっさりと彼女は承諾した。体には自信があったし、その上、セミヌードならパンティを着用している——と云う安定感が彼女を大胆にした。

○

キャバレーのフロアショウは、予想以上に大成功だった。彼女の名前や、年令を宿所まで問い合わせ、はては電話が更衣室のベルを賑わせ始めた。

彼女は有頂天の喜びようだった。してやったり、とマネージャーが北叟笑んだのは言うまでもない。

早速、彼女の宣伝写真を撮影せねばならない。それは、ヌードに限る。——何と云っても彼女の魅力100%の姿体を引き出せるのは、ヌードである——とマネージャーは考えた。彼もまた、ナイーヴな彼女の肢体の魅惑にとりつかれていたのだ。

スタジオでの撮影が始った。マネージャーは彼女のコスチュームの古臭さに難癖をつけた。そんな酷い衣裳では写真にならない——というのだ。彼女は予備の衣裳を持ち出した





性女は、いつと眼を肉に

眩暈の視界を

うつろわたり

針のような

視線

に痺れを  
感じね

まどろみ

が、どれもマネージャーの意に沿うものは、なかった。彼女は迷った。自分なりによいと思って作った衣裳に、駄目押し——されたまじめさが彼女の心を暗くした。

それほど私のセンスは古いのかしら(？)と思った時——これがいい、君は良いブラジャーをしているじゃアないか——こんないいセンスを持っているなんて——ついだから下着を見せてごらん——といきなりシュミーズの裾に手が伸びた。

あッ——と驚くより素早く彼の指先は「ハレンチ学園」その尽に、チラッとレースの辺

りを掴んで引きあげた。

うんますます

気に入った——

そいつだ！そ

いつだよ！——

彼は、ブラジャ

ーとパンティだ

けのコスチュー

ム撮影を希望し

た。

どうにでも、

撮って貰いたか

った彼女は、それでよいのなら——と下着だけの姿になった。カメラマンの鋭い眼が彼女の魅力点の追求に余念がない。

手をあげたり横を向いたり、手足をエビ状

に曲げたり、反りかえったり——さまざま

ポーズを、いわれるままにとってみたが、ど

れも気に入ってもらえない。

カメラマンは、ブラジャーの紐が太すぎる

のさ——と云って、彼女の肩から、するりと

吊り紐をはずす——やっぱり、ない方がよい

——と瞞めていたが——さてよ、パンティの

膝下が長すぎるのも気になるア——と無難

作に、ゴムの線を引っばってみせたが——うん、やっぱり、これじゃ駄目さ——と大きなバスタオルを持ち出し——全部とって、これで体を巻きたまえ——と要求した。

バスタオルならば、と彼女は思い切って、部屋のすみで、すべてを脱いでバスタオルだけを身につけた。その瞬間から彼女は、もう無防備も同然だった。

そこに立って、両手を頭の上にあげるんだ——と囁きつけられるように命令され、その一瞬——するりと解けるようにバスタオルが床の上に落ちてかたまった。

あッ——と叫んで、思わず躊躇位、胸の乳

房を両手で隠すと——その尽、その尽——と

カメラマンが制止の声——シャッターが鳴る

——続いて上下、前後左右から——浴せるよ

うなシャッターの音、音、音——やがて——

よかったよウ——と感嘆の声。

マネージャーが素早く、しかもやさしく、

バスタオルを拾って、彼女の円い背中につけ

てくれる。

彼女の心は、ジーンと熱くなった。なんと

優しい男の心——芸術家なんだわ——と安堵

した。

彼は柔らかな調子で「ねエP子、きみの体

は素晴らしいよ。一層のこと思い切って、ヌードにならないか？ 蹲った姿よりも、のびのびとしたP子の、ヌードだったら、お客さん吃驚するぜ！」

P子は黙っていた。黙っているのは承諾も同じだった。マネージャーの声が、優しくかった。

ガチャン！——と扉の鍵が掛かった。

はッ！——となって思わず彼女が振り向くと——カメラマンが「安心したまえ。誰も入って来られないようにしたのさ。覗かれたら大変だからね」——と微笑んでいた。

男は非常に自分のヌードを恥かしがるが、女性は、むしろヌードを顕示しようとする習性がある——のは衆知の事実だ。

それは、男の肉体の持つ特性と、女体の特性の差にはかならない。

男の場合——外性器があまりに露骨すぎるのだ。本能的に隠したがる習性が存在する。女体の場合、目だつのは、大きな双の乳房だけだ。

外国の女性が下腹部より乳房を隠したがるのは、男の外性器と共通の、あまりにも顕示的な代物の持つ露骨さのせいであろう——と思う。

P子の場合もそうだった。外部だけなら、よいのではないか？ それに私の持つ肉体の魅力は、大勢のファンを勝ち得たことでも知れる——どんなポーズで撮らせても決して恥かしくはないのだ——と云う自負心が湧いている。彼女のヌードは素晴らしかった。

彼女は自分のヌードに誇りを感じるようになった。彼女が、数年後——T劇場の舞台に立つようになる——彼女の楽屋に足繁く、贈り物を届ける若い男のファンが出来た。

大阪のスナック喫茶店の息子で、時々、浅草の知人の店にやってくるのだ——と云う。

P子は、その男の智的な容貌と、親切な贈り物に好意を感じるようになった。

その彼に、本場の大阪のヌード劇場は素晴らしい、また東京の倍もギャラが貰えて、派手な生活が出来る——と耳打ちされた。踊子にとって、ギャラは高いほど魅力だし、将来は、まともな結婚もしたいと思っているだけに、貯金も欲しかった。加えて、何より魅力的なのは、ファンのこの男の友人が劇場の経営主だ——と云うことだった。

うまくいけばスターになれるであろうし、男との結婚も夢ではなかったのだ。

そんな大阪行の話を座主に相談すると、悪い結末については経験豊富な座主は、P子の大阪行を危惧したが、恋と出世欲で盲目の彼女は、他人の心配なんか他所に、ファンの男と連れだち、東京を去った。

やがて、出迎えを待ち、着いた宿屋は道頓堀に近い、想像とは大分違う粗末な下宿だった。

バチン！——と鍵が閉まれば、どうにも逃げようもない密室のような部屋で、暫く待つと、のっそりと若い者を従えたプロダクションの主宰者が現れた。ファンの若い男はP子に、このドスのきいたボスの中年男を紹介すると——「……話は勝やんから聞いた。僕がプロの社長や。ま、頑張ってるや」と云うなり若い者に眼配せして、姿を消した。ファンの若い男が勝やん（？）という呼び名の若い衆の一人であったのを知った時には、もう遅かった。

彼女の周囲は、勝やんを始めとするプロの若い者に見張られて逃げ出しようもない有様だった。

勝やんはP子の「品定め」に掛かった。他の若い者にも手伝わせ彼女の裸形をく、の字に折り曲げると思いもかけない検査を始める。



彼女にとっては生れて初めての経験だった。

若い者は手馴れた動作で、こともなげに処理していく——彼女は屠場に於ける小豚のように、キィキィと哀れな悲鳴をあげたが、男たちには通じなかった。その「品定め」というものが、どんなもので、どんな姿にされるのか——この原稿には詳しく述べられないが、云ってみれば、敗戦後まで数年間続いた「女郎屋」の遺手の検診と全く変わらない予備検査だ——と思えばよい。

猿轡を噛まされ、声の出ないように置いての検査なのだから、如何に興味本位の異常な極限状態が、男心の興趣を唆るだけだったかがわらう。

彼女はこうして若い者たちの攻撃を受けた後——お座敷専門の「特出しストリップ」の踊り子として連夜のように使われ、しかも監視つきなので、逃げ出しようもなかった。

時には、客の好みで「サド的なショウ」にも応じなければならなかったし、縛られて逆吊りになる特殊なモデルにもさせられた。

そんな時にでもなれば、彼女は、他の仲間の女たちの手で虐なまれ、天井から妙な形の俣吊られ、全裸の女体から、ポタポタと苦悶の涙を観客の頭上に、落とすのだった。

普段の着衣の俣の「責め場」だったら、興味の湧かないのが「秘密ショウ」の特徴であった。着衣のない女体が、高い天井で逆さになったり、折り曲げられたり、はては、滅多やたらに見られぬポーズで、ユラユラ揺れている——そんな白日夢が、高い料金を支払って見に来た男たちの希望にこたえて展開すると彼女は、じっと眼を閉じ、暗黒の視界のうちで、客たちの針のような視線に痛みを感じた。とても、まともなプロダクションなどでは出来ない芸当だった。

眺める男たちにとっては、見物だったが眺められる彼女の素肌は羞恥の針で痛み続け、おぞましい男たちの吐く熱気で、毛穴も総毛だつ想いだった。

そうして展開する一ツツの女体の神秘が男たちにとっては、価値ある興味だったのだ——と知る頃には、流石にグラマーな彼女の肢体もおとろえを見せ始めていた。この俣で行けば、遅かれ早かれ、彼女の肉体的魅力は失われるに違いない——と想われた。

その頃、彼女は必死で脱出を計った。しかし、監視の眼は鋭く、逃げ出す余地はない。ある夜の「秘密ショウ」で、全裸の彼女の「アヌヌ責め」が始められた時、彼女は不意

に腹痛をおぼえ、次第に激痛に変わった。流腸器の尿管が原因だったのだ。今夜に限って真鍮の火箸の様な鋭い尿管で責められたのだから堪まらない——客は逃げ出し、彼女は自力で病院の扉を叩いた。逃げ散った若い男たちは逮捕され、彼女は、やっとの想いで懐かしい東京へ、帰ることが出来た——と云う。嘘のようだが、これは実話である。女性よ、御用心！

## 終章

さて、女の子を本当に縛ったり、痛めつけたりする興趣は男である以上、一度は味わってみたもののだが、若し、それが不可能ならたとえ芝居でもよいから、そんな悲鳴とか、苦悶の姿態を眺めたいものだ——という願いを叶えてくれるような芝居が、浅草のA座で上演されたことがあった。

題名はちょっと忘れたが「エノケンの法界坊」と云う映画を想い出させるような、好色のナマグサ坊主が町娘を古寺に誘拐して痛めつけたり、犯したりするようなサド劇だったが、裸にされて柱にくくりつけられ、叩かれて泣き声をあげる踊り子の、美貌と肉体のポリウムが実に見事で、ついうっかり観客の

方も興奮して、大声で弥次をとばしたり——もっと、やれやれ！——的な声援を送ったりしていたのを記憶している。

踊り子のK嬢は、勿論、ふだんはヌード専門の可憐な乙女だが突然、変わった仕事に廻って来たわけで、戸惑ってはいたが、そこは舞台人だから、器用に泣いたり喚いたりして拍手喝采の大入りだった。

評判を聴きつけて取材したいと言う雑誌記者のたのみで、このK嬢を楽屋に訪ねると、彼女はケロッとしたもので——夢中で、泣いたり、暴れたりするだけよ——と答えた。

サドとかマゾの問題については、少しも知識がないらしく——変な写真や、記事は書かないでね、恥かしいから——と気軽に云ってインタービューに、快く応じてくれたが、そのしおらしさと裏腹に、演技となると、どうして、あんなにも凄い叫び声や、暴れ方が出来るものだろうか？——と演技者の持つ二面性と云うか、順応性の素早さにあきれもし驚異の眼を睜ったものだった。

紅い湯もじの裾を割って、見事に熟れた太股がチラチラ眺められる——凄惨な責め場となると、彼女は自由にならない肉体を捻って泣き喚くので、その真に迫った苦悶の表情と

か、下パンをつけているとはいえ気になって観客の視線は自然とその方向に吸いよせられていった。

女体に関する興味と異常な極限状態に於ける裸体の変化の美を求める男心の本能は、男だったら生れながらに備えているもので、そうした本能の卒直な現われが——幼い頃よく見かけるのだがトンボの手足や羽をむしり取ったり、蜘蛛の巣へ昆虫を与えたり、蟻地獄に虫を落としたりするような行為となって具現される——のだと心理学者は述べていた。

またマゾヒズムについても、生来、女性はマゾの持主だと云われているが、男としてはマゾの女性を痛めつけたり、苦しめたりするのは、あまり興味はないのであって、むしろ本当に苦しがつて泣き叫んだり、跪いたりする女性の姿に、よりサディスティックな共感を得るのである——とも云っていた。

私はある時、次のような告白を聴いた。その女性は女優にでもしたいような美貌の持主で、とりわけ胸の隆起と横に張った部厚いウエストの肉付きは抜群だった。

何でも大恋愛の末、いまの夫と一緒にになったとの事で、他にも想いを寄せる男性の数も多かったとの噂であった。

その若い人妻の彼女が結核にかかり、肋膜炎が癒着していて気胸が出来ない（当時は、まだ気胸という治療法が盛んだった時代）ので手術により、肋膜炎をはがさねばならない破目になった。彼女も全快したので、この手術を受けたいと医師に承知した。

やがてその当日——彼女は白いタイル張りの手術室で、美事な乳房を傾け、両腕をのばした形で手術台のバンドに身動き出来ぬよう押えつけられたのだったが、御存知かもしれないが、狭い肋骨の間から二本の透視鏡と切断用のメスを挿し込んで、肋骨にへばりついて剥がれない膜を少しずつはがしていくのだから時間はかかるし、鋭敏な肋膜神経が痛みを感じない筈はない。

最初のうちは、医師から簡単ですよ——と笑顔で云われ、甘い気持で手術台に横になった彼女も、鋭い金属管を腋の下から挿し込まれた時には予期しなかった激痛に「ああッ」と悲鳴をあげ、あとは声にならない呻き声と叫喚の連続だった——と云う。

私は不幸にして、手術の当日を知らなかった。なので彼女の泣き叫ぶ声とか、苦悶の叫喚を実際には聴けなかった——が、その時、順番を待っていた室外の患者から、洩れてくる彼



女の悲鳴の状態とか——ヒイヒイという言葉では表現しにくい程、哀れにも痛々しげな女の苦悶の声を（彼女の美貌と美事な肉体を知っているだけに）ぞくぞくするような感慨に耽って聴いたと教えられ、その場に居合わせた患者を、羨んだ一幕もあった。

手術と云えば、婦人科に於ける「卵管通水法」という、不妊症の診断には、細い女性の卵管に油とか水を注入するので、手術台に縛りつけられた女性の苦しさは非常なもので、

### 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

#### ☆賞金☆

|    |       |     |
|----|-------|-----|
| 優作 | 一篇につき | 参万円 |
| 秀作 | 一篇につき | 五千元 |
| 佳作 | 一篇につき | 三千元 |

#### ☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

担当医師も手をやく——と友人の医師から聴かされた。

サディスティックな医師は割に多いと云うが、残酷に馴れない限り、そうした患者の生命を救うことは出来ないのだから、因果な商売だ——と思う。

○  
美女の脇腹から透視鏡を斜めに挿し込む手技は、刑場で鎗槍を握り、磔柱に縛りつけられた女囚の脇腹を狙う刑吏の心理にも似た、

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

悲愴美が味わえるかも知れないし、嫌がる女患者を無理矢理に押えつけて手術する婦人科医の職場には、羨望の眼を向ける素人の数も多い。

二十数年前の話だが、南方戦線の検疫所で女体の検便ばかり好んで続けた衛生兵が、アヌス熱にとり憑かれた挙向の果てに、浣腸マニアとなって終まったのを記憶している。

その男は云った。——毎日のようにアヌスを見続けていると、これ以上に美しいものはないと思われてくるんだよ、不思議なものさ——と……。

清掃員もそうで、大小便が不潔な物でなくなり、すくって飲んだり、なめてみたい程の愛着を覚え、研究すれば「新説糞尿譚」だって発表出来るんだぜ——と豪語した、その方面のベテランもいるほどだ。

話が、変な方向に逸れて終まったが、私は私なりに見聞した、人生の裏街道を、つとめて「女責め図絵」の研究に、結びつけようと努力した。

自分から飛び込んで行った、ストリップ劇場の世界というものにも、サド・マゾの交錯や、人生の悲喜劇が、生き生きと存在していたのだった。

(終)

性

典

入

門

(2)

## 艶本目録について

斎藤夜居

「艶本」というのは、まったく十把一からげ

式に一括した名称で、本来の意味としては、

昔の艶本、現代の艶本、西洋の艶本、東洋の艶本、と大別して純艶本と準艶本、それから艶本に似せた読物とに分けたら考え易いと思う。一口にそうは云っても、内容のこととなるとだいぶ混乱が見られるから、判然とした区別や分類は、当然各研究家間に異見が多くある筈である。『日本艶本大集成』では、

〔説話、小説、絵巻、戯曲、狂歌、川柳、

小咄、指南本、人情本、艶本、衆道物、三

大奇書、道中物、往来物、事典物、性典、

絵草紙、好色本目録、艶画帖、調書物、性

随筆、詩集、私家版、大正・昭和の特殊風

俗雑誌、民俗風俗研究書、浮世絵・錦絵、  
秘画〕

れる筈だ。

林一美氏の『江戸艶本文学史』（昭和39・

1、有光書房）では、

〔浮世草子、読本（よみほん）、噺本、滑稽本、洒落本、人情本、黄表紙、合巻（草双紙）、根本（ねほん、歌舞伎の脚本）〕等々の艶本。

と、江戸文学のうちから分類された。加えて原典紹介を記述の中心とされた著者の労作であって、要心深く基礎作業を進め、氏の艶本研究シリーズ第一作『國貞』他十二冊の解題背景として重要な意義を持っている。

次に、艶本（総括された意味での）と性典との関連する所だが、艶本類が多種多様なこ

と、章別されている。妥当な類別であって大鑑式に考える場合に拠所を求めることができるが、時代年代別に各項目に八艶本的Vな要素をも多く含むものとしてあって、この式に何でもやって行ったら、世界文芸の総てをも部分的艶本視が可能になってくるから、従って性訓も出てくる。撰り分けるのが一苦労であるばかりか、巾ばかり広くなって、一般読書子の手には負えない。それらのうちから各個別に応じた好みの道へ探究の眼を向けて行けばよい。不備な点があったとしても、概観するに便利で、確かに一通りの知識は得ら



とは既にお分かりと思うけれども艶本における性的描写に必ずしも性典性訓を意味するものがあるとは限らないが、その要素を多く含んでいるのは事実であるから、江戸期およびそれ以前の艶本は性科学の面でも非常に重要であるが、此処では江戸艶本と性典（性訓一般的性知識）ということを考える場合、まずその目録と解題書から入って行かなければならないのだが、残念ながら未だ完備されていないことと、目録そのものの全般に眼を通すことだけでも、既に難事業とされている。けれども、古人先人もこれをないがしろにしていた訳ではなく、次の記録がある。



名家秘蔵書目集（昭14・2 古典社）

○好色本目録 大久保葩雪編（明治39・3）  
 「『新群書類従』第七、所載。柳亭種彦の好色本目録を補訂したもの」

○夢のわたり 高島藍泉編（明治14・春）

○うまの春 林若樹編（明治39・1）

○秘稿目録 南一笑亭ほか、編（明治45）

○玉のさかづき 宮武外骨編（明治45・3）

○いろは別好色本目録 松岡英利（大正5）

○名家秘蔵書目集 岡桃里編（昭和14・2）

「これは当時沼津にあった古典社（渡辺太郎）が発行した。内容は「うまの春」「玉のさかづき」「玉くしげ」の三書を合輯したもので、うち「玉くしげ」は別名「蔵春洞書目解題」として知られている故人飯島花月の編集に成るもの。稀書三点を複製したこの古典社の目録は現在でも珍重されている」

このほか、雑誌『変態資料』（大正15）昭和3）に尾崎久弥の艶本目録が数回連載された『奇書』（昭和3・12）に大野卓編の日本艶本目録もあり、戦後になって、林美一が『近世庶民文化』に、精密な点で高く評価された目録を連載したが、同誌の廃刊で惜しくも中絶した。

尚、その全貌が容易に一般に窺われないも

のに、『相對』の「秘本手記」があった。これの複製に際して、全文活字化されている。所在は、

○第一号（昭和27・10）目録

○第三号（昭和27・11）

○第四号（昭和27・12）

○第五号（昭和27・12）陰名考の紹介

○第十七号（昭和29・7）索引

右の通りである。記録者は、「是空」となっているが戯名であろう。四百二十数点の書目を記してある。

いま、思いついたものだけ記しても大体以上であるが、江戸の性典性訓の研究と艶本目録はどうしても缺かすことができないものでこれがないと文献の調べようもない。又、これの作成に情熱を注いだ人たちも亦少ないことも知ることができる。

○河原万吉氏のこと。

河原萬吉氏もその一人であった。四六書院の通叢書のうち、『古書通』、『古今いかもの通』、『年中行事通』などで、知られている。他に、『珍本物語』（汎人社）、『日本情痴集』（萬里閣書房）、『日本十日物語』（潮文閣）などというのがあった。今日あっては、殆ど披見に困難を感じない、阿奈遠

加之、逸著聞集、はこやのひめごと、去垢集（大東閨語）などを蒐めるのに七年間の歳月を要したと語っている。日本艶本解題は自著自刊、全二十三巻を発行しようという意気込みだったが、二冊きり発行できなかった。この書の内容を見てみよう。

『日本艶本解題』（古書解題之内第一輯）著者 河原萬吉 昭和六年四月発行 四六判二二四頁

内容。「閨の友月のしらたま」「はるさめ日記」「偶言三歳智慧」「開談百陰語」

「まくら文庫」「幾夜廻夢恋之徒然」以上五本の書誌と内容を説明したもの。

『日本艶本解題』（古書解題之内第二輯）昭和六年六月発行 四六判二五五頁

内容。巻頭に口絵五枚いずれも無難なもの

「春機折甲」「三ツ組盃」「てふかゞみ」

「風流色八景」「吾妻草紙」「一休禪師諸色問答」「朝比奈巡島記」「阿奈遠加之」

以上八本の書法と解題。

一、二輯共奥付に二百部限定とあるが、実際は四百部つくった。両書共発禁。自筆謄写版の伏字表を直接購読者には副えた。紙型を利用した両書合冊の改題本も出したらしい。

更に同年（昭和6）八月になると、

河原萬吉個人雑誌『古書誌』創刊号、を発行した。

内容。艶本解題の意義。古書の話。「閨の友月の白玉」その他の異同に就て（広田魔山人）。「笑上戸」解題。「大東閨語」及同補の作者に就て。後記。

約半年間に単行本二冊個人執筆の雑誌（六五頁）の発行で、自費出版である。加えて発売禁止というおまけ付きだ。文筆業と云っても特別に売れるものが書けた人ではない。書誌解題などという実に地味な仕事だったが、艶本の特殊性をねらった自家版行に糧道がかかっていたと見て、先ず間違いあるまい。この人がどんな気持であったか、その艶本解題の意義という文章を読むとよく判る。

「激流がある。その岸に立って人々は徒らに思議と躊躇に時を費している。やがて、一人の男がその群の中から現れて、敢然として流れに足をひたした。そして瀬踏を完了した。

人々は今や、何事もなかったかのように鼻唄まじりにこの流れを渡って居る」と、多分に比喩的に艶本研究に対する基礎作業を語っている。そして、その瀬踏みでひどい目にあってゐる。艶本解題に対する難関つまり検閲制度について、「これにつまづけば発売を禁止

される。禁止されれば甚大なる経済的打撃を蒙らねばならないのである。即ち、この出版を敢行するに当っては、他の一般書籍の出版に比して、桁違いな危険を予想せねばならぬのである」。「艶本の要素が猥雑を最も多く含むものであるが為に、これが研究をさえも、猥以外の何物でもない」と誤認する人々によってなされるのである。当事者以外には実感し得ない苦痛の一つである。私は自ら友人と呼ぶ人々からさえ、如何にこの故に揶揄と軽蔑とを受けねばならなかったか」。

また、編輯後記にも六号活字で種々この間の消息を伝えているが、結びに、

「この二三日で急に夏らしくなりました。この中野にも漸く夜店が出来ました。その夜店から買って来た金魚が、机の上のガラス鉢の中を遊び廻って居ます。今朝見たら出目金が一匹死んで居ました。子供が五人がかりで裏のどぶの傍に埋めてやったと報告に来て居ます。十月になると六人目の子供が生れる筈です。又ひとしきり賑かになることでしょう。皆小犬のように丈夫で元気です」

と、あった。河原萬吉氏は子福者だったことも判る。この人の文業には翻訳ものも数種あって、スエデンボルグの『天界とその驚異



及び地獄』もあった。どういうわけで、艶本研究にとりつかれたのであろうか。自分でも過去の筆業は泡沫の如きもので、必ず後世に益するところのものは、これから始める、艶本解題にあると云っていた。所詮、それも未完成の事業として挫折し、大成できずにおわった。何事によらず人間の仕事にはこうしたことが多い、せめてその志だけでも伝えたいと思った迄である。

### 三 女大学を戯文化した

#### 女大楽宝開

春画枕絵を八笑い絵とも云うように、昔の人たちはセックスの秘事を多く笑いに託した。あからさまに真正面から力(リキ)張って告げずに、まるで今日の糖衣錠の如く、芯の味が隠す用意があった。上下の隔てなく何事においても表があれば裏があるのは、古今東西を問わずその軌を一にしている。勿論、錠剤のみではない。そこに硬いものを軟かく文句取りする滑稽が生じ、お堅いことは言わずにと洒落のめす、ユーモアを愛したことは、江戸俗文芸の随所にこれを窺うことができる。「女大楽宝開」おんなだいらくたからばこ、と読む——は、「女大学」を戯文化

したものであった。

女大学というのは教訓書一巻で、女子大のことではない。貝原益軒、又はその妻東軒の作とも云われたが、益軒の和俗童子訓のうち教女子法を本にして後人の作った説が有力である。江戸時代における通俗的な婦女子教育書として親しまれていた。和順の教えを本として父母・夫・舅姑によく伝え、家政を治めることが説かれていて、この時代の女性観を代表し、長く持続せられてきた。保守的な男尊女卑を出発点とした思想が主調を成している教科書的存在であった。(新潮社版日本文学大辞典参照)。

従って、女大学を、女大楽と言葉をもじった滑稽味をねらっただけのものである。「宝開」は俗にいう宝貝という程の意味で女陰の美称であろう。尚、この「開」という語はこれから随所に多数出現するので、中野栄三編『陰名語彙』(昭和27年紫書房版と昭和43年大文館書店版がある)に拠り、その意を摘記すると、

開「かい」開字を以て女陰名としていることは最も普通で、これをカイと云い、また訓では苦々と読ませているのが多い。古語ではヘキ。陰名の種別によって下に開とつけたの

があるが、或は(ボボ)とて交会の名としているものもある。交会の名には陰名を動詞としている場合が多く、殊に女陰名を主体とし男陰名で交会を称しているのは、殆ど稀である——と。他の用語例略。

女性器の名称を動詞として性行為を現わす用語とするのは今日でもおなじだが、男陰名だけで性交を意味する場合は確かに少ない、おもしろい発見であると思う。

さて、『女大楽宝開』の活字化には左の二種がある。

①『稀書』第六冊、稀購文献刊行会(昭和27・8)部分紹介で挿絵なし。

②会員雑誌『近世庶民文化』第十九号(昭和28・10)これも部分紹介だが、挿絵付で好資料である。

この書の解題としては、『うまの春』『玉くしげ』『秘本手記』『増補艶本目録』等々にあるが、前記庶民文化十九号の岡田甫氏の解説が詳しい。

この書は「大本」といって美濃紙全紙を二つ折した大きさに百十三丁の大冊。開花書肆称悦堂開板。画、作共に月岡雪鼎で、蔵春洞書目解題玉くしげには、上方本には珍しき佳作なり、と褒めてある。戦後の艶本類の流出

期には原本が古書販売目録などにも時々出たものであるとか、通人の談である。そのうちの書を稀書文献刊行会の森山太郎氏が入手し紹介し、のち更に詳しく庶文誌が研究発表したわけである。

月岡雪鼎は、木田氏、名は昌信。近江の人で、のち大坂塩町心齋橋に住んでいた。多くの絵本類をのこしている。浮世絵類考によれば春画の名人とあり、女艶姿大鑑、女容婦美硯新童子往来万世宝鑑、艶道日夜女宝記、などの艶本作品がある。天明六年（一七六八）に七十七歳で歿した。

内容は、一、農耕図で交合を農作に擬えた戯文と絵。二、恋歌二十首。三、女大楽。四、互思連翹相その他、好色性相学のこと。五、美女三十二相と題して、全身三十二カ所の相と説明、ほかに男色の諸相図も各丁にある。六、玉門善悪見やうの事、これは着衣の立姿とそのまま裸体に透視した六図を掲げて説明を加えたもの。七、扇占い。八、色道実語教九、こんたん道具の図ならびに使ひやうの事性具と使用方法である。十、女郎にきをやらする術。十一、性病を受けない仕方、で、かんそうきづ受けざる仕やう、とある。十二、女性器の図解。十三、起請文の事、男女相性、ま

じなひ。ほかに、若衆仕立様の事、と題するのがある。少童を男色愛好者向きにまで仕上げる準備と細心の注意を記し、使用上の極意秘伝を述べたもので、本稿別章の男女同性愛の項目において、後日紹介したい。

次に女大楽（十七条）のうち、十条のみ紹介。開茎（かいまら）先生述となっている。

一、それ女子は成長して他人の家に行き、夫に仕ふるものなれば、色道の心がけ第一なり。

一、父母も、もとより其道を好みたるゆへに、子孫もつきざるなり。

一、女子は夫の茎をわが物とし、我開を夫の物とさだめ、なでさすりて寵愛し、なめりなどすること貞心の第一也。また……略……なであげてもらひなどすれば、即時に玉門うるほひ、交合の味は一入（ひとしほ）なる事疑なし。

一、婦人は夫の家貧賤なりとも、なげきの中の楽しみとて、交合の道より外是に増たる事なければ、とかく色癖など仕かけ、夫の心をいさめるべし。夫もたはぶれに氣うつをまぎらし、勇（いさみ）の心よりふう貴にちかし。

一、女子は富貴の家に行て、たとひ金銀衣

服たく山なりとも、肝心の夫の茎ちひさくては一生思ひ出叶はず、茎とぼしくて喰がつへすべし。思ふ様ならば富貴にて夫の道具もすこやかならば、是に越たる事なけれども、双（ふたつ）よき事はなしと心得べし。されば女はよがる事専らにすべし。いか様に男こしをつかひても、つつしみ顔にてしろくわんとして、悦ばざる女は、さながらうかめ過たるとく、石仏とや云ん。人形におとりし女の大きづ也。されば女の開に十の異名あり。

一高、二まん、三蛤、四たこ、五雷、六洗たく、七巾着、八ひろ、九下、十くさい、と唱ふる。一高といふは上付の開也。二ま

んとは饅頭を合せたるごとくの開也。三蛤とは開中に道具の多き故なり。四たことは鮎玉門也。五かみなりとは開中にて鳴りひびくなり。六洗たくとはぴちゃぴちゃする玉門なり。七きんちゃくとは口にて締めるゆへ巾着と名づく。八ひろといふは開中だはつくなり。九下といふは下付。十くさいとは悪き匂ひする開なるべし。

一、茎に十の異名あり。

一鉄、二かり、三反、四傘、五赤銅、六白七木、八太、九長、十すば。

といふ。一鉄とはふまら也。鉄のごとく和



かにて玉門広きせまきを撰まず、開中にてふとくなり、ふうみ至ってしまり善き故、一駄とさだむ。二かりとはかり高なり。開中に入つてしごき甚だなるゆへ女心よし。三反とは上へ反たる茎也。交合のぐあい至つてよし。四傘はかり高に類したれども、頭大きく開き玉門を狭む。五赤銅は黒茎なり。たとへば女の縮(ちぢれ)がみと同格にて味よし。六白は白き茎なり。見へ美しくけれども風味大ていにおとる。七木とは木のごとく堅き茎なり。八太はいたつてふとき故新聞などには用ひがたし。九長は長き茎也。用捨なく交合すれば子つばを貫ぬく也。十すばは越前まらとも云、皮かぶりにて味わるし。

異名かくの如し、能茎に当りし女は其身一生の仕合(幸せ)、是に勝りし宝なし。又たとへふつつか成る茎に当りしとも、是は其身の不運果報拙き因縁なれば、くやむ事無かれ我に備はりし一物と思ひ、おろそかに仕るべからず。

一、女は一度嫁いりして、男の一物あしきとて其家を出、假令ふたたび善陰茎に当りしとも、女の道にたがひ大きな辱なるべし。一、女子のために茎は父母の恩よりも高し

たとへば甲(かぶと)形、鎧がた、りんの玉りんの輪、ひごずいき、或は長命丸、きけい紙などのこんたん道具(註・いずれも性具、性薬)持行ふは、夫の為に少しもあらず、みな女を思ひ悦ばせん為にあらずや、向ふをよがらせ共に悦ぶ者、夫より外に有らねば大切にいたすべき事也。

一、女子は玉門のさうじ第一にすべし。立居に悪しきにはひすれば、色をうしなひ夫の心かはるもの成べし。

一、婦人は夫の食事に関心を付べし。交合一夜に五六ばんも行ひたる其翌日は、いかなるつよき男にても腹中荒れ、あらしき食事すれば軀をそこなひ、身をうしなふ事有、随分和らかなる食に菜はやく塩か又は煮ぬき玉子などよし。

一、女は其身を心づかひして、なに事も夫に順ふべし。たとひ夫心ばへあらく、声いららかに怒る時、ともに女夫争ひすれば、我が恥を世にあらはす道理なり。おか目よりは至って見苦しくそしり笑ふ物なり。夫のきげん悪き時は返答なく、しとやかにもてなし其夜夫ふしたる聞へひそかに入て、我帯をときて直ちに肌をびったり附、夫ののどへ頭をうつむけ、あまへる軀にてより添ふべし。にべな

き男は是を一旦いきどふりて突き放す事有をいく度もいく度も取附きもの云はずより添へば、いかなる心あらき夫にても、終には機嫌なおり、其俤にさり置物なり。此時そろそろと夫の茎をいらひかくれば、つい指さきの仲人にて仲直りの一曲と成るべし。斯くのごとくつつしむ女は、常に夫婦の争ひを世間に出さず、男も女房の心算(底)にかんじ、ますます家内栄へる事うたがひなし。

強いて一条ごとの説明は略すが、おもしろい言葉もあるが、反面には性の奉仕者としての封建時代の女性の哀れが、戯文といえども浮かび上ってくる。殊に、おわりの章などそれを感ずるではないか。明治になって福沢諭吉が女大学(もとより戯文のほうではない)を評して、女子に屈従を強うるものとして非難を公にしたのは、先進思想家としてやむにやまれぬ気持の上からであろう。

併し、夫婦間の性の快楽を、たとえ家が貧しくても、嘆きのなかの楽しみとして、気うつ(傷心なり)をまぎらして勇む心は、貧富の差別もなくなる、と云ったあたりは千古の名言だとおもう。これは昔も現代もかわりはない。一般平凡な庶民階級にいくらもある考

え方であって、貴族でも平民でも交合の味はおなじだというのである。ひくいところで遊んでいる訳ではないが、天下泰平のしるしであろう。俗謡の一節にも、猫にゃマタビ泣く子にゃアメよすねた男にゃボボがよい、というのもある。

#### 四 江戸時代の初夜の性典

##### 当世 民用 婚礼秘事袋

若い男女の婚礼初夜の心得については、昔の人も随分と心を配っていたことであって、書痴として斯道書籍通でもあった斎藤昌三氏はその著『東亜軟書考』の序文で「昔の人が親心に代って、通信文範（註・文指南もの艶本）のようなものに事よせて教えた性の扱方も今日の人々からは却って淫らな書として卑下さる如き例で、訓ゆべくして言い難い問題であれば、改めて敬虔に見直すべきであるのに折角の教書も悪書と見るは、誠に楯に両面あるのたとえて、見る人の心一つで人生を正道に導くか、邪道に外すか」であろうと述べている。親心に代って、教えがたく云いがたい八無言の教科書／＼を提供する、そこに性典の使命を見出している訳だ。性典に接する態度を矜持するための、根本的な考え方であって

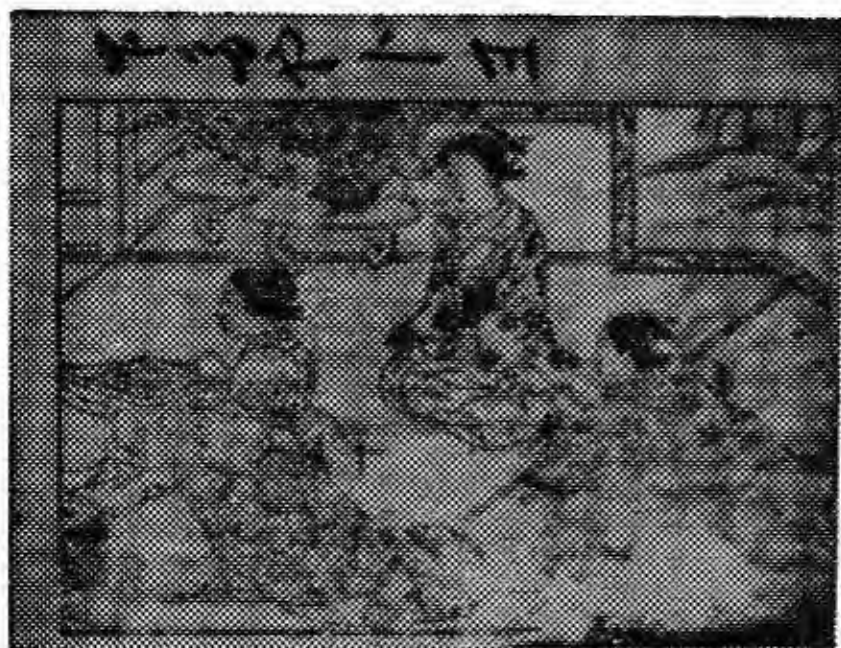
性の本ばかりは、自信を持たずにいやらしく読めばいくらでも賤しくなってしまうから、十分に心して読むべきであろう。

婚礼資料紹介の佳書としてこの『秘事袋』を置いたことは、性典読物として婚礼にテーマが絞られているので説明に便利だと思ったまでのことである。処女の破花、男性の筆下し、必ずしも結婚初夜とは限らないけれどもやはり、花嫁が初夜に良人に捧げる処女性は古い、ロマンチックな考え方だが、尊重しなければならぬまい。美しい夢はいつまでも忘れられないように、この春画沢山の原本にも婚礼儀式の図の上に「下たやトヨ」と女性の自筆があり、遠い昔の日の花嫁さん自身の姿であろう。

この書の活字化は①『日本性典大鑑』（日本生活心理学会版）、および②『近世庶民文化』第七十四号（昭和36・11）にある。

岡田甫氏（古川柳研究家）は、婚礼のときの犬張子の特殊な文献がひろえること、つまりそうした民俗的記事にも注目したと云っている。原典は風俗および性愛資料として貴重である。

##### 当世 民用 婚礼秘事袋



序、凡例、結納歌づくし、色道しつけ方の事、好色本用意の双紙類、聾の陰茎寸法を聞く事、ぬぐい紙用意の事、打合せ餅の事、口とりの事並に座席の事、祝言盃仕ようの事、酌人くわえ役の事、手がけの事、聾引手の事、床とりようの事、床盃の事、嫁閨中寐ようの事、嫁閨心得の事、聾新枕心得の事、開（介）添の女心得の事、新ばちの事、婚色の節初め終りの献立、小角の事、嫁膳高もり飯の



事、知音のかたより部屋見舞の事、部屋見舞の客へ馳走の事、開添より里へ翌日文を送る事、双方の姑膝延しの事、閨中道具飾りようの事、部屋かざりようの事、交合忌みる事、色道用食の事、色道禁食の事、嶋台高砂の事、押台宝来の事、忌みことば十八言、嬉道用ひことば（性用語）廿五言（以上全目次）

『婚礼秘事袋』には異本三種があると伝えられているが、凡例のうちに、「口の吸ひやう（接吻）肌の合せやう陰茎の肌さばきまで詳しく絵図を以てわづらい無からしめ」とあるように、絵画本位の婚姻のための性解説書であった。それも特に若い男女のための入みちしるべVとも云うべき案内書としての記述に重点が置かれているが、私は、表題頭書に「当世民用」とあることに依って、江戸時代における庶民の性生活指導書としての基本型をこの書において見たい。

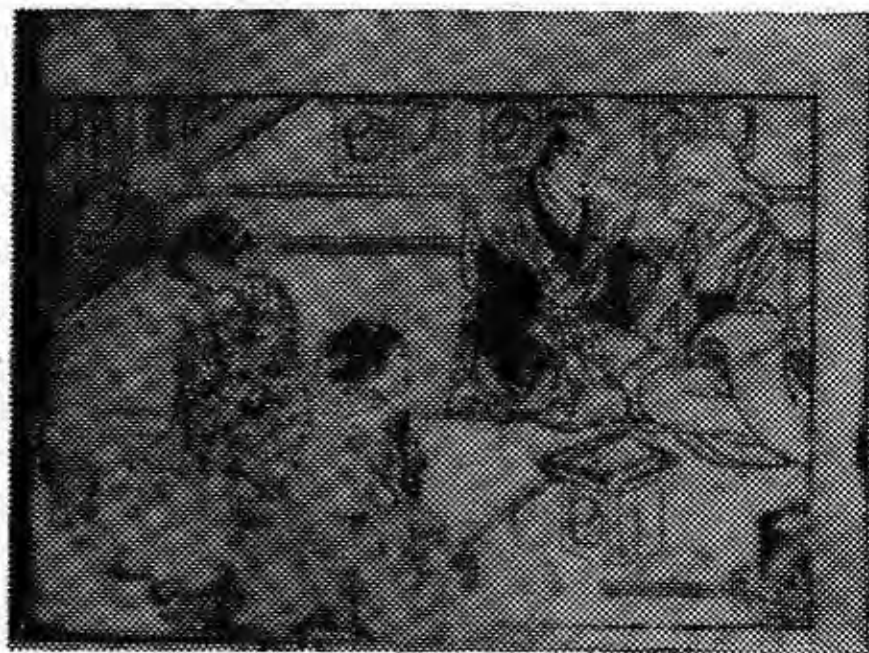
人生の表裏のことは今更ここに改めて云うまでもないことだが、この婚礼秘事袋もじつは宝永年間（一七〇四—一七一〇）に刊行された『婚礼罌粟袋』（二冊）という婚礼の儀式や礼儀作法を説いた指導書の裏がえし版であって、説きがたく語りがたき点のみを噛み

くだき、多分にパロディ化した絵入読物にしてしまつて、神聖なるべき入性Vを娯楽としての甘美な入性Vにデホルメしようとする庶民の智慧の力を感じさせるものがあつた。宝暦頃の出版と伝えられるから、今を隔ること二百年前である。尚、私見の挿絵は寺沢昌治画と細田米之胤と称される二書で、同じ図柄の所を図版で示してみた。内容の全般に亘つて説明するのはくだくだしいので主要な点のみ摘記してみよう。

序文のうちに「閨中にて色情なきは不縁の原因（もと）い」をおそれて、八千代と結ぶ寝や（ベッド）の魂胆易からしめんと、こまかきことを添寝枕の秘事袋といふ」とあつて、夫婦となつてからは女性に色気の乏しいことは、破綻を生じやすいから、とくと寝室の秘事について理解しやすいように説明いたしましう、と云っている。セックスの遊戯化の甚だしい現今の世相とちがって、深窓に育つた性的無智識なウブな若い娘たちには、どうしてもこのような性訓を必要とした——と云うことは、中山太郎著『日本婚姻史』（昭和3）に、江戸時代における男女の適婚齢を説いた章に、

「当代にあつては、男女とも一般的の適婚

秘事袋図絵より



齢に就いては法令の定めもなく、専ら慣習と婚姻する者の身分階級とに任せていた。それ故に上流なる武家階級や豪農巨商などの子女は概して早婚で十二三歳で夫となり妻となつた例も見えているが、庶民階級では男子は十五歳より、女子は十三歳よりを普通としていた。勿論、これとても現代からいえば早婚であるが、当時の社会は早婚を悦ぶ諸種の事情が存していたので、誰も



これを怪しむ者なく、却って身分ある女などが十七八歳になっても独身でいるようなことがあれば、非常なる晩婚としてこれを賤しめたものである」

と記されている事情に依る。

「色道しつけ方」には、まず結納もおさまり



寺沢昌治画

追って吉日を相さだめ、挙式にいたる日まで、遊所に伴って遊女の風俗なども見せたり又は色情に慣れた年増女の気さくなのを附けておき、好色本や春画などを常に見せて、いまだ生娘（おぼこ）のことであるから、実情に即した説明や註釈を加えて、夫婦となつてからの閨房内の愛情ということを常に説明していれば、しぜんとそのことを考えるようになり、色気ということも湧き、月水（メンゼス）が始まるだろう。そうなれば、月水によって淫道がひらけて、生娘であっても、玉門（女性器の名称）にうるおいを生じるから、新開（処女の初交）あらばちと読む——の苦痛もなく、新枕の晩から心よく夫に勤めることができます。このように円滑に一儀が行えることこそ簪殿に対する何よりのご馳走であります。とあるが性行為に対して新嫁が「新まぐらの夜より心よく勤むること」と云っている点などに、旧道徳時代における男性本位のエゴイズムがあるようだ。

「簪の陰莖寸法を聞く事」の章は無類の珍文なので左に原文のまま記す。

「こんれいの日限きはまるより前に、媒人（なこうど）をまねきて、簪の一物寸方をくわしく聞合せて、縹子（しゅす）か綸子



細田栄之胤

（りんず）のきれにて筒守りのごとくなる袋、ふとみ、丸みの寸法に合せてこしらへ右寸方のとをりのはりかた（張型）をはめて用意すべし。かくのごとく元ぎはにくけ紐を結び、さきには小はぜかけなり。これ



は嫁こし入のみぎりに玄関へのり物をかき上しとき、嫁のりものよりさし出し、開添（かいぞへ）の女にわたす。開添うけとりて侍女郎（小間使い）にわたす。侍女郎うけとりて聲にわたすべし。聲うけとりて部屋（や）の衣桁（えか）のはしにかけおく也。是は閨中の陰茎（いんせい）ふくろといふて、交合のあとにて聲の物（どうぐ）に風（ふう）ひかさぬやうにしばらくきせおく物なり。小はぜがけの所ハ小べんの時の用意にてかけはづしなり」

果たしてかかる袋を実用に供したのであるうか？……婚礼吉日に先ず玄関先で花嫁が聲殿にこれを渡すという所にユーモラスな味わいがある。とにかく、何はともあれ大事にしなければならぬ（道具）への認識を無言でたがいに呼び掛けあうのである。確かにこれがなくては結婚式は成立しないのだから……。また、古人の交合（性交）に対するキメこまかな注意と愛情は、「ぬぐい紙用意の事」にも窺われておもしろい。大要次の如く云っている。

交合後の拭（ぬぐ）い紙は嫁入り前から用意しておかなくてはならない。三種類の紙を必要とする。一はのべ紙、二は小すぎ原、三は小半紙であって、閨房で一儀がすんでぬ

ぐうとき、まず最初にのべ紙にてひたしとり二番拭きには小すぎ原をもちい、三番目の清拭きには小半紙をよく揉んでからつかう。此の拭き方はのべ紙にて和らかにぬぐいとり、残ったしめりを小すぎ原にてしめしとり、三の清拭きにはのべ紙や小すぎ原にては紙に粉気があってさくいから、どうしても紙のかすが附着するから、小半紙で更によくふき、乾かしてから陰茎袋をきせて……しばらく息をつぐなり……。

交合の秘事として、テクニックや心理を述べることより先に、なぜ陰茎袋とか交合後の清拭法の項目があるのかと云うに、おそらくは（心得）つまり実際的な（作法）のほうに論点の重きを置いたからで、華道入門に鉢や花器を先ず説明するようなものであるうか。では、更にその最も実際的な事柄の説明をこれから聞くことにしよう。

#### 嫁閨中心得の事

花嫁は床に入ってから、余りにべたつくのは宜しくない。そうかと云ってつんつんとしてお高くとまったようでも不可い。だからと云ってまるで床慣れしたように浮々しているのもどうかと思う。要はいかにも恥しそうに初心のさまであることが良い。と

にかく男に身をまかせて、夫より引き寄せられたならばしめやかに寄りい抱きつくことだ。初めての交合には快美感はなく、処女の場合は少しく痛みをかんじて、後にして不快の表情を現してはいけぬ。後になれば、だんだん、うれしくなるものだから。二日目よりそろそろ良くなって、三四日と過ぎるうち味わいが分ってくるものである。初交に際して余りにも苦しうにするのは最も聲殿に心配をかけることになるから心すべきである。

と、女性側の一儀に対する心がまえから述べているが、

「聲新枕の心得」については、まず床盃が済み、お互いに向い合って床に入ったら静かに挨拶をかわし、随分いたわって何よりもこれから始ようとする性交に対する恐怖心を取り除くよう、万事うちとけて心配をしないようにそろそろと引よせ、そうしている間に女の方に気ざしがあるかないかを試みるとき、まったくその気のない女はただ慄えているだけである。また多少でもその気があっても恥しさで一杯だが、その場合には慄えるというようなことはない。此時男はいきなり始めるようなことをしないで、しばらくは女の方より

潤ってくるのを待ったがよい。と細心の注意をうながし、そうこうしているうちに女身もだえのけしきあらば其時するようにする。また如何ほどに前戯をもちいてもうるおいが来たらず、身の慄えがとまらないという場合には、初交に対する恐怖心からまったくその気ざしが湧かないのだから、じっと抱きしめたままで、女の背中から腰のあたりを軟々と撫でさすりなどして、心をゆるませてから、そろそろとやりくりしたら良い。併し、どうしても女にうるおいが来ない、苦痛のみうったえて一儀動まりがたき時には——と、あつて途中で説明をストップして申訳ないが、今日のモラルや慣行ではまったく理解できない「開添（かいぞえ）の女」というのが登場する。「しかれども開中にうるほひなく、いたって苦しきにて、一儀つとまりがたきときはそのままにて開添の女を嫁のつびがはりに行ふべし」と云うのだ。

私たちは道德の基準を常に現在で考えてしまふが、それが二百年前の性生活の実態、モラル、人間の心理と云う事になれば「事実」と「真実」の差別をどうしても考えたくない。初めにも云ったように、婚礼秘事袋は婚礼罌粟袋という作法書のパロディである。い

くら花嫁が少女々々していて閨房の愛に適さないからといって、開に慣れたる姥桜がスペアであるなんて、事実あったのであろうか？ 原文を追ってみよう。

「開添はよく色なれたる女、嫁に附添て万事に心を付てつとむべきものなれば、嫁新枕の夜、次の間に臥して、嫁ためらひ一儀つとまりがたく見ゆる時は、嫁の後より寝間に入りて、しめやかに抱きつくべし。簀もはづみ居る折からなれば、何となく一儀におよびて心よくおこなふことなり。是則ち嫁の開に又開を添ふゆえ開添といふなり」とあるが、実にきわどい役目ではある。従つて「しかし此のつび代りより得ては開添女へ附きりになりて主家（おもや）を取らるる事まあり。よくよく心がけて新枕は晴れの儀なれば耻辱なきやう兼ねて心得仕附第一なるべし」と、性的無智によつて、かえつて開添女のために家脈の乱されざるよう戒めている。

ところでこの書は、主として京阪の婚姻習俗を記しているのだが、貧富の差別もなくこの結構なる開添の婦人がついていた訳ではなく、「又開添女なき時は（そのような時に）……略……女の両足をそろえさせ、男両足をまたげて……略……女のふともをよく濡ら

して、手伝はせて仕舞うが良し」そうして重ねて本道のやりくりをすれば良いと、所謂すまたで時間をかせぐことを教えている。

「新ばちの事」は初交をやや客観的に（性教育的に）描写した文章であつて、大要を記せば、新開（あらばち）はまだゆるんでいないから、内側までとぢ合せあるものを始めて通し押し分けるのであるから、此のときはどうしても痛みがあるものである。これを普通新開を割ると唱えているが、本当は割るのではなくて押し開くということだ。併し、無理に押しはなせば痛みは強く、女は顔をしかめていやがるものである。一度び通つてしまえばもう痛むこともなく、例えていうなら茹卵の薄皮の取れたる如くなる塩梅だから、翌日は開中が少しはれたように思うだけのことだ。

二日目よりは無難作なるがよい。だが、しかし是もしげきは宜しからず、やわやわと静かに、静かに。三日目ともなれば多少は多くてもよろしい。どのようなおぼこ娘でも味をおぼえ初め、よろこびを感じ始めるからだ。四日目は簀はそろそろ「嫁にとくと味づかせおくべし」とあつて習うより慣れよで、その方が上達も早い。五日目は里帰の日であるから、門出の寿と部屋にて一儀をしめやかに堪

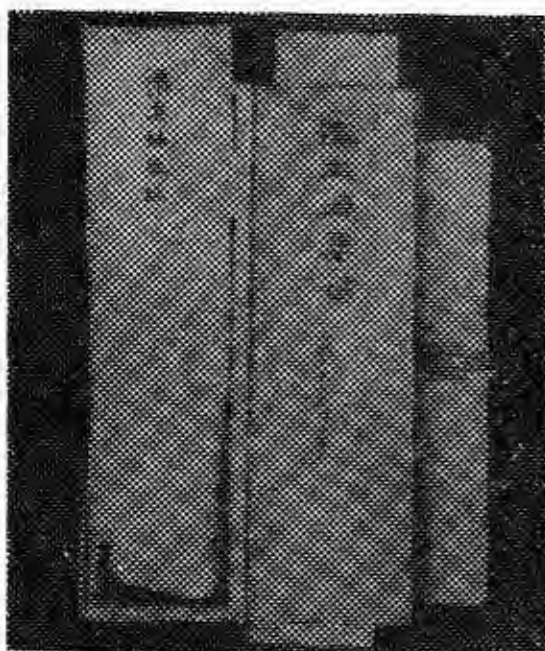


## 九十一代皇后の性典……

## —— 衛生秘要抄の公開 ——

昭和廿九年九月十七日、大東急記念文庫（五島慶太）に招かれた村上元三、中山義秀、尾崎士郎、佐々木茂索ら名士各氏は文部省田山技官から準国宝級の貴重文献とまで云われた折紙付の、我国に現存する最古の性典衛生秘要抄を内覧した。

この衛生秘要抄は、後深草天皇の皇女遊義門院が後宇多天皇の皇后となられた時、皇后宮権大夫であった西園寺公衡（きんひら）が皇后のために、侍医丹波行長に命じて巻物一巻に執筆させ献上されたものであ



## 衛生秘要抄

週刊サンケイ（昭29・10・3）より

った。時に正徳元年（一二八八）八月のことだと伝えられている。（昭和四十五年現在をへだたること六百八十二年前）。

内容は勿論漢文で記されたものだが、中国から舶載された古性典であるところの、「素女経」「玄女経」「洞玄子」などに拠ったもので、今日私たちでも容易に入手できる「医心方房内編」に同じものである。

高橋鐵氏は、私らにとってはそれ程珍しいものではなく、大正時代から覆刻活字本を見ている、と語ったことがある。

尚、東急文庫に入る以前にはこの衛生秘要抄は京都大学附属図書館の久原文庫に秘蔵されていて、門外不出の秘巻だった。当時、大東急の財力をもってこの古性典を迎えたのであろう。週刊誌上のトップ記事になった。

医心方房内編の全文活字化は昭和四十二年に至り文堂発行があり、判りやすく現代語完訳したものが昭和四十三年に芳賀書店から発売された。その全貌のベールはもう剥がされているが、ずいぶんと永い年月がかかったものである。

能させておき、嫁よりはづみきって帰るように仕こなしておくことだ。また嫁たるものは里（実家）へ行っても、いそいそ浮々したる態を見せていることが親孝行の第一であって交合の味がきわまれば、これこそ万のウサをしのぐ第一の妙薬だから、本当に百薬の長と称して差支えあるまい。と結んでいる。

尚、婚礼における忌みことば十八言とは、「かへす」「わかるゝ」「きるゝ」「もどす」「むえん」「しりぞく」「さむる」「うすい」「はなるる」「あさい」「ひまどる」「あく」「しまぬ」「のく」「きらい」「ヲ、すかん」「ヲ、きみわる」と云うのである。総て反対や不吉を意味して、何でもおめでたづくしで行いたいの

は昔も今もかわらぬ人情であろう。娼道用ひことば廿五言は、

「くぢる」「ひぞる」「すねる」「こだるゝ」「いれる」「きざす」「もがく」「じなつく」「いとし」「かあい」「きしむ」「うるほふ」「できる」「ゆく」「わたくし」「だきつく」「よがる」「しめる」「あふ」「き」「つめる」「やる」「うれし」「ほれた」

など、いずれも、うれしい言葉ばかり並べ立ててある。

## □ 水田真紀子習作シリーズ □

お町まちの折せ檻かん

水田真紀子

開け放たれた窓から洩れてくる月の光の中に、その白い肌がチラチラしては、浪人の眼が次第にけわしくなっていくのは無理ありません。

まして、その娘は抵抗すらできないようにうしろ手にヒシヒシと縛られているのです。そして半ば氣を失ったかのように、ぐったりとくずれているではありませんか。

指さきひとつで、どんな面白い遊びでもできるのです。幸い誰もみてはいません。

最初、浪人は女のうめき声を聞き、縛られ

ている姿をみて、助けに入ってきたのには違いなかったのです。しかし、こうして眺めているうちに、あやしく心が燃えてくるのを、どうしても打ち消すことができなくなってきました。

誰もみていないのだ。

この娘は逃げることも、できないのだ。縛られて、ころがされている。

そう考えてゆくと、もう矢も楯もたまらなくなってきたのです。

娘をそっとまた畳の上へねかせました。が



カット・岡 たかし

つくりと半ば横向きに崩れる肢体に寄りそって浪人は改めて娘を抱き起こしました。

うしろ手に縛られたままですので、素肌の円い肩がよけいもり上ってなめらかな曲線を描いて居ります。そのまま掌を肩口から素肌の胸乳へすべりこませてゆこうとすると

「あっ」

その感触に、お町は驚いて声をあげます。

「これ、静かにしろと申すに」

やにわに、その形のよい口許に、ひげ面を押しつけていったのです。



「むううっ」

本能的に首を左右にふりましたが、そのまま押しつけられて乳房を縄目の間から引きだされたのです。

「あっ、いやっ」

やっと顔をそむけて叫ぶところを、男は当て身をくわせますと、それっきりお町は氣を失ってしまうのでした。

キリキリとしめあげた縄を、少し下にずらせるようにして長襦袢の胸もとを左右に押しひろげると、お町の、まだ誰にもみせたことのない、ふくよかな乳房が大きく変形されたまま出てきました。

正気であれば、こんな羞かしいことはありません。氣を失ったままとはいいいながら、乳房は二つともむき身にされ、浪人の掌の中で無情に、もまれてゆくのです。

さくらんぼのような乳首が、コリコリと固い手ざわりで、むせかえるような若い女の香りが、かもし出されて、浪人はもうたまらなくなつたに違いありません。

片手を裾へまわすと、可憐にも、お町の長襦袢はひきあげられ、夜目にも白い太腿が、もう腰のふくらみまでみせるのです。すらりとのびた女の足、その白さが窓からさし込む

月の光の中に妖しげに浮かぶのです。

長襦袢の下は湯文字一枚。その湯文字も情容赦なく浪人の手でまくられていくのです。

荒縄で、うしろ手にキリキリと自由を奪われた娘が、あからさまにむかれている図は、いいようもない無残な姿であり、この上もなく男心をそそる姿態であります。

悲鳴をきいて助けに入った男が、今はこの娘を犯そうとしているのでした。

あまりにも娘が美しすぎました。そして、まだ汚れを知らぬ若い娘が、こうして縛られて、どうもてあそんでもいいように置かれていては、たまりません。

浪人は、完全に理性を失ってきているのです。乳房のふくらみ、下腹のもりあがり、眼の前に据えられては、むしろこのまま引き下がる方がどうかしています。

昼間、弓の折れでさんざん折檻されて、そのままうしろ手に縛られて放って置かれたのが、お町の不運でした。

責めの苦痛に氣が遠くなって、体を動かすのさえたまらなく、悶えているところを浪人に当て身をされて、今はもう死んだように崩れて居ります。しかし、生きている証拠にはとき折り眉をしかめて苦しげな息を吐き、裸

にされた素肌の、もえるようなぬくもりが、一層、男心をさそうのでした。

浪人は、しばらくは、うっとり、この美しいお町の姿態を眺めて居りましたが、辛抱しきれなくなったのか、再び乳房のふくらみをもみ始めるのです。

「う、うっ」

女体が静かに悶えます。

思いのままになる肢体を浪人は自由に扱って、お町の両足を左右に拡げてゆくのです。股間は大きく押しひろげられ、お町の苦悶の表情は見られたものではありません。

「う、うっ」

思いきり顔をひきつけます。

浪人は一本の棒のように縛りあげられているお町の肩を抱いて、重なっているのです。仰向けにされて、腰のうしろで合わされて縛られている手首が、自分の重みでさえ痛いの、その上に男の全体重をのせられてはたまりません。

「あ、あっ」

ふっと、夢心地からさめました、体に喰い込む縄目の痛さに、思わず叫びました。

「これ、静かにしろと申すに」

ぐいぐいと責めあげられ、昼間のぶたれぬ

いた痛みとちがう苦痛に、お町は悶えるのでした。身体をこねられると、ぶたれたあとの痛みまでがよみがえって、あまりの苦しみに思わずもがくのでした。

しばらくして、ぐったりとなったお町の体から浪人は立ち上ります。落花狼藉、そんな言葉がびったりするほど、その場のお町の肢体はあられもないものでした。

心ゆくまで美しい女体をもてあそび、思わぬ拾いものをしたと、浪人は立ち去りかねてあくことなしに見入って居ります。もう一度でも責めてゆきたい女体でした。

誰にも見られず、再びしゃがみこんでいきましたが、このときコトリと、あたりの静けさを破って微かな物音がしました。

はっとなって浪人がふり向きまします。まさか誰にも見られていないと思っていたのに、この有様をのぞいている者があったのです。

ミシリ。

再び物音がしたとき、浪人はとび上るようにして、あわてふためいて逃げ去っていったのです。うしろめたい気であるところを役人にでもみられては大変です。急に恐ろしくな

って逃げ出したのでした。

た。浪人が立ち去った入口から、そっと入ってきたのは、小さな影、それは近所の三河屋の小僧なのでした。

稲荷小町と噂されるお町が、いじめられているというのを聞いて、どんなところでいじめられたのかと思って、夜が更けてから、この社に足をふみ入れてきたのでした。

小僧からみれば年上の娘でしたが、美しいものにあてがれるのは仕方ありません。すばらしい美人、と日頃から女神をみるようにあてがれていたのです。その人が、責められていると聞いてはたまりません。

せめて、その場所だけでも憐れようとやってきたところ、そのお町がまだ縛られたまま転がされていて、浪人体の男が、そのお町に何かをしているではありませんか。まだその本質は分かりませんが、お町の妖しげな姿態に血が沸いてくるのでした。

あれほどあてがれていたお町が、ヒシヒシと縛られて転がされていて、こともあろうに乳房はすっかり裸にされ、そして長襦袢も湯文字もお腹のあたりまで捲かれた姿で、ほうり出されているではありませんか。

みたくてもみられないところが、すっかりむき出しにされているのですからたまりませ

ん。こわごわ近づいていきます。

白いお腹から太腿のつけ根にかけてゆるやかな曲線だけで、甘い水蜜桃のようにふくらんで水々しく、もり上っているのです。

あくことなく眺めていられても、当のお町は肌をかくすことも出来ず、思う存分、この小僧の好奇心を満たさせてやる他はありませんでした。

さんざん責めぬかれた体を今また、荒々しく男の思うがままにもてあそばれて、ぐったりとなっているのです。

荒縄でくびれんばかりヒシヒシと縛られて転がされている女体は、下半身だけ自由に放って置かれています。無意識に片ひざをたてて「うーん」と、お町の身がくねりました。

小僧の目には、ふくよかなふくらみが、まるで生きもののようにゆれるのに、始めて我にかえって、なやましいものに見え、そっと指さきでお町の肌をつつくのでした。

やわらかい羽二重餅の手ざわりで指さきをとけるようです。それなのに指さきを放すとすぐ元のように、はちきれるようにふくらんでくる、その感触に心が躍るのでした。

ふれてみて始めてそこが、しっとりとしているのが分かりました。そうするうちにどう



しても、この水蜜桃を吸ってみたくなってくるのです。

たまらなくなつて、くびれるようにほっそりとしまっているお町の細腰を横から抱きかかえると、お腹にはほほろをしながら首をのばしてそつと唇をおしつけていったのです。縛られて仰向けに転がされている女のそばにしゃがみこみ、お腹の方から足の方を向いて身をもたせかけると、もうしゃにむに、むしゃぶりついていったのです。

慄えながらも息づいているお町の魅力は、願ってもないおいしい果実だったのです。羽二重餅のような弾力のある素肌の感触は、小僧の唇の神経にたとえようのない温かさを感じさせました。

今、落花狼藉と、うす汚い浪人に責めつくされたばかりとはいえ、まだその肌ざわりは完全に娘の柔らかさを失ってはいません。まだそこにはかぐわしい乙女の香りと、ふくよかさを保って居ります。

彼女の内側からにじみ出た甘い香りが、たまらないしめりを、そのふくらみに残しているのです。

もうぐったりと、精も根もつき果てていたお町の女体も、この強い刺戟に再び意識を呼

び戻され、どんなにされているかは分からなのままに、あまりの感覚に、全身をくねらせ悶えてゆくのです。

意識のうすれる前、男の強い力で乳房を責められ、弓の折れの折檻に既に知覚を失っている下半身がまくり上げられて、ぐいぐいと責めあげられた、あの有様が思い起こされ、今また違った刺戟が与えられているのを知ったのです。

「うっ、うーん」

四肢をつっぱって、この刺戟に耐えながらうしろ手に自由を奪われた身が、今はもうさんざん玩具のようにもてあそばれているのをただどうすることもできないでいる悲しさを覚ってゆくのでした。

力のこもった弾力性のある太腿の手ざわりほのかな脂粉の香りと、とろけるような女の匂いと、やわらかな素肌が顔を包んでくるのに、酔ったように小僧は身体全体で溺れてゆくのでした。

痛さの中にジーンと乳房が張ってくるようなしびれを覚え、お町は身をくねらせ、悶えぬくのでした。

お町の肢体は、こうして小僧に責めつくされ、なめつくされ、さんざんにもてあそばれ

ました。

それを払いのけることもできず、うしろ手に縛られたままの全身をくねらせ、顔を真赤に染めて悶え苦しむお町でした。

悶えると、体の節々と昼間の責めのあとが火のつくように痛むのです。しかし小僧に、こうしてもてあそばれると、それと違った責めを与えられるのでした。ジーンとなるようなしびれが四肢の隅々まで伝わり、全身が火照ってカッカしてくるのです。

ヒシヒシと喰いこむ縄目も、ちぎれんばかり。体を硬直させて、気が遠くなってくるのを、もう、そつと、この身をあずけたいように、ぐうっとこみあげてくるのを小僧は、おかまいなしに、自分の好きなように振る舞うのですからたまりません。

気を失うような気持の中から、またむりやりに呼び戻され、しゃにむに、いじめぬかれるのでした。こうなれば、もう折檻です。

何度も何度も、その度に、お町は身をよじって悲鳴をあげるのですが、小僧はこの心地よい感触に陶醉して、女のむせかえるような肌への口づけをやめようもしないのです。

泉の湧くように、水蜜桃にも似た、その甘ずっぱい女の香りを小僧は、むさぼり続ける

のでした。

月の光のさしこむ大納戸の中からは女のうめき声と、やるせない悲鳴と、時には突きあげてくるような苦悶の音が、長い時間、絶えませんでした。

やっと小僧の立ち去ったあとには、もう死んだようになったお町だけが、顔をそむけるように、ぐったりとびたまま残されていました。

相交わず荒縄でうしろ手にキリキリと縛られたままです。乳房はもうすっかりむき出しにされて、お腕を伏せたように形よくもりあがっている乳房の先の乳首が、上をむいて慄えているようでした。

腰から下も、長襦袢をすっかり捲られ、湯文字から白い肌が晒け出されたままです。

しかしまだ、このままですんだのではありませんでした。まだこの上、いじめられることになっているのです。

再び、この稲荷の境内に一人の人影が近づきました。これこそ、初午のさいせん泥棒の張本人、櫛巻のお藤という女賊なのです。

お町が、あらぬ疑いをかけられ、このような目に合わされているのは、このお藤のためと云えましょう。そのお藤が今、姿を現わし

たのです。昼間、かくしておいた金を、そつと取り出しにやってきたのです。

お藤が、お町の呻く声をききとがめて大納戸をのぞきますと、まだうら若い娘が、無残な姿で転がされているではありませんか。まさか自分のために、こうして縛られて転がされているとは知りません。

胸には荒縄が二すじ三すじ、二の腕もくびれんばかりに縛りあげられて転がされているのに、我ながら赤くなってくるとともに、如何に同性とはいいいながら、このような姿態をみせられては好奇心が湧いてくるのは仕方ありません。

そつと大納戸に入ってくるのです。

夜目にも白く輝くお町の素肌は、女の目にも妖しくうつります。円い肩が、くるりとむかれて、胸もとのふくらみが、まばゆいばかりに見えるのです。

娘の乳首は、ぐみの実のようで、指さきでつまみあげたいような魅力をもって居ります。もう海千山千のお藤には、そのぐみの実が、とても新鮮に思えるのです。

思わずジーンと衝激が走って、自分の胸もとをかき抱きます。それほど、お町の乳首はお藤の血を沸かせるのです。

「まあ？」

うっとり、しゃがみ込みます。白い素肌でした。しかし、その肩さきに赤い筋目があるのに気がつき、おやと思つて目を移しますとすらりと伸びた太腿にも無数の筋目。

「まあ、この娘は折檻されたのねえ」

驚きの目をみはるのです。赤いあざは昼間の弓の折れの折檻のあとを、まざまざとみせつけているのです。

思わず横にねじむけた、お町の顔をのぞきこむと、ハツとするほどの美人です。まだ十七、八の水のしたたるような美しさに、改めてこの無残な姿態を眺め直すのです。

あられもなく捲られた下半身。まだ十分に成熟していない幼なさを残していましたが、はちきれるような若さがあります。指さきでつくだけでも張りさけるような弾力。女のお藤が見ても、思わずいじってみたいようなふくらみが形よくもり上っているではありませんか。

もう、お藤にはない若さを、この娘はもっているのです。ぐみの実のような、可愛い乳首。そして、このやわらかいふくらみ。その上、ねたましい程の美人。そのどれもに、お藤は急に嫉妬を覚えてきます。



意識もなく転がされているのを見て、むらむらと妖しい気が起こってくるのでした。

「おや？ それにこの娘は犯されてるじゃないの」

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売！

|     |     |            |
|-----|-----|------------|
| 一月分 | 1冊  | 三五〇円(送20円) |
| 三月分 | 3冊  | 一〇五〇円(送共)  |
| 半年分 | 6冊  | 二一〇〇円(送共)  |
| 一年分 | 12冊 | 四二〇〇円(送共)  |
|     |     | 郵便番号 558   |

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れた方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

お町をのぞきこむと、そう呟くのでした。さきほどの憎しみが好奇心にかわり、お藤の心をゆさぶり始めるのです。

幸い、この娘は縛られています。この女を

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お申込み願います。継続のお申込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。

局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

思う存分もてあそび、女の生理に悶えぬ表情を眺めたいという、好奇心が急に湧いてくるのでした。

犯されたばかりのあとが、まざまざと見られ、その時この美しい娘は、どんな顔をしてこれを受けたかそれが興味をそそりました。恐らく、こうして縛られたまま否応なしの落花狼藉。その有様を想像して、お藤はむらむらと興奮をおぼえてくるのでした。

自分自身が、それを思うだけでジーンと痺れてくるのを覚え、お町の肩に手をまわして片方の手は乳房に触れました。

「まあ、何とやわらかい手ざわり」その手ざわりを楽しむように、静かにもみたててゆくのでした。

「うーっ」

かすかな、お町のうめき。やわらかくもみたてられると、乳房はマリのように弾むのでした。女ですから、お藤のいじり方にはいたわりがあります。女ですから、どうすればいいかをわきまえて居ります。

時には小さな乳首をつままれ、時には大きく、そのふくらみ全体をもみほぐされますとお町は夢見心地の中で、次第に知覚をさまされてゆくのでした。

あばずれ女であるお藤は、どうすれば、この娘の肉体が燃えるかを、充分知りつくしています。そして、むりやりにそれを燃え立たせようとしているのでした。

お町の乳房は、お藤の思うまま、するままにいじめられているのです。うしろ手に縛られていては、それを拒むこともできません。縄目の間から、これ見よがしにむき出しにされているつぼみの乳房を、いじめ抜かれるばかりでした。

玉のような素肌の、そのやわらかくてコリコリしているふくらみの手ざわりを楽しむように、お藤はゆっくりと、また時にはリズムカルに、もみあげてゆくのです。

覚えのあるお藤が同性としての、つぼを心得て責めあげてゆくのですから、たまりません。お町の乳首は恥かしさに慄えながらも固くなってゆくのでした。

「うっ！ うーん」

身も世もない呻き声がお町の口を割らせます。さきほどの浪人や小僧のように、ただ自分の慾望を満足させるために扱われるのとは違います。男を楽しませる道具として扱われるのではなく、されている身がこたえられないように、し向けられているのです。

経験はなくても、成熟している女体なら、こんな扱い方をされると生理的に辛抱できないようになってくるのです。

「ああっ」

身をくねらせて悶えます。そんな、お町の姿体と表情を楽しむように、お藤は責めているのでした。

縛られた痛さも忘れ、あられない裸同様の姿に捲られている身も忘れて、お町は吐く息を荒くして悶えています。

はちきれそうな、そのふくらみの部分は、お藤の掌でびったりおさえこまれたまま器用に動く指さきの運動に、お町の女体は妖しくくねり続けるのでした。

お町の体が硬直すると、しばらくは手を休め、また乳房とふくらみを指さきでまさぐっては悶えさせてゆくのです。

続けさまに、何度も何度もくり返されてはたまりません。気が遠くなるような陶酔のくり返しに、すっかり悶えぬいて死んだようになって、がっくりしてしまうことになるのです。

一晩のうちに、こうして入れかわり立ちかわり、さんざんいじめぬかれて、お町の白い肌は、むきだしになっていました。

そのまま放って置かれれば、翌日、誰が見てもひどいことをされたことが一ぺんに分かるのですが、さすがにお藤は立ち去る時に、汚れた畳なども拭きとって、お町の衣裳の乱れもきちんと直してありましたので、翌朝になって再び用人が入ってきた時は気がつきませんでした。もとのまま一晩中、じっと縛られて転がされていたとしか見えなかったのです。

「どうだ、白状するのか」

用人に問われても、お町はもう今は口をきくことさえできずに転がっているのです。それを、あくまで白をきっていると思われたのでしょうか。再び弓の折れの折檻が始まるのでした。

ピシッ！

「あっ」

ピシッ！

「うーむ」

なさけ容赦もなく、お町のししむらに音が鳴ります。ぶたれ、犯され、またぶたれるのです。何と可哀そうな女ではありませんか。

やっと平次が真犯人をみつけた時には、お町は、とり返しつかない体になっていたのです。

「この項終り」



## 懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

## イチジクの殻が

## 潰れた時



加賀 明 男

これからはじめようとしているお話は、私が面白半分につくった、つくり話では決してありません。

私にとって青春の熱い情熱を燃やした、本当になつかしいお話なのです。こういう皆様は、私のことを、かなりの年配の人間のようには思われるかも知れませんが、どうしてどうして、実際の私は、まだ二〇才を一つ二つ過ぎたばかりの、血気盛んな若者なのです。

そんな私にとっても、これからはじめるお話は、本当に熱い熱いお話なのです。

この話を始める前に、まず私の自己紹介をしておくことにしましょう。私は年令、二十才と八カ月。現在、大学の3年に在学中のスネかじりなわけですが、文学に深い愛着と執念を抱いている、文学青年なのでもあります。背は高からず、ちょうど日本人の平均身長にあたりです。

顔のほうはといいますと、まあ自分で言うてる事ですから、皆様はせいぜい半分くらいのところを想像なさってくださいれば良いわけですが、以前は俳優の黒沢年男に似ているといわれた事もありました。目下、アパートで一人わびしく自炊生活を送っています。

さて前置はこのくらいにし、そろそろ私の熱いお話を、進めていく事にしましょう。がその前にもう一つ。この話の中には、私のほかに、一人の女性が登場してまいります。そこでその女性の紹介もすませておくことにします。

中野アツ子。年令二〇才。職業、現在是不明ですが以前はデパートガールをしていました。中肉中背のどちらかというと小肥りの感じで、男好きのする顔をしておりました。とてもおとなしく、時に見せる笑顔が山本陽子に似ていて、とても可愛い娘でした。

さあ、ではいよいよお話する事にしましょう。私が十九のときですから、そう、もう約2年も前の話になってしまいうわけです。

私とアツ子が、はじめて顔を見合わせたのはアツ子の働いているデパートに私が、靴下を買いに行った時なのです。ごく普通の客と店員として二人は顔を合わせたのですが、ア

ツ子は靴下売場の店員として、いたのではありません。そのとなりのネクタイ売場にいたのです。私を買物に行ったその時、ちょうど靴下売場のほうに誰も人がいなかったのか、かわりに私の靴下を選んでくれ、包装紙につつんでくれたのでした。ふっくらとした顔を少し斜めに向け、『これなんか、いかがでしょう。あなたに、よくお似合いだと思いますよ』とひかえめにすすめるアツ子の動作は、私の若い心をして、その場を立ち去りがたいものにするのでした。私は思いきって言いしました。

『店が終わってから、一緒にお茶でも飲みませんか？』

アツ子は別に嫌な顔をせず、

『私のようなものでもよろしかったら』

と気持ちよく承知してくれたのです。

デパートを出た時、私の心の喜びは、とても言葉に言い表わす事のできないほど、大きなものとなっていました。思えば、これは私にとってではじめての、デートの申し込みだったのです。案外簡単なものだなという気持ちと、どんな事をしゃべったら良いのかという不安な気持ちとが入り混じり、その午後はデパートの終わるまで、私に落ちつきを失わ

せていました。

案ずるよりは生むが易しとはあのことでしようか、あれほど動揺していた私の心とはうらはらに、私の口からは次々と、考えもしなかった言葉が、それも冗談をまじえて、出てくるのです。アツ子は聞き上手とでもいうのでしょうか、私が話している間、じっと真剣なまなざしを私に向け、耳を傾けているのです。そして、本当にうまく、あいづちを重ねてくれるのでした。私の冗談に、これほど面白い事があるかといわんばかりに、本当におもしろそうに笑うのです。

こうして第一回目のデートは無事終わりました。アツ子の乗るバスが、ほんとうに目の前まで来たとき、私はやっと、

『また会ってくださいますか』

と言ったのでした。

『そうねえ。じゃ、明日』

というアツ子の声を聞いた時、思わず私はアツ子の手を握っていました。

アツ子に気に入ってもらえた、その喜びで私は、その夜、直ぐ眠る事ができませんでした。

翌日も、翌々日も、ほとんど毎日のように私たちはデートしました。デートの回を重ね

る毎に、アツ子も、聞くばかりでなく、軽い冗談を交えて、話すようになり、いつしか、喫茶店から公園へという、二人だけのおさまりのコースもできてきましたし、時には、ボーリング場へ足をのびしたこともあります。また時には、私がアルバイトして貯めたお金で、海とか山へ行ったりしました。

最初のデートから数えてちょうど10回目のデートの時、初めて私たちはキスしました。夜の公園で、私のとなりにちょこんと坐っているアツ子を見ているうちに愛しくなり、思わず抱きしめていたのです。

私がくちびるを近づけると、アツ子が、瞳を閉じたのとは、ほとんど同時のでき事でした。暖かいアツ子の吐息が私の顔に感じられた時、私の両手は力一杯、アツ子を抱きしめていました。それはまさに恋愛小説そのものの本当に素晴らしいくちづけでした。

あとで、アツ子から、

『ありがとう。本当にうれしかったわ。私は今、とても幸せよ』

といわれた時の私の喜びようは、そのままを筆にして伝える事は、とうてい不可能な事と思われまふ。

それから、私は、デートの度に、少しずつ



アツ子の身体がぬくもりを確かめるようになり、私の手がアツ子の形の良い乳房に触れた時、アツ子の身体から、一瞬、動きの止まるのが感じられ、私の手が、こわごわアツ子のスカートの中にのびたとき、はじめてアツ子は私の行動を拒否しました。でもそれは、柔らかい拒否でしかなく、かえって私に大胆さを与えてくれるものでした。そして、声なき声をあげるアツ子が、とてもいいらしく、可愛らしく感じられるのでした。

そのころの私たちの会話の中には、結婚という言葉がたびたび出てきました。私もアツ子も、いつしかその事を真剣に考え、望むようになつていくのでした。私の部屋で、肩を寄せあい、将来の話をする時、二人はもう幸せの絶頂にいたのでした。

このまま何もなければ、私たちはおそらく今でもまだこのころの気持ちのままに居る事ができたかもしれません。二人の親しさから、アツ子はきつと私の欲望を許してくれるだろうと思つた私が甘かつたせいなのかも知れません。また、これぐらいの事はかまわないだろうと考へた私は、本当にアツ子を愛してはいなかつたのかも知れません。私には、本当に人には言えない事なのですが、たった一つだけ

変わった欲望があつたのです。私の話に今好意的に耳を傾けてくださっている皆様にいわせるなら、しごくあたりまえの事、別にかくさなくても良い事とおっしゃるでしょう。

私は、アツ子を知る以前から、今皆様が手になされている、この奇譚クラブという本の存在を知つておりました。過去に一度、投稿したこともあり、またその拙文を誌上に掲載されたこともある私なのです。

私は、異性のアヌスというものに多大な興味を持っていたのです。アヌスに恋していたのです。女性のアヌスをじっくりと見てみたい。そこに何かを求めてみたい。浣腸してみたい。浣腸して、その変化の様子がみたい。そんな欲望を持っていたのです。

アツ子とつき合うようになってからしばらくは、ごく一般的な欲望が、私の心の多くを占めるようになっていた私なのですが、長くつき合ううちに、昔恋したアヌスの夢が、再び、私の胸に湧き起こってきたのです。

アツ子とつき合うようになってから、約5カ月ほど経つたある日のでき事です。私はとうとう自分の隠された欲望を押えきることができなくなり、また先にも書きましたような気持ちも手伝つて、ある一つの計画を立てたの

です。それは、アツ子が酒を飲めないという事を知つていたので、アツ子に無理矢理、酒を飲ませて、部屋に連れて帰り、裸にして、浣腸してやろうというものでした。

その日、私は、デートの約束の少し前、近くの薬局へ寄り、イチジク浣腸を買う事にしました。25才ぐらいの女店員に、浣腸をくださいというのは、とてもつらい事でした。でも私の押えに押えた欲望は、いちどフタをあけてしまうと、思わぬほどの力となつて、弱気な私を、とても大胆にさせるのでした。

2個入りで、たしか八十円という、三十グラム入りの強力なイチジク浣腸を買った私は約束の場所までの間、ナイロン袋の中のピンク色の可愛い容器を、ポケットの中で、にぎりしめていました。

アツ子はいつものように私の左側を歩き、右腕にからませ、楽しそうに歩くのでした。その日、私ははじめてアツ子連れて飲みに行きました。アツ子は自分では、

『お酒も少しぐらいなら飲めるのよ』

といつてはいましたが、最初に飲んだジンフィズがかなりこたえたらしく、次に注文したジンライムをとうとう飲み干す事ができませんでした。ほんのりと上氣したアツ子に笑

顔を送りながらも、私は、ポケットの中のピンク色の武器の事を思いつづけていました。

二杯のカクテルですっかり酔ってしまったアツ子をタクシーに乗せ、部屋に連れて来たとき私は、アルコールと、ポケットの中のもの、とても興奮していました。

部屋の中に大の字になりながら、アツ子は『ああ、いい気分。またつれてってね』などと、しゃべりつづけていました。

私は、つとめて冷静に、いつものようにアツ子にキスをしながら、片手をパンティーにかけようとするのでした。

アツ子は、『せっかちなえ』などと、あまえないながらも、腰を浮かせて、私の動作を楽にしてくれるのでした。

私はアツ子に、『水を持ってきてやる』といってその場を離れ、キッチンに行き、ポケットの中にひそかに持ちつづけてきたものをそっと出し、ナイロン袋を破るのもどかし、その先端に穴をあけるのでした。私の全身を激しく血が駆け巡っていました。

アツ子は、私のそんな計画を知る由もありません。おいしそうにコップの水を飲み干すと、今度は、投げ出した私の足の上に上体を折って、つつ伏してきました。ミニスカートを

からこぼれ出たような可愛い白い足が、とても美しく私の目に映り、くの字に曲った二本の足が、それぞれ、重なり合って、何とも言えない柔らかさを出していました。

私の右手には、例のイチジク流腸が、しっかりとにぎられています。少し力を入れすぎたのか先端から液が少しこぼれていました。

私の目は、さきほどから、ミニスカートの一点を注視していました。おそらくこの時の私の目は、異様に輝いていたと思います。私の心臓は、信じられないぐらいの速さで脈を打っていました。

『これから、いい事してあげるよ』

これだけいうのが、やっとでした。アツ子がかちらに顔を向けてうなずいたとき、笑顔を送るのも忘れていたのです。

ミニスカートから真白い二つの丘が現われたとき、私の身体はもう自分の意志で動いているのではなくて、何ものかが、何かの力を働かせて、動かしているのだとさえ、その時私は思いました。そして、私が自分を取り戻した時、右手にはぺちゃんこになった流腸をしっかりと握り、目の前に、およそいつものアツ子らしくない恐い顔を見たのでした。

『あなた、いま何したの?』

と聞くのです。

『流腸してあげたんだよ』

『かんちょお?』

『そう。これ』

といって、握りしめていたイチジクを差し出しました。

『何でそんな事するの?』

『……………』

『面白半分でやったんでしょ』

と詰問の調子でいいながら、私の顔をじっと見つめるのでした。

私にはその時、私の変わった欲望を打ち開ける事は、とうていできませんでした。それほど勇気の無い男だったのです。

『君があまりにも可愛かったから、ちょっといじめてみたかったんだよ』

とか、

『これ今、流行ってるんだ』

と答える私が妙に落ち着いていたのは、今思い出してみると、ぞっとするくらい不思議でなりません。

私とアツ子の間に奇妙な沈黙の時が流れてゆきました。しばらくたって、

『私ちょっと、トイレに行ってくる』

といってハンドバッグからティッシュを四



五枚取り出しはじめたアツ子を見てからの私は、今、思い出そうとしても、はっきりと思いつけないのですが、とにかく、アツ子を部屋から出すまいと夢中になって、手を引っ張ってみたり、服を引っ張ってみたりしたようですが、アルコールの酔いもどこかへ行き、今にも泣き出さんばかりのアツ子の顔を見た時、私の心に、いくばくかの後悔の気持ちが起こってきたのでした。

私は、それまで引きとめていた手をあわて離し、アツ子をトイレに行かせてやりました。私のアパートは、共同トイレですので、直接、排泄音など聞こえなかったのですが、今思えば、それがせめてもの救いでした。

自分の恋人を、そこまで酷悪化しようとした自分が、とても恥かしく、また恐ろしくなってくるのです。

アツ子がトイレに行ってる間、私は、部屋でアツ子を襲った、そのピンク色の容器を前にして、耐えきれなくなった自分をなぐさめるのでした。

アツ子は部屋にもどると直ぐにバッグを持って、何も言わずに、帰って行ってしまいました。私は、送って行かなければ、と思ったのですが、何故か、身体中から力が抜けてし

まったような気がして、とうとう、見送りもしませんでした。

その夜の私は、直ぐにはねむる事ができませんでした。イチジクを持ち出し、口にふくんだり、はては自分で残りの液体を自分に注入するのでした。

翌朝になって私は、急に不安になってきました。もしかして、昨夜のことで、永遠にさようならなければならぬのではないだろうか。という不安で、私はもう、いてもたってもいられなくなりました。

はやく会いたい。会ってあやまりたい。そんな気持ちでした。私は、昼休みを利用してデパートへ飛んで行ったのです。しかし、案の定、アツ子は早退していました。ただ一通の封書を残して。

顔見知りの店員から受けとった手紙には、  
「昨夜はごめんなさい。だまって帰ったりして。突然あのような事をされて、とても悲しかったのです。家へ着いて一人きりになった時、とうとう泣いてしまいました。今までは本当にやさしいあなただったのに……。ひどい事と思えてなりません。」

あなたも別に悪気があって、あんなことをしたのではないでしょう。でも私にとっては

死ぬほど嫌な事だったのです。今まで抱いてきた、あなたのイメージが崩れてしまつて、とても悲しいのです。この思いは、あなたも同じだと思えます。

あなたが、とても好きでした。結婚まで誓い合った二人なのに、例えばざけた事にせよ私を面白半分遊びに使うなんて、私には許せません。

突然のことで、あなたも、とまどうでしょうが、私の事は、どうか忘れてください。というより楽しい思い出の人としてください。私も昨日の、あなたは忘れます。それまでのやさしいあなたの思い出を一生持ちつづけ、生きていきます。

ごめんなさい。さようなら……

皆様、長いこと私のお話に耳を傾けてくださり、ありがとうございます。私は今までもアツ子の事が忘れられないのです。あの熱い熱い、思い出とともに。

皆様の中にこんな私を可哀想だと思いの女性の方がいらっしゃるかもしれません。どうか今直ぐペンを持って私を勇気づけるお便りをお願い致します。

# 魔美女王様の優雅な生活



三原 寛

カット・岡たかし

ウゴを口にくわえて居るのである。ゆったりと便器に腰を下した魔美様は煙草をくゆらし新聞にお目を通し乍ら悠々と朝の排泄をお楽しみになるのである。

魔美様は大体十時頃お目覚めになる。それから暫くの間はベッドに横になったまま、足を投げ出して私の舌をお使いになってゆっくりと足の裏の清拭をお楽しみになったり、或は御気分爽快の時にはそのまま起き抜けて、私の背中やお臀に思いつき鞭をお揮いになる事もある。ベッドの足許には便器が備えてある。便器といっても脚の高い椅子で腰を掛けてお臀の当る部分に丸い穴のあいたもので下には正座した男が顔を仰向けて大型のジョ

来ない様な高価な食物が魔美様の尊い御体内を通して来たものであるから、そのお味は粘っこいチョコレートが舌の上に溶ける様で、その時は自分の幸福感に浸り感涙にむせぶのである。私は便器にされて居る男を、その点で羨しく感じる。便器になると魔美様のお体を通ったもの以外口にする事を許されない。栄養価の高い食事をお摂りになるので、魔美様のお体に吸収消化された残り滓を頂いても十分に滋養になるのである。

魔美様は私にはラング、便器用の男にはセルという呼び名を下さって居る。二人共魔美様の奴隷募集に応じて大勢の中から選ばれて採用されたもので、私の場合、今迄の勤めを止めて退職金と、全財産を処分して魔美様の足下に身を投げ出し、お慈悲を乞うたのであるが、人間の体程玩具として面白いものはないという魔美様の気まぐれから、私のタフな体がお目がねにあって採用となったもので、今一人の便器役を仰せつかった男は相当の会社の重役で、魔美様に使って戴く為に家族とも別離し、持株を処分して千数百万円を献じて、やっとお目通りを許されたという。

此の様にして漸く現在の境遇に落として戴けたのであるが、所詮、女王様の奴隷募集に応じる様な私共マゾヒストは魔美様にとって、喜んでお金を絞り取られる都合の良い財源に過ぎず、魔美様のぜい沢心を満たす手段としかお考えにならないので、一旦奴隷にされるともう私共は便利の良い道具、便器程度にしか見做されず、どんなに心掛けて御奉仕しても精々一年もするうちには倦きられて捨てられる運命にあるのである。こうしてみると如何にも魔美様が言語道断の非道いお方と思われるが実際に哀れなマゾヒスト達を絞り



上げ利用して栄耀栄華の限りをお尽しになつて居ても、現実にも一度でも魔美様にお目にかかるなら、マゾヒストの悲しさ、その様な考えは忽ち消し飛んで、一切をなげうつても、その前に這いつくばりたいという気になるのである。

全く魔美様にはマゾヒストに君臨すべき天稟の素質が備わつて居るといえる。一米七十の大柄な、すらりと発達した肢体、彫刻の様に整った強烈な激しい容貌、厳しい目差し、傲慢な冷酷そうな唇、理想的な女王様なのである。男の口の中に何の感情もなしに排泄出来る女性、全財産を傾け誠心誠意お仕えしても、倦されれば情容赦なく捨ててしまえる冷酷さの持主、これが魔美様である。

奴隷は常に全裸で居る事を命じられる。元々私は玩具用として採用されたものなので、魔美様は、恐らく人間を創造した神ですら、人間に対して斯様な行為が許されるとは思ひも及ばぬ様な非道い事を私の体でお試みになる。鞭やハイヒール、長靴を使つての責めは日常茶飯事である。そして私共二人の奴隷は魔美様のお体に手を触れる事も口をきく事も一切認められない。私の体はいろいろと玩具にされては居るが便器になつた男に至つては

全く便器そのものであつて、魔美様にお仕えして居るといふよりは、魔美様のお臀にお仕えして居るといった方が当たつて居る。

魔美様のお遊びは午后に始まる。魔美様があり余る金力に物をいわせて、遊蕩の限りをお尽しになるのだ。今日やって来たのは、リーグ随一の強打者で今シーズンは三冠王の呼び声高く全国のファンに騒がれているY球団の永沢選手。普段あの様に颯爽としている彼が、魔美様の前に出ると全く卑屈になつて、床の上に土下座しておみ足への接吻を乞うのだ。ソファにふんぞり返つた魔美様は持参させた野球帽に唾を吐きかけ踏みにじつて、大声を挙げてお笑いになる。

レコード代りにされた有名歌手が居た。箱の中に押し込められ外から針で突く仕掛けになつて居て、その針の合図で希望の曲を唱わねばならない。この歌手は寒い日に一晚中戸外で歌い続けさせられ、その間、魔美様はすやすやとおやすみになつて居たのだが、その男は、それでのどを壊してしまい、捨てられたが、も早二度と歌手として名前を聞く事もなくつた。

パンナム級で世界選手権を争つた事もある有名なボクサーは両手を縛られて、気絶する迄、魔美様のパンチを体中、所嫌わず浴びねばならなかつた。

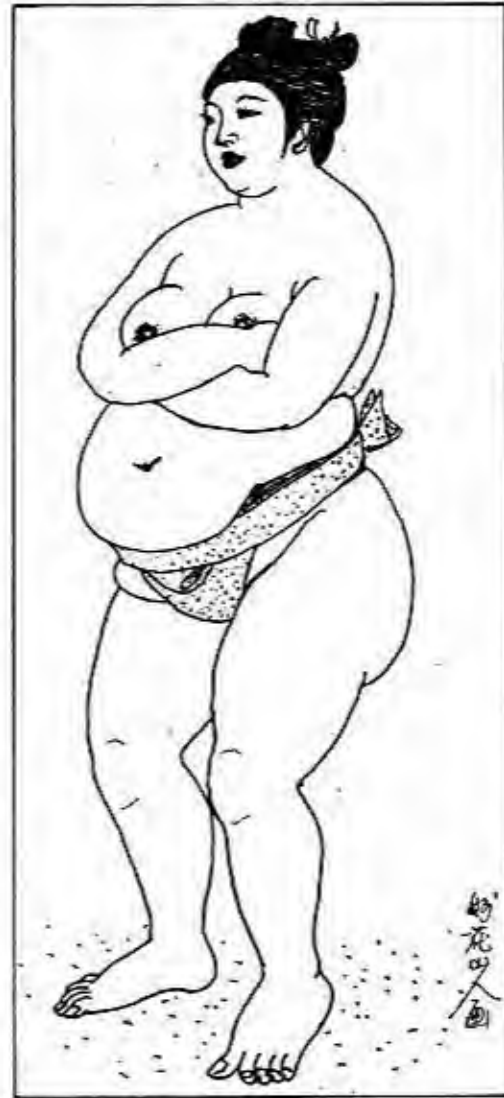
これ等の連中に対する最大の、そして唯一の報酬は、魔美様のおみ足に接吻を許される事なのである。

魔美様のお楽しみみの遊び相手は夜にやってくる、有名なファッションモデルとか、外国商社のタイピストをしている白人女性とか美人に御奉仕させるのだ。ベッドにねそべつて、彼女等の舌で全身マッサージをさせるのだ。私共、奴隷に対しては傲岸な彼女等も、魔美様に対しては唯々諾々である。

すばらしい体をしたファッションモデルがその普段はつんと取り澄ました顔を真赤に上気させて魔美様から流腸され、やっと許されて転がる様にして例の便器にまたがる様な場面もみられる。しかし、彼女等は私共奴隷に対しては、どの様にでも自由にする権利を認められて居るので、私を息も絶え絶えになる迄馬にして乗り廻したら、はりつけにして狂気の様に鞭を揮つたり、或いは全身青あざだらけになつて悶絶する程ハイヒールで踏みにじつたりして捌け口に利用してゆく。この様にして、身も心も一切を魔美様の御意志に委ねた奴隷としての毎日が続くのである。

—— 助太刀娘相撲 ——

梢の冒険  
(中)



カット・妙花山人

—— 奮斗士好太 ——

初めての経験に、上気した梢を、おときはあれこれと世話をやいてくれた。裸の勝負ではおときが先輩。土俵上の手さばきは、手をとるようにして、一々教えてもらわねばならない。

「おわかりになりましたか？」

おときは、自分でもその動作をやってみせたりしながら、少々ばかり、てれくさそうな顔をしている梢に笑いかけた。

「一度や二度では、無理でしょうけれど、相手のするようになさっていればいいんです」

「はい——」

梢は素直にうなずいた。

礼に始まって礼に終わるのは、武道ならば当然のこと。それに、もともと素人相撲でもあり、さしてむずかしいきまりもないのだった。

「じゃ、おまさちゃん、あんたからひとつお

嬢さまにけいこをつけてもらいなさいよ」

「うん」

声をかけられたおまさは、ちょっとはにかんだ笑いを浮かべてうなずいた。

「けいこをつけるなんてとんでもない。あたしの方が教えてもらわなくちゃ……」

梢が、あわてて訂正する。

「おまさちゃん、ぶん投げられて、目をまわしたりしちゃだめよ」

おてるが、ひやかす。

土俵中央へ進み出たおまさは、両足もとを固め、ぐっと腰を落として身構える。はち切れそうな内腿の張りが、娘らしい清潔さをたたえ、まぶしいように眺められた。

両足を踏み開いて膝を深く曲げ、腰を落として構える。ただそれだけのことが、なれない、ことに女の身にとっては、かなり苦しいものであるということがわかった。

なれない梢の構えは、充分に膝が開かず、腰高の中途半端な仕切りだった。

だっと、鋭くおまさが突っ込んで、それをまともに受けた梢がのけぞる。おまさの両手が梢の両脇をがちりと押し上げて、何のてだてもなく梢は、たじたじとさがる。

「なんの……」



と思っても、何も出来ないまま土俵ぎわ。

どんと一突き、とどめの一撃を受けて、仰むけざまに転がる。高々と空を蹴る両足のみじめな姿に、さすがに梢は顔が赤らんだ。

次の勝負も似たようなもの。そんなことが二、三番続いて、勝負をじっと見つめていたおときが声をかけた。

「お嬢さま、胸を出してはいけません」

「胸を……」

梢は、思わず、乳房のあたりに手をやりながら、おときを振り返った。

「胸を……かくすのですか？」

「そうじゃないんです」

おときは、梢の感じがいに、ちょっと表情をくずしながら

「お嬢さまのは、相手の出てくるのを待ち構えて、つかまえようとばかりなさるんです。

ですから相手は思い切りぶつかって、好きなように押せるんです」

ズバリと指摘されて、梢はドキッとした。

なるほど、柔術は相手をつかまえて技を決める。押したり突いたりして勝負をつけるというのではないのだった。仕切られた場所がないのだから、そんなことをしても何にもならないわけだった。

けれども相撲は、どんなに余力があったところで土俵の外へ出されれば負け。かがとが一分踏み出しても勝負は決まる。

立ち上がりの一瞬、梢が身につけた技が、自ら突進することなく一方的な相手の攻撃を許してしまうということになるのだった。

つかまえようにも、まわし一筋を身につけただけの裸身は手がかかりはない、型にはまったおまさの押しに、何らなすところなく土俵を割るのだった。

「ですから、お嬢さまの方からも踏み込んで行って、組み止めるようになさればいいんです」

梢は、うなずいた。

「そう納得できても、体がうまく動いてくれるかしら……」

そして、四度目――。

パッと飛び込んでくるおまさ。踏み込んで出ようとする梢だが、やはりまだおそい。けれども、踏み込んで出ようとする気持ち体が勢を低くさせ、以前のような棒立ちではなかった。押し込まれた土俵際で、ようやく右手の指先におまさのまわしがとどいて、左手でおまさの首を巻き右上手からの強烈な投げわざが初めて出る。その前に梢の足が土俵を割

っていたのだったが、この、ほとんどおまさの裏がえしにたたきつけられた投げわざの切れ味は見ていたおときやおてるの目を見張らせるに充分だった。投げ飛ばされたおまさも何か信じられないような顔つきだった。

「お嬢さま、お見事。なんてすごい投げ……」

おときは勝敗よりも、梢の技に驚嘆したのだった。梢の組み止めるのがもう少し早かったら、おまさはおそらく土俵の中央にたたきつけられていたろう。

おときは、この飛び入りの武家娘に軽い嫉妬を覚えた。しかし、自分ならば、そうむざむざと投げとばされたりはしないという自信は失わなかった。

おまさの次におてるが梢の相手に立った。ぼつてりと肉づきの良いおてるは、その体つきのように、相撲ぶりもおっとりとしていて、勝ち味のおそいきらいがあるのだった。けれども、腰の重い彼女に、じっくりと両まわしをひかれて構えられると、さしものおときも、あしらいかねるほどのしぶとさがあった。勝ち気のおまさの立ち上がり一気の突っぱりに出た時などは、意外なほどのあつけない負け方をみせることもあったが、組んではむしろおてるの方に分があった。

「おてるちゃんが立ち上がりからいっぺんに出て行くような相撲をとればええんだけど」

おまさとの勝負に、突き出され、押し出され、ほとんど力を出さないうちにあっけなく土俵を割るおてるの姿に、おときはひとごとながら歯がゆそうにつぶやくのだった。

「さあ、おてるちゃん、もたもたしてたんじやとても歯が立たんから、思いきりぶつからんだよ」

おとくに励まされたおてるは、さすがに、そのおっとりした表情を引き締め、頬を染めて土俵に入った。仕切りに入るおてるの丸い肩が一層盛り上がり、太腿が慄え胸のふくらみが揺れる。梢も充分に腰を割って構える。最初にくらべると、その仕切りの構えも大分板についたものになっている。

その構えをおとくがじっと見つめていた。立ち上がりのおてるの当たりは、おまさほどの激しさはなかった。けれども、丸い体と低い姿勢からの圧力はかなり強かった。一気に押されることがないかわり、守勢を盛り返すことも難しかった。またも梢の完敗。

二度目。今度は、梢の踏み込みもややきいて、土俵中央での押し合い。一度双差しになられたあと、強引に右をこじ入れた梢だっ

たが、その隙に、攻め込まれて、土俵ぎわ。

おてるの広い背中越しに、わずかにまわしの結び目が見えて、伸ばす右の上手がとどかない。おてるの、幅広い胸もとの厚い肉づきが包み込んでくるように感じられて、梢は重心を失った。

「さあ、もう一番」

起き上がる梢の背中の中の砂を払いながらおとくが励ます。

三番目。丸い体を一層丸めながら突進してくるおてるの肩口を、今度は梢は両腕に全身の力をこめて突き放しを試みた。梢としても最後の手段のつもりだった。

意外にこれが利いて、おてるがのけぞる。

さらに追いつくうち突き押し。掌に、おてるの肩口あたりの厚い肉の弾みを覚えながらの追撃。さすがのおてるの重い腰も浮き気味になったが、梢の腕を下からはね上げての防戦。

どっと体がぶつかり合って、どちらからともなく左四つ。今度は梢も、上手下手の両まわしをがっちり引く。分厚い雲斎の手ざわりを確かめてぐいと引きつけ、ごぼう抜き。

おときとおまさの目を見張らせる怪力だった。バタバタと足を振って抵抗するのをかまわず梢は、おてるを土俵外へ運んだ。

「お嬢さま……」

おときが云いかけて、あきれたように梢の顔を見た。

「あたし、こんな負け方したのは初めてだ」

おてるも呼吸を弾ませながら首を振った。

一日目の稽古はこんな具合で終わった。

最初はおまさの手玉にとられて自信を失いかけた梢だったが、立ち合いのコツをつかみかけるとともに、一方的な負け方もなくなっていた。そして、逆にその怪力ぶりは、おときたちに驚きの目を見張らせるに充分だった。

「とうとう、やっちゃった。あたし……」

夜具の中で梢はつぶやいた。素肌をぶつけて合って取り組んだ興奮がよみがえってくる。締め込みの痕が肌についたあたりに、そっと手をふれると、まだ火照りの残っているのが感じられるのだった。

快い疲労——、梢の寝息は健康だった。

二日目。今度はおときが対戦した。

さすがに、この村の娘力士の筆頭だけに、前日の二人とは一枚格がちがう感じだった。張り切った栗色の肌を引き締める白い雲斎がおとくのたくましさを一層高めていた。

梢も、もう自らの締め込み姿を意識するこ



ともなく、くったくのない本来の性格をとり戻して、この先輩に一步も退かずに立ち向かって行った。

体ぶりはまず互角。力は梢が優るとはいえそれはもとより相撲力ではなく、技についてはいうまでもなかったけれど、おときは、前の日の二人のようにむきになって立ち向かうことはせず、梢の取りやすいように仕向けてくれるのだった。

立ち合いのこつさえなんとかのみ込んでくれさえすれば……とおときは考えていた。

立ち合いにいったんに攻め込まれるようなことがなければ、あとは梢の怪力と、柔術の技がものを云う。だから……

そして、おときの願いどおり、梢の立ち合いは一回ごとにくまくなってゆくのだった。

最初は、ゆとりを持って梢の立ち合いを見ていたおときも、次第に真剣さを増していった。どつとぶつかり合う若い素肌。汗にぬれた肌が押し合っすべり、吸いつくように密着した胸が激しいふたりの闘志にふるえる。

息をのむ、おまさとおてる。

おときの鋭い押しに、なすところなく土俵を割る梢……。梢の猛烈な投げに横転するおとき……。汗まみれ、砂まみれの若々しい裸身が

激しく当たり合い、荒々しくぶつかり合う。しなやかな肢体が、もみ合い、からみ合う。

そして三日目。

相変わらずの夏の日が照る庭に梢はおときの迎えを待ちかねていた。

何の邪心もないおときの笑顔を見ると、梢は、さわやかな風が胸の中を満たしてくれるように感ずるのだった。邪魔な衣類を脱ぎ捨てて裸になってしまえば、武家娘であろうと村の娘であろうと、なんの変わりもない。作法やしきたりだけにとらわれている武家娘の不自然で窮屈な暮しにくらべて、この村娘たちの何と健康なこと。そして、まわし一筋を身につけただけの裸と裸の勝負。それらが梢を魅了した。ずっしりと腰に食い込む横みつが燃え上がる斗志を支えてくれる。梢の肉体が、そのまわしの肌ざわりを待ち望んでいるようだった。

決戦の日を明日にひかえて、娘たちの気持ちの高ぶりもまた頂点に達していた。最後のけいことあって、紫の締め込みを身につけた娘たちの肌は一段の艶を加えていた。きびしい表情が美しかった。

もう一人の娘力士である、おえいも姿を見せた。体をこわして、床についていたという

この娘は、どこか熱っぽさのとれない顔つきだったけれど、見るからに野性的な村の娘だった。細身ながらみしみしとした肉づきで、小型ながら、ツンととがった乳房までが何か挑戦的だった。相撲ぶりも、激しいというよりむしろ荒っぽい取り口だったけれど、勝つも負けるも思い切りのいい捨て身わざは一種の爽快さもあった。

「さあ、お嬢さま、明日はよろしくお願いします」

「ええ、頑張ります。でも、もうお嬢さまは止めてください」

「おや、なぜですか？」

「なぜって、あたしは、もうすっかりあなたたちのお仲間になったつもりなんですから、お嬢さまなんて呼ばれると、なんだか仲間はずれにされてるようですから……」

「それじゃ、梢……さま」

「そうですけど……、それでもなんだか……」

梢はちよっと首をひねったが、ある事を思いついたのだった。

「それじゃ、おみき……って呼んでください」

「おみき……さまですか？」

おときは、ちよっと妙な顔をした。

おみきというのは梢のあだ名なのだった。

あまりの大柄さと怪力とに、  
『ありゃあ梢なんてもんじゃない、幹だ、それも大木の幹だ』

と、藩の若侍たちが、やつかみ半分につけたあだ名が、何時とはなしに梢の耳に入っていたのだった。くったくのない梢は、それを聞いた時は、うまいことを云うものだ——と、自分が云われた事を忘れて笑ったのだった。ふと思いついた、そのことを梢は説明した。村の娘たちは、くったくのない梢の気持に感心し、そしておかしがつて笑った。明日に迫った勝負のことも、この瞬間は忘れた。村娘らしい素朴な、そして健康な表情が戻っていたのだった。

「さあ、明日はいよいよ他流試合——」

梢は思い直して表情を引き締めた。

いささかの自信はついたとは云え、つけ焼き刃的ないこにすぎない。

それに相手は玄人の女相撲——

この冬の暮しむきをかけて、その女たちと斗わねばならない、この娘たちの悪びれない姿を梢は心から立派だと思った。

「あたしも頑張らなくちゃ……」

梢は、両手でポンと横みつをたたき、ぐつと丹田に力を込めた。力強いまわしの感触が

梢の決心を一層高めてくれるのだった。

激しい息づかいと、若々しい汗のにおいが、またけいこ場にあふれた。おときも、おまさも、お互いに声をかけ合って、そして、梢も、いつとはなしに、娘たちの申し合いにきびしい気合いをとばしていた。

けいこを終えて、最後に、おときの声で、

五人の娘たちは、そろいぶみをした。

土俵を囲んで、丸く向かい合った娘たちのりりしい締め込み姿は見事だった。荒い呼吸がまだおさまらず、分厚いおときの胸も、むっくりしたおてるの肩先も、みずみずしい梢のふくらみも大きく上下していた。上気した娘たちの頬を流れる汗が、あふれ出る若い生氣のようだった。高々と上げる足に全身が緊張し、踏みおろす太腿がふるえ、そのたびに乳房がゆれた。

「よいしょッ！」

きびしいかけ声が五人の口から響く。その声は、明日の決戦の場へ向かって、一直線に突き進んで行く娘たちの斗志でもあった。

軽く打水された砂の上の箒目の模様が、すがすがしかった。真新しい俵に囲まれた、十二尺の斗いの場は、静かに微風をよぎらせて

いた。桶の水に、夏の陽が反射した。生々しい土の肌と、まだ香りを残しているような藁の色が目にしみた。

岡野村のはずれにある小高い岡の上の社の境内だった。

杉の巨木に囲まれたこの広場は、まだ静寂が支配していた。

けれども、張りめぐらされた幔幕をくぐって、その中に足を踏み入れた者は、鋭いまでに張りつめた雰囲気、皆一様にたじろぎの色をみせるのだった。

水争いの娘相撲——それが一応この社の奉納相撲という形をとるのは、後々にうらみを残さないためであり、立ち合い人も、両方の村の主立った者たちだけに限られていた。

土俵をはさんで対峙する二十の眸が、互いの燃えあがる斗志をたたえて、ぶつかり合っていた。

一筋の締め込みに身を飾った娘たちが、その若々しい素肌を惜しげもなくさらして、土俵での控えに腰をおろしていた。

おまさ、おてる、おせつ、おとき、そして梢の姿があった。

取り組み前の一とき。のしかかってくるような重苦しいふん囲気の重圧と斗うことは、



この娘たちにとって、取り組み相手にも劣らぬ恐ろしい敵だった。村人たちからの大きな願いを担うには、この娘たちの両肩は、まだまだ、か弱いものだった。

さすがの梢も、両腋に冷たい汗の流れるのを覚え、知らず知らず、両手の拳も堅くなっていくのだった。

腰を飾る締め込みにも、けいこの時と違って、なにか重苦しさを感じられた。

土俵をへだてた向こう側は、さすがに玄人の女相撲、ゆとりのある態度ではあった。

いかにもこの道で身を立っている玄人らしく日焼けした肌の色もたくましく、どっしりとした腰にキリリと締め込んだ黒の締め込みもぴったりと板についていた。

何れも、梢たちに比べれば、ひとまわりもふたまわりもちがう体格、どの手で負かしてやろうかと云わぬばかりの自信満々の視線、口辺に笑みを浮かべる者もあるのだ。

胸の上に組んだ太い腕を押し上げるようなふくらみの厚さが、見る者を圧倒した。

素人の村娘が相手とあって、女力士たちは最初乗り気ではなかったのだった。勝つのが当たり前じゃないかという不満と、他所者の玄人が手を貸すということの多少の後ろめた

さからだった。しかし大枚の謝礼と強引な頼みに断わりきれず引き受けさせられる破目になったのだった。

若手の綾桜と若駒、老練の花錦とここまでで片をつけ、あとは関脇の梅香森と大関の緋緋とを控えに飾るとというのが今日の顔ぶれなのだった。

綾桜は、一座へ入ってまだ一年少々の新弟子。まだ肉の薄い素人っぽい体つきは、おときたちの間へ入ってもさして目立たぬほど。十六歳の幼な顔には大たぶさは似つかわしくなかった。

若駒は十七歳。五尺六寸、十九貫の美事な肉体は、鍛え上げられたものだけに肌の艶と云い、浅黒い日焼けのあとと云い、ようやく女相撲の魅力を備えつつあるところだった。

花錦は三十に手が届こうという姥桜。一座に入ってすでに十年を越えている。五尺五寸二十貫の丸い体ながら、前さばきの巧みさと年期の入った勘のよさととってはいるものの、若い四人の中へ入ると、肌の色艶の衰えはかくせなかった。引退してもいいのだけれど、相撲が好きでやめられないという、この一座の名物的存在だった。

関脇梅香森は二十三歳。五尺八寸、三十貫

の巨軀は、もちろんこの一座随一。胸のふくらみさえ見なければ、江戸相撲と云っても、立派に通用するほど。実際に、江戸相撲の幕下どころとは五分に取ったという実績もあった。

大関を張る緋緋は二十一歳。五尺七寸、二十三貫。均斉のとれた体格と相撲のうまさ。それに加えて、色街にも多くはないだろうと思われするような美貌の持ち主だった。女相撲にしては、やや色白な肌に黒い締め込みが映えて、興行先の男たちの血を沸かしている。この一座の看板力士だった。

取り組み前の重苦しい沈黙が続いていた。村役たちの話し合いが、もめているのだろうか。

昂ぶる気持ちを鎮めようと、目を閉じたおときだったけれど、かえって胸の動悸が互いに響いて、息苦しくさえなるのだった。

ほっと息をついたおときは、腰の締め込みのあたりに、無意味に手をやった。

「焦っちゃいけない」

そう思いながら、目をやる、土俵の向こう側の威圧するような巨体が、胸に暗い影をつくった。

「あのひとたちは、いくらくらいで備わって

きたのかしら」

梢は、そつと隣のおとくに話しかけた。

沈黙が続けていては、ますます、この娘たちの気持ちが堅くなる。これでは斗う前にくじけてしまう——そう思ったからだだった。

「さあ、……」

おときは相変わらず堅い表情を崩さない。

「うまうまかなかったかしら……」

梢は首を傾けたが、ふと向こう側を見て、

思いがけない発見をした。

「ホラ、あの真ん中のひとの鬘にとんぼが止まってる」

「え、どこに？」

おときもつられて目をこらす。

「ホラホラ、ア、また止まった。きつとお仲間だと思ってるのだワ」

梢の言葉に、やつとおとときの顔もほぐれ、

口もとがほころんだ。

おまさも、視線を向け、このおとときの表情に、つりこまれるように白い歯を見せた。

おときも、この梢の気持ちを察するほどのゆとりはあった。けれども、何か笑いがこわばるような心配ですぐには乗っていけなかったのだった。しかし、一度その堅い表情がほぐれるとグッと気分も楽になった。土俵越し

の相手の表情もよくわかるようになった。いかにも強敵そうだった。それだけに彼女の勝ち気が一層、燃えた。

「負けるもんか。あんな日傭いなんか」

口を結んで、一直線に相手を見すえるおときは、斗志と自信を持ったいつもの自分をすっかりとり戻していた。そして、このおときの変化を梢はひしひしと肌を感じ、久しぶりに斗いの前の充実感にひたっていた。

女相撲一座の女たちもまた、考えは異なるものの、やはり激しい斗志を燃やしていた。

それは、当面の相手である梢たちに対してであると同時に、お互い同士の間地でもあるのだった。

特に大関緋緘と関脇梅香森の対抗心は激しかった。

一座随一の巨軀を誇る梅香森はこの一座へ入って八年。他の娘たちのように、身売り同様というのではなく、生まれつきの大女、村の腕白たちとの喧嘩にも敗けた事のないという気の強さと大力、村にやってきた女相撲一座の木戸をのぞいたのが、この道への緒口だった。木戸番おやじの目に止まった彼女は、早速、親方夫婦にくどき落とされ、その場から土俵へ上がることになったのだった。

生まれて初めて身につける分厚いまわしに戸惑い、裸身をさらす恥かしさに大柄な身を縮めながら彼女は無我夢中で二番を勝った。

勿論玄人が、いくら大力とは云え十四や十五の小娘に敗ける筈はなく、これは、いわば祝儀がわりの花相撲だったのだが、これがこの娘の裸稼業への最初の晴れ姿なのだった。

女ながらも、廻しひとつに身を飾った裸同士、力だけがものを云うこの社会は、彼女の巨体と大力にとって理想的だった。五年目に梅香森は関脇を張った。事実上の大関——彼女も他の者も考えていた。しかし、意外なところからライバルが現われてきたのだった。それが緋緘だった。

彼女は一座の親方の遠縁に当る娘だった。疫病で両親を失った彼女は、唯一人の身寄りであるこの親方を頼って奥州から出てきたのだった。彼女の美貌はこの時から目につくほどだった。加えて大柄でもあった。常に新しい花形を求めている女相撲一座が、彼女を遊ばせておく筈がなかった。

緋緘という、この一座の秘蔵の四股名を与えられ、いわば最初から花形の座を約束された形で仲間入りをしたのだった。

取組とけいに明け暮れる、女たちだけの



## 読者ギャラリー『上覧取組』雄松比良彦



単調な毎日、その退屈さをまぎらしてくれるものは、新弟子に対する単なるいたずらに始まって、苛酷なけいこのむち、陰険ないやがらせだった。

親方の遠縁ということでは緋緘は他の娘ほどの目にはあわなかった。

しかし、親方の目の届かない時や、公然のいじめとも云えるけいこの時などは、やはり手ひどい洗礼を浴びた。

その先頭に立ったのは梅香森だった。

自分のようやく獲得した花形の座をうばう者として、彼女が緋緘に抱いた対抗心は、殆ど敵意に近かった。

すでに小結だった梅香森は、それまで殆ど約束されていた大関の座を自分からうばう者として、本能的な危険を感じたのだった。

激しいけいこが終わっても、緋緘ひとりだけでは休息を許されず、姉力士たちの食事の間を四股ふみを命ぜられて、汗を流した。腰がしびれ、目がくらんでよろめく彼女に

ようしやない怒声が浴びせられた。

大きな町での興行の時などは、わざと一日中、まわし姿の裸身のまま、食事の仕度に洗濯に、あるいは使い走りにと追い立てて、町の人たちの目にその肌をさらさせた。これは他の新弟子の娘たちも同様だった。

土俵に上った取組ならば、裸稼業の女相撲、結び上げた太たぶさに映える黒襦子の締め込み姿も何のためらいもないけれど、けいこで乱れゆるんで、わずかに腰に巻きつけたほどのまわしを締め直すゆとりもなく、髪も乱れ、汗と砂にまみれた、そんなみじめな裸身を町人の目にさらすことは、若い娘にとって、何より辛いことにはちがいがなかった。

「あらあら、女の相撲とりがいるわ」

「なあんだ、ふんどしかつぎじゃないのサ」

「あの人たち、一日中あんな恰好してるのかしら？」

「あつたりまえじゃないの、裸が商売の女相撲だもの、ふんどしがたったひとつの商売道具ってわけヨ」

「なるほど、そう云やあそうだけど、でも、商売道具にしちゃ、馬鹿にきたならしい、ふんどしじゃないの、もっときれいなのを締めたりや、よさそうなんだわねエ」

「きれいなふんどしだって？」

「そうヨ、まさか金紗なんてわけにやいかな  
いだろうけどサ、女相撲だったら、女らしく  
せて緋ぢりめんかなんかのさア」

「ウフッ、もったいない、もったいない」

「でもさア、あんな厚いのを締めてたら、お  
しりの皮なんかすり切れちゃうじゃないの」  
「心配御無用。あの連中は体中厚くできて  
るヨ。その中で一番厚いのが顔ッてわけヨ」

町の女たちの聞こえよがしの悪どいからか  
이었다。

乱れた髪をひつつめに結び、体のそここ  
には投げ転がされた砂がこびりついた哀れな  
姿。汗がにじみ、砂によれたけいこまわし  
はお義理にも立派とは云い難い。

「でも女同士の相撲なんてどんなかしら……」

「ふん、どうせ、ふんどし締めた裸おどり  
てところよ」

頭から馬鹿にしきった言葉は花街の女。客  
商売同士の反感からなのだったろうか。

また男たちは

「ほほう、女相撲にしちゃ、もったいない上  
玉じゃねえか」

「なるほど、いい体しとるのう。どうでえ、  
あの腰つき」

「そり腰、二枚腰ってやつよ。どうだ、おめ  
え、ひとつ取り組んでみたら……」

「がっぷりとか」

遠慮会釈もない野卑な目を注がれて、思わ  
ず身を固くして、ゆるんだ前袋をたぐり上げ  
るのへ、

「よう、ねえちゃん、そんな色気のねえ厚ぼ  
ったいふんどしなんぞ、はずしちまったらど  
うだい」

と耳を覆いたくなるような追いうち。  
恥ずかしさよりも、くやしきで鳥肌立つ思  
이었다。

ここより外に寄りどころのない身をうらん  
だが、それ以上に、こんなことを強要する姉  
力士たちへの反発心、そしてその先鋒である  
梅香森への意識が強く燃えた。

「あのひとにだけは、決して……」

突き飛ばされ、転がされ、たたきつけられ  
る荒げいこにも耐えた。

「しぶとい子だねえ」

さすがの梅香森も舌を巻いた。

一年、二年。そして三年目にはその梅香森  
とも控えに肩を並べるまでになった。

天性の美貌は娘ざかりをむかえて一層の魅  
力を加えた。

大柄な花やいだ顔立ち、均齊のとれた肢体  
に加えて思い切りいい取り口は土俵上の人気  
を完全に独占した。

涙と汗で耐えてきた姉力士たちのしごきが  
ここへきて彼女の花を開かせる結果になった  
のだから皮肉といえば皮肉だった。

激しい気性ながら、それを抑えるすべを心  
得た人柄のよさと、親方の身寄りということ  
で一座の人望も集まった。

彼女が大関に張り出されることが決まった  
のは、ついこの年の春のこと。この一座に入  
ってわずかに五年目のこと、もう、先輩の姉  
力士たちからはなんの異議も出なかった。

けれども、唯一人、梅香森だけは、何とし  
ても不満だった。

目の前にあった大関の座を奪われた口惜し  
さ。いくら色気が売りものの女相撲でも、  
実力は実力、あいつだって、あたしに勝てな  
いことを知ってるんだ。少しばかり顔がきれ  
いだからって大関の看板貰って……。ふん、な  
にさ、このごろはすっかり落ちつき払ったよ  
うな顔をして……

梅香森は実力第一の自分をこの時にでも、  
はっきりと見せつけておきたかった。是が非  
でも自分のところで結着をつけねば……と決心



していた。隣に腰をおろしている緋緘の整った横顔を目尻で捉えながら、いらいらと勝負の開始を待ちあぐねていた。

緋緘にしても、今日の取り組みは是非とも自分のところまできてもらいたいと思っていて。正直云って、興行の時の勝負は半ば筋書きによるものではあったけれど、梅香森が聞こえよがしに看板呼びわりしているのは、やはり良い気持ちはしなかった。まともに梅香森に立ち向かって、勝てるとは云わぬまでも歯が立たないなどと云われるほどの力の相違はある筈がないかと思っていた。女相撲であるからには、力のほかに美貌も必要であることは梅香森の云うとおりだけれど、実力もない大関があるだろうか。親方があたしに大関を張らせたのは、それだけの力があると認めたからじゃないか。相手は素人娘とはいえ、けいこも積んでなかなかの力だという話。もし梅香森が敗けるようなことがあれば、いい機会なのだけれど……。

緋緘は、盛り上がった胸の上に丸太のような腕を組んで、これみよがしに巨体を誇示している梅香森の隣で、わざと腕を組まね、形のいい胸を張っていた。

やがて、定め時刻がきた。

村役、顔役たちが、幔幕をくぐって定め席に着いた。何れも固い表情だった。さすがに自信満々の体に見えた女相撲一座の面々にも、さっと緊張の色が流れる。

装束に威儀を正した行司役が土俵に上る。

「これより奉納相撲をとり行ないまする」

甲高い、よく透る声だった。

「勝ち抜き、一番勝負。互いに遺恨のありませんように」

梢は、ぐっと丹田に力をこめた。

おとき、おまさの眸に斗志が燃えた。

先鋒をつとめるおえいの頬は、すでに紅を刷いたように染まっていた。

この野性的な娘は、行司の呼び上げるより早く腰を上げ、唇を噛んで相手に鋭い視線を注いでいた。

まず、上る相手は綾桜。結い上げた投げ島田に似た大たぶさと、腰の黒襦子の締め込みとは、ひとかどの女力士だけれど、まだ肉の薄い体つき、胸のふくらみの幼さは、おえいにも及ばぬようだった。

しかし、この初々しい二人の対戦は、この激しくもまたあでやかな、娘相撲の緒戦をかざるにふさわしいものでもあった。

玄人と名のつく綾桜の土俵さばきは、年若

ながら、さすがに身についたもの。

土俵中央、蹲居の姿勢で向かい合う、おえいのきびしい視線にも少しもたじろがず、悪びれぬ態度は立派だった。

「見合って！」

行司の声が響き、満場が息を呑む。

綾桜は両わきを固め、頭を下げて、基本通りの体勢で突っ込んだ。おえいは一歩踏み込むとみせて、いきなり左へ変わる。やや盲進した感の綾桜は目標を失ってトントンと土俵ぎわまでのめったが、よく立ち直って向き直る。そこで初めて二人の体が激しくぶつかり合った。肌の色も体つきもよく似た二人が激しく動き廻ると、土俵下から見上げている梢の目にも見わけがつかないほどだった。

突き合い、いなし合い、そしてまたぶつかり合う。野性的なおえいの眸がキラキラと鋭く光った。綾桜の幼な顔も、満面に朱を注いで一歩もひかず立ち向かう。若さと力の限りをぶつけ合う女体の美しさ、きびしさ、そして激しさと哀しさが、見る人の視線を釘づけにした。

二、三回ぶつかり合ったあと、おえいは突然、綾桜の顔に張り手の強襲を浴びせた。パン、パンともろにこの攻撃を受けた綾桜が、

虚を衝かれた形で棒立ちになるところを、すかさずつけ込んだおえいの突き押し。激しい取り口にしては、あっけない勝負だった。

唇を噛んで土俵を下りる綾桜。その赤く染まった頬が痛々しい感じでもあった。

二番手は若駒。

肩のあたり、腰のあたりに充分に肉が付いて、隙のない締め込み姿。さすがに綾桜とは一枚格が上の感じ。先陣綾桜の敗退にも、さして表情も変わらないのが、かえって無気味だった。

おてるが差し出す手ぬぐいで、軽く汗をふいたおえいは、激しい取り組みのあとの疲れもみせず、この強敵に立ち向かう。

梢は、この若駒の冷静さに、作戦のあるのを感じて、何のけれどもなく斗おうとするおえいに、ふと不安を感じた。

果たせるかな、立ち合い、いきなり若駒の張り手がおえいの右頬に炸裂した。これは、鮮かな仕返しだった。一瞬、立ちすくんだおえいの隙に、ずぶりと双差し、しかもその差し手を返して、おえいに上手を与えない。玄人らしい抜け目のない手さばきだった。なすすべもないおえいに対して、充分に両まわしを引きつけ、一步踏み込んだ若駒は、右でひ

ねりながら、左からの強烈な投げ。おえいはほとんど裏がえしになって、土俵にたたきつけられていた。

背中一面に、べっとりと砂を貼りつけて土俵を下りる、おえい。しかし、これだけうまくさばかれて、殆ど好きなようにあしらわれては、いいわけのしようもないけれど、張られた頬をおさえながら土俵を下りるおえいはくやしさに唇をふるわせていた。

代わっておてるが立ち上がる。しかし、彼女もまた勝負にならなかった。おてるにしては精いっぱいのおちかましかったが、あまりにも正直すぎる立ち合い。双手で受けた若駒は、次の瞬間、さっと体を開いての、鮮かな引きおとし。おてるの丸い体が土俵中央にみじめに転がった。

「勝負あった！」

甲高い行司の声が無情にひびく。

若駒の口辺に快心の笑みが浮かんだ。

三番手のおまさは、しかし、少しもひるまなかった。

玄人らしい機敏な取り口、抜け目のない相撲でおえい、おてるを軽く一蹴したとはいえどちらも不用意な立ち合いを衝かれたもの。それさえ気をつければ……と、かえって斗志を

燃え立たせ、頬を染めて立ち上がった。

ポンと清く拍手をうってチリを切る、その肩の背のあたりに気迫があふれていた。足を踏み開き、ぐっと腰を落として仕切りに入るおまさの太腿に力がこもって、キリリと締めよげた縦みつの紫が、この緊張を鮮かに彩っていた。

若駒もまた、脇を固め、腰を低く構えて慎重な仕切り。にらみ合うふたりの間に、一瞬火花がとび交うように見えて、次の瞬間、ふたつの若い裸身が、激しく音をたててぶつかり合っていた。

ピシッ！ という、にぶいけれど、新鮮なくだものが裂けはじけるような生々しい響きだった。

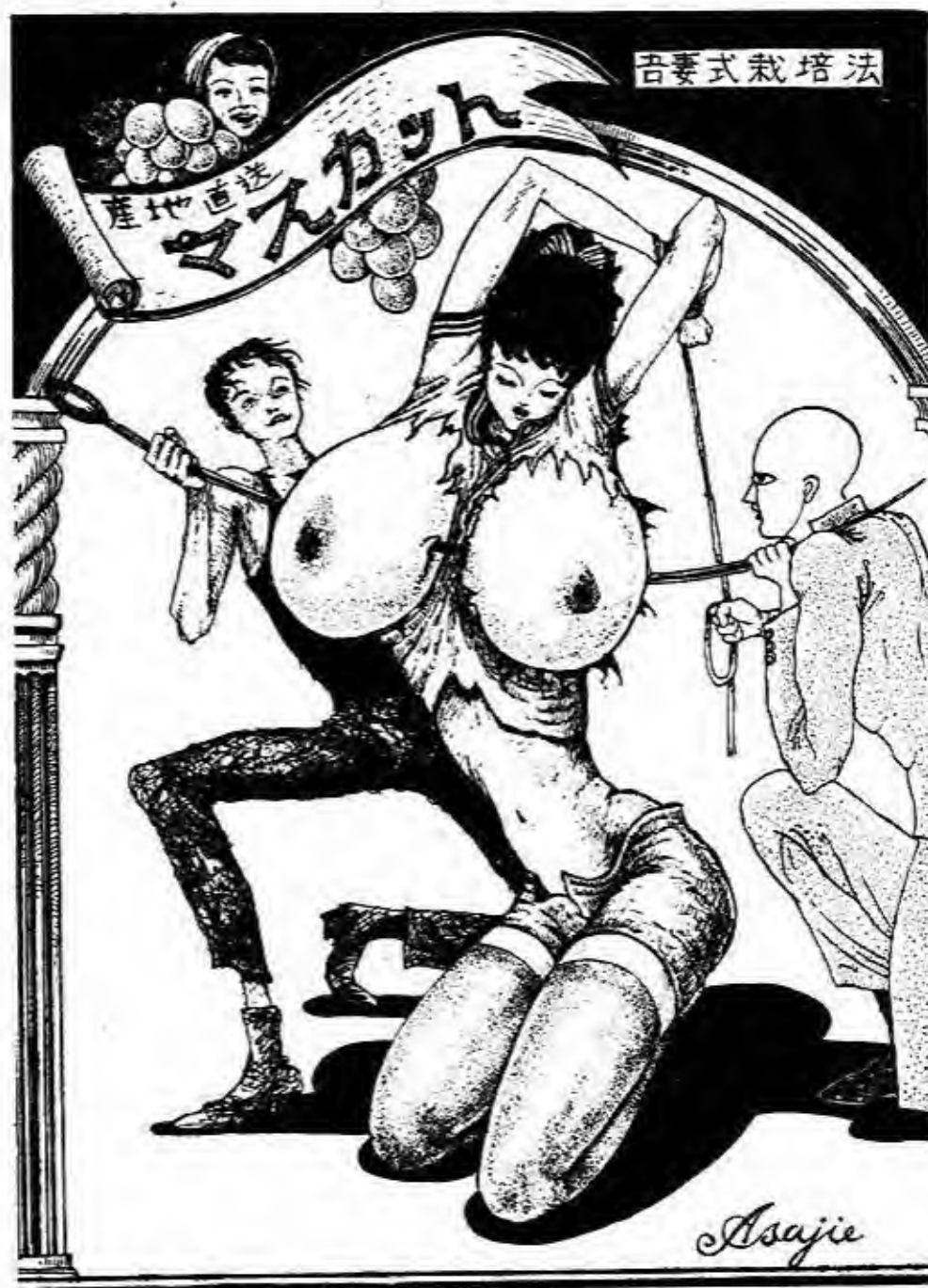
若駒は低く立ってすばやく前まわしを狙った。おまさはこれを嫌って突き放し、さらに追いうちをかけるところを若駒、今度は体を開いての引き落とし、充分承知のおまさは足を送って残し逆に若駒のまわしをとる。若駒もこれに応じて、左で下手まわしをひいたが互いに右の上手はとれない。けれども、さすがに若駒の動きは機敏だった。右でおまさの左手首をおさえその差し手を殺しながら引きずりまわすような左下手出しなげの連発。



——僕のイメージ画集—— 『マスカット』 室井亜砂路

この道のベテラン吾妻容子氏の絵に啓発されて、以前に描いたものです。氏の「肥満女体責め」や、春川ナミオ氏のM画、桐原紫門氏の切腹画等は、終始自己のテーマを追求された、マニアでなければ絶対に描けない不思議なリアリティーがあります。

この方達の御作は、今を盛りの流行イラストレーター作品群が、十年後にその魅力を失った時にも、その衝撃力を持続出来る数少ない作品の中に入るのではないかと失礼ながら考えつつ、僕なりのイメージを働かせたものが、この習作となったのです。



おまさもよく足を送って残っていたけれど、若駒の動きに合わせられたような形で、腰が伸び、足の運びも、もつれかげん。若駒つけこんで寄り立て、土俵ぎわ、おまさが俵に足をかけてこらえるのを、再び左下手からの、出しなげ。玄人らしい鮮かさだった。

したたかに胸を打ったおときは、痛さと無念さに顔をゆがめて起き上がる。乱れた前廻しの間からハラリと折り込んだ端が垂れ下がるのが、おときの気持を象徴しているようだった。

控えのおときは、すでに蒼白だった。緊張の極限——。

全身の毛穴が引き締まって、乳房も固くしこり、鳥肌立つ思いだった。

さすがに玄人の女相撲。強さはさほどとは思われないけれど、なんとも隙のない若駒の相撲ぶり。

早くて、そして切れ目のない技。

女相撲一座側の控えでは、花錦が、この妹力士の奮戦に目を細め、その隣では梅香森がちょっと気抜けしたような表情で、じっと見詰めているのだった。



——四十五年度刊回顧——

『S M ……』  
カメラ・ハント』  
に思う

大西弘明

カット写真・ミキとマキ

平和安穩の世の中の獸性の吐け口なのか、合理化され機械化された公害故か、一般週刊誌さえもが我先にとサド・マゾを取り上げてのSMブーム、喧々囂々の世間であって、また奇巧の読者の希望も種々様々。同一趣味同一嗜好は無理な話と言訳けされても、やはり読者、まして熱心な辻村隆ファンの中には、耳を貸さずにはいられぬ辻村氏のデリケートさを気の毒とは存じつつ、あえて自我慾の回顧録を啓上する次第である。

一月号。ミキとマキの華麗なる戯れ。

四十五年度最高の出来栄えとみる。一年を通じ弱年、人妻のモデルの多かった中であっ

て若い娘らしい恥じらいを全編にわたって甘美に漂わせた。私も人妻の成熟した迫力を好むマニヤの一人だが、娘の羞恥もモデル次第であって、真実味さえあればやはり若い肉体が何にも勝ることを肯定せざるをえない。

洋式のバス・ルームでマキの見守る正面で洋式便器を使用するミキ。人妻にはない若さが生んだ女同志の赤裸々なシーンの中の異常なプレイを知って、光る辻村氏のストロボの閃光に捉えられたミキの羞恥の姿の秀逸さは何と云っても本年度冒頭の作品として最適であったと思う。後手縛りに生まれたままの姿を拘束。背中合わせにした若く水々しい女体

を首縄で連結して正座さすの図。パイプの攻撃に体を震わし、マキは呻きミキは喘いだその甘美さは、辻村氏独得の甘さを誇っていたと感じた。

二月号。あっと驚く人妻の豹変。

川路叢子夫人の被虐図のあまりの素晴らしさに次号よりの読者通信は叢子の名で埋められてしまい、再度、叢子の登場をよぎなくされたと共に、四十五年人妻・カメラ・ハントのエポックを築き、更に年の終り近くには奇クサロンの頁を人妻悦虐写真で埋めるほどの反響を生んだ。脱衣にいたるまでの叢子の羞恥の風情と裏はらに、一たんプレイに踏み込



んでからの豹変ぶりの凄まじさ。ありとあらゆる被虐感を求めて止まない彼女が自ら求めた羞恥の姿態は、股間縄のままの和式トイレの浅ましい姿であった。辻村氏のレンズが輝いたことは云うまでもなかった。

### 三月号。悦虐に憑かれて。

佐倉絹子とその夫の夫婦プレイ。非常に残酷な責めが多く、本当の意味のサディスト向きというところらしく若輩の私には理解しがたいものであったが、この方面のマニヤなら妖気さえも漂う雰囲気、我を忘れたに違いない。

### 四月号。童女浣腸譜。続金原奈加子。

四十四年にマニアの夫を持つ身ゆえに強要され、合意の上とは云え、羞恥と屈辱の姿を誌上に晒さしめられた若妻の再登場である昨年度には童女のように可愛い容貌と大きな妊婦腹で話題を一手に集め、もし年間賞などがあるならば、彼女が最高賞を獲得したに違いない女性であった。今回は生活のためと称して現われただけあって、普通のモデルならば絶対に拒むA責めを、羞恥と屈辱に体を硬直させながらも耐え抜いたのである。後日のサロン楽我記で辻村氏は、せっかく浣腸譜と銘打ったのに肝心のフォトが総べてカットされ

ていたとなげいておられたが、それでも自分でシンダを使う奈加子の表情は素晴らしかった。そして、また、後手緊縛のままの全裸身で和式水洗トイレに跨がった姿は胸のすく思いであった。椅子に開股縛りのフォトも心を奪うに充分の美しさであったが、奈加子のSM被虐美は彼女の表情にあると思われた。

奈加子ほどに自分の羞かしい姿に向けられたレンズを、じっと黒目がちの美しい目で正視できる女は少ないだろう。しかも、じっとみつめる目にうれいがあるのである。私は奈加子が好きだ。A責めを、悶えながら耐える奈加子を想うと、たまらない気がする。次号のサロンで「エネマシンジやポンプをアーヌスに挿入している個所は、例によって白い斜線で逃げたのであるが、それでもやはり都合が悪いとみえて掲載されなかった」と辻村氏がガッカリされていたが、色々な意味で私は齒ざしりした。奈加子の再々登場を祈り、SMの耽美の極致を求めたいと念ずるのみ。

### 五月号。深夜の舞踏会。続秋山夫妻の巻。

益々円熟の域に迫った秋山夫人の登場で、磨き抜かれ洗練された美しい脚線が、私を魅了し尽した。応接椅子に仰臥位をとって両手両脚を頭上に縛りあげられ、くると極端な

屈曲位で反転させられた夫人のポーズはA感覚マニヤ垂涎の姿であった。私ならずとも少しでも美しい女を好む者ならばそのままに放置できないに違いない。正常人でも、そっと触れたに違いない。ましてマニヤなら数個のロール・クリムを空にせざるをえない。辻村氏の前で、かなりの時間がA感覚責めに費やされたであったが、陰微な歓喜に悶えるが如き夫人のフォトの数々は、群をぬくものがあつたと思う。快虐に酔い痴れた秋山夫人の妖姿を鑑賞しながら、私はふと、大阪のある劇場でみた彼女の艶姿を想い出した。舞台上に真の恍惚を見出したための瞬時の誤りかそれとも宴を求めて妄想にうつつをぬかす私の心眼ゆえか、ステージに身を乗り出す私の目にとびこんできた彼女の大胆極まる瞬間のあの美しい姿を想い起こしつつ、私は彼女の娘のように美しいフォトの曲線を賞味したのである。

緊縛の可能性と羞恥を求める小気味よいシヨ―夫妻の再度の登場を、前述の奈加子同様に乞い願って、フォトの限界にいんど欲しと思う。小説現代四十五年十月新秋号の石橋リエのたったポーズを真似て、よりエスカレートして戴きたいとも思うのはファンの慾

というものだろうか。ちなみに、リエのポーズたるや全裸で横位開股、右手を後部より廻して後を押え左手を腹部より伸ばして前を押さえ、それを両脚の間から撮ったものであり成程美を追求して止まぬ芸術作品たることは誰も否定しないであろう。SMフォトにも芸術ありと信じ縛りの美学を信じるのである。乞、ヌード縛りの限界の美を。

#### 六月号。孤独を遁れて。伊藤圭子の巻。

二月号の読者通信で、自分から求めた女性ゆえの被虐の悦びの大きさ。また、多忙にまぎれて友人を紹介しての失敗の償いゆえか、二人のSMプレーは燃え上り、焰が夜のしじまを破ったようである。

白いパンティーマニヤの私には、後手縛りの純白パンティ姿の圭子が女神の如くに映ったし、輝マニヤの諸兄には、しめあげた晒布のフンドシ姿はこたえられなかったであろう。いわんや、白い晒布に腰をしめあげ、小山のような双臀を突き出して、虐げのための股覗きのフォトにいたっては失神ものであったのである。

SMマニヤは、伊藤圭子ならずとも孤独なのである。そして斯く云う私も孤独に耐えている。願わくば一時の孤独よりの逃避の宴に

共にSMの耽美を求めあいたいと思うのである。

#### 七月号。ひたむきの夜。続・佐々木真弓。

二年前の六月号で未だ青い実の女体を縛らせた真弓嬢が、誰が磨き飼育調教したかは定かではないとは云え、大阪ミナミの美しい蝶と化した艶然たる成熟したあで姿を再登場させたのである。二年以上前の彼女の裸身と、成熟した彼女の裸身を比較して、ため息と共に女の不思議を嘆じ得るのは、SMカメラ・ハントのハントたる面目やくじょたるところであろう。大阪キタ・ミナミのホステス諸嬢の気位の高いこと銀座に劣らず。私のような貧乏人、せっかく苦勞して親密になっても、

「電気を消して！」の一言で夢もチボウもパアがオチである。源字名カオリ、SM名真弓の彼女は今、何処にオワスことやら。もしもオモモジ叶うならば、借金棚に供えても、彼女の云う「おシッコの便器がわり。全身のマッサージ」どころか、「ウンコの便器がわりに、家畜人ヤプーの舌人形」そして「何日でも彼女の快感のために奉仕したてまつる」のに……。大分断線したが本当にお美しくご成人あらせられたものである。辻村氏にハルンの洗礼を与えた美女に会いたいもの。

#### 八月号。むら子恋狂い。続・川路叢子。

仕事一辺倒の主人を持ち、忍耐強く弧閨を守っていたむら子が、SMプレイの甘美さに熟れ切った肉体を自覚し遠くかすかに呼び続けられていた自然の声を耳にしたのである。

二月号に初めて晒した艶姿を再び塚本鉄三氏の冴えたカメラさばきの前に投げ出したむら子は、嗜虐の快感を忘れることが出来ずに再度、めくるめく羞恥を求めて辻村氏の前に姿を現わしたのである。快感をナルシスの中に見出し、それを官能の悦びに変化させることの特権は女性特有のものである。大胆な悦虐を求めて裸身を悶えさせるむら子のフォトを眺めるうちに、私はふと、二十年近く前の事件を想い出した。

現在は通路に変わってしまったているあたりだが昔、大丸百貨店の北側（神戸）の路地の小さなバーのマダムと懇意にしていたが、ルースと云う黒人兵とマダムの紹介で親しくなり、英語と日本語を相互に混ぜ合せてのSM調の女性話をかわすほどになっていた。そのルースという男は、外国人には珍しく羞恥を理解する男で、外人万能の頃だったので彼を通じて普通の日本人なら味わえないS性の経験を見せて貰った。例えば、若妻風の美人が



正面向いて羞恥も絶え絶えの姿で、当時のロングスカートを捲りあげて排泄中のフォトを見せて呉れ、芦屋の山中で出会った女性の写真を撮りたくなり、友人と二人で相談の結果ヌードは時間的に危険なのでスカートを捲らせて記念撮影しようと、取り囲んで強要したところ、こういうことになってしまったと云い、あとで考え直してみると日本語にとぼしい二人が、オで始まる女性俗語を口にしようとして、そのあとにシッコとつけてしまったのでこうなると笑っていた。あまりのことにあ然とした二人が、その羞恥に溢れた女性の表情の瞬間にエスカレートして、よりひどい所業をフォトしたともう一枚の凄まじいフォトを私に呉れたのだが、まだ若かった私は日本女性を虐げるS性黒人のフォトに憎悪を感じて焼きすててしまい、今になって悔んでいる。

脱線ついでもう一つの事件を書こう。やはりルースの誘いで彼等のハイツにあるショーを見物に行った時のことだが、冬だと云うのに下界の日本人の停電生活とは全く関係ない別世界で、部屋中に電気ストローブをガンガンつけてシャッター一枚の黒人兵が十人近く集まり、カーテンをおろして、ま昼間から日本人

のあさましいショーを見ようとしていたのである。ショーのヒロインたる日本の女性は、一見して未成年に近いとわかる小柄なほっそりした色白の娘で、世ずれしていないオボコだと理解できるような女性だった。幕開きする前から嗜虐の匂いが濃く私を悦ばせたと記憶している。思った通りスタートした秘図はSM性充分で、相方の日本人の男性が、客の黒人兵達の方に向けて、娘の足をサービスにグイと開かせてみせる。娘が顔を反らせ、恥かしさに耐え得ないように身を揉んであらう姿は単にショーの効果のみをあげようとする演技ではない何ものがあつたと思った。相方がS的に彼女の羞恥を無視して、ショーを進めていくのはこの道の常道で、この時もその相方の若い男はすばやく娘の片足を、足首を持ってひきあげ反転させるようにしたのだが、何も私は、ここで秘戯図をありふれた話で説明するつもりではなく、問題にしたいのは、あれほどのオボコ娘と思われる女が、どう見てもその強制ポーズに陶醉しているに違いない様子を、示し始めたということなのだ。

相当のギャラが出ていたのだろうが、最終段階に入るまでに約一時間近くも見世物のシ

ョーが行われ、その内の約半時間以上が見世物的M劇といえるものだったのは、この娘のマゾ性をよく把握した卓抜なアイデアだと思つたものだ。そしてこの時、露出に恍惚感を憶えるM女の存在を、私は、はっきりと認識したのである。

以上を想い出させたむら子の表情に真のMの悦びを見出し、私は、うっとりとした加虐の悦びに浸つたのである。積極的だったむら子の表情の中の被虐の悦びの中に、私が、はっきりと前述の二人の女性との共通の悦びを見出したのは間違いだろうか。

九月号。マゾヒスチック・アニマル。

谷山久美子の巻。

三十三年の夏、十七才で自縛自縛の自虐に耽つたと称するだけあって、SMの極致に肉迫する何ものがこの九月号のフォトからも滲み出ている気がした。逆算すれば現在二十九才の久美子が十二年間もの長い間に、よしんば、どのマニヤもが経験する起伏があつたとしても、歩んで来たSMへの執着は、即、M性の権化と化した女の歴史であつたのである。十数冊の奇クを独り寝の枕辺に並べて好む頁をあれこれと拾い読み、責めあげられる自己を想像し、独り吐け口を求めて、めく

るめく幻想と幻覚の快美感にのたうつ被虐への情念の姿は、数多い読者の尤大な事例の象徴の姿であり、潜在性の強いSMの極致の姿の表明であつたのではないだろうか。

全身の体毛をすっかり剃りとり、羽鳥水江に共鳴してのエネマシリンジから、果てはA感覚の探究に憂身をやつし、山本・辻村両氏に調教を受けたと履歴を語る久美子の華麗なる過去に、SMの情念を痛いほど感じとる。

九月号での、全裸後手縛りでの字型に臀部をつき出したままの羞恥と屈辱の表情をフォトさせることができたのは、彼女の華やかな履歴がさせた業火と私は見たのである。彼女のそばにビニールが敷かれ、大型のガラスシリンドラーが用済みの姿を晒しているのが私の心を打った。

SMの行為の具象化の是非・社会的影響やその思考に対する危懼はさておき、人間本来の自然性を略奪された最近の社会に、せめて「自由な想念」の世界を望むのが真の人間である筈だ。

対立する思考と思考、または立場と立場とのそれぞれの反目と、主張の正当妥当性の判断の基準は高次の原理によって説明されるべきであろうが、自然と獣性の充足の必要性は

何人も争えない何ものかが存在すると思う。未成年者の購読を禁じ、大人の雑誌として、しかも特定の書店にのみ特殊な販売方法をとる限定発刊式の奇巧の同人誌的存在を考慮するに、その表現方法は微妙を要するとは思ふが、完全飼育の谷山久美子の極限の姿を、より明からさまに表現フォトして欲しかったとなお、あまりある久美子の美体を惜しみ、より高次のカメラ・ハントに私欲を乗じたのは私だけではなかったと考えている。

十月号。悦虐の甘き戯れ。渡部好美の巻。

今世流行のきざしある夫婦交換劇のはしりとでも云うのか主人強要によるM女の登場は数多く、且つ、マニヤとしては悦ばしいことでもある。全裸に喰い込む太縄に酔い痴れ、悦楽の縄目にしびれる好美の表情の美しき羞恥美に陶然とする。

一九一頁の上段にある縄をしばられて、うっとり表情を崩す好美の顔と、右に捻った姿体の乳房のとがりから臍へかけての線、そしてカットされた下腹部の丸味は最高の悦虐絵図であり、その素敵な女体が、イチジクばかりか、エネマシリンジからビール瓶一杯の浴室の湯を呑み込んだかと想うと、心が痺れる思いがする。デリケートな辻村氏には失礼

な評かも知れぬが、何故に彼女を白い陶器に導いたのか遺憾である。私なら、彼女の哀願を無視して、ビニール風呂敷をあてがい、両肢を高々と足首持って挙げるものと思う。尚更に苦言を付するなら、顔に縄を用いるのは存外であろう。だが、いずれにせよ渡辺夫人は素敵の一字に尽きよう。願わくば再度、より以上の姿を晒させて欲しい。

十一月号。豊満女体猥ら書き。村上喜美。

豊満型愛好者垂涎の巻で、どちらかというと肥りじし好きの私にも喜悦の書となる。

ころんころんのいも虫の如く豊かな肉体を転がされ、両肢を横臥のまま開かれたフォトに、満を喫す。しかし、顔にペインティングを施したのは悪趣味でいただけだったのではないだろうか。今後一切止めて戴きたいものである。肥った太腿を開いて椅子に緊縛したフォトは良かった。折角の美しい豊満女体であるから、落書きするひまに両足首に縄を付けての股裂き責めや、逆さ吊りにしてやりたかったと思ったのは私だけだろうか。

十二月号。夫婦愛虐図絵。

三浦敬一・純子の巻。

夫婦プレイ華やかな時世が生んだ愛虐譜。均整のとれた、娘のような純子夫人ならではの



のフォートの数々は、四十五年度の最後を飾るにふさわしかった。柱に対する立位開脚も、同じく柱による座位緊縛も、彼女の均整美を如実に誇示して呉れた。大ざっぱな菱型縛りで上手に臀部を柱に密着固定させた縛りは巧みであったし、柱縛りにて、股縛りの縄で正座に近い太腿を合わすことを拒否したのは小憎らしいほどの演出であった。両脚の曲線美を有する純子ほど股間縛りを快美にみせた者は四十五年度にはいなかった。この意味に於いても年末を飾ったと云いたい。仰臥の形で後手緊縛のまま棒に両脚を載せ、一時の休息をとる純子夫人のM感、上位の美しさに属したと思う。

最後の頁のフォートは四十五年度作品中の快作と思ったのは私のひが目に過ぎないだろう

か。緊縛は夫婦の活性炭と讃美する三浦夫妻なればこそフォートでできた悦虐の姿であると思う。

部屋を取り囲む柵木を、素早く小道具に化した三浦氏の、生活の智慧にあらざるSM緊縛の智慧は、マニヤならではの感深く、また被虐を求めたとは云え、おどましい姿態を辻村氏に撮影させた美しき純子夫人の心理状態を想像するにあまりある、フォートであった。

プラスチックパイプと、冷やかな卵の黄味。それを吸う敬一氏。SMの魔力の深さを悟らされる一コマのシーン。近くに転がったグリーンパイプを眺め感ひとしおであったとも云える。優美な肢体美と悦虐の人、純子夫人をして当誌二大黒柱と評されているもう一本の支柱「花と蛇」団鬼六氏のヒロイン、静子

夫人を想像したいものである。愛虐の人敬一氏に望むことを許されるならば、悶える妻女を、今後共サロンに登場せしめることを乞いたい。

私の見たい、純子夫人の被虐の姿態を具体的に述べるならば、先ずは台所の洗面台に、あの最後の頁で示したポーズで凍るが如き水責めに呻く姿であり、次には冷えきった体に滴るロウ涙の熱さに悶える姿である。

○ ○ ○ ○ ○

振り返ってみると、如何に一年という才月の短いものであるかを痛感すると同時に、早や四十も半ばを過ぎて我娘も十五才となり、子供だと思っている間に私にさえ男を意識するの、自ら垣を造ってへだたていくような年になっているのを知り、辻村氏なみの感慨を、いまさらの如く新たにしている。

軽い自己嫌悪を憶えつつも捨て去ることの出来ぬ嗜虐への道。行きずりの女性と意気投合しての投宿に、時には白い陶器の上での跡始末はおろか、鏡にむかって捨太郎ショウの真似ごと。それも除々に阿呆臭くなって、今日此頃の空想ごとにうつつを抜かした世迷い言。願わくば、私の願望の一つなりともの具現、乞い願うのみ。

## 天星社刊

### 《限定版グラビア写真集》

### 在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』一部一〇〇〇円（送共）略号「美1」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

☆懸賞入選創作☆

ある連続事件

狂ったプレイ

立 一 鬼



カット・須坂 旭

あの一連の事件の始まりとなったその日は九月も末で、前日までむし暑かったのが急に涼しくなった日でした。

おもては、背広を着ていてちょうど良い涼しさでしたが、新宿駅の地下街に入るとそこはまだ夏のなごりの熱気が感じられます。

さっきから地下街のロビーの手すりによりかかっていた山本達郎は、ピースの煙をふかく吸い込みました。エレベーターの近くのその辺りには、もう夜の十一時だというのにまだ数人の男女がたむろしていて、通行人はその前を足ばやに通って行きます。

ある大手会社の庶務課長をしている山本は

退社してから今までの時間を、歌舞伎町の映画館ですごしたのでした。彼が遅くまで家にも帰らず、こうしてぶらぶらしているのはある事情のためなのですが、それはあとでお話ししましょう。

山本は隅の方にいる一人の女を、表面は知らんふりをよそおいながら、注意深く観察していました。山本の方に横顔を向けて立っているその若い女は、確かに相当な美人なのです。切れ長の大きな目をじっと伏せて、やや丸顔のふっくらした頬には、綺麗にカールした髪がたれかかっています。

中肉中背で、年は二十二くらいでしょう。

普通の白っぽいツーピースを着ているのですが、そのスカートがすごいミニなのです。豊かな太腿から、足首の方へすらっと引き締まった脚や、明るい照明の下で、小麦色につやつやした肌の色を見ると、若い女性の精気が漲っているという感じです。山本は、彼女の髪型や服装などから判断してどこかのOLだろうと思っているいましたが、山本がそんなにその女に引きつけられていたのは、実は彼女の美しさのためばかりではないのです。

山本が今まで見ていた映画というのはエロとサディズムを扱った外国映画だったのですが、今はツンとすましている彼女が、その映



画館の中で山本にたいへんハレンチな攻撃をしかけてきたのです。

その映画は、若い女性が裸にされて、縄で縛られて、鞭でうたれたり、吊るされたりと責め場のふんだんにある映画でした。

今年三十六になる山本達郎は、会社ではまあ真面目で通っているし、六年前に結婚した四つ年下の妻にもそのことはおくびにも出しませんが、実は昔からその映画のような、女性を責める遊びがしてみたくてたまらないのです。しかし、まだしたことはありません。山本も結婚する前は、ときどき社の女などと遊んだこともありますが、やはり自分の欲望を言いだすことは出来ませんでした。

ところで、いったい一口にサディズムの根を持った人といっても、それは適当な機会を得れば大きく成長するかも知れませんが、根っ子のままで、つまり機会のないまま、实际行动のないままに終る人も多いのではないのでしょうか。そして案外たいいの人には、想像の上で愉しむとか、実際にやってもせいぜい前戯に応用する程度といった、そういう根っ子のままの方が適していて、サド侯爵のように、やみくもに強い欲求を持っていて、それを開花させる人はごく少ないのではないで

しょうか。

今では山本も結婚して、時々こういう映画を見る以外は、普通のSEXに満足して、サドの欲望に悩まされることもなく、表面は平気で暮らしているようですから、彼の欲望もそれほど強いものではないのでしょうか。

しかし、このところのように妻の照子との間がうまくいかななると、性格の不一致ということはその不和をいっそう助長する大きな原因になるようです。

その日も、山本が遅くまで映画館にいたのは、照子との仲が破滅状態に近くなり、山本が家に帰っても帰らなくても照子は何も言わなくなっているからなのです。

映画館に彼女が入って来たのは、山本が席にすわってからすぐでした。山本が入った時はもう映画は始まっていましたが、その日はウィークデーのためか客席はすいていて、山本はいちばん後ろの席にすわりました。すると五分ほどして、山本にわざと体をすりつけるようにして隣にすわったのが、その女なのです。薄暗い映画館の中でしたが、背後の壁に小さい螢光灯がついていたせいもあって、女の様子は割とよく見てとれました。

こういう映画のときには女性の客はめずら

しいのに、しかもそれが若くて美しい女性だったので山本は少し驚きましたが、もっと驚いたことには、やがて彼女は山本の膝に太腿を押しつけるようにし始めたのです。

しかも、彼女は暗闇の中でもう片方の腿や下腹をなでさすっているようなのです。(この女は、映画を見ながらオナンをしているのか?)と、山本は驚きました。映画館でやっている男がいるという話はよく聞いていますが、女が、というのは始めてです。しかし、考えてみれば、男がやるものを女がやっていけないというのではないはずで

彼女が顔をやや仰向けて、かすかな吐息さえ聞こえるようです。ちょうど画面では女性が全裸で逆さ吊りにされて、さんざんに責められているところで、山本も、しだいに自分が平然としていられなくなるのをどうすることも出来ません。

彼女はかなり長いことそんな様子を続けていましたが、映画の終りごろになって、とうとう山本の方へ手をのばして来ました。

あわてて山本が手をつかまえようとすると女はかすかな声で「アッ」と言って立ち上がり、そのまま飛ぶように映画館を出ていってしまいました。

山本はしばらくあっけにとられていました  
が、そのあと、興奮と後悔にさいなまれなが  
ら、その三本立て映画の残りの二本が終わる  
まで映画館にいました。つまり、こういう映  
画を見てあんなことをするなんて彼女は本当  
のマゾヒストかもしれない、という興奮と、  
それなら彼女をつかまえて、旅館へでも連れ  
ていって、思いきり自分の秘かな欲求を満た  
すよいチャンスだったのという後悔です。

あんなお嬢さんタイプの、おとなしそうな  
女性がマゾの欲望を持っている、と思えば山  
本が興奮してくるのも無理はありません。

ところが映画が終わって、山本が新宿駅で  
家に帰ろうかどうしようかと、ぼんやりして  
いると、山本の跡を尾けてでも来たように、  
また彼女が現われたではありませんか。

エレベーターが人をはき出し、また呑み込  
みして、何回くらい上がり降りしたでしょう  
か、ふと気付くとそこには山本と彼女だけが  
残されていました。

「あの、さっきはどうもすみませんでした」  
と、それを待っていたかのように彼女が話  
しかけてきました。映画館での大胆さとはう  
って変わって、おずおずとした、おとなしそ

うな様子です。

「いや、なに……」

と、山本も変な返事をしました。

「あのう、あなたはああいいう映画、好きな  
んでしょか」

「え、ああいうって？」

「あのう……女の人が縛られたり……サ  
ディズムの……」

彼女は頬をうっすらと上気させて、早口に  
言いました。山本が口ごもった返事をしてい  
ると、彼女の方から、いよいよすばらしい要  
求を切り出してきたのです。

「今晚、一晩だけ私とつきあってくださらな  
い？……私のこと縛っていただきたいん  
ですの。道具も持っていますわ」

山本は興奮と、こんどは疑惑にとらわれま  
した。いったい彼女の話は本当なのでしょう  
か。あまりにもおもしろすぎる話です。

山本は、会社では同期に入社した者のなか  
で、いちばん早く課長になり、このまま行け  
ば、遠からずもっと坐り心地のよい椅子が待  
っているはずなのですから、この女にヒモが  
いたりして、などと自分の地位が心配になる  
のは誰しものことでしょう。

しかし、幸か不幸か、山本の興奮と疑惑と

の割合はおそらく百対一くらいだったので、  
彼女の要求はすぐ承諾されたのです。

新宿から山手線に乗って、高田馬場で降り  
ると、二人は夜道を恋人同士のように連れ添  
って歩きました。山本は二、三回、この辺り  
の旅館を利用したことがあるのです。

彼女は、美知代と呼んでくれと前置きして  
自分がマゾヒストであること、今日はカメラ  
を持って来たので、自分をいろいろに責めて  
それを写してもらいたい、などと恥かしそう  
に話しました。

『高田荘』と書いた小さなあかりのともって  
いる玄関にくと、山本は黒いサングラスを  
かけて顔を隠しました。そこは旅館というよ  
りは、モーテルのようになっていて、あまり  
顔を見られなくてすむのですが、それでもや  
はり山本はサングラスを持っていた自分の幸  
運に感謝せずにはられませんでした。

旅館などというものは、たいがい路地の奥  
などにあるのですが、山本は暗い坂道を降  
りて、その旅館の路地へ入って来た時、ふと  
誰かに尾けられているような気がしました。

その時の山本に、自分がある奇妙な罠に陥  
れられようとしているなどと、どうしてわか  
ったでしょう。また、罠の餌である美知代も



数時間後にはどういう運命が自分にふりかかるか、などという事は知るよしもない事でした……………。

「君はまた、ずいぶんいろんな物を持ってきたんだね」

「フフ、これを全部、私にほどこしていただきますわ」

美知代は部屋に入ると、その和室の畳の上へ、手さげの中から次々に魅力的な責め具を取り出しました。

ロープはもちろんのこと革製の拘束具や嵌口具、手錠、貞操帯、浣腸器などまであり、これからこの美しいお嬢さんがこうした屈辱的な責め具を装着するのかと思うと、山本は早くも、ぞくぞくしてきました。

美知代は山本の見ている前で、割とあっさり全裸になると両手を後ろにまわしました。山本の興奮とは反対に、彼女は旅館に入ってしまうと、すっかり落ち着いた様子です。

美知代が下着を脱ぎすてると、その小麦色の肌から、かすかに汗と若い女性の甘い体臭が感じられました。

「菱縄縛りにして下さる？」

と彼女は、実際には女を縛った経験のない

山本に、あれこれと縛り方の指図までするのです。

「君は、こんな風にいつも誰かに責められているのかい」

山本は、いささか圧倒されて尋ねました。「ええ、そうよ。でも、その事はお聞きにならないで」

美知代は、確かに大分責めの経験があるようです。こんな若い女性が、……………考えてみればおかしいことでした。

縛り終えると、山本は彼女の縄尻をとって風呂へ引きたてます。

湯舟の中で、山本は緊縛された裸身のなめらかな首すじから肩のあたりを吸いました。背面にねじ上げられた腕や、引き締まった柔肌に縄目がくい込んでいて、それが山本の肌にも、こりこりあたります。

耐えられなくなって山本が綺麗に口紅を引いた唇を吸おうとすると、美知代は一瞬、反射的に反発したようです。しかし後ろ手に縛られた恰好では、されるままになるよりないのですから、すぐ大人しくなります。

「待って。写真なんかを撮ってからにして下さらない？」

と、それでも美知代は小さい声でいいまし

た。山本は美知代を浴槽から上げると、濡れた手拭いで彼女の形の良い唇を二つに割り、強く引き絞って猿ぐつわを嵌めてしまいました。

湯気の中で、二人の濡れた体が暖かいタイルの上に転がりました。

「ごめんよ」

と、山本は体を拭いて自分だけ下着をつけると、言いました。猿ぐつわははずしてやりましたが、美知代はまだ縛られたままです。「いいのよ、自分から縛ってもらったんですもの」

美知代は、全裸で転がされた体をよじってさすがに少し恥かしそうでした。

「一旦、ほかうか」

「あ、まって、この姿を写真に撮っていただきたいんだけど……………」

山本はカメラを調べながら、

「しかし、君も大胆な人だね、ぼくみたいに見ず知らずの他人と。……………責められて写真を撮られるのが趣味なのかい」

「そのことはおっしゃらないで。それより、もっと、いろいろ責めて下さい」

彼女の言葉にしたがって、それから山本は

エビ縛りにしたり、貞操帯を使ったり、拘束具を使ったりして、彼女にさまざまな羞恥の姿勢をとらせてシャッターをおしました。山本は責め道具の使い方も、いちいち責められ手である美知代に教わりながらやりました。

そうした責め方は、いずれも山本が夢にえがいていたもので、彼を有頂天にさせましたが、やはり美知代の四つんばいの流腸状態に山本はいちばん魅せられたようです。

ひととおり、美知代の持参した責め道具も使い尽したのは、三時か四時ごろだったでしょう。山本はよくおぼえていません。

身じまいをすると、美知代はなぜか、いやに山本に先に帰ってくれるようにせがみました。明るい所で改めて顔をあわせるのがいやなのだろうと思って、山本はあっさり美知代と別れると、旅館を出ました。

山本が美知代の死を知ったのは、翌日の夕方になってからでした。

山本は、美知代と別れてから、また近くの旅館に入り朝まで一休みして出社しました。その日は、別に何という事もなく過ぎましたが、帰りに駅の売店で夕刊を買うと、見覚えのある彼女の顔が載っているではありませんか。

か。

『全裸の女性、つれこみ宿で殺さる』と、いう見出しで、それはその種の新聞のためもある、相当大きく三面に扱ってあります。おそらく、昼間もニュースなどを聞けば流していたでしょうが、山本はその日はテレビも見なかったのです。

山本は、旅館の名前と美知代の写真を見つけると一瞬、顔の赤味がひいて、すうっと心臓が冷えてゆくような気がしました。彼は変な様子を見られないように、急いでトイレに駆け込むと、震える手で新聞を拡げて、記事の詳細を調べました。

美知代というのは本名で、やはりある会社のOLだったようですが、あの旅館で、全裸で縛り上げられ、猿ぐつわをかまされた上、首をしめられて殺されていたのです。

一緒にあった責め具などから、サドプレイのはての過失致死ではないか、と書いてあります。あのカメラの事は見当たらないところをみると、殺したやつが持っていたのでしよう。幸い山本の事はわかっていないようなので、彼は少し安心しましたが『警察は一緒にいた男を容疑者として探している』などという恐ろしい文句は、山本を震え上がらせる

のに十分でした。

山本が出ていってから、誰かが美知代を殺したのは間違いありません。それにしても、縛った上で殺すとは、そいつもサディストなものでしょうか。そういえば美知代には、ずいぶんプレイの経験があるようでしたから、そのプレイの相手が犯人なのかもしれません。山本は、あの時誰かに尾けられているような気がした事を思い出して、ゾッとしました。

(いったい誰が!……しかしそれよりも、自分は警察に出頭してすべてを話すべきだろう。いや、そんな事をしたら、俺の世間体はどうなるんだ。それにええって犯人として逮捕されてしまうかもしれない。もちろん、そんな事は出来ない、それにしても、あの旅館には何か証拠になるような物は残してこなかったらうな)

と、こんな時は考えれば考えるほど、気が動転するものです。

山本はその日はめずらしく早く家に帰ると不安と恐怖をまぎらわすかのように激しく照子を求めました。

翌朝、目がさめるといっそう不安で、家に引き籠っていたいような気持でしたが、会社



を休んだところで、どうなるというものではないありませんから、しぶしぶ出勤しました。

その後二、三日は、もうどうにでもなれ、と悲壮な決意でいました。しかし何日たっても別に変わった事もおこらず、もともとが楽天的な人間でしたから、山本もだんだん事件のことは忘れて落ちつくようになりました。

警察も、情人同士の過失致死という見方のためでしょうか、あまりこの事件を重視してはいないようです。一カ月が過ぎるころには、まだ胸底に不安のしこりはありましたが、山本はすっかり平常の状態を取りもどしていました。いやむしろ、このところは山本が毎日早く帰宅して大人しくしているので、照子との仲も快方に向かいはじめたくらいです。

しかし、山本の小康状態は、じきに破れることになりました。

山本の会社には、衆目の一致する美人が二人いました。一人は秘書課の長谷川麗子で、もう一人は山本と同じ庶務にいる田中伸子です。

長谷川麗子は、かつてある雑誌の、「オフイスの美女紹介」などというのに、載ったこともある、あかぬけした大柄のグラマー美人

ですが、よく聞くように、あまり美人だと往々にして婚期を失するという言葉のとおり、どうしたわけか、もう二十八になるのに独身のままです。

いろいろと社の人間とも、はでな噂のある彼女にくらべて、田中伸子の方はどちらかというと地味なタイプで、まだ入社して二年ほどですし、年も若く二十四でした。

特に田中伸子は自分の部下なのですから、山本も彼女達の美貌は目についていました。社にはもっと若い男性も多いし、自分は女房持ちの身ときては、彼が別に野心を持っていなかったということは、おわかりいただけるでしょう。

ところが、その山本が、ふとしたことから田中伸子と深い仲になったのです。

あの事件から、一と月ほど過ぎたちょうどそのころ、会社の慰安旅行がありました。それはまったくあのおとなしい伸子の方から積極的に働きかけてきた結果だったのです。

そうすると、山本も据膳食わぬは男の恥というわけで、ついこの前の事件も忘れて伸子とのあいびきを重ねるようになりました。そして、それにしたがって当然、照子との間はまた険悪な様相を呈してくるのです。

伸子は、原宿のアパートに一人暮らしをしているので、二人はいつも彼女の部屋で会っていました。山本はあの晩の美知代との快楽は強烈な思い出でしたが、そのあとが悪かったためもあり、ますます自分の正直な欲望を言い出すことは出来なくなっています。

それでも、照子と居るよりはましだということで、このところは毎日のように遅くまで伸子の部屋で過ごして、夜を明かすこともたびたびでした。

学生の時、バレーボールをやっていたというだけあって、伸子の体は美知代と同じように引き締まっていた、今が盛りでした。やせている照子と違って、彼女は骨盤が広く、腹の筋肉が丸くもり上がっていて、それが山本を惹きつけます。

会社では、無口でおとなしい彼女を素裸にして、ことさら屈辱的な痴態を演じさせることにより、山本はけっこう満足しているようでした。

十一月も終りに近づいたある土曜日、二人は退社してから新宿に出て、食事をしたり、ナイトクラブで踊ったりして、伸子のアパートに着いたのは深夜になっていました。

「ちょっと待っていてね。今、コーヒーでも沸かすわ」

そういつて、伸子は台所へ行きました。

彼女の部屋は、鉄筋三階建てのこのアパートの二階で、いちおう二間と浴室、キッチンをついた作りで、入居者はやはり彼女のような独身者が多いようでした。

山本はコートを脱ぐと、慣れた様子で灰皿を出したりしています。

「さあ、どうぞ」

と、彼女がコーヒーを盆にのせて持ってきましたが、しばらくしてから、伸子は何か決心したように言いました。

「ねえ、山本さん。いい物を見せてあげましょうか」

「へえ、なんだい？」

伸子は立って、壁の隅を占領している大きなタンスの所へ行くと、いちばん下の引き出しから、部厚い一冊のアルバムを取り出しました。

山本が、「さあ、ごらんなさい」と言われて見ると、なんとということでしょう、そこには伸子自身が全裸で緊縛された写真がのっているのです。

そのアルバムは、全頁そうした伸子の責め

写真で、中には相当どぎつい角度から撮った

ものもありました。山本は写真の素晴らしい姿

態には魅せられましたが、あまりにも唐突だったので、一方では前の美知代のことを思い出して嫌な気持ちになりました。

（まさか、伸子もあの女と同じような事をしているのでは）

と、思うと、あの事件を知られているのではないか、という根拠のない疑惑さえ頭をもたげてきます。

伸子は少してれくさそうに聞きました。

「どう？ よく撮れてるかしら」

「ああ、よく撮れてるよ。しかし、こんな写真はいったい誰に撮ってもらったんだい」

山本は、さすがに語気が鋭くなるのをおさえられませんが。

「まあ、そんなにおこらないで。男の人じゃあないからいいでしょう」

「それじゃあ、君はレズなのかい」

「ちがうわ。でも、私はこんな風にぎりぎりに縛られていじめられるのが好きなのよ。それに、あなたも、いつも私には全然こんなことしなかったけれど、本当はこういうのがお好きなんじゃあないの？ いえ、匿さないで。

私は前からあなたにはこの趣味があると思っ

ていたのよ」

こうして、再び山本の欲求がかなえられることになったのです。アルバムの伸子は、全裸で完全に自由を奪われ、思いのままに折りまげられ、責めつけられています。最初は山本も、美知代のことを考えると少し気色が悪かったのですが、その挑発的な姿態を見せつけられては、次第に伸子との責めプレイに溺れてゆくのでした。

いつになく欲情して、山本は着衣のまま伸子を抱くと、唇を吸い合いました。顔を離すと、彼女の唇からあたたかい吐息が感じられます。

山本は、スカートの上から引き締まった尻や太腿をなでながらストッキングのガードルをはずして、パンティを引きはがすようにして脱がせました。

山本は、しばらく伸子の肌の感触を楽しみました。伸子がビクッと体を震わせる時の手の位置から、ふと山本は伸子も浣腸が好きだろうと思いました。

「もういや、早く縛って」

と、伸子が言ったので、山本は彼女の衣服を脱がせると自分も下着だけになりました。

伸子の引き出しには、ロープが沢山ありま



した。かなり使い古されたものらしく、薄黒く汚れていて、くねくねとやわらかくなっています。

「思いきり、きつく縛っていいのよ」

と、伸子は言います。山本は美知代を縛った経験のおかげで、今度は相手に教わることなく縛れました。

彼女の両腕を、背中に捻り上げて縛り合わせると、縄尻を出来るだけ引き上げて首に連結します。こうすると、高手小手になって、彼女はのどが締まって苦しそうでした。別の縄で乳房の上や腹を締めあげ、固くゆわえつきます。彼女の腕にも縄が三重にくい込みました。

それから、前の首縄の余りが二メートルほども垂れているのを股間に通して、背中の方へ絞り上げますと伸子は思わず叫びました。

「あッ、い、いたい。少し、きついわ」

山本は、そのままゆわえてしまわないで、片手で彼女の髪をつかんで頭をおさえながらもう片手でその縄をにぎって、更に絞り上げました。

「ああッ、や、やめて」

伸子は顔を真赤に上気させて、まるく張り出した腰をうかせて呻きます。

「おい、伸子、ただ責められているだけじゃあ君もつまらないんじゃないかい。ぼくはい事を思いついたよ」

「な、なんですの」

山本が手を休めて言うと、伸子はもう、ぐったりしています。

「ぼくは、君がいったい誰に、あの写真を撮ってもらったのか、不思議でしょうがないんだ。だから、これからその事を君に拷問することにしたよ。プレイの薬味としてね。君もその方がおもしろいだろう」

「えッ、そ、そんなこといやよ。ね、やめて下さい」

と、伸子はあわてて云いました。

「うるさいな。そんなにさわぐんなら、猿ぐつわをかませよう」

「わ、わかったわ。覚悟します。あなたの好きなようになさって」

山本は脱ぎすててあった彼女のパンティをまるめて、彼女の口の中につっこみます。伸子は観念したのか、自分からおとなしく唇をあけて、そのしめった布切れを口にふくみしました。山本はその上から、彼女の頬をストッキングできつく縛りつけると、また責めが再開されるのでした。

後手に縛り上げられた上に、猿ぐつわまで嵌められては、もうどんなに責められても、ただ「くっくっ」とせつなそうに呻く自由があるだけです。山本は、そういう縄一本で女性を思いのままに弄ぶことが出来るおもしろさを、存分に愉oshimしました。

「さあ、どうだ。白状する気になったら、首をたてにふるんだ」

と、山本が言いながら責めても、彼女は身をのけぞらせるだけで、がまんしています。

すでに伸子は、体中があら汗できらきら光っていました。責めつけるついでに、固くしこってきた乳房や、あえいで波うっているすべすべした腹部にも攻撃を加えるのですが伸子はしっかり目をつぶった顔をいやいやというように、横に振って悶えます。その顔ももう汗と涙で濡れていて、ほつれ毛が額にべっとりと、はりついています。

しばらくそうして責めてから、今度はぐったりした彼女を仰向けにすると、容赦なくエビ縛りにしました。

「さあ、これからどうしてやろうか」

山本は、折りまげられた伸子のむっちりした太腿を軽く指の先でこづきながら言いました。山本は本当に、これからどう責めたらいい

いのか、あまり智識もなかったのです。

伸子は、この屈辱的な姿勢をとらされて、呻きながら体をくねらせました。するとそれは彼女の豊満なヒップをエロチックにうごめかせることになり、かえって山本を煽情するのでした。

「そうか、君はその可愛いお尻を責めてもらいたいんだね」

と言うと、山本は彼女をそのままにして、少しの間、ほうほうをさがしていましたが、やがてローソクや筆、それにイチジク浣腸などを見つけて持ってきました。

「まず、血行をよくしてからにしよう」

山本はそうつぶやいて、無防備な彼女の臀部をピシピシとバンドで打ちすえました。

「うッ、うッ」

と、呻く彼女の体には、みるみるうちに赤く跡がついて行きます。

「どうだい、そろそろ白状しないと、こんどはこれだよ」

と、山本は伸子の目の前にイチジク浣腸をつきつけました。伸子はそれを見ても、すぐに目をふせて相変わらず体をこわばらせたままですが、山本はふと彼女の目が喜びで光ったように思いました。

フデやローソクを使った責めは、山本はどこかの雑誌で見たことがあるのです。まず山本は伸子を柱のところに引きずってゆくと、エビ縛りの形のまま、さらに足を左右に開かせました。

足を開かせたので、汗で光った伸子の上品でおとなしそうな顔がよく見えるようになりました。山本はその汗で濡れた額にひとつキスしてから、ローソクとフデでさんざんにいじめてやりました。

最後に、例のイチジクを二つ空にして、少しがまんさせてから、縄をほどいてやると、彼女は猿ぐつわのままトイレへとんで行きました。

朝があけるころになって、二人の歓楽の宴も、ようやく尽きたようです。

「君は、とうとう白状しなかったね。ところで、君の相手とは、どれくらいの付きあいなんだい」

興奮の奔流もすぎると、次第に山本は冷静になって、また尋ねました。

「そうね、今お話ししてもいいんだけど、やっぱりそのことはもう少しあとにしたいわ。きつと、このつぎには白状するわよ」

「このつぎは、もっと厳しく拷問するよ」と、山本は言います。

「まあ……。でも、女同士でいじめられるよりは、あなたの方がずっといいわ。……私はあなたなら私の望みをかなえてくれると思ってましたわ。本当に一人で淋しい時なんか、自分で自分の体を縄でぎりぎりにしめつけてみたりした事もあったわ」

「それで、レズになったのかい」

「まあ、そうね。それより、今日は私をもう一度、嚴重に縛り上げて下さらない。そして縛ったままで帰ってもらいたい」

伸子は、また変なことを言いだしました。

「え、どうしてだい」

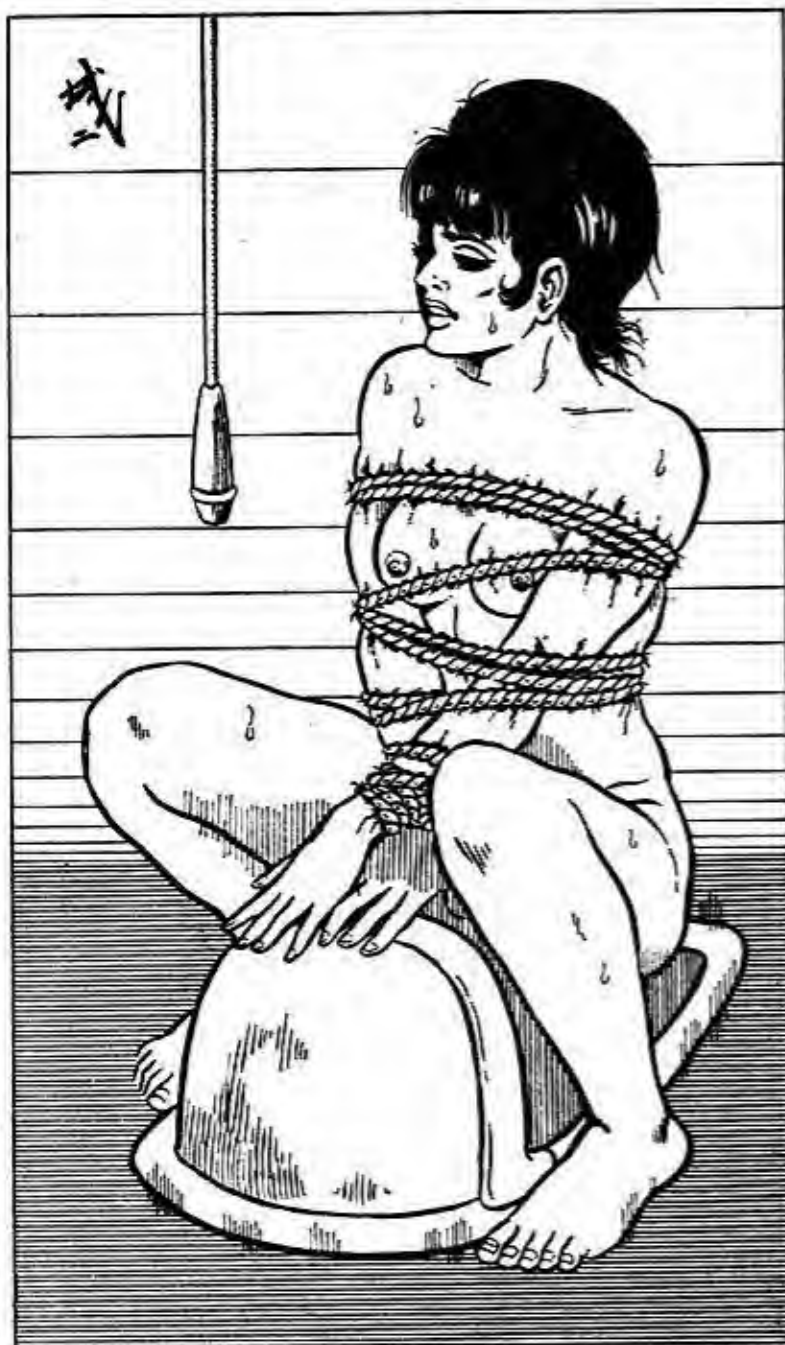
「だって、今日は日曜でしょう。これから今日一日くくられたままで、転がされていたいよ。まるで、とらわれた人間みたいで、すてきじゃあない」

考えてみれば、刺激的な遊びです。しかし山本はそれを聞くと縛ったままでほうっておいたりして、またこの伸子が誰かに殺されるのではないか、という不安を感じました。女性が全裸で縛り上げられていては、誰かに入ってしまったらおしまいです。

「しかし、そんな事をして平気かい。心配だ



読者ギャラリー=S・コレクション  
『快樂への招待』 豪 城 二



なあ」

「まあ、どうして？ 一日あるんですもの、部屋には剃刀だってあるし、一日もがいていれば縄もとけるんじゃないかしら。私、前から一度こんな遊びを試してみたかったのよ」

と、伸子は強硬に頼みます。山本も、君が殺されるといけないからとも言えず、とうとう彼女の言うままに縛ってやりました。

全裸のまま後手にしっかりとくると、両足も縛り合わせました。そしてまた猿ぐつわを今度は山本の不潔な下着を使って咬ませまし

たから、完全な緊縛が出来上がりました。そしてそれは、ちょうど美知代が殺された時の恰好と同じだったのです。

ところが、結局、彼女の縛り放置の夢は実現されないことになりました。

山本が、縛られてうつ伏せに転がされている伸子をあとにして彼女の部屋を出たのは、まだ六時ごろで、はく息も白く、外には一面に朝もやがかかっています。

山本が部屋の鍵をかけながら、ふと見ると

廊下の曲りかどに誰か隠れています。

山本は、なぜかそいつが美知代とのあの晩尾けていた男だという気がしました。山本は反射的に、その男の方へ駆け出そうとしました。すると、それと同時に男もぱっと階段を駆け下りて逃げだしたのです。

山本も、あわてて男の跡を追います。二人共、二、三町はものも言わずに駆けました。しかし、そいつは山本より若い男で、ずっと足が早いのです。山本は着ていたコートがじやまになって、とうとう息を切らせながら追跡を断念しました。

山本が立ちどまると、男はすぐ角を曲って姿を消してしまいました。山本はしばらく荒い息をつきながら、男の消えた跡を見おろしたままで立っていました。その時、急に、伸子が殺されているのではないか、という予感が頭にひらめきました。

こわい物でも見るように、伸子の部屋のドアをあけた山本でしたが、幸いにも彼女に別条はありませんでした。彼女はさっき別れた時縛り上げられたと同じ恰好のままです。山本はそれを見て安堵のため息をつきました。

山本が、驚く彼女を有無をいわさず縄をほどいて、洋服を着せかけてからやっと安心し

て帰ったのは言うまでもありません。

しかし殺人者は狙っていたのです。月曜日には、伸子は普段のとおり出勤していましたが、その翌日の火曜の朝になって、彼女は死体で発見されたのです。

殺し方はまた絞殺でした。ですが、今度は彼女は縛られてはおらず、不思議な事には例のアルバムや、責め道具である縄がすっかり犯人に持ち去られていて、普通の殺人事件として扱われたことです。

もっともそうしたアルバムの存在や、彼女がマゾヒストだった事などを知っているのは山本と、伸子のレズの相手だけなのです。警察でもそこまで判るわけがありません。山本にしてみれば、彼女とそんな遊びをしていた事が知れては大変ですから、かえって都合なのですが、どうして犯人がロープまで盗んでいったのかと考えると、何かしら不気味な疑問に悩まされるのでした。

今度は、山本と伸子との仲は知られているので、彼も警察から嚴重にとり調べられました。と、いっても山本が前の事件にも関係があるとは誰も知りませんし、月曜はちょうど

伸子のところへも行かず、照子と家に居たアリバイがあるので、犯人と疑われる事だけは免れました。

山本は、あの謎の男のことは言い出せませんでした。あの男が犯人かも知れませんが、もしあの男が挙げられれば、山本と伸子がしていた事も明るみになるかも知れませんが、美知代を殺したのも彼だとすれば、その事も出るわけです。ともかく、山本はこの事件がうやむやの中に終ることを願っていました。

こう、自分と関係した女性が相ついで殺されては山本でなくとも恐ろしくなりますが、それに加えて今度の事件では、山本もまったく四面楚歌の状態に立たされることになったようです。

伸子との関係が明るみになると、照子はすぐ荷物をまとめて実家へ帰る仕度をはじめますし、会社でも部下の女と関係していたのは、風当たりは弱くありません。

照子は、弁護士と会って離婚の相談をしています。彼女のことですから、山本からしぼれるだけしぼるつもりでしょう。しかし、それも、こんなことになっては山本の自業自得というわけです。

二、三日中には家を出るので、照子はすでに自分の持って来た家具などは全部実家へ送ってしまったていて、家の中はがらんとしています。山本は、こういう時こそ外泊でもしたい心境ですがそれもならず、しかたないので夜は遅くまで、バーでねばってから帰るようになっています。

そういう時、第三の殺人は意外な所で行われました。

伸子が殺されて四日目。その日も山本が夜更けて十一時ごろ帰宅すると、家の前にパトカーが二台とまっています。門の中へ入ると近所の人達も数人騒いでいました。

第三の犠牲者は照子だったのです。しかしどうやら殺人はこれで終るようでした。なぜなら、今度は犯人の目撃者もあり、何よりも彼は大事な証拠を残していたからです。

警察の調べで、犯人は山本の会社とも取引のあるK社の社員で黒川という男であることがわかりました。彼は、八時ごろ山本の家へ忍びこんで、照子をしめ殺しましたが、大分手こずいたらしく、その時の照子の悲鳴を聞いて駆けつけた人達に顔を見られていました。さらに彼は家の中へ自分のパス入れを落としていきました。



そのパス入れの名前が警察には、ピンとききました。そして、黒川の写真をとりよせると目撃者達も彼を認めたのです。

黒川は、伸子と親しく、どうも結婚の約束までしていたらしいのです。警察は、そのため前から彼に目をつけていたのです。山本は知りませんでした。彼は取り引きの関係で、前に二、三度、山本の会社に来たことがあり、それで伸子と知り合ったようです。

つまり、黒川は自分の女である伸子が、山本に傾いてしまったことを怨んで彼女を殺しさらに山本を殺そうとして誤って妻の照子を殺した。というのが警察の見方でした。

それから数日後、黒川は関西に高とびしていましたが、ある旅館でガス自殺しました。そして、その遺書は警察の見解を裏書きして、ここに事件は一応、落ち着いたのです。

確かに黒川は、伸子のアパートで山本と追いかけてことをした男でした。しかし、それでは美知代の事は全然無関係なのでしょうか。それに、伸子のアルバムもどこからも出てこないようです。

人には言えませんが、山本はそれを考えると、ちっとも安心出来ませんでした。彼は、

どうしても犯人はまだ他にいて、という気がしてなりません。美知代の事や、伸子がマゾヒストだった事などを知っている山本には、あまりに、腑に落ちない事が、多かったのです。

山本が、そういう鬱々とした日々を送っているうちに、その年もだんだん終りが近づいてきました。

そうしたある日、ついに彼の所に来るべき手紙がとどいたのです。それには予想していた通り、あの時、山本が撮った美知代の写真と、伸子のアルバムの写真が同封されていました。文面はただ一言「クリスマスプレゼントとして、真犯人をおくります」という妙な文句があるだけです。

山本は、その手紙は警察にも見せず、ひたすらその日を待ちました。

『犯人は私です。美知代と、伸子と、黒川はすべて私の奴隷であり、彼等は私が直接に殺してやりました。照子さんは黒川に殺させました。前の三人はマゾヒストで、私は彼等に女王として君臨していたのです。』

まず美知代は、あれは事故でした。私達は

「浮気した相手を折檻する」というおなじみのプレイをするために、あなたを利用したのですが、美知代を責めている時に間違っって首がしまりすぎたというわけです。

あなたがサディストだという事は、会社であなたの様子を見れば大体わかりましたけれど、それを試す目的もあったのです。

種をあかせば、あの時、私達はあなたの隣の部屋にいたのです。私達というのは、ああいう所へ一人では行けませんから、黒川と行きました。あなたが出られてから、三人でプレイするつもりだったのですけど。

伸子の時は、これは事故でもなんでもありません。伸子をはじめは、私達のプレイの刺激になるようにあなたに近づけたのですが、伸子は私達から離れてあなたを横どりしようとしたので殺しました。と、言えばおわかりでしょう。私は、もう女王役にあきて、今度はおあなたに女奴隷として飼育されたいのです。

照子さんの事は、もちろんそのためです。あの人がいれば何かと不便ですし、あなたもあの人には大分苦しめられているようでしたから、あなたと二人だけでプレイが出来るように、と黒川に殺させました。

黒川には奴隷の奉仕の一つとして殺人をやらせたのですけど、ああいうヘマをしたので始末しなければなりません。彼は、私に責められながら、氣を失ったところを殺してやったのですから、極楽往生でしょう。

これで邪魔物はすべていなくなり、私は女王の地位から解放されたわけです。それで、私はもう一人の奴隷に、私自身をこの箱につめてもらいました。彼も私のこの姿を見てはさぞ幻滅したことでしょう。そして、完全に自由を奪われた女奴隷として、あなたの所へ送ってもらいました。

私は高慢で悪い女ですから、私を調教なさるのも、責めごたえがあると思います。あなたも奥さんを殺されては、やはり私が憎いでしょう。さあ、私をぞんぶんにいじめて下さい。

長谷川麗子

町は人ごみで賑うクリスマスイブの日、山本の家に大きな荷物が運搬されてきました。その荷物についていたのが、右の手紙なのです。

荷物はダンボールの箱で、それを開けると中にはまたポリエチレンの箱がありました。その蓋をはずした時、山本が見たのは真白な女性のヒップでした。女は箱の中にエビ縛

りのような形で折りまげられてつめられ、送られて来たのです。

女、長谷川麗子は、立たせると、残酷なくらいに厳しく拘束具で縛り上げられていました。

両手は後手錠をかけられ、手錠から続いている鎖が一すじ、彼女の二の腕を体に縛りつけています。

恰好のよい豊かな胸は、ブラジャーに穴をあけたような革製の拘束具で締めつけられ、変形した乳房が、ぴょこんと突き出していました。

腰にもやはり、革製の貞操帯のようなものを付けられていて、もり上がったヒップにその黒い革ベルトがくい込んでいます。そしてもちろん口には嵌口具が彼女の頬を締めつけています。

ごていねいな事には、それと連結した鼻輪まで装着されていて、彼女のツンと高い魅力的な鼻梁をみじめな形に責めつけているのです。

この恰好では、山本にも彼女がどんなにっらいか想像出来ました。

足首の縄をほどいてやって、彼女を立たせた時には、プンと異臭が匂いました。どのく

らいの間この中へ入れられていたのかは知りませんが、彼女が中で排泄しなければならなかったとすれば、一日以上である事は間違いないありません。

今までは女王として誇り高かった彼女が、その間中この屈辱と苦痛に満ちた姿勢をどうやって耐えたのでしょうか。

箱の中には、まだ他にそれまで彼女が奴隷達を責めるのに使った物でしょうか、沢山の責め道具が入っていました。それと一緒に、あの伸子のアルバムなどもあります。

山本は、その中から細い鞭を取り出すと、彼女のたくましく張り出したヒップに一発打ちつけました。

身動きするのも苦痛なのか、麗子は縛り上げられたグラマーな姿態をビクリと震わせただけで立っています。

山本が浣腸器を用意して近づくと、拘束具の中で彼女の大きな美しい目が、きらきらと光りました。

聖夜はしんと更けてゆきます。そしてそれは、驕慢なサド女王がマゾの喜びに屈服する儀式的夜でした。

——(おわり)——





年度末に思う

## 羞 恥 観 念

三 輪 昂

カット・あらいかず

四十五年度締めくくりの号が予定通り（わたしはいつもこの「予定通り」の刊行に感心しているのだが）に届いた。1から12までズラリと並んだ背ナンバーを眺めていると、この一年間、わたしを幻想の園に遊ばせてくれた各号のモデル女性の姿態が次々と思い出され、重なり合って去来する想いである。

わたしの心を奪う緊縛美術。そこに滲み出る哀歎の情。これが美でなくて何であろう。正に女性美の一極致を抽出する、美術形態であると思うのだ。

静かに十二号のページを繰り出して、最初から目を眩った。わたしの拙い「短詩」が扉に掲載されているからだ。これはまことに驚きである。たしかに七月の始めに投稿した憶えはあるが、まさか活字になろうとは思っていなかっただけに読み返してみても赤面、冷汗ものとは、あの時の気持か……。

さて、十二月の最後のページを閉じてから

思ったことであるが、迫力の点で少し不満が残ったのは、いなめないものの、年度のしんがりにふさわしい落着きに、世相に迎合しない芯の強さを感じせしめられた。

わたしの主観かも知れないが、四十五年度を通じての特徴は「A感覚」の参加にあるように思う。羞恥責めの対象が、一般的な羞恥そのものではなく、Aへの移行がいちじるしいように感じられたのである。A憧憬は新しいとはいえないが、従来のおしめなどによる依存型？ が一歩進んだような感がある。

A感覚については、しばしば同好者から指摘されているが、わたしの考えからいうと、一Ⅱ幼児期にみられるもの。二Ⅱ同性愛にみられるもの。三Ⅱ衛生観念の破壊にみられるもの……に分けられると思う。

幼児期の性感は、母親の乳首による口腔刺激と肛門刺激だそうであるが、幼児が排便を我慢したり、また反対に多回数になるのはこ

のメカニズムによるだろう。

同性愛者間に於ける重要性が一般観念のようであるが、近頃は性具の普及によって様相は変化していると聞く。なぜかということは資料がないので断定は出来ないが、旧来の衛生観念や、実際の困難さが原因ではないかと思う。

第三に挙げたものは当を得ていないかも知れないが、つまりこういうことである。排便を不浄とする旧来の思想が孤立した便所を造り上げ、羞恥の行為の如き観念を植えた。故にその暴露は羞恥心を刺激する。ある種の精神病患者が、わざと鍵をかけずに用を足し、知らずに入ってくる人を驚かして喜ぶというそうだが、この型の変型した性的発散法といえるのではなからうか。

わたしが、わざわざ「70年度の特徴」とみて指摘したいのは、以上三点の考えから、見せかけの異常ではない「異常」をみた思いがしたからである。この三点の特徴は、今後必ず崩壊してゆく運命にある「観念思想」だと思いが、この羞恥観念に酔い痴れ得るデリケートさが、アブのアブたるゆえんであるといえないだろうか。

アブマニアは時代にも精神的にも逆行していると思うが、決して退行しているのではないだろう。普通と違った形で進歩しているのだといっていいと思うのである。

カッター・小川茂正



被虐の旅シリーズ

## 赤と黄の衣裳

由利美千子

洋裁のお稽古の帰りに映画をみて、伯母の

店のドアをあけた時、私の体の芯がズシンと断層をおこしたような気がした。

葉山の横顔が私の目にとびこむより、体の芯が鳴る方が、さきだったような気がする。

そして、断層をおこした部分から埃が煙を巻き上げるみたいに得体の知れない煙が胸をぬけて背中へ走り、背面一杯にひろがった。

私はドアをしめて、外へ走り出した思いにかられた。

会いたくて、会いたくてたまらない人の姿を見るのは、嬉しいよりも苦しかった。

外へとび出して、呼吸をととのえないと死

にそうだった。

それはオーバーな言い方でも何でもない、恋をしたことのある人なら、解ってもらえるはずだと思う。

「いらっしゃい」

私は、むしろ不機嫌のような言い方で葉山に挨拶した。

自分自身、どんな声か不安だった。

「お土産、いただいたよ。ほら、面白いお面だろう」

伯母は上機嫌で、カウンターの前の棚の上に飾ったお面に目をやった。

（旅行してたのか……）

私は何となく、ほっとした。

（新しい恋人が出来たわけでもなかったんだわ。けど、旅先でも、あんなことするのかしらん？）

私の胸のどこかが、こわばった。

お面は日本のものではなかった。

海の向こうの、多分、南米あたりのものらしかった。

（いったい、何をしている人なんだろう？）

「少し、やせたね」

彼は私を見て言った。

（先生のせいよ）

と云いたかったが、みえすいた口説のよう



で、いやだった。

「結婚の相手は見つかったかい？」

「まだよ」

「早く見つけないと、お婆さんになっちゃうぞ」

「いいわ、そのうち外国へ探しに行こうかしら？」

「パキスタンへかい？」

「パキスタン？」

「そうだ、彼はパキスタン製の革鞭のことを言っているのだ。」

白浜の宿で、彼がその鞭を出してきた時、部屋の中では無理だといい、いつか戸外で牛を追うように、その鞭で追われてみたいと思っただった。

私は思わず「クスン」と笑った。

「先生こそいらっしやりたいんでしょう？」

「いや、ボクは日本の女がいい」

「本当？」

「外国の女は体臭がきついからね」

「まあ、よく御存知ね」

（おぼえていらっしやい）

と私は、おなかの中で言った。

そして、又しても、体の中のどこかが、こわばった。

私は彼を私一人のものにしたいらしい。

私は、やきもちやきなのだろうか。

アタマで考えるよりさきに、体がやきもちをやくのは何故だろう。

けれど彼の彫りの深い顔をみていると、どんな女でも彼を好きになりそうな気がしてくる。しかし、彼に縛られることを本当に喜ぶ女は、そういないだろう。そして、彼もまた誰でもいいというわけでもないと思う。

そして私は、伊波の従姉だといった、あの女を思い出した。

私がもし彼を責めることが出来るなら、責めて責めて、責めぬいてやる。

でも、私はいくら嫉妬の炎を燃やしても、彼を責めてそれを消すことは出来ないのだ。

私は私の炎を彼の手によって、布ぎれではたいて火の手を消すように、叩きまくって消してもらいたいのだ。

それが被虐を喜ぶ私のサガなのだから仕方ない。

「美っちゃんを一日、借りてもいい？」

彼は伯母に言った。

私の胸は喜びにおどった。

「日本の秋を堪能したいんだ。一人旅はもう飽きたから、つれが欲しいんだ。お嬢さんに

変なことはしないから、借りてってもいいだろうか？」

「私でよかったら、変なこと歓迎しますわ、先生なら……」

伯母は言った。

「私が十年若けりゃ、すてておかなかったのに……しゃあない。美っちゃんのお相手でどこへ行くの？」

「から松の林を歩くには、清潔ムードが向いてるだろう。信州へ行くか」

彼は私の顔を見て意味深長にほほ笑んだ。

○

彼は汽車で行こうと云った。

私はだまっとうなずいて、新大阪の新幹線の乗場に近い改札口で会う約束をした。

彼は身軽な姿で近付いた。彼の手にしているスーツケースはそんなに大きくなかった。

私はほっとするような、失望するような気持ちを味わった。

（パキスタンにこだわっているんだわ）

自分で自分に言った。

そのスーツケースでは到底、あの長い鞭は入りそうになかった。

「会いたかったわ」

列車が走り出した時、私はつぶやくように

言った。二人並んでいるシートは、顔をまともに見ないので、そんな言葉が口にしやすいかった。

しかし、彼は「ボクも……」とは言ってくれなかった。

(じゃあない、年令の差だわ)

と私は思った。

若い男の子たちは卒直にものをいう。時には卒直どころかオーバーな表現さえ平気でする。しかし、葉山ぐらゐの年令は戦中派といふのだろうか、どこかにつつましい日本人の殻をくつつけているらしかった。

「何故クルマにしなかったかわかるかい？」

葉山が言った。

「いいえ」

(クルマを、売ってしまったというのだろうか。贅沢は出来ないんだというナゾなのだろうか。それとも人身事故でもおこして……)

私の考えは悪い方へ飛躍する。

「わからなけりゃあ、いいよ」

「あら、いや、きかして……」

私は、よけい心配する。

「キミと会うの久し振りだろう。クルマでくると、信州の秋を見たいと思ってるのに、京都の秋あたりで沈没しそうだからさ」

「あら……」

私は思わず背中が、カーッと熱くなった。殺し文句というのだろうか。

それは思いがけなく、私の心にひびく言葉だった。

そして私は憎らしいと思った。私は悪い方へ心配していたのに……。こんなのを「こづらにくい」と表現するのだろうか。そして、そんな些細なことで、より一層、傾く女心を知ってのことなら、尚更、こづらにくい人である。

「京都でも、ビワ湖でも、岐阜でも秋のいい所は方々あるでしょうに」

「でも、カラ松はないよ。見たいんだ。カラ松が……」

「子供みたい」

そうだ。私は彼のそういう所が好きなんだとも思った。

すぐく大人かと思うと、子供っぽいところがある。

「それにもう一つ、クルマにしない訳があるのさ」

彼の言葉に私はクスンと笑った。

「パキスタンでしょう？」

「うん」

彼は笑いながら

「こいつ……」

と私の顔を見た。

私は自分の顔が赤くなるのがわかった。

「あれは来年までおあずけだ」

「どうして？」

「あれを使えるのは北海道よりないよ。しかし、もう雪が降り出すからね」

「北海道……いいでしょうね」

私は雪の中でも、いいと思った。

この間の青い細い鎖は雪の中で、私の肌を美しくみせてくれるだろう。

黒い紐でもいい、雪の白さに、肌の白さはかないっこない。それを美しく見せるためのアクセサリーが鎖や紐なのだ。

そして、あの革鞭は私を気絶させるかもしれない。私は深々と雪に埋まる。

風がすぎると、煙が立ち昇るように雪が舞う北海道……。

私はいつか、北海道の雪の中へ、彼の手で埋められてみたいと思った。

○

名古屋で乗りかえて、長野行の列車に乗った。

グリーン車は、新婚らしいカップルが多か



った。

男の肩に頭をよせて、仮睡しようとする女を、いとしそうに見ている男——。多分、婚前にある程度のふれあいがあったカップルだろう。

そうかと思うと、ものもいわずにお互いに週刊誌を見ているカップルもある。

そうした夫婦は、みんな正常な愛のいとなみで満足出来る人なのだろうか。

もし初夜の初々しい花嫁を縛りたくなったら、どうするのだろうか。

もし花嫁自身、新郎のとりこになったという実感を、ぐるぐる巻きにされることで表現したい欲求があったら、どうするのだろうか。

こんな時、女は反対の求め方をすることがある。

週刊誌には女の縛られた漫画なんかがよくのっている。それを、わざと男に見せて「こういう絵に興味をもつ男性って多いんですってね。いやぁね」

なんて言ってしまうのだ。

男は女のウソを見ぬけない。本当に厭なのだと思ってしまう。自分が興味をもっているも、それを引っこめて

「そんなのはヘンタイだよ」

なんて、すましてしまう。

そして他に何でも気楽に話せる女性が出来ると、

「うちの、そのケがないんだよ」と打ち明ける。

女が素直にならないのがいけないのかもしれないけれど、「私、縛られたいの」とは、言いにくいものなのだ。それを察してもらいたいと思うのは無理だろうか。

けれど私は、葉山という相手を得た。

それ自体は幸福なのだが、恋の苦しさの方が大きいかもしれない。

「あら、デゴ一よ」

私は自分の変な考えごとをたち切るように急に大きな声を出した。

列車は、もう木曽路にかかっていた。

窓の外に、蒸気機関車の姿がみえた。

「何だい、デゴ一って……」

「あら、先生、知らないの。D五十一って機関車よ。ファンが多いのよ」

若い自分が知っていて、どうして知っていなうな彼が知らないのか、私は本当にたのしかった。

「木曽路もいいね、一度こようね」

そういう約束が、たとえカラ約束に終わっ

ても、女というものは嬉しいものなのだ。

塩尻で乗り換える時、釜めしを買った。

罐ビールで釜めしを食べながら、私は又、

今晚はまともに夕食を食べられないことを覚悟した。

「心配しなくてもいいよ」

彼は微笑んだ。

私の思いが、どうしてすぐに通じるのだろうか。

「白浜じゃ随分、いじめたね。フラフラだったじゃないか」

縛られて手の出せない私の目の前で、一箸も食べていない夕食がたたづけられた時、空腹よりも別のつらさがあった。けれどそのすき腹のまま、いくつかある湯舟を順に湯につけられ、コンクリートの通路を、首の鎖で引かれながら、這って歩いた思い出は今となると苦痛の実感がなかった。

女の体は、お産の苦しみを忘れるように作られているのだろうか。だから死にそうならさでも忘れられるのだろうか。

彼は白浜でいじめた詫びに、今日は、のんびり旅行させてやろうと思っているのだろうか。

それでは、つまらないと思う。

久し振りに会った彼に、私はいじめて、いじめて、いじめぬいてもらいたいと思つていた。

茅野で列車をおり、タクシーで旅館へつくまで、私は彼の気持が不安だった。

普通なら、何かひどいことをされるのではないかと不安をもつのに、私のは、ひどいことをされないのではないかと不安をもつ。だから倒錯という言葉が生まれるのだろうか。

部屋へ通された時、彼は立ったままで鴨居に目をやった。

床の間のように作られている場所の上に、化粧板のつもりなのだろうが、板のように薄くはなく、少し厚みのある十五糎幅ぐらいの木が横にわたっていた。その木の上も下も空間になっているのだ。

そして、入口に続く広い廊下はベランダのように椅子や卓がおかれていたが、その廊下より一段高く座敷があり、座敷と廊下を襖でへだてているのだが、その襖の上が空間になって床の間の横木がカギの手に続いていた。

多分、襖の上も又、小さな障子か襖を入れようとしているのだろうが、まだその準備が出来ないのか、座敷と廊下をへだてる襖をあけ放せば、その上の鴨居は、まるでむき出し

の棟木のようにみえる。

彼はそれを見廻すとニヤリと笑った。子供がいたずらを見つけたような微笑だった。

私は何かしらん、期待の喜びがひろがってくるのを感じながら、同じようにニヤッと笑った。

○  
宿の前は溪流になっていた。

私たちは宿の下駄をはいて、その流れのそばへおりていった。

流れは岩にぶつかって、白い泡を立てていた。

その岩に丸木がかけられ、向こう側へ行けるようになっていた。

私たちは下駄をぬいで手にもつと、その丸木を渡った。丸木の長さはそんなに長くなくあとは岩から岩へとび移らなければならなかった。

さきに立った彼に

「先生、手をかして」

と、私は甘えた。

私は手にした下駄を彼に持ってもらい、その上、片手を引いてもらって溪流を渡った。

あとは細い落葉の道が続いていた。

落葉の匂いは甘く、香ばしかった。

私は、ふと六甲の夜の匂いを思い出した。

「先生、香織さんで御存知？」

私は少し皮肉っぽく言った。

「香織？」

彼は立ち止まって私の顔を見た。

「ええ」

「誰にきいたんだ？」

「さあ、誰かしら？」

私が、からかうような瞳で彼を見たのが、ひどく癪にさわったのだろうか。

「キミは……」

と、彼は言葉さえ、とぎらせると、私の顔をじっとみつめたが、急に背中を見せると足を早めて小道を上って行った。

「先生、先生」

私は急いで追った。曲りくねっている道はすぐに彼の姿を茂みの中にかくしてしまう。

大股にぐんぐん歩いていく彼を追うのに、

私は駆けるようにについて行くのだが、爪先上に登っている山道は、平地を駆けて追うようにはいかなかった。

落葉をふむ自分の足音と、流れの音しかきこえなかった。

「先生」

よんでも答えがない。道の片方は雑木林の



下を溪流が音をたて、谷の向こうは屏風のよ  
うな山肌がせまっていた。そして道の片方も  
又雑木林の茂みが順に高くなり、空さえ晴れ  
ているのか、曇っているのか、さだかには見  
えなかった。

しめって、薄暗い谷の道なのだ。

やがて、そこだけが、灌木の茂みが刈りこ

まれたようにあいていて、落葉が重なりあつ  
て敷きつめられたようになってい場所へ出  
た。

葉山が仁王立ちになっていた。

「服をおぬぎ」

彼は言った。

「生まれたままの姿になるんだ」

「こんな所で？」

私は、ひるんだ。い  
くら谷あいの道とはい  
え、誰か通るかもしれ  
ない。

「ボクは、ひとに批判  
されることは大きらい  
なんだ。まして、過去  
にふれられることは、  
なおきらいだ。ボクだ  
ってキミの過去のこと  
は何もきかないじゃな  
いか。キミはボクを不  
愉快にした。よっぽど  
もう別れてさきへ帰ろ  
うかと思った。けれど  
方針をかえたよ」  
「どうするの？」

「服をぬげと云っているんだ」

私は上着をぬぎ、スカートをとった。

「スリッパも、パンティもとるんだ」

私はいわれた通り、生まれたままの姿にな  
った。

彼はズボンのポケットから細い紐をとり出  
した。

「手をうしろにまわすんだ」

私は意志を失ったロボットのように、彼の  
いう通りにする。

彼は私の手を後手にくくった。

風が、さぁと通りすぎると、私の肌は粟  
粒立った。

「寒いか？」

私は、うなずいた。

「あたたかくしてやるよ」

彼は上着のポケットから水色のチューブを  
出した。

私ははじめそれが何だかわからなかった。  
新しい歯みがきかもしれないが、歯みがき  
をこんな所で使う目的は考えられなかった。

彼はチューブから、白い半透明のものを  
出し出した。薬のようでもあったが、薬にして  
はチューブの大きさが大きかった。

その白いものは液よりはかたまっていた。

読者ギャラリー「終宴」須坂 旭



サロメチールのようなものとも違う。

縛られた私は、何をされるのかと不安だった。

すると彼はそれを指さきにとり、私の肌へぬりつけた。

それは糊だったのだ。

グリーンや黄色のチューブはよく見るからもし色がブルーでなかったら、一目で糊とわかったろう。

彼はクリームでもつけるように私の胸へも背中へも、ベタベタとつけた。

「さあ、そこへ寝るんだ」

彼は私をつきとばした。

私は落葉のクッションの上へ転んだ。

ガサガサと落葉が鳴って、その何枚かが、

私の肌にくっついた。

彼は私を足で蹴った。

私は転がった。

普通の家の、玄関ぐらいの広さの所を、後手のまま右に左に転がされた。

小さな紅葉の落葉は、糊で私の肌にはられた。

けれど、人間の体には起伏がある。いくら転がっても、くぼんだ所にはつかなかったし又、いったん貼りついて、又とれてしまう

葉もあった。

赤というよりも、乾いて赤黒いもみじの葉や、まるで小判をばらまいたような、楕円形の黄色い葉もあった。

又、同じ黄色でも山形に切りこみの入っている葉。黄と赤とまじり合っている、指をとじた手の平ぐらいの大きさの葉もあった。

又、お相撲さんの手の平ぐらいの暗紅色の葉もあった。

私の体は動かす度にカサカサと音がした。

彼は落葉の貼りつかない所へは、自分で落葉を拾って貼りつけた。

私は大きな、みの虫のような姿になった。

「どうだ、温かくなったらう」

彼は言った。

「まだ顔が残っている。今、キミを落葉の化け物にしてやる」

彼は私の後手に縛った紐のさきを手にもつと、私を空地の奥へ引きずった。私は立ち上るひまも与えられず、ガサガサと落葉の中を引きずられた。

「さあ、そこへ坐るんだ」

私は立木を背に正坐させられた。

その膝へ、彼は落葉をかかえてきて山にした。

まわり一杯に落葉があるのだ。その赤や黄の色で、目がチラチラするほど、谷あいのくぼみに吹きよせられた枯葉は多かった。

彼は私の口の周りにベッタリと糊をつける

と、大きな葉でフタをするようにおった。鼻の穴までおおわれたので、私は息苦しくて、じっとしていられたかった。

私は糊のついている唇をぐっとあけて、舌で枯葉をおしやった。枯葉は簡単に落ちた。

「何故じっとしていない。舌で落としたんだね。舌を出してみろ」

言われてどうして舌が出せるだろう。私はじっと口をむすんでいた。

「出してしろ」

それでも口をかたく結んでいたら、彼は下唇を指ではさんでギュッと引っぱった。

痛くはなかったが、下唇をわざと大きく突き出すように装った土人の顔のように見えるかと思うと、恥かしかった。

「舌を出してごらん」

私は仕方なく舌を出した。

彼はズボンのポケットからクリップをとり出すと、下唇と舌と一緒ににはさんだ。

「いい恰好だよ」

彼は笑った。



そして額や頬に糊をつけ、ベタベタと枯葉をはりつけた。

「面白い動物が出来たね」

彼は自分の着想に満足したらしかった。膝から下は落葉に埋まり、胸の隆起も肩も顔も落葉でいろどられた私は、それだけなら、むしろ美しい彫像であるかもしれないのに、ダラリとたらしした舌と下唇をクリップではさまれて、よだれが口のはたを伝っている図は、やっぱり美しいよりは虐いたげられたケモノなのだ。

「全身にコールドタールを塗ってそれに羽毛を貼りつける刑罰があるそうさ。キミのは、そのイミテーションだ。コールドタールに羽毛を使うと、皮膚呼吸が出来なくなつて、苦しみ死にするんだよ。キミのは糊と落葉だが、どうだい、苦しいか？」

彼に言われ、私は急に不安になつてきた。

私はガサガサと体を動かした。

まだ苦しくはなかったが、死ぬのは恐ろしかった。

「かんにんして……」

というつもりが、舌をはさまれているのでケモノのような、声しか出なかった。

私は縛られた木から、のがれようとした。

しかし、それも無駄な努力だった。

「木の葉の化けもの、しばらくそうしておいで」

彼は私を置き去りにしようとしている。どうしよう……。

「いや、いや」

と言つたつもりだったが、それは「ヤーヤー」というおかしい声しか出なかった。

「人が来たらこまるといふんだらう。じゃあもっと、奥の木へ縛つてやる。さあ。こっちへくるんだ」

彼は木に縛つた縄をといた。

その瞬間、私は逃げようとした。

しかし、彼は縄尻をぐつと引いた。

「クリップをもつて来てよかつたな」

彼はひとり言を云いながら、私の乳房の上の木を葉をはがし、乳首をはさんだ。

「逃げようとした罰だよ」

「痛い……」

それも言葉にはならなかった。

「もう一つ、罰を与えてやるよ」

彼は私の髪の毛をつかむと、ぐんぐん引つ張つた。そして、それを細い木の根元へくると巻きつけようとする。私は体を横倒しにするより仕方なかった。所々木の葉がはが

れて、所々木の葉がついてい脚をバタバタさせた。

いくら丹念に貼りつけても、体全体を被うことは無理なのだらう。それでも小さなもみじの落葉はつましく貼りついていて。美しいというか、奇妙というか。

彼は髪の毛を一本の木に巻きつけて結ぶと別の木に、私の後手に縛つた縄尻を結びつけた。

脚は自由だったが、とてもなげ出して長くのびることは出来ない。私は足をまげて、体を小さくかがめ、髪を引っ張られる痛さと、手首の痛さを少しでも少なくしようとした。ぐるぐる巻きにされているわけでもないのに一本の紐と髪の毛で、私は身動きが出来なかった。

彼は落葉をすくつては私の体にかけた。

糊はもうかわいてしまったので、肌にはりつくことはなかったが、直に私の体は木の葉にうまつた。

「少しそうやっているんだね。そうしたら、もっと素直なキミに戻るだらう、ボクの過去なんか気にしないキミにね」

彼は、そこを去ろうとした。

「ああ……」

私は必死に何かいおうと試みたが、下唇と舌をはさんだクリップは、自由にものを言わせてくれなかった。

彼の姿は、もう私の視野から消えていた。風がカサカサと音を立てても、私ははっとした。

しかし、人は通らなかった。

観光客以外に用のない道らしいし、ウィークデーの夕暮れに、この谷あいの道を散歩する人もいないのだろう。

カサカサと音がする。

何の音だろう。

私は不意に恐怖が胸を走った。

蛇がいるかもしれない。こんなしめった谷だ。人通りも少ない場所なら、安心して蛇が棲息するかもしれない。

もし、まむしがいたら……。

私は何とかして後手の縄をとこうともがいた。もがくと髪の毛がつれて痛かった。クリップにはさまれた乳首も痛かった。それでも私はもがいた。落葉がカサコソ音を立てた。もがいて、音を立てていれば蛇はこないだろう。

人に見られても、マムシにかまれるよりましだと思った。私は足をバタつかせ、無駄な

努力をくりかえした。寒くはなかった。カッカッと暑くなった。それでも縄はとけなかった。

「大分、あばれてるね」

彼は微笑をうかべて近付いた。

「さあ、もう少し奥へ行こう」

彼はクリップをはずし、髪の毛を木からはずし、木に結んだ縄尻もといってくれたが、後手はそのままだった。

「罰はまだすまないんだよ、そのまま歩くんだ。人が来たらマントをかけてやる」

彼は言った。そのマントを宿へ、とりに帰っていたのだろうか。

私は素裸で、まだ木の葉をとるところへ貼りつけたまま、小道をさらに奥へ歩かされた。

縄尻を彼にとられ、どこかも赤や黄の落葉でうまっている小道を歩きながら、私はしあわせだった。彼に縛られていることは、やっぱり、ここよかった。

しかし、それは歩いても痛くない、落葉の道を通っているからだ。このあたりは不思議に松の葉はなかった。やわらかい枯葉の上を素足で歩くのは、縛られていなくても気持ちいいに違いない。

やがて又、小さな滝がみえて来た。小さいといっても幅は三メートルぐらいあった。ただ丈が短かった。

滝はいったん落ちて淵になり、その淵をとりまく岩の間から溪流に注いでいる。そして淵のまわりの岩から、滝の上へ淵をまたいで梯子がかけてある。その梯子を登ると、又、樹間の道になるらしかった。

もう日も沈んだのか、薄暗かった。

「その梯子をのぼるんだ」

彼は言った。

梯子といっても、丸木に丸木を打ちつけた段梯子だ。後手に縛られた身で、どうして、すいすいと登れよう。

「縄尻は持っていてやる。淵へ落ちることはないよ」

彼は、いう。

しかし、私の拙い文章では、その梯子がどんなに危つかしいものか説明は出来ないが、お正月の出初め式にハシゴの上で芸を見せるのを見たことがあると思う。あんなハシゴが丸木で作られていて、それがゴウゴウと音をたてて白い飛沫がとんでいる滝壺の上へ、フタのように渡されているといえ、わかってもらえるだろうか。一步ふみはずせば滝壺に



なっている深い淵なのだ。手を使って、這って渡っても恐いと思うのに、後手に縛られてどうしてそれが渡れるだろう。

彼は縄尻を紐のありったけのばして持ちかえると、さきに登って滝の上に立った。

「さあ、くるんだ」

縄尻を引かれて、私は片足をハシゴにのせた。

裸を寒いと思わなかった。

私は冷汗を一杯かいて片足ずつ動かした。

中頃へ来た時、彼はぐんと縄を引いた。

私は思わず片足をハシゴの横棧の間へ、す

べり落とした。脚がすれて痛かった。

それよりも、片足の膝と胸をハシゴにぶつけ、私はハシゴの上に突っ伏す形で動けなくなってしまうた。

「どうした、早く上れ」

彼は容赦なく縄尻を引く。二の腕も手首ももげそうに痛かった。私はハシゴの間に落とした足をあげることが出来ない。彼が縄尻を引くと私の体は少し上へ上った。ゴリゴリと乳房がハシゴですれた。

「痛い……」

私は悲鳴をあげた。

## ☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対してはても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

「痛けりや引っぱらないよ。ひとりですってこられるんだね」

私は首をふった。それは無理だった。

彼は又、私の縄尻を引いた。

私は胸やお腹で、爬虫類が蠕動するようにハシゴを体中で、おし上った。丸木の木肌にすれて、落葉がとれ、水しぶきの中にまきこまれて消えていった。

滝の上まで上った時、私は立ち上れず、思わず土の上に横になってしまった。

「どうだ、汗をかいたろう」

彼は平気でいう。

「今度は涼しい思いをさせてやるよ。そのハシゴを戻るんだ」

「え？」

私は自分の耳を疑った。

今、やっこの思いで渡ったハシゴを、もう一度、もとへ戻れというのか……。

「戻らなければ、宿へ帰れないんだよ。さあ行くんだ」

又しても彼は、後から小突く。

私はヨロヨロと立ち上った。

そして、体を少し横向きにして、一歩ずつ棧を渡っていくことにした。下りる方が、らくだった。

しかし途中までくると、彼は立ち止った。

「両足を棧から落としてごらん」

「そんな……」

私は、ひるんだ。

すると彼は自分がかがんで、後手の紐を下に引いた。縄尻をハシゴの棧に通して縛りつけようとするのだ。いくらもがいても、私の体は自然ハシゴの上に寝かされてしまった。

彼は後手を棧の一つにかたく結ぶと、私の足を棧の間へ落とそうとする。足を落とせば私は測の上へ吊り下げられてしまうのだ。

「やってみろ」

そういわれても出来なかった。

「いうことをきかないのか」

彼は上から木の枝のさきで、私の体を所きらず突いた。

「痛い……」

私は悲鳴をあげる。その悲鳴より滝壺の音の方が大きく、私の悲鳴は白いアブクの中に吸われてしまう。

「さあ、いうことをきくか」

私の体を突く木の枝に不自由はなかった。グリグリと乳房の下をえぐる。

その痛さに私は云われた通り足をまげて、ハシゴの棧の下へおろした。

「もう片方もだ」

彼は片方の腿を突いた。

私は、それも下へおろした。

乳房から上が、やっとハシゴの上から出ている形で、私の両脚は滝壺に続く測の上に、ぶら下った。しぶきが脚に当たった。手首が痛かった。

「どうだ、涼しいだろう」

彼は、うそぶく。

彼は私をまたいでハシゴの下へおろすと、私の姿を正面からゆっくり見た。

「上から人が来たらボクの目に入る。下から人が来たら教えるんだよ」

「そんな……」

ハシゴから吊るされて、そんな余裕があるだろうか。体の重みが両腕にかかっているのだ、手首はもちろん、腕が折れそうに痛い。私は、それをこらえるために、息を吐くのが精一杯だった。

彼は、そんな私を、あのいたずらっぽい瞳で見ていたが、持っていた木の枝で私の乳首を撫でた。

「ああ……」

こんな姿にされているのに、乳首は敏感だった。

ゴウゴウと音を立てる滝壺のそばに吊り下げられ、痛さと戦っているのに、乳首は別の生物のように、勝手に電気を走らせる。

「痛いのかい？ いい気持ちなのかい？」

彼は平然と乳首のさきを小枝でなぶる。

「ああ……かんにんして……ああ……」

私は小枝をよけようと身悶えした。けれど彼は許してくれなかった。

右の乳首をいじるかと思うと、左の乳首をいじる。そうかと思うと小枝をすてて、両方の手の指で私の両方の乳首を、ぐりぐりと、もんだ。

「ああ……ああ……」

私の体は燃えてくる。それを押さえるには一つの方法しかないのに、彼はただ燃やし、たぎらせる。

「ああ……」

つらかった。

燃えるのが、つらかった。

そして、人通りもない谷あいには、暮色が濃くなっていった。

——(つづく)——

x x x x x



## — セミ・フィクション —



カット・山吹赤茶

## 牝猫と .....

## ..... 鼠の一日

## 座頭孝司

秋晴れの一日、直子の強引な誘いを断わり  
されるわけもなく、私の予定は全部パーにし  
て犬山のラインパークへ……菊人形とテレビ  
塔へのおつきあい、いやお供である。

バカ長いスカート攻勢をどう思っているの  
か、名古屋市内ではまだ半数以上がミニ愛好  
者であるようだ。勿論のこと、直子は膝上三  
十センチ、ともすれば真赤なパンティがチラ  
チラと見えそうな超ミニである。

見上げると首の痛くなるテレビ塔の下まで  
来て、彼女、何を思ったのか展望台まで階段  
を昇っていきうとい出た。面白くもない  
菊人形を見て廻り、いいかげんくたびれてい  
るのに……とは思ったが、それなりの楽しみ  
に気がついて、私より先を行くことを条件に  
出そうとして気がつく、彼女はもはや階段  
口に消えるところだった。

見上げる楽しみがあるとはいえ、エレベ  
ーターなら十分そこそこの昇りが、かくもシン  
ドイものであったとは……。最後の三十メ  
ートル程は、折角の楽しみを賞味するところの  
さわぎではなく、疲れたテナものを通りこし  
てグロッキー状態であった。この時ほど、わ  
が体力の乏しさに悲哀を覚えたこともなかつ  
たが、ようやくにして辿りついた時、彼女よ

り二十分近くは遅れていたようである。その  
証拠は、足速やに昇りきって腹が減ったとみ  
える彼女の膝に、展望台で売っているソバの  
空鉢と、みたらし団子の空皿があったことで  
明白であった。聞いてみると九本たいらげた  
そうである。

展望台の見物人は多く、腰を降ろす場所が  
ない。クタクタの私だが、直子は替ってやろ  
うとは云ってくれない。ええいとばかり、彼  
女の前にヘタリ込んでやった。開き気味にし  
ていた膝の奥から、プーンと汗ばんだ臭いが  
直撃してきたが、勿論避けるはずがない。む  
しろ、その膝小僧に手をかけて引き開け、鼻  
をつっこみたいくらいのもんだが、傍に人目  
があつては我慢するよりしょうがない。

しかし、さすがに彼女。私の気持を察して  
か否か、パツと開いて、だがすぐに閉じてし  
まった。一瞬に近い身じろぎだったが、私の  
目には鮮かに、真赤なパンティと真白な腿肌  
と、そしてそこに印せられた明らかな二つの  
キスマークがとびこんで隠れたのであった。  
そして、ずっと彼女は立ち上った。私の鼻  
の前を、膝小僧がサツと通りすぎていった。  
私は、ヘタリ込んではおられない。仕方なく  
よっこらしよと立ち上り、ヨタヨタしながら

後を追う。展望台の隅の方で外界を見降ろす態の彼女の横に並ぶと、耳に口を寄せて囁くような叱責がとんできた。

「いくらなんでも……。他人がじろじろ見たやないの！」

私はそうかなあという顔で、とぼけてやった。直子でもやはり人目は気になるらしい。

「きのうは、誰と遊んだんや？」  
私も囁き返す。

「なんでそんなこと聞くの？」

ちようどいい具合に、横手に居た一団らしいのが、あっちへ行ってくれた。

ほんの少しだが声を大きくした。

「そやかて……証拠が見えたぜ」

「ああ、これのこと……」

直子は、しゃあしゃあとしてスカートの上から、ちよっと叩くしぐさをした。

「これは、うちのゴキブリ（義父のこと）が犯人や。いつも酒呑んではエッチなことしてくるんやけど、ゆうべは我慢してやって小遣い、まき上げたったんや」

「オヤジと取引したんか？」

「ちがうわ。ゴキブリが夢中になっている間に抜き取ったったんよ。今朝がた気いついて探しとったから、どっかへ落としてきた

んやろ。落とすくらいやったら、全部うちにちようだい」いうて、残りもイタダキよ」

「おお怖わ。うっかり出来んなあ」

「なにいつてんの。あんたが、抜きとるほど持ってたことある？ 今日かて電車賃もないくせに……ええ気なもんや」

なるほど、と私は内心で頷いた。特に今日はどうにもええカッコウの仕様がなないのだ。突然やってきた直子に、引き立てられる様にお供をさせられた形なのだから懐中はきわめてお軽いのである。年中オケラの如き口吻にはいささか承服しがたい点もあるが、今日のところは彼女の自尊心を損わないほうが何かと便利だとの咄嗟の判断で、ご気嫌をとっておくことに肚を決め、

「そらそやなあ」

と頭をかいてみせたおかげで、すぐにソバと団子にありつくことが出来た。効果はテキメン、まことに恵みの早い観音様である。

下りはエレベーターに乗ってくれたので、グロッキーに輪をかけることもなかったが、ようやく広場のベンチに腰かけられた時には心の底からヤレヤレという気持が湧いた。

帰途は駅までタクシーをはりこんでくれたのだが、乗りこんでから、ふと、展望台上で

彼女が他人の目を気にした様子を思い出して不思議な感じがした。

だいたい彼女は、電車などに乗って股を閉じていたことがないといっているのだ。わざと前の席の人に見せつけているとしか思えないのだ。私のほうがヒヤヒヤして、思わず前に立ちはだかってかばうのだが、彼女はそれが気に入らないらしく、ひどく私の足を踏みつけたり、強引に隣に坐らせたりするのである。そんな彼女であるのに、なぜあの時に限って、私を叱ったりしたのだろうか。あまり露骨な覗きこみの形になったからかなあ、チラチラはいいが、マジマジは自尊心を損うのかなあ、などと、ミニからハミ出している太腿に横目を走らせて考えていると、その膝小僧が私のズボンをゴツンと小突いた。

「はよ、降りいな。何をボンヤリしてんの」  
ハッと気がついたら、タクシーは停まって私の横のドアが開いていた。

岐阜までの電車は、幸か不幸か満員で、彼女お得意のチラチラの構えをとる席がなかったおかげで、私もヒヤヒヤせずに済んだ。ところが、そうなればそうなたでまた、物足りない思いがする私なのである。改めて、このヒヤヒヤさせられる楽しみの価値を認めな



がら、ギューギュー押しつけられる彼女のボリュームの楽しさとを比較していた。

まだ布団にもぐりこんでいたところを強引に連れ出されたのだったから、家に帰りついても布団はそのままである。クタクタの上にギューギューだったから、私は部屋に入るなりその布団に転がった。

「フン、よわむし」

直子はそういつて、洗面所に掛けておいたバスタオルを取ってきて座布団の上に敷く。いつもは私にさせることだが、よほど切迫していたとみえる。

私のほうを見向きもしないで、そのバスタオルが濡れ始め、溢れ出したのがタタミを這い出す。そうなると私の疲れのほうが一っこんでしまうから不思議である。

このこと起き出した私がタタミの小川に唇を寄せようとしたとたんに、直子の足がひらめいて蹴り転がされ、仰向いた顔が、彼女の両足首に挟みこまれた。目を開けると、そびえ立つ巨大な円柱を滑り落ちる水滴が見えた。一気に糸をひいたそれは、彼女の足首から接点を伝って私の頬に移った。

「脱がしてよ」

直子の命令口調が落ちてきた。私は直ちに

両手を差し伸ばした。

ぐっしよりとしたパンティが、私の両手に移ったとたんに両頬を挟みつけていた足首が外され、片方ずつ抜けてゆくのが見えたが、顔の上で捧げ持つ形のパンティが、急にぺしやりと私の顔面を包んだ。直子が上から踏みつけたらしいのだ。

冷たい、そして特有の香りに顔全面を包みこまれた私は思わず声を立てたようだが、もちろん払い除けるようなことはしない。私は夢中でそのパンティをむさぼり始めていた。

何か直子がいったようだったが、私はかわず続けていた。すると急に脇腹に相当な衝撃を感じて、とび起きざるを得なかった。直子が蹴りつけたらしい。

「誰か来たっていうてるのに……はよ行き」

そのとたんに、二回目らしいチャイムが鳴った。私は大慌てで布団に顔をこすりつけ、香ぐわしの水分を拭くと戸口へすつとぶ。

何くわぬ顔をして戸を開ける。帰途に寄って注文しておいた寿司が届いたのだった。何くわぬ顔をして頷き何くわぬ顔をして受け取ったものの、出前の小僧が、この独特のにおいに気付かないだろうか？と多少気にかかる。何くわぬ顔をして観察する。小僧はべつ

に変な顔付きではない。気付かれてもどうってことはないが、せっかくの香気を吸われるのが惜しい気がするのだ。

早々に戸を閉めて受け取った二つの寿司皿を投げ出した形のパンティの横に並べる。とたんに直子の手が伸びて、二皿とも取り上げると部屋の隅の机へ運び、窓を少し開けてパクツキ始める。

私が、昨夜入れたままの魔法ビンを持って行って、少し暖かみのありそうな茶をいれてやった時には、二人前のにぎりマグロとイカの四つだけを残して消えていた。

いつものことながら見事な早喰い、見事な食欲である。

「おいしかったわ」

けろりとしていうが、これじゃあ、味わうひまはないだろうと思う。

「僕の分はこれだけか」

「あら、あんたも喰べるんやったの？」

「これだけでいいって、残したんやろ？」

「ちがう。これ好かんや」

「しょうないなあ。ま、それで我慢しよう」

「フフフ。その代わり、味つけたるわね」

意味ありげな微笑に私の胸はおどった。直子は、ゆっくりと、あぐらを組み直した。

## 連載・アブ紳士行状記

## M 派 交 友 録

(14)

△鷹野めぐみの巻▽(1)

鬼 山 絢 策

## 本誌に登場したサジスチン

かつて本誌にも二、三度、寄稿したことのある、鷹野めぐみさんとの交遊を回想してみよう。

本誌の古い読者なら、鷹野めぐみの名を記憶していただける方もあると思う。

本誌にあらわれた最初のサジスチンは、森山美歌さんであると思うが、森山さんについては前号に触れた通りで、私の見た感じではSよりも、むしろMの方の気のあるひとのよ

うに見受けられたし、作品も中野安太郎氏が代筆したとあっては、たぶんS女王としてのイメージがこわされてしまう。次に現われたのが、春日ルミさんであろう。このひとは文章よりも、口絵写真のヒロインとして有名であった。

しかしM写真のモデルは多分に製作者の意図する構想に従って動いている場合が多い。

これは、実際に写真を製作してみると、分かることである。映画などで、例えば、痴人の愛のナオミ役は、京マチ子、叶順子、安田道代と三人のスターが演じたが、製作され



カット・岡たかし

た画面を見れば、これ等の女優さんがS的要素を持っているかに見える。しかし、これはあくまでも演出者の意図に従っているだけで本人も、つとめてSの女性になりきろうと努力しているが、これも演技にすぎない。

そういう面から見ると、モデルとなった女性には、あくまでもイメージの上でのSであるという風に、私は見てしまうのである。

つまり、他動性のSと自主的なSとに、分けられると思う。

鷹野めぐみさんは、その後者で、天性のサジスチンである。



男性のサディストの場合も二つの型がある  
と私は述べた。つまり同性、異性、及び社会  
から受けるコンプレックスから、反動的にS  
となるもの。もう一つは、征服欲が強く、人  
に優れた実力があって、弱者を徹底的に従属  
させなければ気の済まぬタイプ。

この二つがあるが、これは当然、女性の場  
合にも、二つに区分される筈である。

私の知るかぎりのサジスチンは、どちらか  
というと、コンプレックス型の女性が多い。

前に紹介した倉田由起夫人の場合でも、且  
那さんはMではあるが、つき合う階層が財界  
官界の一流人物であり、そういう人々を接待  
するには、どうしても氣を使って、従属的に  
ならざるをえない。その反動が旦那さんと二  
人きりになった場合はSとして現われる。

後に紹介する玉井ひろ美というストリッパ  
ーも、すぐれた美貌とすばらしい肉体に恵ま  
れて（女性にとっては、それだけで実力者で  
ある）しかも、踊りも演技も、しっかりした  
実力をもっていて、収入も多いし、コンプレ  
ックス的な要素はない筈であるが、ストリッ  
パーという職業が、その環境から受ける社会  
性に対してコンプレックスを持っていると、  
私は見た。

倉田由起さんにしても、玉井ひろ美にして  
も、才色兼備で恵まれた環境にあり、一面、  
男性征服欲も強いが、私としては、強いて区  
分すれば、コンプレックス型の方に入れたく  
なる。そういう風に感ぜられるのである。

何故かと言えば、現在は恵まれた生活を送  
ってはいるが、過去において、男性から、或  
いは社会から、精神的な圧迫を受けた、また  
は迫害された、その時点で男性を憎悪し、い  
つか見返してやろうという復讐的な観念が植  
えつけられ、その後、環境が好転して、男性  
からも愛され敬慕されるようになって、憎  
悪、復讐の観念だけは、そのまま心の底に残  
って、それがSとなる――。

そんな風に受けとれるのである。

だからバーのマダムとか芸妓とかいう職業  
にあるひとは、本人には職業からくるコンプレ  
ックス（とは言えないかもしれないが）み  
たいなものが潜在的な観念として、本人の意  
識する与否とを問わず、含まれているように  
思えるのである。

だが、鷹野めぐみさんは全く違う。

その点でも、彼女は数少ない自主的なサジ  
スチンだと思ふのである。

子供の頃から比較的裕福な家庭に育ち、美

人で頭も優れていて、両親も揃っていて、何  
ひとつ社会的に圧迫を受ける素材はない中で  
育ってきて、しかも幼女の頃から、男性征服  
欲が非常に強かったというから、これこそ天  
性の征服者的サジスチンである。

鷹野めぐみさんを私に紹介してくれたのは  
親友、春木俊野氏である。

### 奴隷の証明

春木氏とは三日にあげず会って、一時は池  
袋や渋谷、新宿のバーを飲み歩いたものであ  
る。だが、どうかすると双方、仕事が忙しく  
て、一カ月ぐらい会わないことがある。

その時も一カ月以上、御無沙汰して、久し  
振りに会ってみると、何となく春木氏の顔色  
がよく、浮き浮きしているところが見える。

さては何かいいことがあるかと、そこは敏  
感だから

「何だか嬉しそうじゃありませんか」  
と水を向けると、

「ええ、実はすばらしいひとを見つけたく  
す。僕は今、そのひとに夢中なんですよ」  
と言う目は情熱的に光っている。

春木氏は控え目な男で、女性の前に出ると

感情を、あまり表面に出さないのだが、私と会っている時には自分の気持を、あからさまに出してくる。

春木氏の話によると、鷹野めぐみさんは、日大の芸術学部を出て、現在はN新聞社の広告部に勤めている二十六才のエリートだという。

しかし、春木君にも悩みのたねがあった。それは鷹野めぐみさんに対するライヴァルが居ること、しかも、そのライヴァルである丸谷という男とは、微妙な関係にあるのだった。

丸谷君は、S化粧品宣伝部の男である。

春木君の会社は運送会社で、S化粧品の製品を全国に向けて発送している。つまりS化粧品は、春木君にとっては得意先の会社なのである。

それで、丸谷君を時々バーやキャバレーに招待しているうちに、かなり親密になった。

その丸谷君から打ち明けられたのが鷹野めぐみさんの事で、自分はすっかり参っているんだが相手にはさっぱり通じない。結婚まで考えているのだが、どうしても言い出せないし、まだそこまでの段階に達していない。であんたに橋渡しをしてもらいたい、と頼まれ

た。ともかく、その鷹野めぐみさんに会って見ようということになって、二人を新宿のよく行くクラブに一夕、招待した。

本来なら、N新聞社にとっても、S化粧品はスポンサーだから、めぐみさんにとって、やはり得意先に当たるわけである。

スポンサーの会社の社員とつき合う場合は個人的には対等な筈であるが、やはりどうしても一歩、へり下って御機嫌をとるようにするのが社会的な常識である。

ところが鷹野めぐみさんは、全然そういう意識がなく、逆に丸谷君を顎で使うように、いばっているのだという。

もっとも、鷹野めぐみさんには恐いものなして、丸谷君ばかりでなく、他のスポンサーの社員だろうと、会社の上司だろうと、思うことをドシドシ言うし、彼女のつくったコマースシャルは新鮮なアイデアが豊富で、各スポンサーに好評だというのである。

「何しろ丸谷さんは、うちにとっては大切な得意先でしょう。その丸谷さんが平身低頭している女王様を連れてくるって言うんですからね。僕は随分、気を使いましたよ」

そこで今度は、春木君がめぐみさんを一目見て、ぞっこん参ってしまったのである。

「酒が入ると、すぐ男性罵倒論を始めるんですよ。これは僕にとっては大歓迎だし、丸谷さんも彼女の御機嫌をとるために調子を合わせるんです。もっとも彼も多少、Mの気があるんですね。だから話は、だんだん女性のSについての具体的な行動性を論議するようになったんです。傍についたホステスも話の調子を合わせるためか、Sに興味を持っていろいろ口振りでした。丸谷さんは僕と二人きりでキャバレーなどに行くと、結構、女をからかうんです。かなり、あくどいいたずらをして、それはむしろサディスティックに見えることを平気でやってのけるんですが、鷹野めぐみさんの前に出ると、傍についたホステスの手さえ、さわらないぐらい、お行儀がよくなっちゃうんですよ」

丸谷君と春木氏の鷹野めぐみさんに対する目的は同じようで、ちょっと違う。丸谷君は結婚を最終目標とした恋愛であり、春木氏の場合は奥さんも子供もあるのだから、奴隷希望を目標とした恋である。だから春木氏の方が、いくらか気が軽いわけだ。

好きな女性のためなら、喜んで奴隷として奉仕するというのに、春木氏も丸谷君も口を揃えて賛成した。



「僕は恋する女性のおしっこなら全然、汚いという感じはしませんね。喜んで飲ませてもらいますよ、と言ったんです」

春木氏は、自分の目標をズバリと言つてのけた。めぐみさんは

「口先ばかりじゃダメよ、実行しなくちゃ。」

口先だけなら、命でもあげますなんて、よく言うじゃない。そんなの全然、意味ないわ」

「じゃ、実行して見せます。証明は、いつでもしてみせますよ」

「丸谷さんは？」

「ええ、僕だって、ほんとに好きなひとの命令なら」

春木氏ほどの決意はなく、ちょっとどもりながら、顔をあからめて言った。

「そんなら、ここで証明してみせてもらなさいよ。ふふ」

めぐみさんは皮肉な微笑を浮かべながら、どちらにともなく言った。

「いいですよ。あなたのなら喜んで飲みますよ」

春木氏は、めぐみさんの顔を真剣な表情でみつめた。

「何もあたしが飲ませるとは言っていないわ。女性にどれだけ従属的かという証明をして見

せればいいのよ。あんた、飲ませる？」

めぐみさんはホステスの、れい子という子に言った。

「あらア、二人っきりならね。やってもいいけど、公衆の面前じゃね。あたしもハレンチは大好きだけど——」

「じゃあ、足のうらを舐めさせてやんなさいよ。それくらいなら、できるでしょ」

れい子という子も酒が入っているの、めぐみさんに言われるままに、ストッキングを脱いで白い素足を出した。

「サア、どっちが舐めるの？ 丸谷君？」

イザとなると、丸谷君は赤くなって「イヤア」と頭を掻いて笑いにごまかした。

「じゃあ、春木さん」

めぐみさんが命令するように言うと、

「ハイ、あなた——」

れい子は足を高々と持ちあげて、春木氏の顔の前へ突き出した。

春木氏は、その足首を両手で持って、土ふまずのところへ舌をあててペロペロ舐めた。

「ウワァー、くすぐったい。やったやった」

れい子は足を振りほどくはずみに、したたか春木氏の額を蹴つとばした。

「あっ、ごめんなさい」

「いいんですよ。あなたに蹴られるんなら本望ですよ」

上機嫌で眺めていた、めぐみさんは、何故かこの言葉は気に入らないらしく、ちょっと不愉快そうに眉をしかめた。春木君は、その表情の変化を見逃がさなかった。

「つまりね、めぐみさんは、僕がれい子の足を舐めたのは、めぐみさんの命令に従ってやったのだと思っていたんですよ。めぐみさんの命令で、舐めたくもない足を舐めたと思いたかったんですよ。それを最後にきて、れい子というホステスに、お世辞のつもりで、あなたのなら喜んで舐めると言ったのが気に入らなかったんですよ」

でも、めぐみさんはすぐ機嫌を直して「丸谷君は失格ね。勇気がないわ。いくじなしよ。春木さんは合格。言ったことは実行するんだから」

「ほんと！ この方、頼りになりそうだわ」

れい子は、春木氏の顔を両手で挟んで、口にキスしてきた。額を蹴つとばした、お返しのもつもりであろう。

「というわけでね、その夜は僕が、すっかり点数を稼いじやったんですよ。それに引きか

え丸谷君は消けてしましましてね。あとで僕に紹介するんじゃないかなって嫌味を言われましたけどね。丸谷君に、おかんむりをまげられるのは商売上、困るけれども、それ以上に、めぐみさんは僕にとって大切なひとなんです」

春木君の熱のあげようは、たいへんなものだった。

「しかし、それは珍しい女性ですね。貴重な存在ですね。私にも紹介して下さいよ」

「そりゃいいですけど、二人でも困ってるのに、また三人目に強敵があらわれては、なりたいへんだから——」

「冗談じゃない。あなたからそういう話を聞いた以上、ライヴァル意識は持ちませんよ。それよりも、そういうひとに女王さまとしてモデルになってもらいいたいな」

私は私で、例によって写真のことしか考えていなかった。

「なってくれるかも知れませんか。話のもってゆきようでは」

「じゃあ、あなたもモデルになつてくれますか」

「エエ、いいですよ」

「じゃあ、早速、紹介して下さい」

春木氏も私の頼みでは断わりきれず、めぐみさんと日時を打ち合わせて、新宿の「マスコット」というクラブで会うことになった。

### 爪の垢よりほかの垢

めぐみさんを見た第一印象は、正直言って私の好みには合わなかった。

背はスラリとして高い方だが、やせぎすな身体で、私はグラマーでないと魅力を感じない。だが読者諸氏の中には肥ったひとはイヤで瘠せたひとの好きな方も居られると思うから、そういう好みの方にはピッタリである。

身体の方は好みに合わなかったが、顔は理智的で目が大きく、司葉子型の美人だった。

黒目のかった瞳で、相手の心の奥底まで見通すようにジーツと見つめる。そこには先入観がある故もあるが、サディスティックなひかりがただよっていて、ゾクゾクとするような妖しい魅力があった。

「はじめまして。鬼山です」

私は頭を下げて、顔をおこしたが、鷹野めぐみさんは黙ったままで、会釈をした風にも見えず、私をジーツと見すえるのだった。

「あなたの雑誌は凸版ですの。それともオフ

ですか」

いきなり口を開いたのが、こういう質問だった。

「本文は活版です。口絵、表紙はオフです」

「広告は何頁ぐらい、入ってますの。毎月、どのぐらいの広告収入ですの」

なかなか辛らつな質問である。最初の十五分ぐらいは商売の話で、こんな場所ですりでも商売の話をしているのは窮屈である。それにこういう話をしている時は、めぐみさんは女性という意識を全然、感じない。

幸い春木氏がうまく話題を転じてくれた。

「何しろ、めぐみさんはコワイひとですよ。こないだ新聞社へ行ったら、めぐみさんの机の前に立って頭を垂れている四十ぐらいの人が居るんです。何と、その人が課長さんなんです。課長を自分の机の前へ呼びつけて、ポンポン文句を言ってるんですからね。皆の見ている前でやるんですからね。どっちが上司かわからないんですよ」

「ああ、あの禿は頭が固いのよ。いつも頼む頼むと頭ばかりペコペコ下げるしか能のない男なのよ」

「恐れ入りましたな。じゃあ、あなたは広告部では随一の実力者なんですね」



「我がままを通させてもらってますわ」

「しかし、女性のあなたにかなわないということは、ほかの男性がだらしないということとすな。天下に冠たるN新聞社としては、ちょっと困ったもんですな」

私は、いたずらっ氣を起こして、毒舌を吐いた。

「申しわけございません」

めぐみさんは笑いながら、この時はじめて頭を下げた。春木氏は

「全くですね。めぐみさんの爪の垢でも煎じて飲ませてやるといいですね」

「爪の垢よりも、もっと他の垢の方が効き目があるんじゃないかな」

「あら、他の垢って、どの垢？」

「例えば、鼻くそとかへそのゴマとか——」

「あたし、おへそにゴマなんか溜まってないわよ。ホラ——」

めぐみさんはブラウスにスカートという軽装だったが、いきなりブラウスを捲ってスカートをずり下げ、おへそを出して見せた。

「あ、なるほど、これはかわいらしいおへそですね。じゃあもう少し下の方の垢でも」

と春木君がおへそに顔を近づけたところ、

「何言ってるのよ、バカね！」

パシン！

と平手で頬ぺたを叩かれた。

「図にのるんじゃないよッ」

傍に坐っていたホステスが、笑いこらげている。

「男って動物は、これだからイヤんなっちゃうわね。ゲスな畜生よ」

めぐみさんは、おへそをしまいながらホステスに話しかける。このクラブは上品だからホステスも、ただ黙って笑っている。

「どうもすみません」

殴られた春木氏があやまっている。

「大体、いまのセールスマンと言うのは、得意先に、ただペコペコ頭を下げて御機嫌をとるばかりが能じゃないのよ。不勉強よ。麻雀だの、こんなところへ来て酒を飲んで、スケベな話ばかりしてるんだから」

「こんなところ」と言われたのでホステスが

「申しわけございません」

と、丁寧に頭を下げた。このホステスは上品に、とりすましている。

「しかし、あなたのような才色兼備の女性は世の中の男性がバカに見えて、結婚の対象となるような男性が見当たらないでしょう」

「ふふ、そうでもないわよ」

めぐみさんは高々と足を組みかえた。ほっそりとした脚線美が御自慢らしい。

「大会社の社長とか、有名な芸術家とか、タレントとか、そういうのでなければダメでしょう」

「イヤイヤ、そんなの大嫌い。鼻持ちがならないわ。そういう奴等は土下座してきたって頭を蹴っとばしてやるわ」

「スゴイ！ じゃ一生、独身で暮しますか。多くの男共を奴隷にして」

「ウウン、結婚する気はあるわよ」

「どんな人がいいんです？」

「そうねえ、おとなしい男がいいわね」

ここまでは私との会話である。この時、春木氏が急に真顔になって、

「あのね、鷹野さん。あなた、丸谷さんをどう思われますか」

「どう思ってます？」

めぐみさんはニヤニヤいたずらっぽい笑いを浮かべて春木氏を見た。

「実はね、彼はあなたを真剣に愛しているんですよ。あなたのような方と結婚できたら最高の幸せだと、彼はそこまで考えているのです。僕をあなたに紹介してくれたのも彼の口からではどうしても言えないから、僕にあな

たの気持を聞いてくれと頼まれたんです」

「あっはははは、ナンセンスだわ」

「向こうが真剣に恋しているのをナンセンスと片づけるのはちょっと可哀想じゃないですか。賢明なあなたにも似合わぬ軽卒なお言葉だと思いますが」

「あっははは。何を言ってるの春木さん、彼が真剣に愛しているという具体的な証明は何なの。彼があたしに、何かそういう行動に出たことがあるの」

「さあ、そこまでは聞いていませんが——」

「彼がただ愛していると言っただけの言葉を信じて、あなたがあたしに向かって彼は真剣に愛しているのですよと言いきることこそ軽卒じゃない？ あなたはその考え方が。ただ愛している、好きだと言っただけならまだしもだけど、結婚まで考えているというなら、それ相当にもっとあたしを理解し、彼自身をもあたしに理解させようと、努力すべきでしょう。彼は全然そんなことしてないわよ」

「そりゃ心の中に思っているだけで、したくてもあなたの前に出ると何も言えなくなってしまうんです。それが恋と言うものです」

「冗談じゃないわよ。だから男は、いくじがないって言うのよ、それじゃ相手に通じっこ

ないじゃないの。昔の女のくさったのみたいだわ。いまの女はもっと行動的よ。真剣に恋をしているなら勇気を出して何か意思表示を具体的にすべきじゃない？」

「彼があなたを見る時の、あの熱っぽい眼に何もお感じになりませんか」

「あっははは。あなたも幼いわね。いい年して。そんなの少年少女の、恋のまねごとじゃないの。とにかくそのくらいのことで、結婚という最終目標にまで飛躍したものの考え方、彼もあなたも軽卒すぎるわよ」

「軽卒軽卒、大軽卒だな。これは春木君の負けだ。この問題は春木氏に再調査を命じて却下します」

実際は、もっと二人で議論したのである。傍で聞いている私は退屈を感じたので、中に入って取りなした。

「大体ね、あんなくだらない男をあたしの結婚の対象として考えるなんて失礼よ」

「そうだ、そうだ。失礼きわるな」

私は調子にのって、つい口が合った。

「鬼山さんはまだ丸谷君に会ったことがないんでしょう。それなのにどうしてあの男がくだらない男だと分かるんですか」

春木氏は、こんどは私の方に矛先を向けて

きた。

「イヤ、これは失礼。失言取り消します。しかしね、お二人の話を聞いて前後の事情から鷹野めぐみさんのようなトップレディには、ふさわしくない男性のような気がしたただけなんです。私の臆測で判断した軽率をお詫びします。これだから男なんてみんなダメなんだな」

「先廻りされちゃった。あははは」

彼女は組んでいた脚を上へはねあげるようにしておろした。私はその向かい側に坐っていたので彼女のスカートの中が、かなり奥まで覗けて見えた。私はハッとした。パンティらしきものが見えなかったからである。彼女はパンティをはいてないのかもしれない。

「だけどね春木さん。淑女の前で結婚なんていう問題を、我々他人の居る前で軽々しく口にしたことは、めぐみさんに対して失礼であることは確かだと思っただけがね」

「分かりました、分かりました。みんな僕が悪いです。僕が大軽率でした。あやまります」

「あやまるくらいで済む問題かな。ねえ、めぐみさん、頭をさげたくらいでお許しになるのですか」



「ふふふ、許せないわ」

「じゃ、罰を受けます。どんな罰でも受けます。土下座もします」

春木君は椅子からおりて、じゅうたんの上に両手を突いて、めぐみさんの前に頭を下げた。

### 勇 気 ある 女 性

「あなたは口であたしをもちあげるようなことを言っているが、心の中ではあたしを軽蔑してるのね。あんな丸谷みたいな男をどう思うかなんて、聞いてくるんだから」

「ハ、申しわけありません」

春木氏は、じゅうたんに額をすりつけんばかりに平身低頭した。

春木氏としては、勇気ある行動だった。

開放的なMの性格の人は、人前でこういうことをするのに、あまり抵抗を感じない。だが隠ぺい的なMの人物は、二人きりの時なら何でもやるが、こうした多勢の眼のある場所では尻ごみする。

春木氏は後者の方だから、M派の人間以外の居る場所では、極端に隠してきていた。しかし最近は場数を踏んで、かなり開放的にな

ってきた。

春木君が低頭して、頭をあげた時

「誰が頭をあげると言ってる？ あたしが許すまでおじぎしてなさい！」

春木氏を上から見すえるめぐみさんの眼はいままでにない、きびしさがあった。

「あ、まだ許して頂けないんですか」

「うるさいわね。さげろと言ったらさげるのよっ！」

めぐみさんの右脚がサッとあがった。靴は脱いでいたがストッキングをはいた足が春木氏の頭の上にのせられ、グッと踏みつけた。その脚のあがった瞬間、春木氏は眼近かにスカートの中を覗き見た。私のところからも見えた。前よりも更に高く上げられたため、太腿のつけ根まで見えたが、パンティは見られなかった。暗い奥が見えたと思った時は、足に力が入り、春木氏の頭がグーッと、さがつてしまったのでよくは分からなかったが、たしかにノーパンティのように見えた。

じゅうたんに顔がめりこむほど踏みつけておいて

「こういう人をいんぎん無礼というのよ。ヘラヘラおべんちゃら叩いていて心の中では軽蔑してるんだから」

「イヤ、そんなことはないですよ。春木君はあなたを崇拜していますよ」

私は、春木氏のためにとりなした。

めぐみさんは頭の上から足をどかして

「ハイ、靴」

と足を顔の前にさし出し

「頭をさげたままで、はかせるのよ」

と命じた。春木氏は何を見たのか、声も出ずに、おじぎをしたまま這うように靴を両手に持って、うやうやしく靴をはかせた。

「女性が男性の上に君臨する美しいポーズですね。あなたにかしづく男性は相当居るんでしょう」

「別に——学生時代は変なのが居たけど」

「日大の芸術部でしたね」

「演劇の奴等なんかには相当いかれたのが居るのよ。写真科の奴でヌードを撮らせてくれなんて言ってきた奴が居たわ」

「で、撮らせたんですか」

平伏していた春木氏が、つと首をあげて、めぐみさんを見上げた。

「あたしのヌードは高いわよ、一万円だよって言ってやったらびっくりして引き下ったけど、それからしばらくして五千円にまで下れてきたのよ。撮らせてやってもいいけど

その代わりお前も裸になって、一緒にモデルになれて言っちゃったのよ。そしたら尻尾を巻いて逃げてったわ」

「へエ？ 男が裸になるのは別にそんなに恥かしいことじゃないでしょう。却って喜ぶんじゃないですか」

「妾のいう通りのポーズをとれって言っただのよ。例えば馬になったり、犬になったり、おまるになったり。そういう、条件をつけたのよ。ふふふ」

この時、春木氏がムククリ起き上って

「僕なら喜んでその条件でモデルになりますよ」

「頭を上げたらだめだって言ったら！ いくら言ってもきかないのねッ」

めぐみさんはサッと脚をひらいてソファから立ち上った。さっきからウイスキーやジンをかなり飲んでいり。さくら色に上気した頬にきりっとつり上った眼ざしは妖艶だった。

何をされるのかと、一瞬、春木氏もおびえた表情で美しい暴君を見上げた。

「ここへ、——頭をのせるのよ」

めぐみさんは脚の間の、腰かけていたソファを指さした。

春木氏は、ほっとしたように、めぐみさん

の脚の間へもぐって、ソファに顔を横にしてのせた。

めぐみさんは極めて自然な動作で、スカートをフワッとふくらませて春木氏の顔の上にドッシリと尻をのせてしまった、

「フフフ、こうすりゃ頭が上げられないでしょう」

いたずらっぽい眼で私を見て、ニッと笑った。

「春木君と飲むと、いつもそういうプレーをするんですか」

「だって、このひとの好みでしょ。サービスよ」

「サービスとおっしゃると、あなたはそういうことはあまり好きでない？」

「ふふ、好きだわ。でもこんなの手ぬるいわね。もっと徹底したことをやってみたいわ」

お尻の坐り具合が不安定なので、ソファのアームに両手をついていた。

「ほう。というと、どんなことですか」

「そうね、究極の理想を言えば、もっとも惨虐な方法で殺してやりたいわ」

「こりゃ凄い」

「でも、それは夢想しているだけで実現不可能だから、それに代わる方法をとるより、し

かたがないわね」

彼女は安定をよくするために、あっちこっちとお尻を少しずつ移動させている。

「それはどういう方法ですか。例えば鞭で血がにじみ出るまで叩くとか、逆さに吊るすとか、そういうことですか」

「それもいいけれど、やっぱりへたをしようと殺してしまう恐れがあるんじゃない？ 一回ぐらいなら、どうということないかもしれないけど、何回もやったら、しまいに参っちゃうでしょ」

どうやらお尻がピッタリ安定したとみえてアームにつかまっていた手を放した。手を放せばそれだけ重量が春木氏の顔にかかるから相当に苦しいのではないか。一体、春木氏はどんな顔をしてこの苦しみに耐えているのか私は見たくなった。

「たしかにそういうプレーは危険をとまないますね。それに、いかに相手が承知の上とは言え、身体に傷をつけるということは望ましくないことですね」

「そうしてやりたいんだけど、実際問題としては、あとになってトラブルがおこる可能性があるわね」

めぐみさんもちかなり勇気がある。何しろ人



間の顔の上に腰をおろしているので、その分だけ高くなっている。ソファから上半身がかなり上にはみ出しているの、よそのテーブルから見ても、相当目立つ姿勢である。それを平然としているのだから、たいした心臓である。

もっとも、まだ時間が早いせいか、クラブは空いていて、めぐみさんの後の方、ずっと離れたところに、二組ぐらいの客しか居なかった。

「私も少年の頃から女性にいじめられたいという慾望は持っていましたね。縛られて、身動きできないようにされた上、殴ったり蹴られたりされたいという気持は、少年いや幼児の頃から抱いていましたね。だから、これは性慾以前の本能だと思っんですよ」

「あたしもそうよ。少女の頃の方がいまよりもっと惨酷イメージを描いていたわ」

彼女は尻をグリグリと左右に動かした。春木氏は悲鳴もあげずにこらえている。陶然としているのであろう。

傍に居たホステスは、めぐみさんが春木氏の顔に腰をおろした時に、ソッと席を立てていた。

恐らく眼のやり場に困ったのであろう。

「少年期から青春に眼ざめる頃になって、私のMの傾向は、苦痛をとまなう責め、特に血を見るような責めよりも屈辱を受ける責めの方を好むようになったんです」

「肉体に受ける苦痛よりも精神的な苦痛の方が高度ですわね」

「サア、それはどうか分からないが、その方が安全と言うか、健全というか、健全というのはおかしいかな。しかしそういう風に考えるようになったんです」

「現実的な考え方ね。でも、あたしの場合は少し違うわ」

お尻がどうやらピッタリとつばにはまったよう、めぐみさんの高い姿勢は安定したのか動かなくなった。

めぐみさんは、無言でテーブルの上の煙草を指さした。

テーブルからちょっと離れたので手が届きにくくなった。背をかがめれば取って取れないことはないが、せっかく安定した位置を、崩したくないのだらう。

私はホープを抜き取って手渡し、ライターで火をつけた。めぐみさんは悠然と紫煙をくゆらせながら

「もっと現実的な、現実的ではない、現実

男性をはずかしめる方法があるわよ」

自信をもって言いきる、めぐみさんの姿は一段と大きく見え、崇高な感じを受けた。

それにしても、かなり長い間、乗っかって

いる。  
私は、そろそろ下敷きの春木氏が、心配になってきた。

「春木氏、大丈夫ですか」

これはM派としては弱気な言葉である。私の心中は春木氏を心配する一方、どういう風に乗っかけているのかを見たくてたまらなかつたので、そうでも言ったら、めぐみさんがスカートを捲って見せてくれるのではないかと期待したのもあった。

「ふふふ、交替させてあげましょうか」

「ハア、それは光栄です」

私は、彼女をモデルにした写真が猛烈に撮りたくなった。どうしても撮ってやろうと決心した。

紙数がオーバーしてしまった。今月は、このへんで筆をおかなければならない。

春木氏にはお気の毒だが、このままの姿勢で来月まで辛抱して頂きたい。

カット・豪 城二



(一)

俺は真っ黒に塗った愛車マーキュリー・クーガーを青山のサンドリアンの前につける。着かざった女や気取ってエスコートする男共が憧れと嫉妬の入りまじった目を、車の中でモクをくわえる俺に投げかけてゆく。見るがいい。羨ましがるのがいい。俺はお前達とは違うんだ。貪乏人どもめ。俺はモクを消してゆつくりとドアを開いて降りる。都会は好きだ。特にネオンの夜は、神などというバカくさいものが姿を消して、悪魔という素敵なヤ

異

教

徒

懸賞入選創作

天野 邪 騎

ツが俺を酔わせてくれる。そこには罪などとは四角張ったものがなく、すべてが自由だ。欲望が渦巻き、人間も本来の姿に返ってゆく。

俺は行きつけの秘密クラブに歩いて行く。スモークブラウンのグラサンをかけ、ブリテッシュスタイルに身をつつんだ俺を、男も女もふり返って見て行く。男共の目は敗北の影を宿し、女共の目は俺に訴えてくる。貴方が声さえかけてくれたなら、私、こんな男とすぐ別れて貴方とのデートを喜んでするわ、……と。しかしな、俺はイモには目を止めないことにしているんだ。マア、その程度の男が

お前さんにとっては似合いだぜ。

そのバー、いやクラブは、あるビルの地下にある。このクラブは芸能人とか有名ななどのコネがなくては入れない。クラブの中は三つの室に別れている。一つはバンドが入りダンスが出来るホールで、カクテル光線が眩しく入りみだれている。もう一つは、落ち着いたクリーム色で統一されたエレクトーンの流れるバー。もう一つはショーを随時やっているクラブ。

俺はフロントで会員証を見せて秘密のドアから中に入った。案内のボーイの慇懃な問



いにバーに行きたいと答えると、ハンドランプで俺の足もとを照らして案内する。廊下は暗くボーイの照らす光だけが明るい。バーはすいていた。俺は今夜、ここでモデルのエリーと待ち合わせることにしていたが、まだエリーは来ていない。

バーには三組のカップルが、それぞれ肩を寄せ合ってボックスやカウンターに腰かけていた。この室も暗い。天井の豪華なシャンデリアの中にたてられたローソク一本が放つ光だけが、光らしい光だ。しかし暗闇になれている俺の目にはこの室の隅々までが見える。奥のボックスには、今、売れに売れている男性歌手のMが、清純派で売っている女優のYとキスをしていた。女性週刊誌の記者が見たら喜びそうな光景だ。

しかしこのクラブでのことは他言無用。

もし口外すれば命の保障もない。

もう一つのボックスは、TVタレントの良き夫役の多いKと女性歌手のHだ。HはKの胸に顔をうずめ、手はKの上着をしっかりとつかんでいる。Kの右手はやさしくHのロングヘアを愛撫し、左手は、Hのパンタロンのジッパーのところで隠れてる。下げられたパンタロンから、闇にも白くその太股が見え

た。

俺はそこから目をカウンターに向け、カウンターの反対の端に腰を下ろし、バーテンダーにナポレオンをたのんだ。

カウンターのカップルは、つい最近上京して来た上方のコメディアンFと、新婚間もないEだ。EのダンナのKはホモのウワサが高かったし、事実俺にもカマをかけてきた男だ。Eは、欲求不満にでもなっているんだろう。なにしろ二人が結婚する時、どんなウワサが広まったか俺は知っている。Eって女は一種の色気狂で、だれとでも寝ることで有名だった。そんな女が、ホモのKといっしょになったところどううまくいくはずがない。Kの財産目当てなことは歴然としている。

俺はブランドグラスを持って、俺自身のことを考え始めていた。車は外車を乗り回し原宿の高級マンションに、一人で住んでいる自分のことを……。

○

俺の家は大阪で小商いをしていた。俺は十八の春ヤサグレて東京に出て来た。そして落ちついた所が山谷のドヤだった。何でもやった、食う為に。ドカチンも風太郎も清掃夫もやった。しかし、俺が汗水たらして働いてい

る時、俺と同年位の学生が俺の横をまるで不潔な物を見るようにして女と歩いていった。俺は呪った。神とすべてこの世の善とされていくものを。そして夢見た。金を持ち、車を飛ばし、すました女を抱く俺自身の姿を。けれども俺は知っていた。それが夢でしかないことも。

その反動であろうか。俺は毎晩のように酒を飲み、女を買った。しかしその女は俺の夢に出てくる女とくらべて、何という違いだろう。俺の抱く女は、こんなうす汚い女じゃない。その肌はいつまでも美しくかぐわしい臭いを発していなければならなかった。違う、違う！ こんな売女じゃない。俺は、女をなぐった。めちゃくちゃになぐりけとばした。女は頭を両手で抱え込んで室の中を逃げ回っていた。悲鳴を聞いて四、五人が室に入ってきた。その間に女は逃げていってしまった。俺を止めてくれた野郎達は、俺の気が静まると逃げるようにと行ってしまった。どうせあの女のヒモが、仲間を連れて仕返しにくるだろう。俺は逃げた。別に荷物もないから簡単だった。走った。どれくらい走ったか解らぬくらいに走った。

気がついたら俺は小高い岡の上のベンチに

坐り込んでいた。夜も明け始めていた。まぶしい。太陽がこんなにもまぶしいとは思ってはいなかった。いや忘れていた。俺はポケットをさぐって見た。四千円と少しの小銭しかなかった。もう行くところもないんだ。この俺には、残されたものと言えば地獄ぐらいなものだ。俺はその時、神を呪ったのだ、なぜこの俺を弄ぶのかと。俺は悪魔に笑いかけた。善意に満ちたような顔をして人を引き倒すような者よりも最初から悪意を晒け出している者の方が正しい。人を傷つけ、呪い、憎むこの俺には悪魔のエゴイズムがピッタリなんだ。俺はその時から俺の魂を悪魔に売ってしまった。そして俺の心に今まで、忘れていた笑みが浮かび始めた。失った笑いを取りもどした。しかし、その笑いは今までの笑いと違ってゐる。生まれ変わった俺の悪魔の笑いだ。唯一人、俺しかいない小高い岡からひしめきあった下界を見下ろして俺の笑いは続いた。いつまでも、いつまでも……。

俺はその日、競馬場に行った。第一レースから俺は自分の全財産を賭けた。悪魔にも見放されたら俺は死ぬ以外になかった。いわば命を預けた悪魔との勝負ともいえた。だから俺は何のためらいもなく、全財産を賭けるこ

とが出来た。四一六のブタ。俺にふさわしい数字だった。そして最終レースが終った時、俺は六千万以上の金を持っていた。最終レース、俺は十万円以上にふえていた俺の金を、やっぱり第一レースと同じように四一六のブタに賭けた。勝算はなかった。だが俺は、それまでのレースで俺の気嫌をとり続けてくれた悪魔の本当の力を見たかったのだ。入った大穴六万円の配当。俺はしみじみ悪魔の力を信じた。俺はその時に誓った。俺は、この金を悪魔の一番好きな生贄をささげることにする、とな。

悪魔の一番好きな生贄。そう、この世の美しき女、それも飛び切り高級な澄まし返った女だ。俺が夢でしか抱くことが出来ないと思っていた女だ。

俺はその夜、東京を脱出した。行く先は俺の生まれ故郷の大阪だ。しかし、家なんかには帰りはしない。俺が生まれ変わるにふさわしい場所。人生の勝負に破れた者の安息地。この世の偽善を、取り去った町。明日がない町。悪魔によって甦った俺が、悪魔の像を彫るのにふさわしい町、釜ヶ崎だ。

俺はこの町の安アパートの一室を借りて、悪魔の像を彫り始めた。赤裸々な肉欲、人間

そのものを変えてしまう酒、その他もろもろの欲望を血肉に変えて、悪魔は成長していった。人間の弱点、もろさを悪魔のカットと開かれた両眼は見えていた。

悪魔の像は彫り上がった。仏像にはない太ましい姿がそこにはあった。その心は神以上に寛大であり、神以上に絶対であった。悪こそ人生の華だ。罪を犯すことこそ人間本来の姿だ。神は偽善だ。悪魔こそ人間が心をゆるしてもよい者なのだ。その像は語り、宣言しているのだった。

俺はその会心の像を持って再び東京にやって来た。悪魔よ、見ていてくれ。俺はお前を喜ばしてみせる。お前の大好きな、とび切り上等の女を、お前の目の前で、お前の一番好きな方法で料理して供えようではないか。

俺は原宿にマンションを買い、車も手に入れた。そして悪魔との約束を果たし始めた。あれから一年、悪魔の前でどれ位の女が泣いた事だろう。M財閥の令嬢、有名なプリマドンナ、高尚とされている種類のあらゆる女、しかも常は澄まし返った女達が次々と悪魔の前で俺に哀願し悲鳴をあげた。そして俺に罵倒の声を浴せた。泣け、わめけ、罵倒しろ。それらのもの総てが悪魔の血となり肉と変わ



っていくのだから。

しかも知っているのだ、俺は。その体の自由を奪っている皮紐や、鎖、鞭が、お前達にとってはなくてはならない物であることも。

罵倒したその同じ口から歓喜の声を聞くのもすぐであることも。憎んでも憎み切れないはずの俺に血を滲ませた肌をすり寄せ、あつい息をせつなげに吐いているメスブタどもめ。

一日五百円で男と寝る女でさえも、そんな姿を見せなかったぜ。そんな俺の言葉さえも彼女達にはこちよく響くのであろう。俺の力一杯ふり下ろす鞭さえも、そのシリをふって催促しだす。そして次の俺の攻撃を心待ちにする様になっている。そして俺の小水さえもそれが最高級のシャンプンであるがごとく飲み、まだ飲みたらないようなガラガラした目で俺を見つめる。何がハイソサエティだ。どこをとれば上品などと言う言葉が出てくるのだろうか。しかしそんな生活も日本では一時休みだ。明日からはヨーロッパで俺の悪魔は動き出す。だから今日は豪華にして幕をおろすことになるだろう。

最後、当分の間、日本を留守にするフィナーレ、その生贄が世界でもベスト3に数えられるモデルのエリー。日本での最後には本当

にふさわしい生贄だ。悪魔よ、充分に日本娘の血を吸ってくれ。その華ぐわしい臭をかいでくれ。その肉を、えぐり取ってくれと俺は願わずにはいらなかった。

○

俺は横に人が坐す気配を感じて、思い出の世界から、今の世界にもどった。坐ったのはエリーだった。この美しさは何と言えはいいのだろう。純粹の日本人でありながら、どことなくジンガイを感じさせる女だ。それは身体の大きさにも関係しているのだろう。

身長は百六十五センチはあるだろう。しかも彼女は多くのモデル達のようにヤスギスな肉体ではない。そのバストは大きいとは決して言えないけれども形よく盛り上っている。ウェストは形よくくびれていて、ヒップは肉づきよく、外人の女に多くみられる様にヒップアップされていた。とは言っても寝るのは今夜初めてであるのだが、俺は彼女のヌードグラビアを見て知っていた。しかも写真を通して彼女の肉体は、すでに充分、男を知っている事を俺に訴えかけていた。俺は日本の最後の生贄を彼女に決めた。

しかも彼女は美しいだけではなかった。彼女は国会議員の中でも、その勢力では並ぶ者

はないと言われているSの女、いや、女ではない、Sにとっては女神にも等しい存在である事実も俺の決心に拍車をかけた。自分の欲のこしか考えないで、財閥に結びついて私利私欲を肥やすことしかない男。そんな男の女神とも言えるべき女をスタスタにする。考えただけでも俺の心は唖り狂った。

俺は綿密な計画を立てた。誘拐して犯すのもいいだろうが、そんなことは本物の悪魔のすることではない。女にしたところで、そんな方法で犯されたのなら、その時自分を忘れるような歓喜の声を上げたとしても、むりやり犯されたんだと思え、進んで辱しめを受けたいにしても罪の意識はうすめられる。しかし自分から喜んで下着まで取ったのであれば自分自身への嫌悪は激しく残るだろう。なぜなら自分自身も、自分を辱しめた犯人の協力者になっているからだ。プライドの高い者ほど自分の手で自分の誇るプライドを傷付けた時のショックは大きい。今までが高ければ高いほど、その反動は大きく、どこまで崩れていくか計り知れないものなのだ。

俺の手で自分自身のプライドに傷をつけた女共の多くは自分自身を無くし流転していった。ごく少数が今までの火遊びをやめたが、

しかしその者達でさえも、魂のぬけたような人間になってしまっていたのだ。

俺の計画は何の障害もなく着々と進んでいた。俺は今日まで二度ばかりデートしたがエリーの過去の男みたいにすぐ手は出さなかった。そして毎日のように彼女の元にマーガレットの花を送り続けた。しかしそんな仮面をつけた芝居も後数時間で終わりだ。仮面を取った俺の素顔を彼女に見せるのもすぐだ。

## (二)

俺はまだ仮面をつけたままエリーをエスコートしてそのクラブを出た。今夜は俺の室でたのしい時間、そう、たのしい二人だけの時間を過ごすことになっていた。俺がこのことをエリーに話すと喜んで賛成した。無論、俺は旅行のことを話し、日本を長く離れる思い出に君と二人で最後の夜を過ごしたい、と思いつめた様に言ったことも彼女には気に入ったのだろう。

室に入りシャンパンで乾杯をした。そしてほのかに酔いが回ってきた。室の電気を消しムードランプの下で二人は踊った。そして当然のように激しく抱きあい、舌を絡ませ合っていた。

俺は彼女を抱き上げてベッドルームに運び込んだ。彼女は俺の首に手を回し、目をウツトリと閉じていたが、彼女の胸は、次の俺の行為を待ちこがれているように波打っているのだった。

俺は彼女をゆっくりとベッドに下ろした。シャツのボタンをはずし上体を起こしてキスをしながら脱がせた。そしてパンタロンも。俺は次々と作業を続けていった。ブーツも黒のストッキングも、その美しい身体を締めつけていたオールインワンの下着も。

彼女は可愛いビキニの花柄パンティしかつけないで俺の目の前に横たわっていた。香しいミツコのにはいをただよわせて、彼女は服を脱がされただけでまるで愛撫を受けたように顔を紅潮させ、淡い溜息さえつき、足をモジモジさせて俺を待っているのだった。横にすべりこんだ俺の、左胸に咲いている黒バラが激しく息づいていた。

俺の仮面を被ったままの攻撃が始まった。場数を踏んでいる俺の手にかかって、エリーの持っている情事の経験などひとたまりもある筈がない。まるでケタ違いの翻弄に彼女はたちまち口を大きく開けて、音にならない透明の声を発し、そしてガクンという音がする

ようにして失神の世界に没入してしまった。

俺が仮面を取る時が近づいたようだ。俺はまだ気を失っているエリーを抱きかかえて別室に運んだ。黒一色で塗り込められた室。壁も窓にかけられたビロードのカーテンもすべてが黒に統一されていた。

室の中央には黒い皮が張られた手術台のようなベッドがそなえつけられていた。そのベッドにエリーを寝かせて、両手両足を大の字に、それぞれのベルトで固定した。今までどれほどの女が、このベッドに涙の雫を落とし泣きわめき、俺に哀願し、そして罵倒の言葉を投げかけたろう。俺は一瞬、そのような事を考えた。

しかし俺はすぐに我に返った。そんな過去の事を考える時ではない。今こうして目の前に最上級の獲物が横たわっているのだ。俺はふり返って悪魔の像を見た。その両眼は怪しい光を放って料理人の腕前のほどを見つめている様だった。待っていて下さいヨ。今夜は一世一代の料理を作ってごらんに入れます。材料も天下一品だ。腕のふるいがいがあるうと言うものだ。

俺はエリーの歯に自殺防止用のビニールで出来た器具をつけた。これは舌をかみ切ろう



## 読者ギャラリー『轡 絞 り』志 羽 利 也



とした時の用心の為だし、声も十分に聞くことが出来るように考えたものだ。俺はそれをつけ終わってからエリーの両ほほに手打ちを一発ずつお見舞いした。

エリーは気がついて、まぶしそうに目を開けた。一瞬不思議そうに周りを見廻して、今自分のおかれている立場をすぐ理解したらしく、その美しい顔には恐怖の色が走った。そして俺を見つめた。俺はそんなエリーの問いかける目を無視して作業を続けた。

エリーの豊かな髪を掴んで持ち上げ後頭部にマクラのような器具を置き、首が動かないように固定してからAのボタンを押した。スルスルという音とともに天井を覆っていた布が左右に別れて大きな鏡が姿を表わした。エリーはキャットという声を出して目をふせた。それを待っていた俺は皮のムチをエリーの太ももにふり下ろした。エリーの全身は、まるで電気じかけの様に突っ張った。俺はエリーに目を開かなければ何発でも今みたいなのが飛

ぶぞと言ってやった。エリーはおずおずと目を開いたが、またすぐ閉じてしまった。それと同時に二発目のムチが空を切っていた。エリーは、大きな声を出して全身を突っ張らした。そして涙を流し始めた。

俺は、しばらく泣きたいだけ泣かしておくことにして、次に必要なものを用意することにした。カミソリやシェービングクリームなどという、料理に必要なものを納めてあるタナを開け、それらが入っている小箱を持って来た。それから獲物の料理に使ういろいろな器具や薬品もそろえていった。

それらをそろえ終わる頃にはエリーの涙は出つくしたらしく、ただすすり声だけを立てているだけだったが、目だけはしっかりと閉じられていた。俺はエリーに目を開けなければまたムチ打ちだぜと言うと、あきらめたらしく眸をのぞかせた。

俺はBのボタンを押した。ベッドの両足の方だけが上に上がり、中央部は下にさがっていった。両足を固定した台はほぼ四十五度の角度になり、ベッドは完全に折れた。俺はイスを持ってくると、その持ち上げられた足の真中に座を決めた。

俺は石ケン水を筆でぬっていった。それが

くすぐったいらしくエリーは身をよじった。冷たく光るカミソリが光って俺に笑いかけている様だ。エリーはその俺の作業が始まると目を閉じたり、開いたりしていたが、最後には、ハッキリと開いて俺の作業を見つめていた。それに気がついた俺は鏡に向かって笑ってやった。あわてた様に鏡の目がそらされたが、すぐまた戻った時、心無しか潤んでいる様に思えた。エリーはその冷たいカミソリの感触を楽しみ始めたに違いない。だが、仕上げてから急に悲しみが呼び返されたごとく泣き出した。しかし俺はそんな事は気にしてはいなかった。まるで芸術家のように、自分の仕事の出来上り具合を入念に観察していた。俺は次の作業にかかった。それが何であるか解った時のエリーのあわてぶりは、俺もおどろくほどのすごさだった。そして過去、この台に乗せられた女と同様に、俺をののしったり、おだててみたりし始めたのだった。しかし俺にとってその声は、俺の心に住む、悪魔を震い立たせる声以外の何ものでもなかった。二回目の新たな作業が始まった。俺は指先でタップリコールドクリームをすくい取った。その作業が始まるとエリーは声を上げ身をよじりだした。

グリーン色をした石ケン水が流腸器から押し出されて行った。二千ccが消えてから、俺は生理用のタンパックをもう少し細くしたやつを栓の代用にしてやった。そして彼女に、もし三十分間がまん出来たら今夜は帰してやる、と、無論不可能を承知で言う、と、エリーはコックリとうなずいたが、すでにその首すじは汗でベツトリと光り、顔を紅潮させて、唇を必死に噛んで、ガマンしていた。

俺は小型のバイブレーターを手にとると、次の作業に移った。そのブルブルという音と共にエリーの口からも声が流れだし、合唱が室の空気をいっぱいにはずませはじめた。

しばらくすると、エリーは潤みきった目を俺に向けて、甘えるような声で限界を知らせるのだった。俺は、三十分持ちこたえなきゃどうなるか知らないぜと冷たく言っただけ。一瞬その目に不安の影が走ったが、すぐそれも消え、ただ急場の苦痛を解消することのみしか考えられなくなっているらしかった。

俺は用意のバケツを金具にセットして、タンパックを取り去り、エリーの顔を見詰めてやった。エリーは必死になってまだ限界に挑戦しているようだったが、ついにバケツが音をたて始めた。

エリーは、まるで気を失ったようにガックリしていた。しかしそれもムチが空気を切り裂いた瞬間に、元の世界に連れ戻されたのであった。俺はエリーのマクラをはずし顔を横に向けてバケツの中を十分に見せてやった。エリーは嫌々をして目を閉じたが、俺はそのたびに髪の毛を引っぱって目を開けさせるのだった。エリーは、また泣き出していった。

悲しいか、くやしいか。泣け、泣くがいい。お前の涙は、俺にとっては甘露の水晶であり俺の心を更にウキウキさせ、悪魔との、より一層の握手に駆り立てる以外の何物でもありはしない。

俺はウサギの毛で出来た太筆を持ち出していた。もちろんその筆で描くキャンパスはエリーであり、作品には悪魔の華とでも題をつけることにしようかななどと思いつながら、制作にとりかかった。筆は激しいタッチで縦横に走る。その度にキャンパスは波打ったが、エリーはその制作行程には嫌悪を感じていないようだった。これは悪魔の主義に反する。獲物は悲鳴を挙げねばならないのだ。苦悶こそ魔像の求めるものなのだ。俺の筆捌きは激しさを加えキャンパスを描き破らんばかりの狂い描きに変わった。そしてついにその作品は完





S M カメラ・ハント……… 続・谷山久美子の巻………

# 凄絶！ 片足逆さ吊り

辻村 隆

## マゾヒスティック・アニマルの可能性の限界に挑戦

昭和四十五年九月号に、谷山久美子の『悦虐の履歴書』を延々百余枚にわたって書き、彼女のハントには一応、終止符をうったつもりでいたのに、思いがけずマゾヒスティック・アニマルの思いつめたような便りを受け、近頃沈潜していた私のSMの心は、はからずも刺激を受けて、嘗て試みたことのないような、強烈の極みの緊縛プレイをやってみた意欲にかられ、嗜虐の可能性の限界に挑戦してみる気になったのである。

「辻村様、長い間御無沙汰しておりましたがあれ程、忠告して下さっていたにもかかわらず、とうとう理性を失って、こんな浅ましい姿になった私をお許し下さい。ずい分、私自身、自分の心と斗ったのですが、激しい被虐の誘惑には勝てず、遂に夫を捨て、家を捨てて、彼の許に走ってしまいました。彼に奥様があることを承知の上で、彼の奴隷となるために、われとわが身を、底無し沼のような、地獄の責苦の世界へ、投げ出してしまったのです。彼の前で奴隷宣言をし、果てしない責苦の日夜のなりわいの中で、あがいております

す。始めからそうなることを承知の上で、みずから進んで求めた道とはいいいながら、プレイの合間、フト正気に返った時、わが身の浅ましい姿に鳥肌の立つ思いです。そのくせ、彼に惹かれ、地獄の責苦と、たらい廻しのなぐさみものになっている私自身、うたかたのその刹那刹那に我を忘れて、おぼれているのです。自業自得で誰も恨んではおりません。一糸も与えられぬ裸暮しの、鎖と革と縄に犇々と束縛された毎日ですが、本望にも思えるのです。一週間に一日だけ自由と休養が与えられます。その解放された一日も私にとっ



ては行くあてもなく、いたずらに盛り場をうろつくのみです。こんな奴隷の犬畜生になった私ですが、フト辻村さんや以前プレイをした方々に、むしように会いたくなる時があります。あれほど忠告していただきながら、とうとう、その忠告を無視して何もかも捨てたこんな犬畜生に、貴男はもう興味はおありではないかも知れません。でもお会いしたいのです。期待を裏切り、刹那の衝動に走った、この浅ましい女に、凡ゆる侮辱と責苦を思い切り与えて下さい。貴男の御慈悲で、命だけは助けていただけたら、私は何をされてもかまいません。私が、さらにどんな女に変貌したか、貴男自身の目で確かめて下さい。

このお便りを出してから、休息にきめられた毎火曜日の正午、辻村さんと度々出会った京都駅新幹線八条出口で、一時間お待ちしています。彼にはこの事を告げてありませんが、若しわかったとしても、貴男に紹介された彼のことですから、デートした相手が辻村さんと分かれば許してくれると思います。このお返事はいりません。失望する火曜日の少ないことを祈っています。久美子」

彼とは、『悦虐の履歴書』で書いたM・Oである。彼がプレイのルールを踏み外して、

このマゾヒスチック・アニマルを、自分の奴隷として調教したいと考え、かなり執拗に久美子に決断を迫ったらしい。彼女が進退をきめかねて私に相談してきた時、家庭は家庭、プレイはプレイとして割切るべきだと、その軽挙妄動をいましめたのであったが、遂に被虐の願望と誘惑には勝てず、すべてを放擲して彼の許へ走ったのであった。

プレイのルールを逸脱した彼の行為に、不安を感じた彼の奥さんから、そのことについて電話を受けたが、私としては意馬心猿の彼の心を押えるすべもなく、又彼の行動を規制する権利は私になかった。すべては彼の良識に俟つより仕方なかったのである。

やがて奴隷飼育に飽きがきた彼が、何カ月先か、何年か先には、谷山久美子を追放することは目に見えていた。犬畜生のように責めさいなまれ、なぶられて、挙句の果てに、ぼろ屑のようにポイと捨てられることが分かっていても、刹那の快虐の誘惑には勝てず、自からその泥沼に溺れていった彼女の、強烈きわまりない被虐性は、理性で破壊と分かっている、プレイキが、きかなかったのである。

M・Oが私の心づかいを無視した憤りとは

別に、この哀れなマゾヒスチック・アニマルに、私は憐憫に似た感懷を覚え、それがいつしかSMの形態を整え始めて、女がそこまで望むのなら、一層、その願望を果たしてやるべく、トコトンまで責めて責めて責めぬき、前人未踏の緊縛プレイを敢行してやろうという気持になったのである。なまじ本人の為を思って情をかけ、私らしくもない人の道を説いた言葉をかけるより、アニマルには、アニマルにふさわしい扱いをしてやった方が、彼女を歓ばせる手段のように思えてきたのであった。

今の彼女は、果たしてどのような緊縛につながる被虐にまで、耐えられるものなのだろうか、それは会って行なうまでは分からない。

しかし、過去数度の、凡ゆる強烈な被虐には、欣喜として耐えてきたし、奴隷化し、牝犬化して、凌辱の極みを探究してきたが、責めの限界となると、彼女の謂う一〇〇パーセントの陶醉（彼女は其の時、その時の悦楽のパロメーターをパーセンテージで現わした）は、肉体の損傷、生命の危険を伴わずに行ないうるものかどうかという点で、私にして一抹の不安があった。

「被虐忍耐が、過去の実績に照らし合わせて  
 尚も昂進しているという、本人の告白が若し  
 事実なれば、懼らく空前絶後の被虐実験が可  
 能のように思われてくるのであった。」

私も過去、数ある女性をハントしてきたが  
 その被虐度に於いて、彼女に勝る女性は、つ  
 いぞなかった。

あらゆる被虐にたえて、それを恍惚と悦楽  
 に交じ、如何なるプレイの場合も、快楽の度  
 合を一〇〇パーセントといわぬ、超一流の真  
 性マゾの女性は、谷山久美子をおいて他には  
 なかっただけに、その可能性の限界に挑戦す  
 る対象としては最適であった。

既に彼女に対して、人智の考えられ想像さ  
 れる嗜虐行為の殆どを試みたように思うが、  
 生身の女性だけに、矢張りそれにも限度があ  
 るだろうと、私を制御させていた人間性も、  
 この牝犬に対しては、人並の感情も、思いや  
 りも必要がなかったのではなからうか――。

息もたえだえに、生死の境を、さ迷いなが  
 らも、一旦正気づけば、須臾にしてその責苦  
 が快楽にすり変わってしまう女性である。い  
 くら苛めても苛めても、苛めたりない女、そ  
 れが真性マゾヒスト、谷山久美子の正体であ  
 った。なればこそ、当を得た、マゾヒスチッ

ク・アニマル（虐待動物）というタイトルを  
 彼女に進呈したのではなかったか――。

私は今こそ、名実共に、その真価を発揮さ  
 せてやるべく、あれこれと、悪魔の囁きに似  
 た、どす黒い思索を練ったのである。

ことここに到っては、私一人では到底、体  
 力不足である。勢い気の合った協力者を求め  
 なくてはならなかった。

谷山久美子を調教し、俱にプレイした佐久  
 間ドクター氏は、その点、誠に都合のよいア  
 ドバイサーであり、サジストであった。

早速、電話して、彼の意向を打診すると、  
 思いがけぬ果報と、双手を挙げての賛成で、  
 トコトンまで、やってやってやり抜きまし  
 うと、すぐ張り切っていた。

午前中、宅診で、正午は一寸、無理だが、  
 三十分ずらすことにして、午後の往診時間を  
 それにあてるつもりである。甘っちょろいフ  
 エミニスト精神は、この際、かなぐり捨てて  
 サジズムの鬼になってやりましょうと、反対  
 にハッパをかけてくる意気込みようである。  
 ドクター氏はドクター氏なりに、彼女の連絡  
 場所に、要請の手紙を出していたのだが、音  
 信不通の俛、その後、パツタリ途絶えていたの  
 で、私のかいつまんだ説明で事情を知り、ひ

としおハッスルしているようであった。

久方振りに、私の胸中に激しい嗜虐の想念  
 がムラムラと湧き上ってくるのを自覚して、  
 差出人住所無記名の、唯、三文字、久美子と  
 したためた封筒を、電話口で、いつしか力を  
 こめて握りしめていたのである。

「何かいいアイデアありますか？ うんと奇  
 抜な、それでいて、どのハント女性にも出来  
 ないようなもの……」

「徹頭徹尾、吊責めを試みたら如何です」  
 吊責めの好きなドクター氏らしい発言であ  
 る。

「それもいいですが、既に、吊責め、逆吊り  
 など、すべて実験済みでしょう。だから同じ  
 吊るにしてみても、情容赦のない、うんと強  
 烈なものをやってみたいと思うのですよ」

「勿論です。唯、生命の危険のない様にやり  
 ませんと、彼女は恐らく仮死状態になるまで  
 我慢するでしょう。脈膊、心臓の状態など、  
 体調の方は、仕事柄、充分気をつけますが、  
 結局、吊り責めの長時間放置という事になり  
 ますかね。それとも何か別のプランを考えて  
 おられるのですか？」

「以前、東映の『責め地獄』や一連の残酷も  
 のでやった緊縛ですが、弓ぞり責め、片足逆



さ吊り、駿河責めなど、いろいろやりました  
が、相手がSM気のない女優さんですから、  
すべては落下傘という股にかけた金具付の、  
吊下具を用いてやったのです。腰と股でしっ  
かりと安定させて、尾骨あたりにとりつけた  
丸環に縄を結んで吊るしたのですが、それ  
もヒイヒイって大変だったのです。これら  
をトリックなしで、本当に縄だけで吊るして  
みたらどうかと考えたりしているのですが」  
「ああ、思っただけでもゾクゾクしますよ。  
彼女なら大丈夫でしょう」

「多分ね。それと共に、彼女はうんと辱かし  
められて飲ぶたちですから、牝犬宣言をさせ  
て、人間失格を命じ、これ以上は不可能と思  
われる大量の浣腸をやってみたいのですよ」  
「それもいいでしょう」

「先生の方で、高圧浣腸用のイルリガートル  
やグリセリンなど準備していただければ有難  
いのですが……」

「いいですとも。何ならカテーテルも持参し  
ましょうか」

「結構ですね」

私達は受話器を通して、辺りも憚らず、  
かなりの大声で、こんな物騒な会話を交して  
いた。熱い血がサッと胸をよぎって、トコト

コと心臓の昂まるのを我にもなく覚え、電話  
をきいたあとも、果てしなくおぞましい想念  
が渦を巻いて湧き上ってくるのであった。

十一月十日の火曜日、それが谷山久美子の  
運命の日と決定した。私達二人で一方向的に。

### ○犬宣言と調数につづく空前

#### 絶後の高圧浣腸責め

食事に浪費する時間が惜しく、牝犬の為に  
ビスケット一袋とソーセージ、それに寿司の  
折詰を途中で買って車内に放り込み、定刻の  
正午近く、京都駅の八条口に到着。

車を、やっと駅前の駐車場にもぐり込ませ  
て新幹線の出改札口に歩む。

谷山久美子は所在なげに、改札口の傍らに  
並んだ椅子に腰を降ろして、週刊誌に目を落  
としていた。心なしか肩がやつれ、背に伸び  
た黒髪も艶なく乱れていた。

やはり彼女は、当てもならぬ今日の日を  
約束通り待っていたのだ。若し、今日の火曜  
日に私が現われなかったら、こぬ人を待つ帆  
の浦の淋しさに、独りトボトボあてもなくさ  
迷っていたことであろう。

みずから求めた悦虐の淵とはいえ、寄るべ  
なきさすらい舟に似たうしろ姿は、余りにも  
みじめで佻しかった。背後からボンと肩を叩

く。ビクツとして振り返った久美子の眸に、  
うつろな驚愕が走り、私を確認した刹那、鮮  
かな生気が蘇って、頬を硬ばらせて、泣くよ  
うに目尻が笑った。

グレーのセーターに、セミスカーットの地味  
な服装が、谷山久美子を幾分、老けてみせて  
いた。

「やはり来て下さったのね、嬉しいわ。我俣  
ばかりして御免なさい」

「今の生活、どうなの」

「御想像に任せますわ」

「思いきったもんだね」

「どうしようもなかったの。いつかはこうな  
る私でしたわ」

「兎も角、車に乗って話をしよう。ドクター  
氏もくるんだよ」

「まあ、佐久間先生も——。お懐しいわ。私  
の我俣を怒っていらっしゃるでしょ」

「何度も豊橋の方へ便りしたらしいが、梨の  
礫とかいってた」

「全然、あそこへは顔を出さなかったんです  
わ、あれ以来」

「M・Oとは、どうして連絡したの」

「いつも電話で——。あの人に私の家の番号  
教えちゃったの」

「私にも、ウンともスンともいってこなかったね」

「叱られると思って怖かったのよ」

「まあいい、車で先生を待とう。宅診が午前中あるので、少し遅れるんだ」

「春以来ですわね」

助手席に坐って、感慨深げにつぶやく。

「そう、四月中旬、ホテル『H』以来だ。恰度、半年振りかな」

「私のハント読ませていただきました。不満や、いいたいこともありますけど、今更何も申し上げませんわ」

「マゾヒスティック・アニマルのこと？」

「でもその通りの私なんですもの。どのよう  
に非道く書かれても仕方ありませんわ。本当  
は嬉しいのよ。あんなに長く書いていただけ  
て……」

「かなり失礼な点もあるけど、あんたがマゾ  
の典型的な人だけに筆があのように走ってしま  
ったんだ」

「いいんです……。書いてくれって、散々お  
ねだりしたんですもの」

「食事は？」

「まだですが、余りおなか空きません」

「今どこに住んでるの？」

「東大阪市です。くわしくいうのはカンニン  
して下さい」

「ドクター氏以来、H・O始め、かなりの男  
性に虐められたのだろう、何人ぐらい？」

「彼をいれて四人——」

「誰が一番、凄かった？」

「二人目の人——。丸十時間縛りつづけにさ  
れて、力任せに叩かれて、体中腫れ上りまし  
た。無茶をされて痛くてオシッコが出来ませ  
んでした。彼は怒っていました。その人に」  
「想像がつくよ。それでも、アクメを感じた  
の？」

「辻村さんよりはね」

「参ったな、今日は手加減はしないよ。お前  
のマゾ性の頂上を見届けてやる」

「覚悟してますわ、存分に虐めて……」

「牝犬の宣言、調教、浣腸、汚辱、吊責めと  
盛り沢山だぞ。お前のエサは買ってある。こ  
れをホテルにつくまで、しつとりと温めてお  
くのだ。たっぷりと喰わせてやるから」

私は後部のシートに手を伸ばして、紙袋か  
らソーセージをとり出すと、牝犬に与えた。

「人目につかぬように早くしろ」

と、叱咤する。プレイは前触れもなく始ま  
っていた。女に屈辱を与えるのが目的であっ

た。黙って受取ってじっとみつめていたが、

私の意図が分かると女の目尻に猥らなげら  
いが浮かび上り、そっとスカートをたくし上  
げる。リクライニングのシートを半ば倒し、

私は意地悪く、女の行為を目で追っていた。

牝犬に羞恥の表情はない。それが当然、与え  
られた義務の如く、腰をもたつかせていた。

「ドクター氏が喜ぶだろう、知ったなら」

牝犬は軽く喘いで笑った。私の指が存在を  
たしかめてうごめく。ドクター氏を待つ間の  
軽いたわむれであった。

あわただしく佐久間先生がタクシーでかけ  
つけ、逸早く私の車を探して、手を振る私に  
こたえる。

「ああ流石に忙しかったですよ。いやあ、今  
日は谷山さん、元気かい？」

気さくに声をかけて乗り込んでくる。イル  
リガートルを持ち込んだのか、彼の袋は  
大きく、かさ張っていた。

「往診の方、大丈夫ですか？」

「ああ、プレさんに頼んでおきましたよ。幸  
い切羽詰ったクランケがおらず幸いです。夕  
方六時まで大丈夫です。どうぞ御心配なく」  
嬉しそうにドクター氏は息を弾ませてニコ  
ニコ笑っていた。



「寿司の折詰を買ってきましたから、直行しましょうか」

「ああ、それがいいですね。腹が減りや、ホテルの冷蔵庫のものでもパクつきますよ」

車をスタートさせて、目指すは平安神宮近くの、ホテル「H」である。吊りには、おあつらえの飾り梁があるし、天井も高いから、責めのプレイには何かと都合がよかった。

左近麻里子、梨花悠紀子、小池美喜、笹原八千子と、このホテルでのプレイは、かなり多い。それもプレイの部屋は、いつも吊りに理想の飾り梁を天井に仕組んだ、特定の入室を使用していた。

三人で行く奇妙さも、何故かこのホテルでは、さして気にもならない。

部屋に入り、私が切り出すまで、ドクター氏は牝犬の体温であたためられた、ソーセージの存在に気づかなかった。

私を取り出すと、

「あれッ、いつの間に」

とドクター氏は、あっけにとられた顔でまじまじと久美子を見つめた。喜々として女はもう黙って、そのついでにパンティを脱いでしまう。これから始まる拷問以上の責苦と、ありとあらゆる緊縛と凌辱を加えられるのが

さも嬉しくてたまらぬといった、浮々とした表情で、猥らに笑っていた。

「バカに嬉しそうだね」

ドクター氏がひやかすと、

「だって、先生と辻村さんの二人に虐められるの、久し振りですもの、恰度、生理が昨日終わったばかりで、体の都合もいうことなしですよ」

「生理の終わった直後が、一番燃えるそうだよ。しかし、かなりやつれた感じだね。いや荒れているのかな……。大分過ぎるのじゃないかな」

「分かります？」

「分かるともさ、医者を見くびっちゃいかんよ、君い」

「好むと好まざるとにかかわらずですわ」

「好まざるってことはないだろう。あんまり過ぎると、ションベンばチビりますたい」

最後は近頃流行りの、漫才家横山やすしの口真似になって、佐久間ドクターは呵呵大笑した。ジメジメしないこの磊落さがいい。

「ねえ、辻村さん、今日こそ一〇〇パーセントやりましょうや」

「ええ、手加減しないでね」

「いつも、手加減などなさらないじゃありませんか」

せんか」

久美子が傍らから、いい添えた。

「そうかい、そうかい。じゃあ、ヒイヒイ泣き喚いても、少々体に傷がついても知らないからね」

「余り傷をつけられると、彼の手前、困りますわ」

「彼なんてクソくらえだ。私が紹介してやった人間じゃないか。それが一言の断わりもなく、プレイのルールを無視している彼など、同好者の風上にもおけぬ奴だからね」

「でも……」

「よし分かったよ。なるべく気はつけるけれど、私や先生もハッスルすると、思わず力が入るからね。一週間や十日ぐらい、縄目が消えないかも知れんが、彼が文句いったら私にいつてき給えよ」

「いやに脅かすんですね。いいですわ、どうなっても覚悟の上ですもの」

「よし、ではもろもろの男共によって汚れた体を清潔に洗ってくるのだ。ハダカで私達の前に戻って来て四つ這いになるだ。検査をしてやるから」

「ハイ」と応えてイソイソと立ち上ると半分ばかり湯量の溜まった浴槽をたしかめてから

私達の眼前でクルクルと服を脱ぎ捨てる。裸身のあちこちに、どす黒いあざが斑々と肌の色を変えていて、牝犬の調教のあとを、ありありと、とどめていた。

心なしか、乳房は黒ずみ、臀部の筋肉は、遅しなっていた。全裸を、羞かしげもなく曝して牝犬は浴室へ消える。一段高い部屋からは、硝子張りを隔てて、浴室内が一望のもとに見渡せた。

「正にアニマルの名に愧じませんな。えらく喜んでるんですから、恐れ入りますよ」

ドクター氏は硝子張りごしに、湯をかぶる彼女の姿を眼で追いながら、感嘆したように呟いていた。

束の間に私達はプレイのスタンバイにとりかかる。縄、カメラ、三脚、ストロボ、ローソク、パイプ、エネマシリンジ、手拭、グリセリン液瓶、イルリガートル、革紐など、知らぬ人が見たら慄然とするようなプレイ用具が、狭い部屋に、ところ狭しと並べられた。ドクター氏の顔は、昂奮で紅潮している。

浴室から出てきた久美子に向かって、私の声が激しく飛んだ。

「そこから四ツ這いで這ってくるんだ」  
仄かに赤く染まって湯気の立つ裸身をあわ

てて這わせ、牝犬は両手をついて、膝で這ってくる。直ちに首縄で柱につなぎ、四ツ這いになった牝犬の体の隅々まで検査し、微かな異臭も漂わさぬことを確かめてから、私は先生に目で合図を送った。おごそかに彼は一枚の紙片をポケットからとり出し、たたんだ紙を拡げて牝犬の眼前につきつける。

「さあ、この牝犬になる宣言を読み上げるのだ。大きな声で——」

私は素早く、ソニーのカセットテープ「メモ」のボタンを押す。マイク内蔵の小型テープレコーダーは音もなく廻り始めた。

牝犬は涙みなく、彼の作ってきた牝犬宣言書をよみ出した。

（谷山久美子は、唯今より人間を放棄しまして、一匹の牝犬となり、忠実に、従順に、飼主である旦那様方の命令の俤に、ありとあらゆる飼育、調教、訓練、凌辱をうけまして、可能性の限界を試す実験台となり、牝犬の体を捧げることを誓います。ワンワン、牝犬クミイ）

ワンワンと二声啼いて、牝犬クミイの宣誓の終わりをシオに、二人がかりで四ツ這いのまま立てないよう両手両足を、数本の縄で連結させてくり上げる。

柱から縄を外すと、ムチ代りの革紐でしりに一鞭くれて、部屋の中央まで、ヨタヨタと這わせて歩かせ、首縄をぐいと引き上げる。ドクター氏は二米ばかり離れて、ポリ袋のビスケットをとり出すと、

「さあ、クミイ、口で受けるのだ。受けそこねたら一ムチくれるからな」

と、愉しげにビスケットをポイと投げてよこす。一個目は牝犬の鼻づらに当たって床に落ちた。容赦なく私のムチは臀部に激しく飛ぶ。二個、三個と投げて、うまく口には入らず、ああと開いた口の端からこぼれ落ちる。その度毎に、ムチが喰りを生じて、クミイの裸身に小気味よく鳴り響いた。忽ち数条の桃色の条痕がレリーフのように浮き上る。

投げることも六個目にして、やっとうまく口で受けとめ、牝犬はのどをならしてバリバリと噛み、嚥下していった。

床に散らばったビスケットを一個一個、口で拾わせ、砕け散るビスケットの小さい破片を、舌で床をなめさせて喰べさせる。

ドクター氏と交替して、彼が首縄を握ると私は机上に置いた俤にしてあったソーセージを握り、微かに女臭の放つそれを口にくわえさせる。



くわえさせた後、ドクターの曳く首縄につられて、クミイはぐるぐると三べん廻り、数十センチ離しておアズケさせる。

御馳走の寿司をとり出すと、別に頼んで入れてもらったワサビを、たっぷりと握り寿司の飯になすりつけ、洗ってきた灰皿に、添付のチューブ入りの醤油をたらして、寿司を入れる。

「さあ、喰うのだ。ワンワンワンと三回ないて——」と命令する私。

顎を突き出して、クミイは三度吠え、灰皿の中の寿司を、やっとのことで、ほおぼる。たちまち、ワサビの辛さに、ボロボロ涙をこぼしながら、やっとな個を平らげ終わる。

ドクター氏が首縄をはなし、鮪の切身を指先でつまんで、四つ這いのクミイの背後に回りこみ、しきりにゴソゴソしている。牝犬は人間めいた呻き声をあげて尻をくねらせる。

赤身の鮪が、しっとり一際光り、それにワサビを、たっぷりとなすりつけて、灰皿に入れていると、

「味付上等の鮪だ、有難うただけ」

と平手でパシリと臀部に一つくらわせる。

牝犬はしばし躊躇する。ドクター氏の手にゴム紐が握られ、ピンと伸張して、手を放



すと、ピシリと激しく尻にはねかえる。その痛みに気圧されたかのように、牝犬は己れの体臭のする、切身を口に入れる。

ついで彼は、部屋の入口の、上りがまちに脱ぎ捨ててあるスリッパを裏返しにすると、その上に寿司を一個のせてきた。

「さあ、あれを喰ってこい」

命令一下、牝犬はそろそろと向きを変え、ヨタヨタと這い乍らたどりつき、どす黒く汚れたスリッパの裏にのせてある寿司を喰えろと、口をモグモグさせた。折々、容赦なく革紐や、ゴム紐が、牝犬の背にバシリ、バシリと、するどい音を立てて炸裂した。

「どうです、この辺で、そろそろクリスタールにかかりましょうか」

このプレイに飽きて私はドクター氏に声をかける。彼はうなずくと、五〇CCの流腸器に、タププリとグリセリン液を吸い上げた。

「もし洩らした時、ここじゃ工合が悪い。風呂場へ連れて行ってやりましょう。遠慮なく注ぎ込めますからね」

私は牝犬を四つ這いで、ヨタヨタ歩かせて風呂場へつれてゆくと、一旦縄を全部解きはなし、以前縛った俣水責めして、濡れそぼってから堅くなった縄に交換した。ゴワゴワと堅くなっているの、かなり痛い筈だ。流腸し易いよう、大きく股を開いてベッタリと坐らせ、素早く後手に犂と縛り上げて、両腿を二の腕に縛りつける。女体を押し潰したポーズにさせて、ドクター氏を手招く。むき出しのシリをパチパチと数度、叩いて愛撫してや



り、私はドッカと牝犬の背に腰を降ろす。

ドクター氏が、慣れた手付で、グリセリン液をフルに吸い込んだポンプを構える。苦もなく液体は腸内に吸入されていた。原液を三倍ぐらいに薄めてあるが、やがて牝犬は私の膝下で身をよじり出した。グルグルグルと鳴動を伝えていたが、耐え性もなくその姿勢の尽、異臭を撒きちらして汚濁の塊を私達の眼前で堆積させていった。

牝犬の体をズルズルと数十センチずらせ、温湯をざぶざぶ流して排水孔へ流し込むと、裸身に数杯の湯を浴びせかけて浄める。一休みする間もなく、イルリガートルの洗礼が始まる。一杯入れると一〇〇〇CC入るが、ざっと八分目の温湯を容器に入れ、ドクター氏は高々とかけける。私は黒いゴム管でつながった尖端を受け持って水止めを握る。気持よ

く硝子容器の温湯は減って行くが、流石にあと一息というところで、減量はとまって停滞する。圧力がなくなったからであろう。あっさりと終りにし、次いでエネマシリンジでの注入である。洗面器に一杯の湯を汲み上げ、圧力球を交互に交流させて、容赦なく流し込んで行く。押し潰されたように縛られてへたばっていた牝犬は、苦しげに喘ぎ、膨満した腹部を押し上げる。この洗面器一杯の湯も、計量はしないが、恐らくは一〇〇〇CCを超えているに違いなかった。許容量を遥かにオーバーしているかも知れないが、私は根気よく注入作業をつづけ、殆ど洗面器が空になるまで続けた。もう牝犬は肩で息をして、今にも奔流となって、ほとばしる気配である。私達は許さない。体を回転させて、ふくれ上った腹を上になせ、円椎型のゴム栓をして、き

つく縄をかけて押さえた。

「く、くるしい。ああ、もう駄目。もう我慢出来ない」

「ツベコベいうな。牝犬は人間の言葉は喋れないんだぞ」

苦悶に引きつった顔に私はざぶざぶと洗面器で湯をそそぎかける。ドクター氏がハナを摘むと、アアと喘ぐ唇が大きく開き、その口中へドドッと湯は溢れて流れ込んだ、牝犬の容貌は蒼褪めて、次第にひきつって行く。

と、もがいた拍子に押え縄がずれたのか、プシッという撥音と共に、二米近くゴム栓が飛び、噴出する奔流は十数センチの弧を描いて、さながら噴水のように噴き上り、屈曲した牝犬の腹に落下していった。

人間噴水……。そうとしか形容しようのない壮観に、しばしドクター氏と私は、手を拱ねいて、このシーンに魅せられ、没入していたのである。

### 吊り責めの種々相

#### その一——両手縛り吊り責め

牝犬の汚物をすっかり洗い浄めて、息つく間もなく部屋へ戻ると、いよいよ吊り責めの開始である。

牝犬の責めのルポに、くどくどしい美辞麗



句や、長々とした会話は不必要である。一言の文句もいわせず、唯、私達は、今日の初期の目的に邁進し、トリックなしの真正銘の吊り責めの種々相を、この牝犬に実施すればよかったのである。

吊り責めを実施する場合、私はその縛り方に、しばしば充分の配慮を払い、緊縛が不自然であったり、無理があったりするとすぐ苦痛なので、よくよく熟慮して縛って来たのである。

しかし、今日のこの牝犬には、その配慮は全然、無用であった。ごく気軽に縛って、その縛り方が、どんなに苦痛を伴っても、この牝犬は、激痛の中にすら愉悦を覚え望んでいたからである。真性のマゾに対して、緊縛方法などに考慮を払う必要がないだけに、私は気楽に遂行出来た。

手始めは、両手を縛っただけの吊り下げである。ごく単純、簡単にみえるが、この吊り下げに我慢出来る女性はいない。全身の重みが、両手を縛った縄にすべてかかっているからであった。腕の付け根が抜けそうになるほど激痛を感じ、両手首はち切れんばかりに縄が喰い込む吊り下げ方である。

余分の縄を避けて、手首のみごく簡単に縛

ると、例のお目当ての飾り梁に縄をかけ牝犬を机上に立たせる。掛けた縄を手首で結んで止める。さして吊り下げの労力もいらない。体を一寸抱いて、机を外せば、ブラリンと自動的に牝犬はぶら下るだけであった。この方法をするために、よく手首にウレタンや、手拭を巻いて、手首に直接かかる縄の痛みをやらげざる手段をとったが、クミイにはそんな

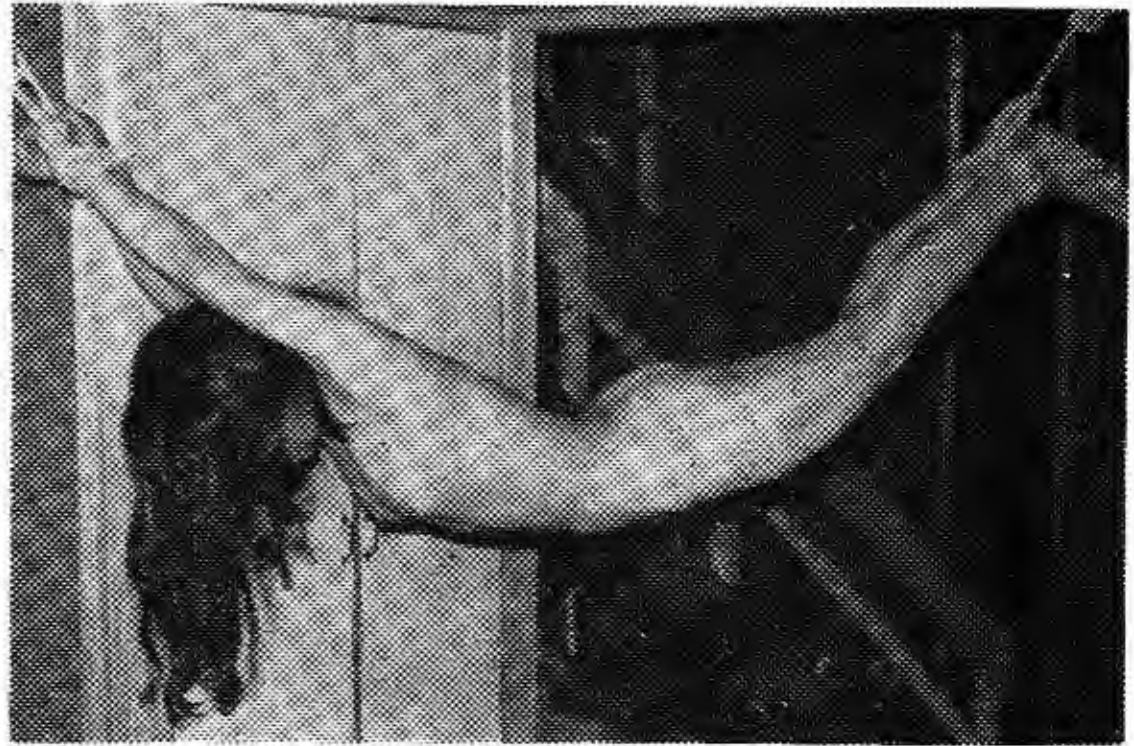


配慮は何一つしない。むしろ細目の縄一本を使って、じかに手首を縛っただけの全裸であった。獲物にむらがりよったSのハゲタカ共によって剃毛されたあとが、モヤがかかったようである。

机に立たせて、両手首を一杯に引き絞り、しっかりと結んだ筈なのに、サッと机を外すと、引き裂くような悲鳴が上り、牝犬クミイの女体は、十センチぐらい伸びて下った。

ドクター氏の、力まかせの革紐が、ムチとなって肌に飛び交う。音響効果のよいようにわざと猿轡は嵌めていない。この世のものとも思われぬ叫喚の、血の叫びが部屋の空気を震わせる。両足首を握って、ぐいと引っ張ると、コキッと関節の鳴る音がして、女獣はこわれた笛のような悲鳴をあげて、ポロポロと涙をこぼした。女体を押すと空間にゆらゆらと揺れる。私は鏡台の前に備えてある、軽便カミソリを手にとると、この眼触りなモヤを水も石鹸もなしに除去し始めた。ゾリゾリと粗い音を立てたあとに微かに血がにじむ。毛根が逆立ってトゲのように地肌にするどく刺さっている。

既に何十回となく叩きのめされた双脛は、赤いというより紫斑色を帯びていた。強靱な



牝犬の臀部の皮膚は、過去の数々の実績を物語るように、あちこち血がにじんで、皮膚が裂けていても、それを快楽にすりかえられるのか、吊り下って苦悶にひきつった眸の奥に強い陶酔を浮かべていた。

机を与えてやると、よろめいて足をふんま

え、クミイは大きく肩で喘いだ。

第一の試みを終わって、ハアハア苦しげな息を吐きつづけるのは、クミイより頬を紅潮させ、激しい昂奮の虜になったドクター氏の方であった。

### その二——弓ぞり吊り責め

牝犬の奴隷に休息はない。手首の縄を更にしっかりと結び直し、鴨居に縛りつける。足首を強く縛り、縄尻を残す。

一呼吸計って、私は牝犬を抱き上げる。ドクター氏は、両足首を縛った縄尻を鴨居に結ぶ。このポーズは、ぐっと全身を伸長させるほどラクであるが、手足の縛った個所の距離が短いと、背骨が逆さに弓ぞりになって、苦痛は夥しかった。腹部へ一本縄を入れて、体重を支えてやると、かなりラクになるが、私達は、この牝犬にラクを与える気持は毛頭ない。如何に苦痛にたえ、それに悦楽を覚えているかを観察していたのである。

牝犬は、手首を縛って、鴨居に結びつけた縄を、しっかりと握りしめていた。この握りが、かろうじて全身を支える力となっていたのである。両手で縄を握っていたのでは、責めの目的はない。こじあけるように、両手を縄から離させると、全身の重みの支えは、縛

られた両手首両足に、ずしりとじかにかかり背骨は重みで彎曲してゆく。これは両手吊りにも勝る、苦しいポーズであった。牝犬の髪は微かに震え、必死にこらえつつも、激痛は背骨を伝わって全身をさいなみ始めていた。クククッと、懸命に声を殺して、クミイは骨のキシむ疼痛にたえつづける。

さながらハンモックの様に吊られた女体に私の平手が小気味よい音を立てて飛び交う。彎曲した腰骨の辺りへ、何か重いものをのせてみたい誘惑にかられたが、牝犬の腰が折れても困ると、その誘惑は自から打ち消して、左右に体をゆすることで我慢した。

ミシミシと音を立てて女体は揺れ、支えない体は、悶絶寸前のケイレンを起こしてビクビクと打ち震えていた。もう牝犬には声を立てる気力もなく、ハアハアという苦しげな吐息だけが激しく流れた。

両足の縄をといて降ろしてやっても、しばらくは、なえたように立てず、牝犬は手首の縄を握りしめて、腰抜けのようにぶら下っていた。

気合をいれるように、激しく革バンドで腰の辺りを殴りつけると、ハッと正気に還ったように、牝犬は直立した。腰がむしように痛



むのか、不自由な姿で、腰をこねくり廻してゆすっていた。

手首の縄をとくと、縄痕がまるで、ネジの螺旋のように深々と、赤い凹みをつくって、その強烈さを、まざまざと物語っていた。

「休ませてほしいか？」

牝犬は健気にも横に首を振る。

「よし、もっと激しい調教をしてほしいというのだな」

微かにうなづく。

私とドクター氏は、内心啞然としながら、血の気の昇った顔を見合わせた。

### その三——女体二つ折り蠟燭責め

部屋の一方を取り巻く手摺りに腰を支えながら徐々に体を立ててゆく。牝犬の両足を抱え込んで両膝が乳房にぴったりつくくらいに体を折り曲げ、しっかりと押さえ込むと、ドクター氏がわが意を得たりと許り、荷物のようにぐいぐいと締め上げて縛ってゆく。両手を手摺りの下からくぐらせて、縛って鴨居に吊るす。屹立した双臀は、尻打ち責めに恰好の位置であった。クリスマスの金蠟を立てて点火する。尻立て角度の傾斜で、熱した蠟涙が、ポタポタと敏感な皮膚に伝い始めた。見る見る蠟骸は堆積を増してゆく。牝犬クミイ

の表情に、衝撃の陶酔が走る。この強烈そのものの態度で、熱い蠟責めをうけることが、牝犬にとっては、何ものにもかえがたい歓喜の極みであった。

牝犬としての、プレイの間、人間の言葉は一切、許されていない。異様な沈黙の中で、恍惚と、呻吟する牝犬の官能の昂まりの声だけが、私達の心を疼かせていた。

「一寸喋らせましょうか、奴隷生活のいきさつなどを……」と私。

「そうですね、私達のプレイの参考になるかも知れません」

うなづいて、牝犬の顔を足裏でグイと踏みじり、二本の足指で鼻先をつまんで、いたぶりながら、

「しばらく、喋ることを許してやる。有難いと思うのだ。今の奴隷生活で、一番苦しかったことを告白するんだ。どういうことをされたのだ？」

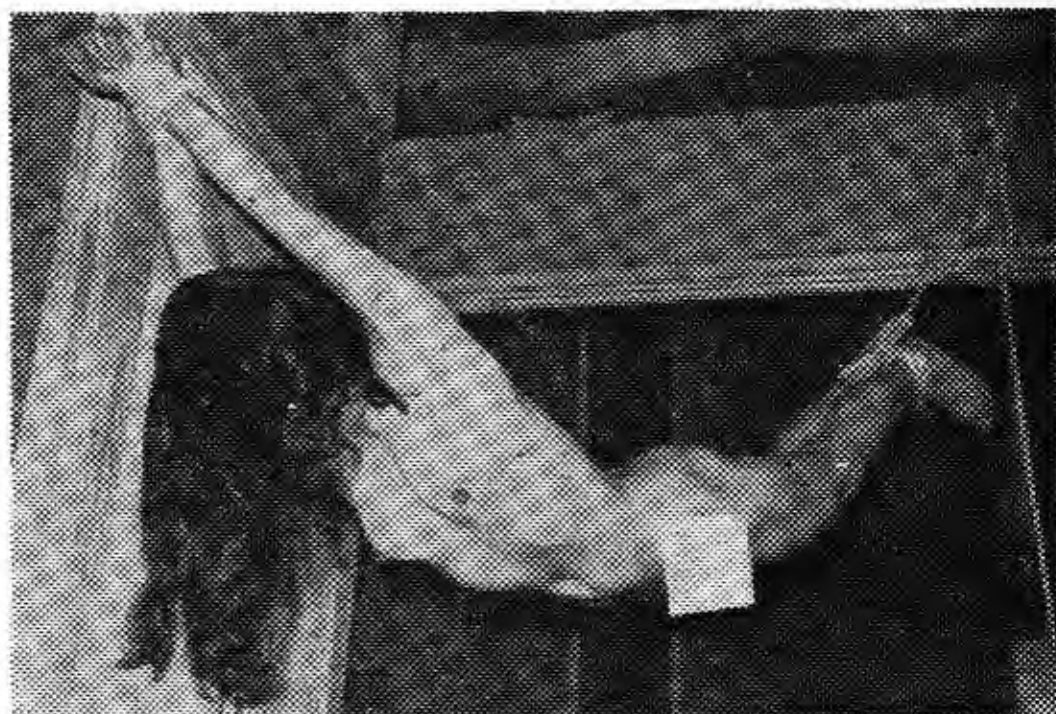
「む、むねがつまって喋りにくいんです」

「ぜいたくいうな。現に今、喋っているじゃないか。さあ、早くいえ」

「すべてが苦しい連続です」

「何故、逃げ出さないのだ」

「……………」



無言に対して、私の手が、いきなり尻にとぶ。

「責められることが、うれしいのだろうか？」

「ハイ……」

「お前の方が、それを望んでいるのだろう。だから逃げ出さないのだ。逃げ出したくないのだ。かわりパンコに、思い切り虐めてもら

「いたいのだろう」

「ハイ、その通りです」

「じゃあ、苦しみてもんじゃない、愉しみなんじゃないか」

「かも知れません」

「その愉しみの、もっとも大きい時の模様をいうのだ。早くいえ、いわないと何時間でもこうしておくぞ」

「ハイ。一番苦しかった、いえ愉しかった時は、両耳にゴム粘土をつめて、その上から蠟で封じられ、ノド仏まで、つかえそうな塊りのついた革の嵌口具をはめられ、荷造用の太い粘着テープをベッタリ両目にはられて眼隠しされ、それから……」

「それから……」

「ああ、息が苦しいのです」

ドクター氏は、少し縄をゆるめてやる。

「それから、革の搾衣や革手錠、足枷をはめられて、布団袋に押し込まれ、首だけ袋から出して、車のトランクに放り込まれて、ぐるぐる走り廻って何処かの広い庭園へ運び込まれました。かなりの人がいる様子でしたが何も見えず聞こえず、唯、気配で感じました。数人の人が、入れ換り立ち換り責めた挙句、荒縄で縛り直されまして、どろどろの冷たい



地面に投げ出され、股裂きにされて、長い間投げ捨てられていました。あとで分かったのですが、私のこの浅ましい姿をサカナにしてみんなで縁側でビールをのんでいたのです。余ったビールの流腸を受けたのはその直後です。泥にまみれた私の体を、泉水に投げ込み溺れて死にそうになった時、引揚げてくれま

した。地面に筵をひき、手足を大の字に、四方の杭に縛られた俤、それこそ死にそうになるまで入れ換り立ち換り、私を苛め抜きました。その誰一人として顔は分かりません。私は又元通り、車のトランクに入れられて戻ったのです」

「フーン、それだけか」

「人間スタンドにされました」

「どういふことなのだ」

「恰度、今と同じようなこんなポーズで、壁に押しつけた机の上にのせられて、ローソクの代りに、自家製の電気スタンドを立てるのです。書類はクリップで縄に挟みませんが、両足は邪魔になるといって、折り曲げられて縛りつけられてあります。ロ一杯に小さな灰皿をはめてまわって、吸い差しの煙草が、唇の周辺すれすれに、けむい紫煙をあげています。彼は机上に私をこうしておいて、仕事をし

り、計算をします。計算は私のむき出しの肌に、マジックサインペンで書き殴って勘定するのです。クチャクチャ噛むチューインガムの噛みかすは、私のホッペやひたいや、鼻先など、ところ構わずくっつけます。夏の蚊の多い夜など、渦巻の蚊取線香を、私の双方のおしりに金具で立てたりします。日によっ





ては、いろいろの色のマジックインキで、私の顔にいたずら書きなどして、仕事をするのです」

「奇抜な構想で、そうされる事で歓びを感じているのだろう」

「彼は気嫌のいい夜は、そのあと、いろいろと私の体を嬉しがらせてくれますが、うるさい時は、その尻ゴロりと横になって、うたたねをしたりして構ってくれません」

「自から求めて走った道だ。よろしい、ではもとの牝犬にかえれ。次は又吊り責めだ」

「一言だけいわせて下さい。どんな苦しい責めも我慢します。けれど何かの方法で私の体

も飲ばせて……でないと痛い方ばかりに心が走ります」

「分かった」

ピシリと頬を叩きのめし、私達は次の行動に移ることにした。

#### その四——駿河責め

牝犬の告白に虚構も混っているかも知れない。

しかし、クミイの虚構と現実の谷間を彷徨する告白が、私達を刺激したことは確かであった。

私達はこの苛めても苛めても、苛め足りぬ牝犬の緊縛に二人がかりで懸命に取組んでいた。緊縛に対する苦痛には、この牝犬は余りにも押れ過ぎ、鈍感になっているのか、駿河責めを試みるべく、私は胸から腕にかけて縛り、ドクター氏は腿や足を縛る間、この超マゾヒストは、さも嬉しげに数条の縄を甘受していたのである。

背後で、両手両足を一纏めにはどうしても縛れない。それは絵空事に過ぎず、いざ実際に縛ってみると、手足はすれすれに背後で接

触しても、それ以上は、余程手足の長いものででもない限り、無理であった。足首と手首に別の吊縄を通し、いよいよ引揚げる段階に到達する。

元気なドクター氏が、牝犬の体をよいしょと抱え上げ、私は梁にかけた縄をうんうんいって引っ張る。一休みして更に弾みをつけるようにして、彼はクミイの全身をぐいと差上げた。間髪を入れず縄を引き、裸身は高々と揚る。素早く鴨居に通してしっかりと繋ぎ、ドクター氏は、手を離す。牝犬は肌に喰い込む縄目の痛みに、思わずウウと唸る。東映の『徳川女刑罰史』で、可愛い金髪の少女ハニレーヌに行なった駿河責めは、見た目には等しくても、少女の吊り下げの縄が、落下傘につながついて苦痛は少なかった。今ここに現出した駿河責めは、全くのトリックなしの、縄のみの吊り下げである。それは、偉大なるマゾヒスト、谷山久美子以外には考えられぬ、サジストの夢を叶えてくれる極美の姿であった。

数段の階段をかけ上って、中二階になった寢室の障子を開き、腑かんしてカメラを構えあわただしく駆け下って、この凄まじいポーズに、私もドクター氏も、目を血走らせてシ



ヤッターをきった。私はタタミに長々と寝そべり、今見上げる空間に、ゆらゆらとたわやう緊縛の裸身を、胸躍る感激でみつめ乍ら、苦悶に唇をかみ眉を吊り上げる牝犬の、被虐の表情を追いつづけていた。

激情にかられてドクター氏は、牝犬の空間にうかぶ体を大きく揺さぶる。梁はミシミシと音を立てつつも、しっかりとこの女体を支え、揺れつづける牝犬は、叫喚の悲鳴をあげた。情容赦もなく、彼はぐるぐると数回、体をねじって放す。裸身が空に舞い、その強烈の緊縛を、余すことなく走馬燈のように、私

達の眼前に転回させていった。カラーとモノクロで数十枚も撮ったであろうか。

燃えに燃えさかる私の嗜虐心は、尚も牝犬を痛めつけるべく、被虐の限界に挑戦して、この息たえだえの牝犬に強靱な革ムチの洗礼を与えつづけていた。

ドクター氏の合図で下降させた時、牝犬クミイは半ば仮死状態に近かった。胸繩の圧迫によって、息づかいが乱れ、双眸は散慢であった。彼女のいう、歓びは何一つ与えてはいない。激しい、強烈そのものの責めと緊縛の連続で、流石のマゾヒスチック・アニマルもヘトヘトとなっているようであった。

### その五——両手垂直吊り責め

私はよく「その縛り方は、何というのですか？」ときかれることがある。そんな時は適当に答えておくが、相撲の四十八手のような名称は、私の縛る緊縛四十八手には、残念ながら、ないといってよかった。

縄掛けの極意書などには、尤もらしく、何々縛、何々と書いてはいるが、それは囚人なり、罪科人に対するものであって、緊縛をプレイとして駆使した時、その一つ一つの縛り方は、各人各様の自由奔放な想像の産物である筈である。

私は今、牝犬谷山久美子に対し、数々の苛酷な緊縛を続けているが、便宜上、××吊り責めとか名付けているのであって、決して正式な名称ではないことは論ずるまでもなく、自己流の表現に過ぎないのである。プレイの緊縛は、所詮そんな古式にのっとった窮屈なものではなく、自在闊達に、好きな様にやればいいのであって、それが又、嗜虐性の、緊縛に走る者の悦楽につながるのではなからうか。私自身、こうしたタイトルをつけて、区別すること自体に後めたさを感じるのであるが、次々様相をかえてゆく、限界への挑戦の緊縛に、勝手な名称をつけることを寛恕していただきたい。

ともあれ、牝犬クミイは、駿河責めによって、手足の関節が痛み、苦痛の為、数多の縄をやっと解きほぐしても、暫くは失神したように起き上れなかった。この、超マゾヒストをもってしても、この背後での両手足縛りの



吊り責めが、如何に苛烈であったかは想像にかたくない。サジストであるくせに、私もドクター氏も元来は又至ってフェミニストである。牝犬のうずくまった、縄痕だらけの裸身に、急に本来の心を取り戻したのか、ドクター氏は近よってしゃがみ込むと、牝犬の体のあちこちを揉みほぐすように、撫でさすってやっていた。牝犬は、やっと顔を上げた。何かいいかげである。宣誓を守って口を閉じているが、何をいおうとするのであろうか。

「嵌口令を解除してやりましょうか？」

「ええ」

と私は、うなずく。

「よしよし喋っていいぞ。どうしたのだな」

「水がのみたいのです」  
うなずいて彼はコップに水を汲んできてやる。谷山久美子は、さも美味しそうに一息にのみほし、ほんと大きく吐息をついた。

「すぐく胸が苦しくて。しめつけられて、息がとまりそうだったの」

「縛り方が悪かったかな。外の女性で、もっと我慢する人もあるんだよ」

ハッターをかませてドクター氏は、私に片目をつぶる。

「そうかしら、でも苦しかったわ」

「よしよし。じゃあ、少しラクな縛りをしてあげよう」

「センサー、ちょっとも構ってこないで……」

谷山久美子は、私のみつめる前で、ドクター氏に縋りつき、言外に何かを求めている。

そういえば、緊縛の折、いつも必ずといってよい程使用するバイ

ブや一連の大人の玩具は、いまだにすべて袋の底で眠っている。久美子にとって、被虐の極致が、たまらぬ愉悅につながることが物足りないに違いなかった。確かに今日の私達は、プレイという言葉で現わす、SMの悦虐や快楽を忘れての、ひたすら拷問のような責めにのみ走り過ぎていた様である。真性のマゾヒストであっても、快楽の伴わぬ責めの行為には、痛いものは、痛いのである。日頃の持論を忘れて、女体の責めに挑みかかる私達に、久美子は不満を感じていたのであろう。その行為を仄めかして、久美子は、ドクター氏に猥らに輝く眸でそれを訴えていた。



「ああ、少し疲れました。一風呂あびて来ますよ、いいでしょう」

私は気をきかせて立ち上る。私の手前、ドクター氏も幾分のためらいをみせていたからである。

「恰度、一休みって頃です。どうぞどうぞ。ああ、それから、あれ借りていいかしら」

ドクター氏は、親指と中指を十センチばかり広げてみせる。それは小型バイブレーターの長さであった。黙ってうなずき、私はタオルを握って、バスへおもむく。

洗うでもなく、湯ぶねにもたれて、これからの構図を考えていると、突然けたたましい



声が硝子窓を隔てて耳をつく。ここまで聞こえてくるくらいなら、その叫びは相当に激しく大きいものである筈であった。秘かに心待ちに待ちかねたパイプの洗礼を受けて、谷山久美子の歓喜は、こらえようもなく堰を切ったように、一気に爆発したのであろう。

激しい恍惚の嬌声が嬌々と私の耳をうつ。ドクター氏のサービスによって女の心は一挙に昂揚し、それがこれからの緊縛に好結果を与えることは、間違いないように思われた。私は独り微笑む。さしてその方に関心のない純粹のS人の佐久間先生が、私の役柄を引き

好感が持たれた。

麻雀のようなものにしろ、勝っても負けてもキレイに打つ人と、何か厭味な、きたない人とがあって、上手下手は別として、私はそうした、何処となくきたないやり方の人とは爾後あまり交際<sup>つきあ</sup>いたくなかった。それは誰しもそうであろうが、自分のきたなさに人々は往々にして気付かないものである。

その点、ドクター氏と気がよく合うのは、彼のプレイ振りはキレイだからだったからかも知れない。

K氏のように、ハント女性を撮る場合、応

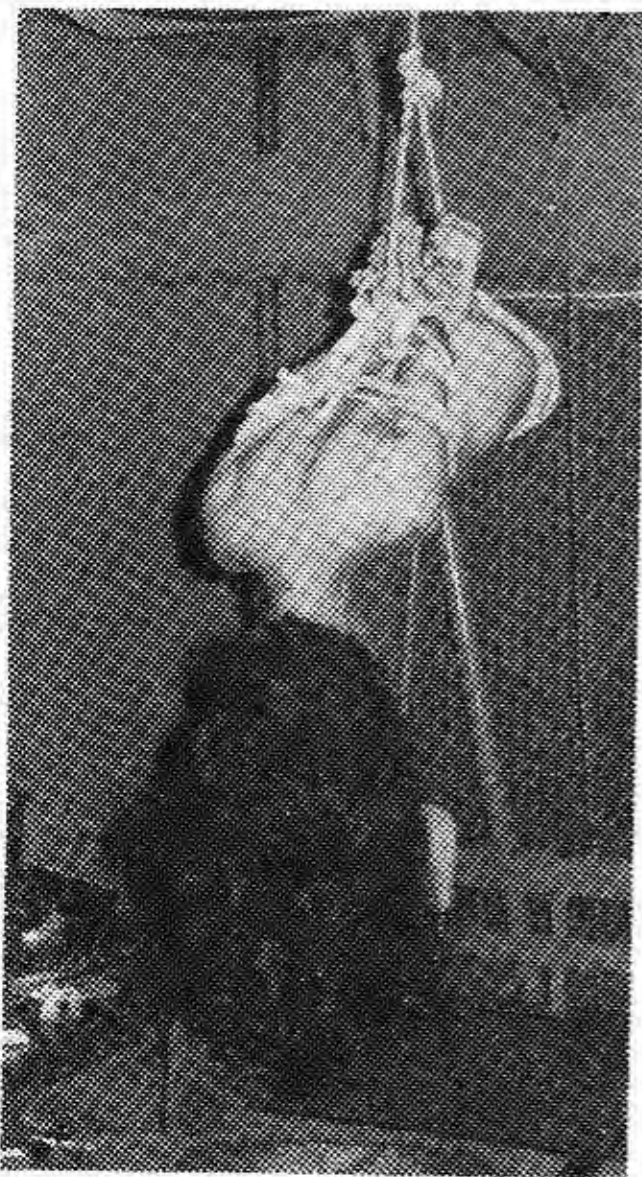
受けて、ひたすらに久美子を欲ばせようと努力している姿を想像して、微笑笑を禁じ得なかったのである。

同好の人々と一緒にプレイした時、そのプレイに綺麗な人ときたない人がある。それはそれぞれの性向にもよることだが、さつとアカ抜けのしたプレイをする人には、やはり

援を頼むと、忽ち尊大な態度になり、すぐ相手の女性の素性や名前などきき出して自分を売り込み、次回からは一対一でプレイしようとする。又U氏のように、プレイもそこそこに、ネチネチともっぱらセックスのみに走りたがる。A君のように、散々フォトは撮るくせに、助手という名目だからと、ハント費用を全然、負担せぬ。紹介したハント女性の前をハネルのは当然だというように、自分もプレイしておきながら、女性の報酬のピンハネをするM氏など、それぞれコトに当たって個性丸出しにするが、私にいわせたら、すべてキタナイやり方である。

ドクター氏のように、ほどよくプレイの雰囲気にとけ込み、余り出しゃばらず、さりとして傍観もせず、プレイ費用の方もチャンと心得ているとなると、つい一人で行なえない今日のような場合は、お願いしたくもなるものであった。しかも彼はセックスには私よりも淡泊であった。私の場合、糖尿の持病からくるやむを得ずの情なさであるから、元氣な私なら到底、我慢もしなかったであろうし、糖尿といい乍ら、結構近ごろは、行きつく果ては、何とかかとかいいながら、そちらへ走っていた。





その淡泊な彼が、珍しく、谷山久美子に悦楽と歓喜を与えるために努力していた。

更につづく緊縛プレイに錦上華を添えるべく、女の関心を昂めつつあったのである。

部屋の覗けるバスの硝子張りから、そっと窺ってみたが、私は大人気ない気がして、湯の中にじっと入りつづけていた。

ゆっくり時間をかけて上ると部屋に戻る。

私の気配に振り返ったドクター氏は、一寸照れ臭そうに笑った。谷山久美子は、あられもなくしとどに乱れて、私が戻ってきてても、快楽の呻きを中断させなかった。

簡単に縛った両手、胸縄——。そのアクセサリーがなければ、ドクター氏はハッスル出

来なかったのである。彼の手許に大人の玩具が数種ちらばっている。黙々と私は裸身にサラシの褌を纏いつけた。

女体がのたうち、そして、陶酔の中で女は悶え、巧みなドクター氏の手練によって、女はぐったりとなった。かすかに薄黒い目くまをうかべて、女は死んだように目をつむってのけぞった俤でいる。

「あとあとの為に、一丁、喜ばせてやりましょう」

「それを求めていたのですよ。分かっていながら、いつもに似ず、お互いに大分、逸っていましたからね」

「辻村さんのお株をとって申し訳ない」

「とてもとても——有難いですよ。じやあ、そろそろやりますか」

「そうですね。彼女の手首、かなり腫れ上っているようですから、少し柔らかい布を使ってやったらどうでしょう」

「いいでしょう」

二本の晒布をとり出して、ドクター氏に手渡す。

「さあ、始めるよ。起きられるかね」

「ええ、大丈夫です」

物頼げに女は上体を起こす。牝犬としてでなく、一人のマゾ女性として扱うことに私達の意見は一致した。終始、何も喋らず、哀歓苦楽を訴えないのは、やっていても何となく張り応えがないからであった。

「あの寝室へ昇る階段の、踊り場から下へ吊りさげてみましょうか」

「一寸むつかしいですね。あそこへ立たせる程の腰掛けも、道具ありませんよ」

「あの階段の端に足をかけさせて、うしろから抱きかかえていて下さい。早いとこ両手を棒に縛りつけますから。さあ、この階段の手摺りを跨いで、しっかり落ちないように握っているんだよ」

「何だか怖いわ。大丈夫かしら」

「先生が、うしろから体を支えているよ」

促されて、谷山久美子は数段昇って、手摺りを跨ぎ、全身を傾斜させて、おびえた表情になった。

踊り場へ立って、先ず右手を柵木に縛りつ

け、ついで、なかなか離さぬ左手を、手摺りからもぎとるようにして同様に縛りつける。腰から下半身が歪んで、階段の端をしっかりと踏んでいるが、ドクター氏が手を離せば、忽ちブランと杵木にぶら下ってしまう。

慌しく階段をかけ下り、下から体を受けるようにして、両足を握って足を外させる。手首の縛りは布だから、さして痛くないが、女の表情に恐怖が浮かび上っている。

空間で両足を開かせたり、垂直に伸ばさせたり、腰を前后に振らせたりして、支えのない体操を命令する。両手を伸ばすと久美子の腰の辺りまで届く。一しきりカメラを撮り終わり、蔽いようもなく、すべすべとなめらかなふくらみに、私のいたずらの手が伸びる。絶え入るような熱い吐息を洩らして、女体は妖しく空にくねくねとうねる。ドクター氏の手が、スラリと伸びた女の足裏を擦る。女獣の嬌声は、急激にけたたましくなり、パイプの衝撃に、果ては両足で空を蹴って歓喜にわめいた。その手段も又、恐怖を忘れさせ、このはりつけのような吊りのポーズを少しでも長持ちさせる方法であった。

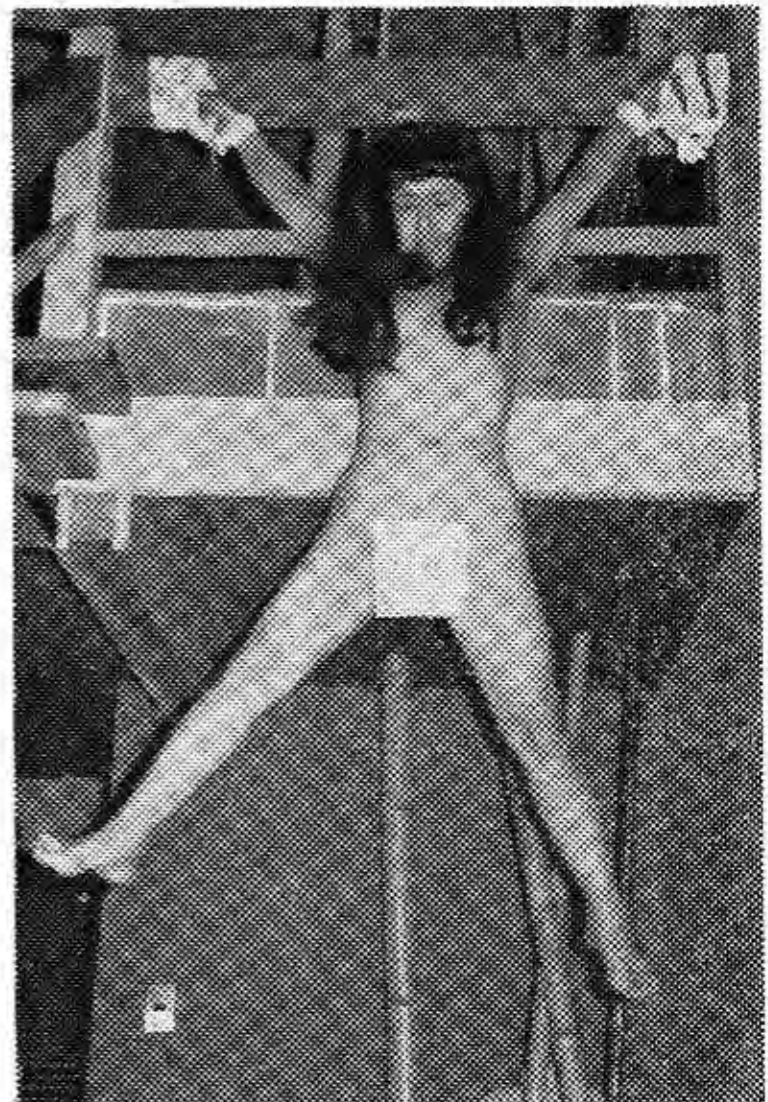
女体は宙に踊り、二本の足が空中でタップダンスを踏んでいた。

もうこれくらいでよからうと、快楽のプレイを中止し、私は手を伸ばして腿から腰へかけて抱き、ドクター氏がソロソロと布を外した。ドサツと重味がかかり谷山久美子は、私の頸を持つ。重い体を抱えた俤、私は部屋へと引返していった。

### その六——女体 屈曲両足吊り責

これと同じポーズを、縛り方教室で、伊吹真砂子に行なった記憶がある。しかしその吊り下げは低く、私の腹部あたりに伊吹真砂子の豊かな双臀があったのを覚えている。どの様なポーズの吊り方にしろ、例えば数センチでも体が地上を離れると、もう高くても、低くても、体に受ける苦痛は同じである。しかし吊りの場合、見た目には、地上すれすれと高々と吊った場合とでは、その迫力には格段の相違がある。高く吊れば吊るほど、そこに峻烈な、吊りの美しさが生じていた。

両手を膝裏へ回して縛って腰で止め、足首



を一本の短い縄できつくしめ上げて、それに縄を通しただけの簡単なものである。

ドクター氏は、全身の力をこめて、ヨイシヨ、ヨイシヨの懸声と共に、久美子の体を持ちあげ、差し上げ、私は懸命に縄を引いた。

両足が、殆ど梁すれすれにまで吊り上る。しっかり結んで止めるとドクター氏は差し上げていた手を離す。見事な足首での吊りのポーズが出来上る。かなり苦痛なのだろうが、女の足指に、十指とも力がこめられて、反りかえっていた。

ドクター氏は小型のパイプを振動させると



ごく事務的に扱い、長く垂れ下った髪の毛を掴んで、はずみをつけて、女体を回転させて離す。

コマの様に、空中に女体が舞って、微かな振動音が、遠く近く耳朶を撃った。

転回がゆるく逆転してやっと止まり、ゆるらゆらと、裸身をゆらめかせて、女は甘い呻きをまきちらしていた。その都度、敏感に反応して、神経の深奥は、この人工の悦楽器の感激を、素直に受け止めていた。

官能の疼きに酔い痴れた一匹の女獣は、私達のその時の、一寸の気まぐれによって、いきなり誘発される悦虐にとまどいながらも、その刹那のうたかたの愉悦に、惜しみなく感情をむき出しに露出させていた。

被虐プラス悦楽という方程式は、谷山久美子ほどの真性マゾヒストにも立証された。

過去数度の吊り責めにくらべて、それは何という変化であろうか。一匹の美しい獲物のように高々と吊り下げられた女体から、絶え間なく洩れる甘い喘ぎは、現実のこの苛酷な両足吊りの責苦を忘却させて、尚余りあるように思われるのであった。

時を得たりと、革紐は空を切って唸りを生じて、臀部に炸烈する。ギャツと女獣の絶叫

が忽ち甘美なる声に変わって、女はそのムチを甘く受け止めていた。双臀に華やかなミミズ腫れが、須臾にして数条、浮き上る。ムチうつ力で、女体は宙にコマと舞い、けたたましい叫声と歓声がミックスして、今、谷山久美子は、苦痛と快楽の渦中に、我れを忘れて耽溺していた。煮えたぎる想いにかられて、パイプをさっと掌中に納めると、より強烈なものへと、愛玩の器物は交替していった。

### その七——開股いのしし吊り責

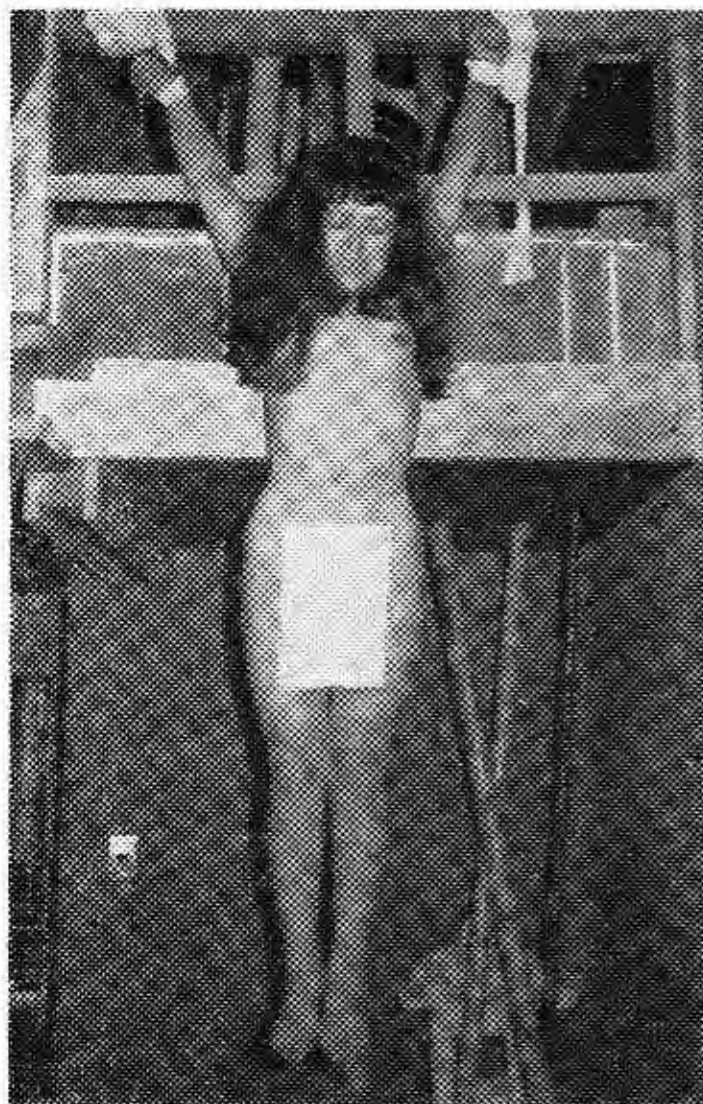
右手と右足、左手と左足を縛りつけて、股裂きさながらに、精一杯に開ききって吊り下げる。この様なポーズは谷山久美子以外のハ

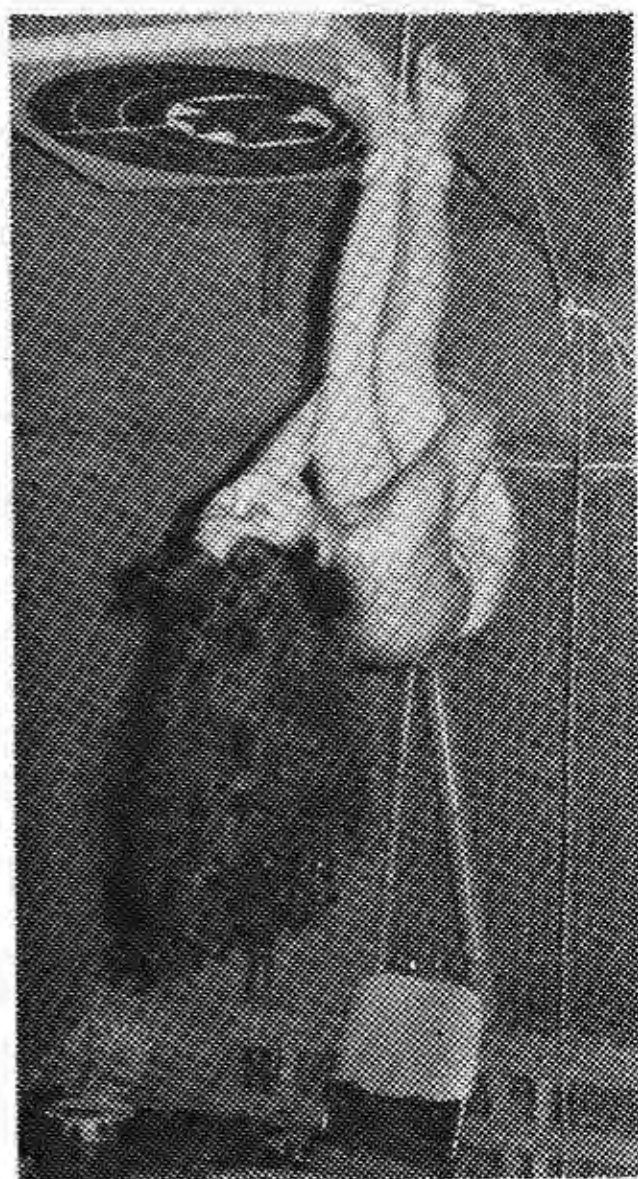
ント女性では、凡そ考えられぬ吊り責めである。私達が日頃、想像上の産物として絵画には描けても、いざ実際に女体に試みた場合、大半は実現不可能であった。しかし谷山久美子に限っては、殆ど想像に近いものにまで実現が可能であったのは彼女自身、非常に柔軟

な女体の持主であると同時に、あらゆる被虐に耐え得る、誠に稀有の女性であったからである。

ドクター氏が女体を持ち上げ、私が鴨居に力をこめて縄を引っ張って結びつける。大の男が二人でやる時には、大抵の事なら易々として実行出来た。

私達のこの緊縛の労働は、比較的ラクであったが、谷山久美子にとっては、到底、長い時間、耐えうるものではなかった。女の苦悶は、その激しい唸り声にまざまざと現われていた。私の真正面に、むき出しにされた羞恥のポーズ——。蠟燭に点火すると、片手を高





々と掲げて、股裂きの中点に傾斜させる。熱蠟は尾を曳いてポタポタと落下し、次第にローソクと落下地点を接近させるにつれて、唸り声は、けたたましい咆哮と変わり、部屋のしじまを裂いて、耳朶を圧した。熱蠟の累積が回みを埋めつくしても、ローソク責めは終わらない。嗜虐に猛り狂う魂の雄叫びが、これでもか、これでもかと、私に苛責を続けさせた。ガクンと垂れ下った顔に近づき、髪を掴んで、仰向かせた鼻孔に、熱い滴がポタポタと流れ込んでゆく。直線に落下した蠟涙が鼻孔深く薄い粘膜を灼いて、キーンと全身をつらぬく激痛に、女の体はおこりのように震え、口一杯に開いて絶叫する久美子の表情に

は、苦悶以外の何もものなかった。蠟滴は的を誤まって、かっと開いた口腔にも、白い花を咲かせて飛散した。

「く、くるしい、もうやめてえー」「どうだ、一〇〇パーセントか」

「……………」

「どこが苦しいのだ？」

「腕の付根や腿の関節が、今にも外れそう、もうダメ……ああ、もうがまん出来ない」

ドクター氏が体を抱えて、支えてやった。「ああ、もう死にそうだったわ。それにローソクがすごく熱かった——」

「体に十センチぐらいまで近づけたからね」

「きつと火傷してるわ」

「えらく、弱音を吐くじゃないか」

「縛られ続けて、クタクタでしょう。だから尚更こたえるのね」

「どの女性にも果たせなかった事を、すべてやってみるつもりだったからね。ああ、先生

——随分、手がだるいでしょう。もう一度、離してしまいなさいよ、構いませんから」

うなずいてドクター氏は、抱えていた手をそっと離れた。

こびりついた蠟骸が、ポロポロとこぼれ落ちる。

「浣腸しちゃうから」

フト、そんな言葉が口をついて出た。笑っていたきます。というテレビ番組の、堺正章がしばしば口にする惹句がこれである。テレビで浣腸という言葉が、憶面もなく飛び出す時代である。自分でいって、テレビの見過ぎかなと苦笑し乍ら、私の眼は、あからさまに正面に位置する、浣腸ルートに釘付けされていた。

洗面器にたっぷり一杯の湯を汲み上げてくると、エネマシリンジを沈め、圧力をかけてぐいぐいと注入する掌に力が入った。これで三度、谷山久美子は浣腸の洗礼を受け、絶え入るような呻きを洩らしていた。湯量約一リットルを完全に注入し終り、その排出をふせぐべく、蠟涙による埋立作業を行なった。力強い腹部の圧力によって、そんなものは、いざとなれば消し飛んでしまうかも知れないがものは試しである。蠟滴の乾いた上から、セ



ロープをベタベタと縦横無尽に張りめぐらせて押える。

股裂きで吊り下った女体を鐘に見立て、私はこぶしを固めると、横木がわりに、臀部をゴツンゴツンと、つついた。女体は前後にゆらゆらと揺れ、腹部の充満した苦悶と、既に十分近く吊られた手首、関節の痛みで、女の唸り声も途切れ途切れに噎れ果て、もはや苦虐の昏睡状態に近かった。

二人がかりでずるずると女体を降しても、身動きもしない。それでも圧迫する腹部の苦痛に耐えかねてか、しきりに

「ああ、ゆかせてえ……もう我慢出来ない。ああ、苦しいわ」

と白眼をむいて、頬をこわばらせている。首縄をつけて、トイレの扉を開き、私達は密封した蟬滴やセロテープが、どれ程迄に効果があつたかを、この眼で確認しようとした。

腰を浮かし加減にさせて、私達の見守る前で、刹那ベタベタはりつけたセロテープに、水液がにじみ始め、不規則に伝い始めたと思つたのも束の間、忽ちにして激しい下瀉が、飛沫をあげて、白いタイルに乱れ走った。

一瀉千里の勢いに押し切られ、濡れた醜い蟬骸がポトリポトリと落下する。

バスで汚れた体を浄めるよう命令して、私達は部屋へと満足げに引き返した。

日頃、心に持ち続けていたものをすべてやりつくした満足感で、私は快い飽和状態にひたっていた。疲労が左程でもないのは、ドクター氏がシンディ作業の方を、殆ど引き受けてくれたからだろうか。

「やりましたね。私も、もう思い残すことはありませんよ」

煙草をくゆらせ乍ら、ドクター氏は、快楽の飽和点に達したのか、眼を細めて嬉しそうに呟いた。

「随分時間をかけましたね。もう四時間近く経ちましたよ。好きなればこそやれるんですね。考えてみりゃ、吊り、吊りの連続で、かなりの重労働ですよ」

「だけど、今迄みたいに彼女の帰る時間を気にする必要がないから、気分がラクです。今

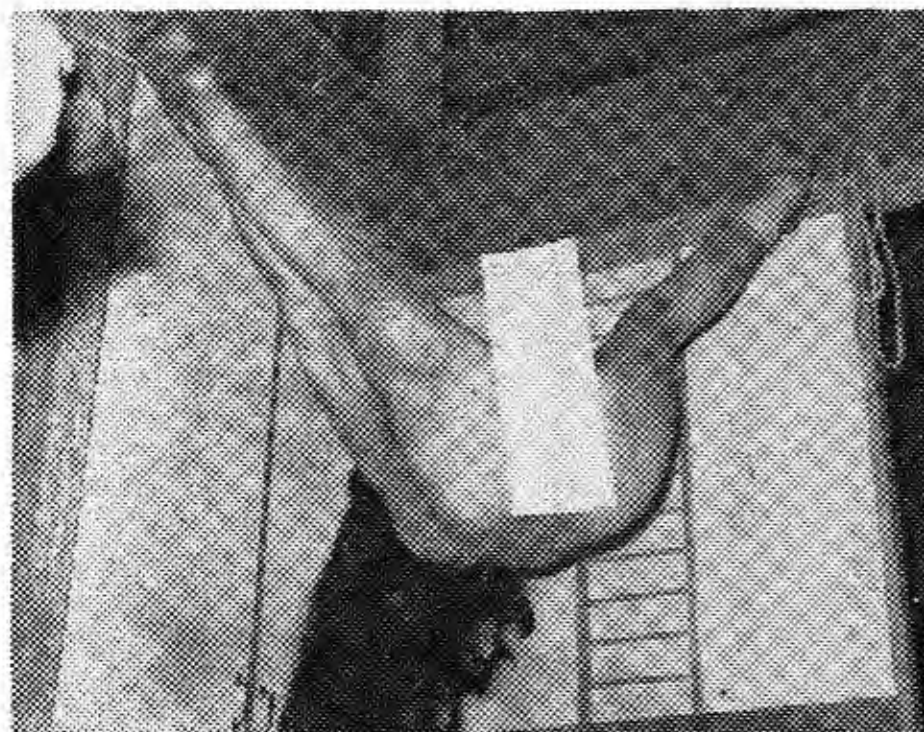


日はすべて気分的に爽やかでした」

「それにしても彼女、超人的ですよ。まあ十中八九の女性は、とても体がもたないでしょう。ああして湯につかって出てきたら、又ぞろケロッとしていますよ、キット」

「どうでしょう、今日こそは一〇〇パーセントだといわせてみたいですね」

「いや、彼女の場合、その時、その時のプレイは、痛さや苦しみで、もうやめてほしいと思つていても、それが一つ終れば、忽ち被虐を求める心が変わるのです。やってもやっても、懼らくキリがないでしょう。従って、谷山久美子の場合、彼女の謂う一〇〇パーセントはあり得ないと思うのです」



「でも、もうそろそろこちらが草臥れてきましたからね」

「最後に、念願の片足の逆さ吊りをやって、今日の打止めとしましょう。彼女が百パーセントの歓びを得なくても、私達は百パーセント以上の満足をしたのだから、もって事足りてすべきですよ」

「ええ、それだけは是非やりたいですなあ。彼女、O・Kするでしょうか」

「見ていてごらんなさい。決してイヤとはいいませんから」

その私の予測通り、体を拭いて、裸身の儘部屋に戻ってきた彼女に、その希望を打明けると、嬉しそうに女はニコリと笑ったものである。ああ怖るべきこのマゾ性よ。私とドクター氏は思わず顔を見合わせて苦笑した。

### 大詰め——凄絶！ 片足逆さ

#### 吊り責めとプラスチックフア。

片足吊りの場合、もう一方の自由の足がブラブラしていても眼触りなので、膝で折り曲げて強く縛り、後手の縄につなぐ。彼女への吊り縄の縛りに対する配慮は無用だから、いとも簡単に片足首を数回巻いて括り、例によってドクター氏が女の体を持ち上げる。私が縄を引く。垂直に左足が天井にぐんぐんと伸びて行く。梁にすれすれまで引上げて縄を結びとめる。ドクター氏がソロソロと体を降下させて離してゆく。予想以上にコトは簡単に運んで、片足の逆さ吊りで、谷山久美子は空間に吊り下った。片足の縄にぐんと全身の重みがかかり皮肉に喰い込んで、ウウツと、女は声にならぬ呻きをあげて、苦痛に眉をしかめ、歯を喰い縛って頬を引きつらせていた。一本縄なので、自然に全身がゆるやかに回転

する。それが反って好都合で、私達はぐんと離れて、全身が入る位置から、しきりにシャッターをきった。二人のストロボが白い点滅を撒きちらし、ノドがからからになってくる昂奮で、心をうわずらせて、カラーとモノクロを交互に構え、この素晴らしき逆さ吊りに全霊を集中させて撮りまくった。

「ウーン。ああ、痛い。足がチ切れそう。早く降ろしてえ」

「まだまだ」

ドクター氏が私に眼くばせした。心得て、パイプレーターをとり上げると、女に恍惚と陶酔を与えるべく近寄る。

苦悶の呻きが甘く変わって、苦悶の中に悦虐を覚えて、女はキリキリ奥歯を鳴らして呻吟する。この片足逆さ吊りこそ、私が日頃念願の、夢にまでみた結集であった。谷山久美子という超マゾヒストの女性によってのみ、この積年の念願が果たされたのである。

殆どの女性に対して、つい思わず、フェミニストになる私が、不思議に、この谷山久美子にのみは、それを感じなかった。彼女に対してフェミニストになることは、彼女の不満を助長させるに過ぎないことを知っていたからである。愛撫の代りに平手打ちをくれ、抱



擁の代りにムチ打ちした。そうすることによって女が歓ぶことを知っているだけに、これでもか、これでもかと、嵩にかかったの、激しい強烈きわまる緊縛の数々が、その刹那々々には苦痛であっても、日々の経過と共に、甘い被虐の想い出として、すりかえてゆく女性であることを知り過ぎる程知っていた。

緊縛、笞打、浣腸、凌辱、そして挙句にはそうした状態の下に遂行されるセックス。これが谷山久美子のワンセットの悦楽である。手加減や、優しさは、彼女の求めるところではなかった。トコトンまで虐め抜かれ、汚辱にまみれて、晴々として引揚げてゆく彼女に私の中年の肉体をもってしては、到底手に負えない激しさをいつも感じていた。

今、二対一なればこそ、思い切って振舞えているのかも知れない。

彼女を巡る、サジストの男達は、既に十指に及ぶかも知れない。そうしたすべての男達を飽和状態にさせる女、谷山久美子は、又と得がたい真性マゾヒストであろう。

「あの女と」で、女体の被虐美を追求しつづけた、山本一章の筆を折らせ、私やドクター氏の如く、孜孜營々と嗜虐を追求しつづける男達をたんのうさせた女、谷山久美子——。

彼女はさしたる美貌でもない。とりわけの教養ある女でもない。素晴らしい肉体の持主でもない。それでいて、その男達を次々と果てなく喰い尽す、虐めても虐めても、虐めたりない女であった。

今ここに、今日のハントの最終の美を飾るにふさわしい、嗜虐プレイの極致がある。

女は呻き、泣き喚き、嬌声をあげ、肉をくねらせ、刻々と鬱血する脳裡を、被虐の歓喜に疼かせて、ぶら下っていた。

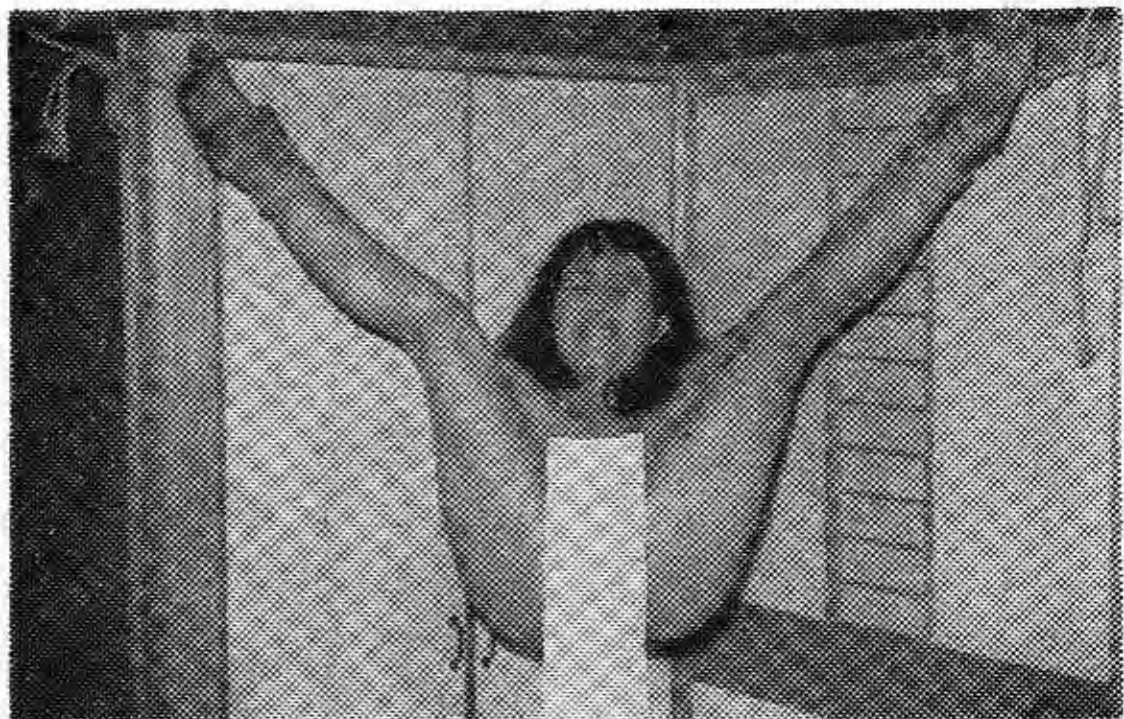
けたたましく奔流する熱血にかき立てられカメラを措くと、逆さの女体にかけより、ズボンから引き抜いた太い黒革のバンドで、皮膚も裂けよ、骨も砕けよと許り、私は憑かれたように叩きまくった。

くねくねと転回し、歓喜の坩堝の中で、絶叫し、咆哮する女体は、虚構の域をまぎれもなく越えた、生々しい現実の姿であった。

胸に、乳房に、臀に、私の桃色の齒型を烙印させて、引き下げられた女体は、声もなく伸びていた。

私はドクター氏の耳許で、熱い息吹きを吹きかけて、あることを囁く。うなずいて彼はバスへと消えた。

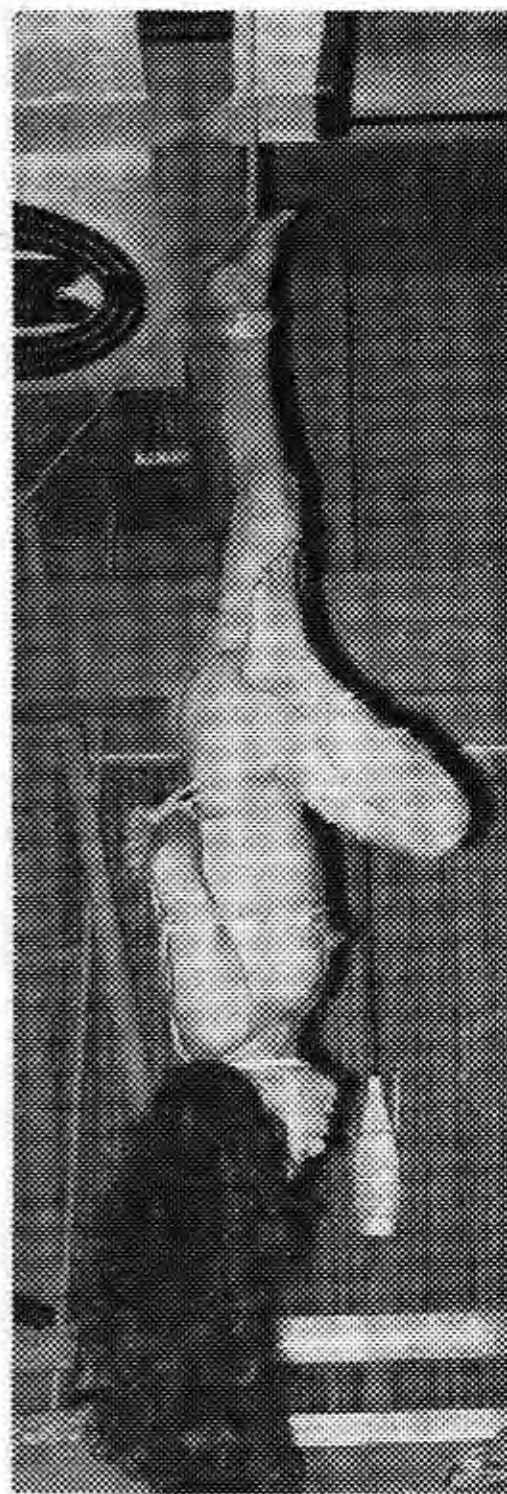
キレギレに、うつつのように私を求める女



の言葉は、有終の美を飾る、女のみたされぬ望みを訴えていた。

避妊リングを装着した久美子の目的は夫へのためではない。悦虐の果てにおとずれる歓喜の淵にドッポリと身を沈めるため、自分を虐めつくしてくれる男達のためであった。





悦虐のプラスアルファを求めて、久美子の顔は猥らに歪んでいる。苦虐による悦楽のさめぬ間に、ひたすらに没入して、最後のピリオドを打ちたがっていたのである。

女の片脚は、膝から折れ曲って縛られた俤で、私を迎えようとする痴態は、片足逆さ吊りの縄をすべてつけていた。

かつては、緊縛のプレイそのものによって私のセックスは、殆ど昇華し、完全燃焼していたのに、次々と現われる人妻の挑みに、私は、いつの頃からか負けていた。それはプレイの当然の帰結であるかも知れないし、女の方から求められた時、男としてその求めに応じないのは、むしろ卑怯であったからかも知れない。プレイというルールを重視したため私は過去しばしば燃える女体の、熱度をさま

し損ねて、女性から皮肉られたり、不気嫌にさせた苦い記憶がある。

プレイに潔ぎよく同行してくる女性なら、最終の帰結は、そこへゆくのが自然の姿であった。金銭的にはっきり割切った緊縛モデルや、未知の怖さに震え乍ら、怖いものみたさの、初体験の若い娘ならいざ知らず、最近ハントする人妻は、結局は、緊縛のプレイによって、女体を疼かせ、むしろセックスアピールするものであることを、私はそのしばしばのプレイから感得していた。

相手が求めるのなら、それに従って飲ばせてやるのが情ではなからうか。燃えるだけ燃え立たせて、所知らぬ顔をするのは、蛇の生殺しにも似た行為であるかも知れない。

私自身、糖尿という持病があるくせに、た

しかに最近ではセックスづいていた。それは、この持病をもって果して可能なりやという自分の肉体への試みのようでもあった。その結果、巷間に伝わるように、糖尿病でファルスしないという伝説は、間違っている事を確認していた。糖尿病によって、セックスアピールしないのは確かであっても、自分がその気で努力し、私のような機会をもてたら、或る程度、いや常人と何ら変わらないという自信を世の同病相憐れむ諸氏は、もっていただいてよいのではなからうか。

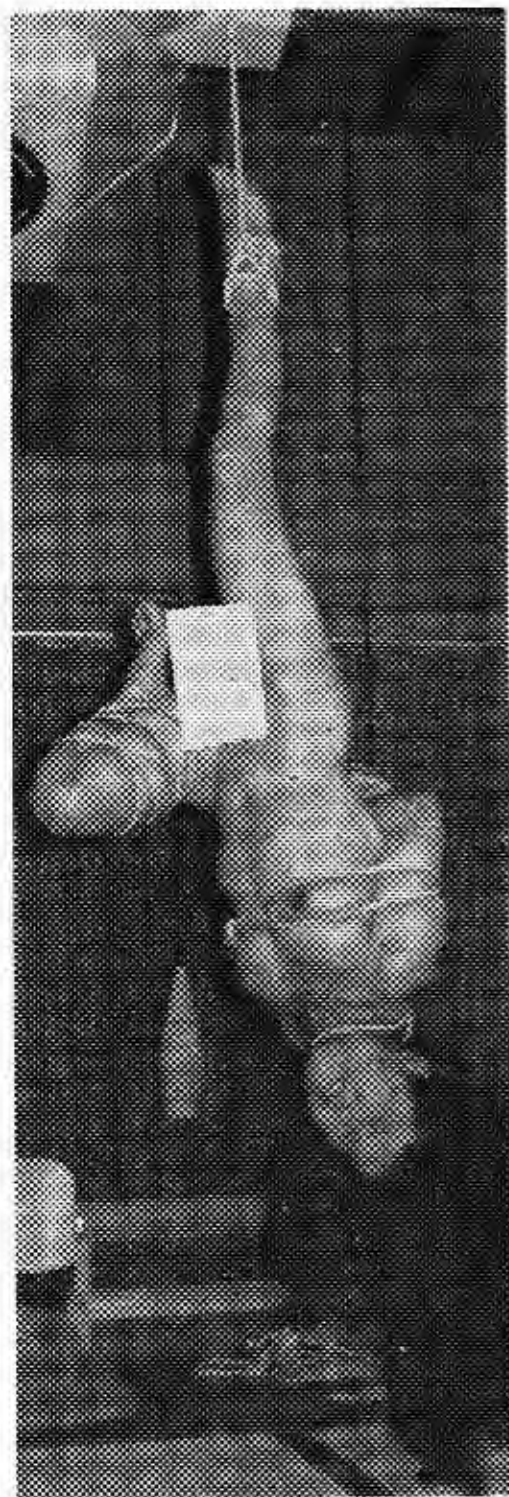
とあれ、激しいアピールの果、私はクタクタになって谷山久美子の傍らに伸びていた。すべてやるだけやった、満足と飽和感と、何かむなしい虚脱感に襲われて、起き上ろうとしなかった。

狂った様に悶え、私の肩に噛みついた久美子が、ウソのように安らかに、依然として縛られた俤、転がっていた。

華やかなプレイの数々のあとに、フト忍びよる空白——。私は何のために、己れのエネルギーを、せっせとすり減らしているのだろうか。

或いは老化を早めるかも知れない行為と知りつつ、それでいて、これがよわい五十才に





なんなんとする私の生甲斐ではなからうかと矛盾した心で、傍らの多情多淫に、ややうらぶれ、荒れ果てた女の顔を、一抹の味けなさでみつめるのであった。

裸の私の傍に、これも禪一丁のドクター氏が、思いやりのある笑顔で膝をついて、じつと私の顔をのぞきこんだ。

「大分、疲れたようですね」

「ええ、どうも——」

起き上って、ノロノロと久美子の縄に手をのばす私を引きとめ、ドクター氏は素早く、彼女の縄をといていった。

「先生は？」

「いいんですよ、私は。数々の緊縛や吊りで充分ですよ。じゃあ、そろそろ帰り支度を始めましょうか」

ドクター氏の声につられて、女はやっと体を起こす。

焦点のきまらぬ、放心状態のうつろな眸が漫然と私をみつめていた。

久美子の心に激しく吹き荒れた、被虐願望の台風は過ぎ去った。

今、彼女の心には、明日のない、むなしいう住所不定の悔恨が刻み込まれているに違いない。

被虐に身をゆだねる、その束の間に心を燃焼させても、正規のルートに戻った彼女には人間らしい希望も目的もなく、ただ奴隷生活が待っていた。

いつ又会えるやら、いや、もう会わぬ方がいいかも知れない。安定の住居を放棄して、理性を忘れ、うたかたの被虐の情熱に走った

谷山久美子に、フト佻しい、哀れさを覚えたものの、それ以上、立ち入る関心は私にはなかった。

彼女の末路はどうなるか、それは私の関知するところではない。

刹那の刺激に、お互いの心を火と燃やしても、さめたあとは、もう何のゆかりもない他人同志に過ぎなかった。彼女に対し憐哀はあっても愛情はない。

私達はさっさと、帰り支度を整え始めた。

「どう、今日は百パーセントだった？」

ドクター氏が笑顔で訊ねる。

「さあ、分からないわ……。又、いつか会って下さる？」

二人へ向かって女は問う。

私は黙したままで、ドクター氏が代りに応えた。

「ああ、お望みならいつでもね。でも、これ以上のことは無理だし、繰り返して過ぎない様に思うがね」

それは私の心の代弁でもある。超マゾヒスト、谷山久美子よ、何処へゆく——。

カーテンを開いた窓に、つるべおとしの夕闇が忍びよっていた。



カット・岡 たちし

M派の暁将、田沼醜男氏が、そのラジカルで大胆なる発想と、旺盛なるM体験によるエッセイをひっさげて初登場（本当の初登場はおそらく一九五九年×月号読者通信であると思うが）、何よりも三者関係的、逆転趣味的M色濃厚なること、沼氏以来の卓抜さと名文ぶりでM人士を随喜せしめたことがあった。世間では不祥事件相つぎ、そのあふりか沼氏著「家畜人ヤプー」及び「手帖」の、某出版社による出版とりやめ（？）なんていう事態となつて、ひそかにがっかりしたのも今ではなつかしい思い出。

奇クのある号の、田沼氏作品の、目次の活字が中央折りこみの部分にあって見えないよう？ にしてあったりして、或いは？ と思ひ、そうならばと、編集部の手法に感心

したりしたものだが、田沼氏作品のような大胆なものを、堂々と連続掲載してくれるのがうれしかったものである。

それにしても、当時の日本人が意識的、或いは無意識的に持ったにちがいない救いがた？ 白人崇拜。又、それを裏がえしにしたような、自分と同色人種蔑視感情への考察やS誌に幾つか載った、ハードタッチの珍しい名M小説には、感嘆の他なかったが、あれから何年かの歳月が流れて、GNP何位だとか驚くべき経済成長がどうのといい、でもやはりそれも例えば公害の恐怖ひとつとりあげても何とも空しいそれにすぎなかったのではとやっと気がついたみたい、日本人ではなかったか、なんて感じちまって仕方ない（私だけなら幸いだ）昨今なのだ。日本政府の相

哀れなる夢 想

まさにとわごと

虹、丸 虹 吉

変わらぬの対米追随ぶり。しかも近年徐々に激しさ加える軍国主義日本という世界のレッテル。

さて、全盛？ の深夜放送でも聞くようにして、何気なく（もとよりノンセクトの人間のこと、イデオロギーや好き嫌いをぬきに）聞くともなく聞いていると、北京放送なるものは仲々うがったこと言う、と往々にして感心をさせられることもある（日本の偉い人なんかの、あの説得力に乏しい演説ばかり聞かされていると、北京放送のオーバーな口調も、随分と説得力を持って聞こえるのは本当）のだけれど、それもどうやらSM的表現が仲々あるということにあるらしい。

SMなんていえば一寸、場違いかも知れない。しかし、つまり、そのきまり文句の一つ



が「米帝国主義に追隨する日本反動派」だが例え11月23日の放送では、「米帝国主義は日本反動派政府など一にぎりの召使いどもをかり集め……」とか、「日本の反動政府の代表は、そのご主人米國に追隨し、その口調まで猿まねをして……」といった具合で、かたくなに中國敵視政策をとりつづける日本國首相といえ、常に召使、下僕、手先、番犬、タイコ持ち、etc、なんていう、M派にとり大變シゲキ的名称の存在以上では決して登場してきやしないこっけい？ さではある。

11月某日の國連總會での、演説へのショート・ショート？ ブラック・ユーモア？ 的（SM色ある笑いが濃厚）ストーリーは更に傑作という他ない。その名文ぶりに感心しちまうて、再度それをといて期待でその後毎晩の如く待ったことではあったのだが、二度とは放送してはくれない心にくさに、又々感心してしまったことであつた。

その名作？ というのは、題して「觀客席ではグレイがブルーに変わり、一方舞台の役者は赤から青になった」というもので、何ともこつてりとシゲキ的（中國的？）な毒舌ぶりであつた。つまり、……時代は既に大國が國連を道具にして勝手きままにふるまうような時代は終了した。弱小國が國連に於いて大國強國の不正をあばき、やつつける時代ともなつてゐるのである。それなのに、こんな時

代感覺にまだ無縁の世間知らずの人物が存在する（という）のだ。それは日本の首相とその一味で、正にどれい根性丸だしもいとこる。超大國に対しておべっかたらたら述べたてるだけで、中味のないことおびただし。更に日本はすでに經濟大國で、それに見合う軍備を必要とするなどと、たしなみも知らぬ場違いなでたらめなんか並べたてて「そうですネ。うんて捨てる場所もない、そんな大國も、おかしいだらうからネ」（といった具合で）ああ、おれ様も遂に輝かしくも世界的人物になれるんだぞと、その前夜は原稿読む練習で徹夜し、又こつそり現場の下檢分なんかに出かけ、マイクの高さはどうだらうなどと苦心のほどもかわいらしい。そして自分の上にふり注ぐであらうカメラマンのフラッシュの雨、そんな光景をば頭に浮かべ、すっかりコーフンしてねつかれぬ。そして晴れの日はずに來た。極度の緊張のためにすっかり固くなり、そわそわと最前列に坐つてた彼にやと指名があり、壇上に立つておもむろに原稿読み上げようとしてハツとした。なんと觀客席は、つい先程まではグレイ一色だったはずなのに、すっかりブルーに変化（グレイは服の色、ブルーは、椅子の色というのだそう）してゐるではないか。一方舞台の演者の顔色は瞬間哀れなほど真赤になり、やがて蒼白に変わつて行く。それでもつとめて平靜を

装うべく懸命の努力をし、ゆっくり読みはじめたのだが、そのうち速度がどんどん早くなつて、始めのうちあつた抑揚もなくなつちまひ、同時通訳があぶつく位だった。云々……といったような内容で、これをきいていて、ふと田沼氏のエッセイを思い出して仕方なかった。

いみじくも田沼氏指摘の如く、何ともマゾフィックな感じを禁じ得ぬ日本國！ それにしてもご主人さまである大統領殿が、むくつけき（いや実に失礼頓首）男性閣下ではなくて、女性（それも、アニタ・エグバークばかりの、いや、何？ 一寸ばかり古すぎやしないかつて？ まあ、いいじゃんか）であつたとしたならば、と考へた時残念ながら？ 卒直に告白して、どうしても全然好きにはなれそうもない（私だけがそうであるのかも。だから乞ひ寛恕）、あのある高名なお偉方に、なんと自分自身がいつのまにやらなつちまつて、女ご主人さまに召使われちまつて、奉仕させられちまつてるところなんかをこていねいに想定しちやつて、思わず恍惚としちまつていた……だなんて、ああ、何とマゾ人間というやつは、我ながら哀れというもおろか、なんとも不可思議というほかもない。だなんてひそかに自分のばかばかしさに赤面したことではあつた。

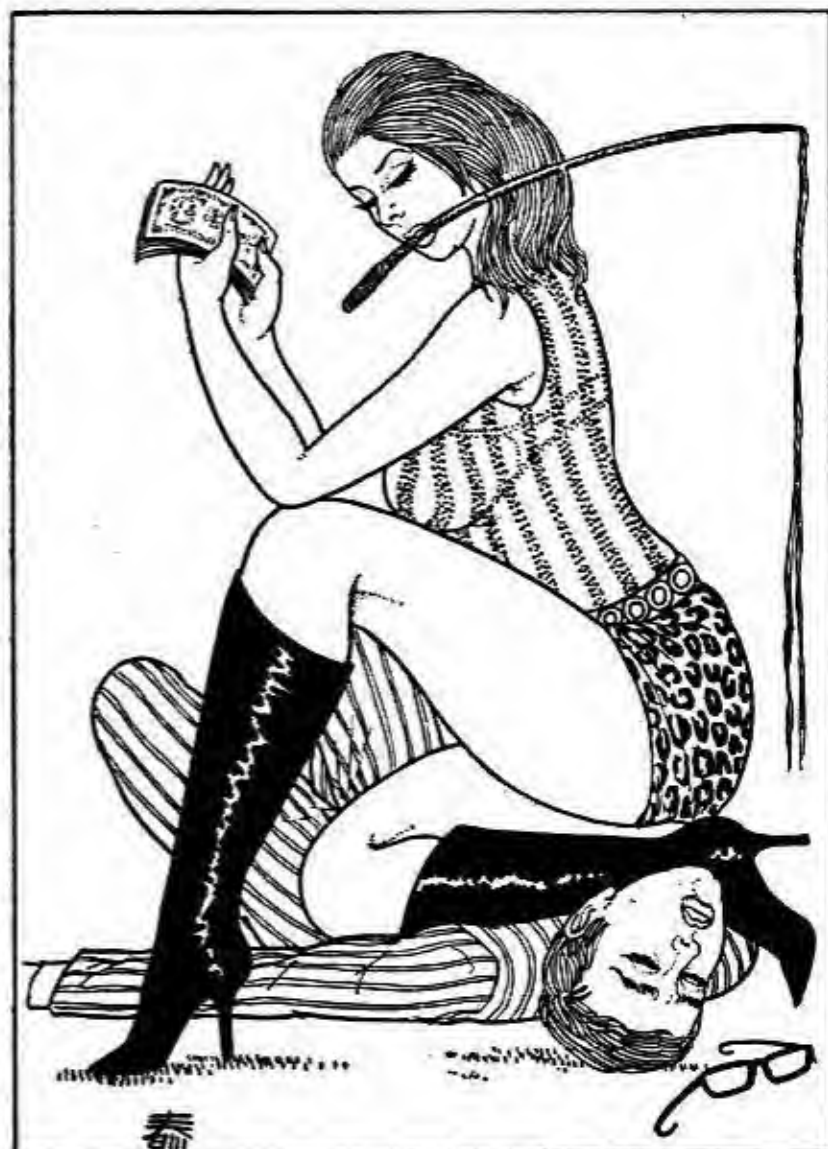
M 派 創 作

嗚

咽

＜む せ び な き＞

浅 羽 や す し



カット・春川ナミオ

(1)

「どうしても個人保証はいやだと言うのね。そう、それならいいわ。私にも考えがある。荒療治もいやだけど……貞子！」

うで組みして正座し、だまりこくる信吉をにらみつけながら、海野けい子は言う。

貞子、と呼ばれた女事務員は、もう立ちあがっていた。

「いいから、首輪をかけておやり。あたしをふつうの女と思ったら、大まちがいだってこ

とを、からだに刻みこんでやろう」

貞子は、背後の戸棚から、大型のスーツ・

ケースを引っ張り出しながら、

「そう来なくちゃ、社長」

「うん。なんだか、いま私は、ウズウズさ。

こいつを叩きのめしたくてね」

けい子は、いきなり、しなやかな、なめし

皮でつくった、ローズ・ピンクの室内グツの

ままの右足をあげて、信吉のひざをグイッと

踏む。はずみに、羽織っただけのケープが、

ハラリと畳におちた。

彼女の甘く香ぐわしい体臭を頬に感じて、やっと眼を開いた信吉はあっと息をのんだ。

輝くばかりの素肌をかくすのは、胸にまかれた純白のサラシ。あとは、なにひとつ、つけていない、思いきった姿であった。

けい子は、信吉の眼など、気にするふうもなく、さらに、もう一方の左足をあげて、完全に彼のひざ上に立ちグリグリと踏んだ。

胸にまつわりつくサラシが、ハラリとほどけかかり、信吉の顔を撫でた。

踏まれてはいるものの、痛みをほとんど感



じないのは、けい子が四十キロをきれる力細い体格のためなのだろうか。

表情も変えない、そんな信吉に、けい子はさらにハラをたてたようである。

「いいかげんにネをあげたらどうだい」

といいながら、クルリとうしろを向いた。

目の前に、けい子の白い尻がうごめき、信吉は度胆をぬかれた。だが、つぎの瞬間、かれは、どたりと、ぶざまに引っくり返らなければならなかった。というのは、その白い尻で、顔をひどく叩かれたからである。

貞子は慣れた手つきで持った首輪を、信吉のどに回すと、パチッと尾錠をかけた。

首輪には、太いクサリがつけられているので、すかさずそれを踏めば、もはや信吉は身を起すことはできない。

「社長、どうしましょ」

貞子は、クサリを踏みしだきながら言う。

「つないでおしまい」

室の片隅に、大きなケヤキの座卓がある。

貞子は、白い太股をのぞかせながら、その座卓の太い脚にクサリを巻きつけ、

「準備オーケー」

と、けい子に告げた。

「時間をかけて、ジワジワと利かせよう。こ

のまえの吉田のカニ野部みたいに、医者を呼ぶのは、カッコよくないからねえ」

吉田というのは、理髪店の店主で、やはりけい子に、少からぬ借金があった。トコやだからハサミを持っている。ハサミを持っているからアダ名がカニ。約束の期日に二百万円の借金が返せず、半ごろしの目に会わされたのは、ついこのあいだのことであった。そして今は、次の犠牲者、信吉が、けい子と貞子から酷い目に会わされようとしているのだ。

けい子は、伸びた信吉の顔を、はいたままの室内グツのまま軽く踏みながら、

「ウンというのならいまだよ。あたしをおこらせたら、ただではすまないから」

「社長、いくら言ってもだめですよ。鞭の味を知ってもらってからにしましょうよ」

貞子は、ピュウ！と音させて、手にもった鞭で空を切った。

デパートで催されたへ舶来品蚤の市でみてきてきたというその鞭は、牛か馬を追うためにつくられたものだろうか、細身の、よくしなう皮製で、かなり古いものだった。先端にはパチンコ玉大の径一センチの玉があり、いかにもききそうだった。

「これで、へヒネリ打ちをやったら、さぞス

カッとするだろうなあ」

貞子は、妖しく眼を光らせた。

ごろごろと、けい子の腹部が鳴りだしたのは、ちょうどそのときである。

「チェッ。ハラがムシめ、いいときに鳴りだして。痛た！だめだ、貞子。ウン」

けい子は、形のよい下腹を抱え、その場にうずくまる。

「社長さん、フクロ、溢れるんじゃないかしら。そろそろ時間ですよ」

「信公！お前さん、ウンがいいよ。鞭はお預けだよ。さきに、社長のおなかをみてあげなくちゃ」

鞭を放りだし、けい子の傍らにすりよった貞子は、けい子のサラシに手をかけた。

「おーお。こんなにたまって。社長、苦しかったでしょうねえ」

なにかたまったのだから、貞子の半身にかくれて、信吉からはみられない。

とつぜん、室の隅に異臭がただよい、

「貞子！苦しいよ！」

けい子がうめく。

「動いちゃだめ！ちょっとの辛抱よ」

貞子は、忙しく手を動かしながら言う。

クサリにつながれ、冷たい畳に放りだされ

て、信吉にはさっぱりわけがわからない。

## (2)

見なれない青年が、信吉の経営するオフィスへやってきたのは、けさ、九時をちょっと回ったところであった。

「ご依頼の融資のことで、もうすこし専務さんにおたずねしたいことがあると社長が申ししています。書類は、調査をパスしました。半分形式みたいなものですが、専務さんがお顔をおだしになれば、ものの五分で八百万円はお宅の口座に入りますから」

と、青年はていねいな口調で述べた。海野事務所には、すでに一千万円の負債がある。それを承知で、別に八百万円の融資を申し込んだのは、信吉が専務をしている出版社、ベストブック社が、さらに打出した新しい企画の宣伝費等が必要だからである。

この新企画はやれば当ることはわかりきっていた。融資を申し込んだのは、半月前のことであったが、海野事務所だけが頼りでは心細いので、A相互銀行にも貸付の申し込みはしておいたが、担保力のないちっぽけな出版社には、銀行はいい顔をしない。どうも悲観的な見通しのところへ、この呼びだしは、な

んともありがたかった。

十時からの営業会議の予定も放りだして、信吉が、青年に言われるままにタクシーにのったのはしかし、軽卒であった。

というのは、実は、前からの負債の一千万円の利息さえ払えないまま、海野事務所からはそのぶんについて、あらためて信吉の個人保証の手形を入れるように、強く求められているからだ。

ベストブック社は形ばかりの法人で、一千万円の財産どころか、十万円のカネもないのである。しかし印刷会社も用紙店も、信用で手形取引をしてくれる。だが、万一ベストブック社の経営にガタがきたとなったら、販売会社の支払いは、自動的にそれら手形の振出し先におさえられても異議をとえないことに公正証書をとられている。

信吉は、はじめ海野事務所から融資を受けるさい、ちょっと操作をやった。つまり、海野事務所から融資金をうける寸前までは、そうした公正証書をつくらず、販売会社の口座にわざと金を残しておいて、海野側が調査した時点では、担保力があるように合法的にみせかけておき、首尾よくカネを借りだしたあと、それこそものの一時間もたたないうちに

印刷会社や用紙店に債権を預けてしまった。出版社にとっては印刷と紙が生命。良心がとがめたが、そうするしか、なかったからである。

案のじょう、海野側は、その背信行為を知って激怒した。一方的なルール違反だから、これはサギ行為だというのである。

あらためて、何回もの話し合いが行なわれたが、話は平行線をたどっている。

海野側は、できたことは仕方がないから、代りの担保を入れよ、と言う。

吹けば飛ぶようなベストブック社だが、これでも法的には法人であり、共同経営の柏瀬という友人が社長で、信吉は専務である。

株式会社だから、いくら社長であり専務でも、個人的に負債の責任を負う義務はない。

だが、海野側は、この商法上の常識を知りながら、あえて社長、専務の個人保証の手形を要求してきた。

信吉の自宅は、自由ヶ丘にある。

分譲マンションで、代価九百八十万円の大部分は、妻の久子の父から借りた。

海野側が、このマンションに目をつけたのはいうまでもない。義父は不動産のコンサルタントであったから、このさわぎを聞くと、